

神曲

02
浄火

アリギエリ・ダンテ

Alighieri Dante

山川丙三郎訳



第一曲

かのごとく酷むごき海をあとにし、優まされる水をはせわたらんとて、

今わが才の小舟帆をふねを揚ぐ 一―三

かくてわれ第二の王國をうたはむ、こは人の靈きよ淨められて天
に登るをうるところなり 四―六

あゝ聖なるムーゼよ、我は汝等のものなれば死せる詩をまた
起きいでしめよ、願はくはこゝにカルリオペ 七―

少しく昇りてわが歌に伴ひ、かつて幸さちなきピーケを撃ゆるしちて赦
をうるの望みを絶つにいたらしめたる調しらべをこれに傳へんこと

を 一―二

東の碧玉あをだまの妙たへなる色は、第一の圓にいたるまで晴れたる空の

のどけき姿にあつまりて 一三—一五

我かの死せる空氣——わが目と胸を悲しましめし——の中よりいでしとき、再びわが目をよろこばせ 一六—一八

戀にいざなふ美しき星は、あまねく東をほゝゑましめておのが伴^{とも}なる雙魚を覆へり 一九—二一

われ右にむかひて心を南極にとめ、第一の民のほかにはみしものもなき四の星をみぬ 二二—二四

天はその小^{ちひ}さき焰をよろこぶに似たりき、あゝ寡^{やもめ}となれる北の地よ、汝かれらを見るをえざれば 二五—二七

われ目をかれらより離して少しく北極——北斗既にかしこにみえざりき——にむかひ 二八—三〇

こゝにわが身に近くだゞひとりの翁^{おきな}みたるをみたり、その姿は厚^{うやまひ}き敬を起さしむ、子の父に負ふ敬といふともこの上には

いでじ 三一—三三

その長き鬚には白き毛まじり、二のふき^{ふたつ}をなして胸に垂れし

髪に似たり 三四—三六

聖なる四^{よつ}の星の光その顔を飾れるため、我彼をみしに日輪前

にあるごとくなりき 三七—三九

彼いかめしき鬚をうごかし、いひけるは。失明^{めしひ}の川を溯りて

永遠^{とこしへ}の獄^{ひとや}より脱れ^{のが}し汝等は誰ぞや 四〇—四二

誰か汝等を導ける、地獄の溪を常闇^{とこやみ}となす闌^ふけし夜^{よる}よりいづ

るにあたりて誰か汝等の燈火^{ともしび}となれる 四三—四五

汝等斯くして淵の律法^{おきて}を破れるか、將^{はた}天上の定新^{さだめ}たに變りて

汝等罰をうくといへどもなほわが岩に來るをうるか。 四六

—四八

わが導者このとき我をとらへ、言^{ことば}と手と表示^{しるし}をもてわが脛^{はざ}わ

が目をうやくしからしめ 四九―五一

かくて答へて彼に曰ふ。我自ら來れるにあらず、ひとりの淑女天より降り、我その請こひにより伴ともとなりて彼をたすけぬ

五二―五四

されど汝は我等のまことの狀態ありさまのさらに汝に明あかされんことを願へば、我もいかで汝にこれを否むをねがはむ 五五―

五七

それこの者未だ最後の夕ゆふをみず、されど愚おろかにしてこれにちかづき、たゞいと短き時を殘せり 五八―六〇

われさきにいへるごとく、わが彼に遣はされしは彼を救はんためなりき、またわが踏めるこの路を措きては路ほかにあらざりき 六一―六三

我はすべての罪ある民をすでに彼に示したれば、いまや汝の

まもり

護のもとに己を淨むる諸々の靈を示さんとす 六四―六六

わが彼をこゝに伴ひ來れる次第は汝に告げんも事長し、高き

處より力降りて我をたすけ、我に彼を導いて汝を見また汝の

詞を聞かしむ 六七―六九

いざ願はくは彼の來れるを嘉せ、彼往きて自由を求む、そも

このもののいと貴きはそがために命をも惜しまぬもののしる

ごとし 七〇―七十二

汝これを知る、そはそがためにウティカにて汝は死をも苦し

みとせず、大いなる日に燦かなるべき衣をこゝに棄てたれば

なり 七三―七五

我等永遠の法を犯せるにあらず、そはこの者は生く、またミ

ノス我を繋かず、我は汝のマルチアの貞節の目ある獄より來

れり 七六―

あゝ聖なる胸よ、汝に妻とおもはれんとの願ひ今なほ彼の姿
 にあらはる、されば汝彼の愛のために我等を眷顧かへりみ ―八一
 我等に汝の七ななつの國を過ぐるを許せ、我は汝よりうくる恩恵めぐみを
 彼に語らむ、汝若し己が事のかなたに傳へらるゝをいとはず
 ば。 八二―八四

この時彼曰ふ。われ世にありし間、マルチアわが目を喜ばし
 たれば、その我に請へるところ我すべてこれをなせり 八五
 ―八七

今彼禍ひの川のかなたにとゞまるがゆゑに、わがかしこを出
 でし時立てられし律法おきてに従ひ、またわが心を動かすをえず
 八八―九〇

されど汝のいふごとく天の淑女の汝を動かし且つ導くあらば
 汝そがために我に求むれば足るなり、何ぞ諛言へつらひごとをいふを須もちる

ん 九一―九三

されば行け、汝一本もとの滑かなる藺ゐをこの者の腰つかに束ねまたそ

の顔を洗ひて一切けがれの汚穢を除け 九四―九六

霧のために眊かすめる目をもて天堂の使者つかひの中なる最初の使者の

前にいづるはふさはしからず 九七―九九

この小さき島のまはりのいとく低きところ浪打つかなたに、

藺やはらありて軟ひぢかき泥おの上に生ふ 一〇〇―一〇二

この外には葉を出しまたは硬くなるべき草木くさきにてかしこに生

を保つものなし、打たれて撓たわまざればなり 一〇三―一〇五

汝等かくして後やまちこなたに歸ることなかれ、今出づる日は汝等

に登り易き山路やまちを示さむ。 一〇六―一〇八

かくいひて見えずなりにき、我は物言はず立ちあがりて身を
いと近くわが導者によせ、またわが目を彼にそゝげり 一〇

九——一一

彼曰ふ。子よ、わが步履あゆみに従へ、この廣野ひろのこゝより垂れてその低き端はしにおよべばいざ我等後うしろにむかはむ。 一一二——一一

四

黎明朝あけぼのの時に勝ちてこれをその前より走わしらしめ、我ははるかに海の打震ふを認めぬ 一一五——一一七

我等はさびしき野をわけゆけり、そのさま失へる路をたづねて再びこれを得るまでは 一一八——一二〇

たゞ徒いたづらに歩むことぞと自ら思ふ人に似たりき

露日と戦ひ、その邊わたりの冷かなるためにたやすく消えざるところにいたれば 一二一——一二三

わが師雙手もろてをひらきてしづかに草の上に置きたり、我即ちその意こころをさとり 一二四——一二六

彼にむかひて涙に濡るゝ頬をのべしに、彼は地獄のかくせる
色をことごとくこゝにあらはせり 一二七—一二九

かくて我等はさびしき海邊、その水を渡れる人の歸りしこと
なきところ^{うみべ}にいたれり 一三〇—一三二

こゝに彼、かの翁の心に従ひ、わが腰を括^{くく}れるに、奇なる哉
謙遜の草、彼えらびてこれを採るや 一三三—一三五

その抜かれし處よりたゞちに再び生^おひいでき 一三六—一三八

第二曲

日は今子午線のそのいと高きところをもてイエルサレムを蔽
ふ天涯にあらはれ 一―三

これと相對^{あひむか}ひてめぐる夜は、天秤^{はかり}（こは夜の長き時その手よ
り落つ）を持ちてガンジエを去れり 四―六

さればわがゐしところにては、美しきアウローラの白き赤き
頬、年ふけしため柑子^{かうじ}に變りき 七―九

我等はあたかも路のことをおもひて心進めど身止まる人の如
くなほ海のほとりにゐたるに 一〇―一二

見よ、朝近きとき、わたつみの床^{ゆか}の上西の方^{かた}低きところに、濃
き霧の中より火星の紅^{あか}くかゞやくごとく 一三―一五

わが目に見えし一の光（あゝ我再びこれをみるをえんことを）
海を傳ひていと疾く來れり、げにいかなる羽といふとも斯許かくばかり
早きはあらじ 一六―一八

われわが導者に問はんとて、しばらく目をこれより離し、後
再びこれをみれば今はいよくあざや燦かにかついよくく大いな
りき 一九―二一

その左右には何にかあらむ白き物見え、下よりもまた次第に
白き物いでぬ 二二―二四

わが師なほ物言はざりしが、はじめの白き物翼とみゆるにい
たるにおよび、舟子ふなこの誰なるをさだかに知りて 二五―二七
さけびていふ。いざとく跪き手を合すべし、見よこれ神の使者つかひ
なり、今より後汝かかる使者等つかひたちをみむ 二八―三〇
見よかれ人の器具うつはをかるんじ、かく隔たれる二の岸の間にも、

擢を用ゐず翼を帆に代ふ 三一—三三

見よ彼これを伸べて天にむかはせ、朽つべき毛の如く變ることなきその永遠とこしへの羽はねをもて大氣を動かす。 三四—三六

神の鳥こなたにちかづくに従ひそのさまいよくあぎやかになりて近くこれを見るにたへねば 三七—三九

われ目を垂れぬ、彼は疾とく輕くして少しも水に吞まれざる一の舟にて岸に着けり 四〇—四二

艫ともには天の舟人ふなびと立ちさいはひ（福その姿にかきしるさるゝごとくみゆ）、

中には百餘の靈坐せり 四三—四五

イスラエル、エジプトを出でし時、彼等みな聲をあはせてかくうたひ、かの聖歌に録しるされし残りの詞をうたひをはれば

四三—四五

彼は彼等のために聖十字を截りぬ、彼等即ち皆みぎは汙みぎはにおりたち、

彼はその來れる時の如くとく去れり 四九―五一

さてかしこに残れる群むれは、この處をば知らじとみえ、あたかも新しきものを試むる人の如くあたりをながめき 五二―五

四

日はそのさやけき矢をもてはや中天なかぞらより磨羯を逐ひ、晝を四

方に射下いくだせり 五五―五七

この時新しき民面おもてをあげて我等にむかひ、いひけるは。汝等

若し知らば、山に行くべき路ををしへよ。 五八―六〇

ヴィルジリオ答へて曰ふ。汝等は我等をこの處に精くはしとおも

へるならむ、されど我等も汝等と同じ旅客なり 六一―六三

我等は他の路ほかを歩みて汝等より少しく先に來れるのみ、その

路のいと粗あらく且つ艱かたきに比くらぶれば今よりこゝを登らんは唯ただ戲たはぶ

の如くなるべし。 六四―六六

わが呼吸いきによりて我のなほ生くるをしれる魂等はおどろきて
いたくあをぎめぬ 六七―六九

しかしてたとへば報告しらせをえんとて橄欖をもつ使者つかひのもとに人々
むらがり、その一人ひとりだに踏みあふことを避けざるごとく 七

〇―七十二

かの幸多さちき魂等はみなとゞまりてわが顔をまもり、あたかも
行きて身を美しくするを忘るゝに似たりき 七三―七五

我はそのひとりの大いなる愛をあらはし我を抱かんとて進み
いづるを見、心動きて自らしかなさんとせしに 七六―七八
あゝ姿のほか凡て空しき魂よ、三度みたびわれ手をその後うしろに組みし
も、三度手はわが胸にかへれり 七九―八一

思ふに我は怪訝あやしみの色に染まれるなるべし、かの魂笑ひて退き、
我これを逐ひて前にすゝめば 八二―八四

しづかに我に止めよといふ、この時我その誰なるをしり、しばらくとゞまりて我と語らんことを乞ふ 八五―八七

彼答ふらく。我先に朽つべき肉の中にありて汝を愛せる如く今^{きづな}紐を離れて汝を愛す、此故に止まらむ、されど汝の行くは何の爲ぞや。 八八―九〇

我曰ふ。わがカゼルラよ、我のこの^{たびぢ}羈旅にあるは再びこゝに歸らんためなり、されど汝何によりてかく多く時を失へるや。

九一―九三

彼我に。時をも人をも心のまゝにえらぶもの、屡々我を拒みてこゝに渡るを許さざりしかどこれ我に非をなせるにあらず

九四―九六

その意正しき意より成る、されど彼はこの三月^{みつぎ}の間、乗るを願ふものあれば、うけがひて皆これを載せたり 九七―九九

さればこそしばしきき、我かのテーヴェロの水潮うしほに變る海の
邊ほとりにゆきたるに、彼こころよくうけいれしなれ 一〇〇—一

〇二

彼今翼をかの河口くちに向く、そはアケロンテの方かたにくだらざる
ものかしこに集まる習ひなればなり。 一〇三—一〇五

我。新しき律法おきて汝より、わがすべての願ひを鎮むるを常とせ

し戀歌の記憶またはその技わざを奪はずば 一〇六—一〇八

肉體とともにこゝに來りて疲甚つかれしきわが魂を、ねがはくは少

しくこれをもて慰めよ。 一〇九—一一一

「わが心の中にもものいふ戀は」と彼はこのときうたひいづる
に、そのうるはしさ今猶耳に残るばかりに妙たへなりき 一一二

— 一一四

わが師も我も彼と共にありし民等もみないたくよろこびて、

ほかに心に觸るゝもの一だになきごとくみゆ 一一五―一一七

我等すべてとゞまりて心を歌にとめゐたるに、見よ、かのけだかき翁さけびていふ。何事ぞ遅き魂等よ 一一八―一二〇
 何等の怠慢ぞ、何ぞかくとゞまるや、走りて山にゆきて穢けがれを去れ、さらずば神汝等にあらはれたまはじ。 一二一―一二三

三
 たとへば食をあさりてつどへる鳩の、聲もいださず、その習ひなる誇ほこりもみせで、麥や莠はぐさの實を拾ふとき 一二四―一二六
 おそろゝもののあらはるゝあれば、さきにもまさる願ひに攻められ、忽ち食を棄て去るごとく 一二七―一二九
 かの新しき群歌むれを棄て、山坂にむかひてゆきぬ、そのさま行けども行方ゆくへをしらざる人に似たりき 一三〇―一三二

我等もまたこれにおくれずいでたり

一三三―一三五

第三曲

彼等忽ち馳せ、廣野^{ひろの}をわけて散り、理性^{うなが}に促されて我等の登

る山にむかへるも 一—三

我は身をわがたのもしき伴侶^{とも}によせたり、我またいかで彼を
觸れて走る^{わし}をえんや、誰か我を導いて山に登るをえしめんや

四—六

彼はみづから悔ゆるに似たりき、あゝ尊き清き良心よ、たゞ
さゝやかなる咎^{とが}もなほ汝を刺すこといかにはげしき 七—九
彼の足すべての動作^{ふるまひ}の美をこぼつ急^{いそぎ}を棄つれば、さきに狹^{せば}ま
れるわが心 一〇—一二

さながら求むるものある如く思ひを廣くし、我はかの水の上

より天にむかひていと高く聳ゆる山にわが目をそゝぎぬ 一

三一 一五

後方^{うしろ}に赤く燃ゆる日は、わがためにその光を支^さへられて碎け、

前方^{まへ}にわが象^{かたち}を残せり 一六—一八

我わが前方^{まへ}にのみ黒き地あるをみしとき、おのが棄てられし
ことを恐れてわが傍^{かたへ}にむかへるに 一九—二一

我を慰むるもの全く我に對^{むか}ひていふ。何ぞなほ疑ふや、汝は
わが汝と共にありて汝を導くを信ぜざるか 二二—二四

わがやどりて影を映^{うつ}せる身の埋^{うづ}もるゝ處にてははや夕^{ゆふ}なり、
この身ナポリにあり、ブランドイツイオより移されき 二五

— 二七

さればわが前に今影なしとも、こはたがひに光を堰^せかざる諸
天に似てあやしむにたらず 二八—三〇

そもく威力はかゝる體ちからからだを造りてこれに熱と氷の苛責の苦し
みを感じせしむ、されどその爲す事の次第の我等に顯はるゝこ
とを好まず 三一—三三

もし我等の理性をもて、三にして一なる神の踏みたまふ無窮
の道を極めんと望むものあらばそのもの即ち狂へるなり 三
四—三六

人よ汝等は事を事として足れりとせよ、汝等もし一切を見る
をえたりしならば、マリアは子を生むに及ばざりしなるべし
三七—三九

また汝等は、己が願ひをかなふるにふさはしかりし人々にさ
へ、その願ふところ實を結ばず却つて永遠とこしへに悲しみとなりて
残るを見たり 四〇—四二

わがかくいへるはアリストーテレ、プラトー、その外多くの

ものの事なり。かくいひて顔を垂れ、思ひなやみてまた言ことばなし
四三―四五

かゝるうちにも我等は山の麓に着けり、みあぐれば巖いははいと嶮
しく、脛はぎの疾はやきもこゝにては益なしとみゆ 四六―四八
レリーチェとツルビアの間のいとあらびいと廢すたれし徑こみちといふ
とも、これに此くらぶれば、寛ゆるやかにして登り易き梯子はしごの如し 四
九―五一

わが師歩みをとゞめていふ。誰か知る、山の腰低く垂れて翼
なき族人たびびともなほ登るをうるは何方いづかたなるやを。 五二―五四

彼顔をたれて心に路のことをおもひめぐらし、我はあふぎて
岩のまはりをながめたるに 五五―五七

この時わが左にあらはれし一群ひとむれの魂ありき、彼等はこなたに
その足をはこべるも、來ることおそくしてしかすとみえず

五八一六〇

我曰ふ。師よ目を擧げてこなたを見よ、汝自ら思ひ定むるあたはずば彼等我等に教ふべし。六一―六三

彼かれらを見、けしきはれ氣色晴やかに答ふらく。彼等の歩履あゆみおそければいざ我等かしこに行かん、よきこ好兒よ、望みをかたうせよ。

六四―六六

我等ゆくこと千歩にして、かの民なほ離るゝこと巧みなる投手なげての石のとゞく六ばかりなりしころ七

彼等はみな高き岸なる堅き岩のほとりにあつまり、互ひに身をよせて動かず、おそれて道を行く人の見んとて止まる如くなりき 七〇―七二

ヴィルジリオ曰ふ。さいはひあゝ福に終れるものらよ、すでに選ばれし魂等よ、我は汝等のすべて待望む平安を指して請ふ 七三

―七五

我等に山の斜ななめにて上りうべきところを告げよ、そは知ること
いと大いなる者時を失ふを厭ふことまたいと大いなればなり。

七六―七八

たとへば羊の、一づつ二づつまたは三づつ圈をりをいで、残れる
ものは臆してひくく目と口を垂れ 七九―八一

而して最初の者の爲す事をばこれに續く者皆倣なまひて爲し、か
の者止まれば、聲なく思慮こゝろなくその何故なるをも知らで、こ
れが邊あたりに押合ふ如く 八二―八四

我はこの時かの幸多さちき群むれの先手さきての、容端かたちたゞしく正歩履あゆみ優いうにこなた
に進み來るをみたり 八五―八七

さきに立つ者、わが右にあたりて光地に碎け、わが影岩に及
べるをみ 八八―九〇

とゞまりて少しく後方うしろに退すされば、續いて來れる者は故をしらねどみななくなせり 九一—九三

汝等問はざるも我まづ告げむ、汝等の見るものはこれ人の體からだなり、此故に日の光地上に裂く 九四—九六

あやしむなかれ、信ぜよ、天より來る威能ちからによらで彼この壁に攀よぢんとするにあらざるを。 九七—九九

師斯く、かの尊たふとき民手背てのおもてをもて示して曰ふ。さらば身をめぐらして先に進め。 一〇〇—一〇二

またそのひとりいふ。汝誰なりとも、かく歩みつゝ顔をこなたにむけて、世に我を見しことありや否やをおもへ。 一〇

三—一〇五

我即ちかなたにむかひ、目を定めて彼を見しに、黄金こがねの髪あり、美しくして姿けだかし、されど一の傷ありてその眉の一

を分てり 一〇六一一〇八

我謙^{へりく}だりていまだみしことなしとつぐれば、彼はいぎ見よと

いひてその胸の上のかたなる一の疵を我に示せり 一〇九―

一一一

かくてほゝゑみていふ。我は皇妃コスタンツアの孫マンフレ

ディなり、此故にわれ汝に請ふ、汝歸るの日 一二二―一二

四

シチーリアとアラーゴナの名譽^{ほまれ}の母なるわが美しき女^{むすめ}のもと

にゆき、世の風評^{さた}違はば實^{まこと}を告げよ 一一五―一二七

わが身二の重傷^{いたで}のために碎けしとき、われは泣きつゝ、かの

よろこびて罪を赦したまふものにかへり 一一八―一二〇

恐しかりきわが罪は、されどかぎりなき恩寵^{めぐみ}そのいと大いな

腕^{かひな}をもて、すべてこれに歸るものをうく 一二一―一二三

クレメンテに唆^{そその}かされて我を狩りたるコセンツアの牧者、その頃神の聖經^{みふみ}の中によくこの教へを讀みたりしならば 一二

四——一二六

わが體^{からだ}の骨は、今も重き堆石^{つみいし}に護られ、ベネヴェントに近き

橋のたもとにありしなるべし 一二七——一二九

さるを今は王土^{そと}の外ヴェルデの岸邊^{きしべ}に雨に洗はれ風に搖^ゆらる、

彼消^けせる燈火^{ともしび}をもてこれをかしこに移せるなり 一三〇——一

三二

それ望みに緑の一點をとゞむる間は、人彼等の詛^{そと}ひによりて
全く滅^{とこしへ}び永遠の愛歸るをえざるにいたることなし 一三三——

一三五

されどげに聖なる寺院の命^{もと}に悖^{もと}りて死する者、たとひつひに
悔^{もと}ゆといへども、その僭^{もと}越なりし間の三十倍の時過ぐるまで

一三六―一三八

必ず外なるこの岸にとゞまる、もし善き祈りによりて時の短

くせらるゝにあらざば 一三九―一四一

請ふわが好きコスタンツアに汝の我にあへる次第とこの禁制
とをうちあかし、汝がこの後我を悦ばすをうるや否やを見よ

一四二―一四四

そはこゝにては、世にある者の助けによりて、我等の得るところ
大なればなり。 一四五―一四七

第四曲

心の作用はたらきの一部喜びまたは憂ひを感じる深ければ、魂ことぐ

こゝにあつまり 一―三

また他の能力ちからをかへりみることなしとみゆ、知るべし、我等の内部うちに燃ゆる魂、一のみならじと思ふは即ち誤りなることを 四―六

この故に聞くこと見るもの、つよく魂をひきよすれば、人時の過ぐるを知らず 七―九

そは耳をとゞむる能力ちからは魂を全く占しむる能力ちからと異なる、後者はその状さま繋つながるゝに等しく前者には継きづなし 一〇―一二

我かの靈のいふところをきき且つはおどろきてしたしくこの

事の眞なるをさとれり、まことそは我等かの魂等が我等にむかひ

一三―

聲をあはせて、汝等の尋ぬるものこゝにありと叫べる處にいたれる時、日はわがしらざる間に裕ゆたかに五十を上りたればなり

―一八

葡萄黒むころ、たゞ一束たば いばらの茨をもて、村人むらびとの圍かこふ孔あなといふと

も、かの群むれ我等をはなれし後 一九―

導者さきに我あとにたゞふたり登りゆきし徑路こみちよりは間々まま大

いなるべし ―二四

サンレオにゆき、ノ―リにくだり、ビスマントヴァを登りてその頂にいたるにもただ足あれば足る、されどこゝにては飛ばざるをえずと 二五―二七

即ち我に望みを與へ、わが光となりし導者にしたがひ、疾き

翼深き願ひの羽を用ゐて 二八—三〇

我等は碎けし岩の間を登れり、がけ崖左右より我等に迫り、下なる地は手と足の助けを求めき 三一—三三

我等高き陵をかの上縁うはべり、山の腰のひらけしところ^にいたれるとき、

我いふ。わが師よ、我等いづれの路をえらばむ。 三四—三

六

彼我に。汝一步をも枉ぐるなかれ、さとき嚮導しるべの我等にあらはるゝことあるまで、たえず我に従ひて山を登れ。 三七—

三九

いただき

巔は高くして視力及ばず、また山腹は象限しやうげんの中央なかばの線すぢよりはるかに急なり 四〇—四二

我疲れて曰ふ。あゝやさしき父よ、ふりかへりて我を見よ、汝若しとゞまらずば、我ひとりあとに残るにいたらむ。 四

三―四五

わが子よ、身をこの處まで曳き來れ。彼は少しく上方^{うへ}にあたりて山のこなたをことごとくめぐれる一の高臺^{ハルツオ}を指示しつゝ、かくいへり 四六―四八

この言^{ことば}にはげまされ、我は彼のあとより匍匐^{はひ}つゝわが足圓の上を踏むまでしひて身をすゝましむ 四九―五一

我等はこゝに、我等の登れる方^{かた}なりし東に向ひて俱に坐せり、そは人顧みて心を慰むる習ひなればなり 五二―五四

我まづ目を低き汀^{みぎは}にそゝぎ、後これを擧げて日にむかひ、その光我等の左を射たるをあやしめり 五五―五七

詩人はわがかの光の車の我等とアクイロネの間を過ぐるをみていたく惑へることをさだかにさとり 五八―六〇

即ち我にいひけるは。若しカストレとポルルーチェ、光を上

と下とにおくるかの鏡とともにあり 六一―六三

かつかのものその舊き道を離れずば、汝は赤き天宮の今よりもなほ北斗に近くめぐるをみるべし 六四―六六

汝いかでこの事あるやをさとるをねがはば、心をこめて、シオンとこの山と地上にその天涯を同じうし 六七―

その半球を異にするを思へ、さらば汝の智にしてもしよく明あきらかにこゝにいたらば、かのフエートンさちが幸なくも

車を驅るを知らざりし路は何故に此の左、彼の右をかならず過ぐるや、汝これを知るをえむ。 ―七五

我曰ふ。わが師よ、才の足らじとみえしところを、げに今にいたるまで我かくあきらかにさとれることなし 七六―七八
さる學術にて赤道とよばれ、常に日と冬の間にありていと高くめぐる天の中帯は 七九―八一

汝の告ぐる理ことわりにより、この處を北に距ること、希伯來人エブレオびとがこれをみしとき彼等を熱き地かたの方に距れるに等し 八二―八四
されど我等いづこまで行かざるをえざるや、汝ねがはくは我にしらせよ、山高くそびえてわが目及ぶあはざればなり。

八五―八七

彼我に。はじめ常に艱しといへども人の登るに従つてその勞を少うするはこれこの山の自然のぼなり 八八―九〇

此故に汝これをたのしみ、上るの易きことあたかも舟にて流れを追ふごときにいたれば 九一―九三

すなはちこの徑路こみち盡く、汝そこにて疲れを休むることをうべし、わが汝に答ふるは是のみ、しかして我この事の眞まことなるを知る。 九四―九六

彼その言葉を終をへしとき、あたりに一の聲ありていふ。おそ

らくは汝それよりさきに坐せざるをえざるなるべし。 九七

一九九

かくいふをききて我等各々ふりかへり、左に一の大なる石
を見ぬ、こは我も彼もさきに心をとめざりしものなりき 一

〇〇——一〇二

我等かしこに歩めるに、そこには岩の後なる蔭に息へる群あ
りてそのさま怠惰おこたりのため身を休むる人に似たりき 一〇三—

一〇五

またそのひとりはよわれりとみえ、膝を抱いて坐し、顔を低
くその間に垂れゐたり 一〇六—一〇八

我曰ふ。あゝうるはしきわが主、彼を見よ、かれ不精ぶせいを姉妹
とすともかくおこたれるさまはみすまじ。 一〇九—一一一

この時彼我等かたの方に對ひてその心をとめ、目をたゞ股もものあた

りに動かし、いひけるは。いぎ登りゆけ、汝は雄々し。一

一二——一四

我はこのときその誰なるやをしり、疲れ今もなほ少しくわが
息いきをはずませしかど、よくこの障礙しやうげにかちて 一一五——一一

七

かれの許もとにいたれるに、かれ殆んど首かうべをあげず、汝は何故に

日が左より車をはするをさとれりやといふ 一一八——一二〇

その無精ぶせいの状さまと短き語ことばとは、すこしく笑ゑみをわが唇にうかばし

む、かくて我曰ふ。ベラツクワよ、我は今より 一二一——

また汝のために憂へず、されど告げよ、汝何ぞこゝに坐する
や、導者を待つか、はたたゞ汝の舊ふりし習慣ならひに歸れるか。

——一二六

彼。兄弟よ、登るも何の益かあらむ、門に坐する神の鳥は、我

が苛責をうくるを許さざればなり 一二七—一二九

われ終りまで善き歎息なげきを延べたるにより、天はまづ門の外そとに

て我をめぐる、しかしてその時の長さは世にて我をめぐる

間と相等し 一三〇—一三二

若し恩惠めぐみのうちに生くる心のきゝぐる祈りあだしのり（異祈は天聴かざ

れば何の效かひあらむ）、これより早く我を助くるにあらざれば。

一三三—一三五

詩人既に我にさきだちて登りていふ。いざ來れ、見よ日は子

午線に觸れ、夜は岸邊きしべより 一三六—一三八

はやその足をもてモロツコおほを覆ふ。

第五曲

我既にかの魂等とわかれてわが導者の足跡あしあとに従へるに、この

とき一者ひとり、後方うしろより我を指ざし 一—三

叫びていふ。見よ光下なるものの左を照さず、彼があたかも
生者のごとく歩むとみゆるを。 四—六

我はこの言ことばを聞きて目をめぐらし、彼等のあやしみてわれひ
とり、ただわれひとりと、碎けし光とをまも目守るをみたり 七

—九

師曰ふ。汝何ぞ心ひかれて行くことおそきや、彼等の私語さしやき汝
と何の係かゝりあらんや 一〇—一二

我につきて來れ、斯民このたみをその言ふに任まかせよ、風吹くとも頂いただき

揺ゆるがやぐらざるつよき櫓ゆるの如く立つべし 一三―一五

そは思ひ湧き出でて思ひに加めあてはることあれば、後の思ひ先の
思ひの力をよわめ、人その目的めあてに遠とほざかる習ひなればなり。

一六―一八

我行かんといふの外また何の答へかあるべき、人にしばゆるしく

赦ゆるしをえしむる色をうかめてわれ斯よこあひくいへり 一九―二一

かゝる間に、山の腰にそひ、横方よこあひより、かはるよこあひぐよこあひ憐よこあひれよこあひみた

まへを歌ひつゝ、我等のすこしく前に來れる民ありき 二二

―二四

彼等光のわが身に遮さへらるゝをみしとき、そのうたへる歌を長

き喰くれたるあゝに變かへへたり 二五―二七

しかしてそのうちより使者つかひとみゆるものふたり、こなたには

せ來り、我等にこひていふ。汝等いかなるものなりや我等に

告げよ。 二八—三〇

わが師。汝等たちかへり、汝等を遣はせるものに告げて、彼の身は眞まことの肉なりといへ 三一—三三

若しわが量はかるごとく、彼の影を見て彼等止まれるならば、この答へにて足る、彼等に彼をあがめしめよ、さらば彼等益をえむ。 三四—三六

夜の始めに澄渡る空そらを裂き、または日の落つころ葉月はづきの叢雲むらくもを裂く光といふとも、そのはやさ 三七—三九

かなたに歸りゆきし彼等には及ばじ、さてかしこに着くや彼等は残れる者とともに恰も力のかぎり走る群むれの如く足をこなたに轉めぐらせり 四〇—四二

詩人曰ふ。我等に押寄する民數かず多し、彼等汝に請はんとて來る、されど汝止まることなく、行きつゝ耳をかたむけよ。

四三―四五

彼等來りよばはりていふ。あゝ幸さいはひならんため生れながらの身

と俱に行く魂よ、しばらく汝の步履あゆみを停めよ 四六―四八

我等の中に汝嘗て見しによりてその消息おとづれを世に傳ふるをうる

者あるか、噫あゝ何すれぞ過行くや、汝何すれぞ止まらざるや

四九―五一

我等は皆そのかみ横死を遂げし者なり、しかして臨終いまはにいた

るまで罪人つみびとなりしが、この時天の光我等をいましめ 五二―

五四

我等は悔いつゝ赦しつゝ、神即ち彼を見るの願ひをもて我等
の心をはげますものと和やはらぎて世を去れるなり。 五五―五

七

我。われよく汝等の顔をみれども、一だにしれるはなし、さ

れど汝等の心に適^{かな}ひわが爲すをうる事あらば、良日^{よきひ}の下^{もと}に生れし靈よ 五八―六〇

汝等いへ、さらば我は、かゝる導者にしたがひて世より世にわが求めゆく平和を指してこれをなすべし。 六一―六三

一者^{ひとり}曰ふ。汝誓はずとも我等みな汝の助けを疑はず、もし力

及ばざるため意斷たるることなくば 六四―六六

この故に我まづひとりいひいでて汝に請ふ、汝ローマニアとカルロの國の間の國をみるをえば 六七―六九

汝の厚き志により、わがためにファーンの人々に請ひてよき祈りをささげしめ、我をしてわが重き罪を淨むるをえしめよ

七〇―七十二

我はかしこの者なりき、されど我の宿れる血の流れいでし重傷^{ふかで}をばわれアンテノリの懷^{ふところ}に負へり 七三―七五

こはわがいと安全なるべしとおもへる處なりしを、エステイ
 の者、正義の求むる範圍かぎりを超えて我を怨みこの事あるにいた
 れるなり 七六―七八

されどオリアーコにて追ひ及しかるゝとき、若しはやくラ・ミー
 ラの方に逃げたらんには、我は息通いきかよふかなたに今もありしな
 るべし 七九―八一

われ澤に走りゆき、葦あしと泥ひぢとにからまりて倒れ、こゝにわが
 血筋ちすぢの地上につくれる湖うみを見ぬ。 八二―八四

この時また一者ひとりいふ。あゝねがはくは汝を引きてこの高山たかやまに
 來らしむる汝の願ひ成就せんことを、汝善あはれみき憐あはれみをもてわが願
 ひをたすけよ 八五―八七

我はモンテフェルトロの者なりき我はボンコンテなり、ジヨ
 ヴァンナも誰もわが事を思はず、此故にわれ顔を垂れて此等

の者と俱に行く。 八八―九〇

我彼に。汝の墓の知られざるまで、カムパルデーノより汝を遠く離れしめしは、そもく何の力何の運ぞや。 九一―

九三

彼答ふらく。あゝカセンティーノの麓に、横さまに流るゝ水あり、^{かくれが}隱家の上なるアペンニノより出で、名をアルキアーノといふ 九四―九六

われ喉を刺されし後、徒^{かち}にて逃げつゝ野を血に染めて、かの流れの名消ゆる處に着けり 九七―九九

わが目こゝに見えずなりぬ、わが終焉^{をはり}の詞はマリアの名なりき、われこゝに倒れ、残れるものはたゞわが肉のみ 一〇〇

―一〇二

われ眞^{まこと}を汝に告げむ、汝これを生者^{しやうじや}に傳へよ、神の使者^{つかひ}我を

取れるに地獄の使者よばはりて、天に屬する者よ 一〇三—
 汝何ぞ我物を奪ふや、唯一滴^{しづく}の涙の爲に彼我を離れ、汝彼の
 不朽の物を持行くとも我はその残りをばわが心のまゝにあし
 らはんといふ 一〇八

濕氣空に集りて昇り、冷えて凝る處にいたれば、直ちに水に
 かへること、汝のさだかに知るごとし 一〇九—一一一
 さてかの者たゞ惡をのみ圖る惡意を智に加へ、その性^{さが}よりう
 けし力によりて霧と風とを動かせり 一二—一二四

かくて日暮れしとき、プラートマーニオよりかの大いなる連
 山にいたるまで、彼霧をもて溪を蔽ひ、上なる天を包ましむ
 れば 一一五—一一七

密雲變じて水となり、雨降^ふりぬ、その地に吸はれざるものみ
 な狹間^{はざま}に入れ 一一八—一二〇

やがて多くの大いなる流れと合し、たふとき川に向ひて下るに、その馳することいとはやくして、何物もこれをひきとむをえざりき 一二一—一二三

たくましきアルキアーンははや強直しわが體をその口のあたりに見てこれをアルノに押流し、わが苦しみにたへかねしとき 一二四—

身をもて造れる十字架を胸の上より解き放ち、岸に沿ひまた底に沿ひて我を轉まろばし、遂に己が獲物えものをもて我を被ひ且つ巻けり。 一二九

この時第三の靈第二の靈に續いて曰ふ。あゝ汝世に歸りて遠き族程たびぢの疲れより身を休めなば 一三〇—一三二

われピーアを憶へ、シェーナ我を造りマレムマ我を毀こぼてるなり、こは縁えにしの結ばるゝころまづ珠の指輪をば 一三三—一三

五

我に與へしものぞしるなる

一三六―一三八

第六曲

ヅアーラの遊戯果つるとき、敗者は悲しみて残りつゝ、くり

かへし投げて憂ひの中に學び 一—三

人々は皆勝者とともに去り、ひとり前に行きひとり後よりこ

れを控へひとり傍よりこれに己を憶はしむるに 四—六

かの者止まらず、彼に此に耳を傾け、また手を伸べて與ふれ
ばその人再び迫らざるがゆゑに、かくして身をまもりて推合

ふことを避く 七—九

我亦斯の如く、かのこみあへる群の中にてかなたこなたにわ

が顔をめぐらし、約束をもてその絆を絶てり 一〇—一二

こゝにはアレツツオ人にてギーン・デイ・タツコの猛き腕に

死せるもの及び追ひて走りつゝ水に溺れし者ゐたり 一三—

一五

こゝにはフェデリーゴ・ノヴェル口手を伸べて乞ひ、善きマルヅツコにその強きをあらはさしめし。ピサの者またしかなせ

り 一六—一八

我は伯爵^{コンテ}オルソを見き、また自らいへるごとく犯せる罪の爲にはあらで怨みと嫉みの爲に己が體^{からだ}より分たれし魂を見き

一九—二一

こはピエール・ダ・ラ・ブロッチアの事なり、ブラバンテの淑女はこれがためこれより惡しき群^{むれ}の中に入らざるやう世に在る間に心構^{こころがまへ}せよ 二二—二四

さてすべてこれ等の魂即ちはやくその罪を淨むるをえんとてたゞ人の祈らんことを祈れる者を離れしとき 二五—二七

我曰ひけるは。あゝわが光よ、汝はあきらかに詩の中にて、
祈りが天の定を枉さだめぐるを否むに似たり 二八—三〇

しかしてこの民これをのみ請ふ、さらば彼等の望み空なるか、
さらずば我よく汝の言をさとらざるか。 三一—三三

彼我に。健すこやかなる心をもてよくこの事を思ひみよ、わが筆解げし
易く、彼等の望み徒あたならじ 三四—三六

そは愛の火たとひこゝにおかるゝもののたらはすべきことを
たゞしばしのまに満すとも、審判さばきの頂垂れざればなり 三七

—三九

またわがこの理ことわりを陳べし處にては、祈り、神より離れしがゆ
ゑに、祈れど虧處おちど補はれざりき 四〇—四二

されどかく奥深き疑ひについては、眞まことと智さとの間の光となるべ
き淑女汝に告ぐるにあらずば心を定むることなかれ 四三—

四五

汝さとれるや否や、わがいへるはベアトリーチエのことなり、
汝はこの山の巔いただきに、福さいはひにしてほゝゑめる彼の姿をみるをえむ。

四六―四八

我。主よいそぎてゆかむ、今は我さきのごとく疲れを覺えず、
また山のはやその陰を投ぐるをみよ。 四九―五一

答へて曰ふ。我等は日のある間に、我等の進むをうるかぎり
すゝまむ、されど事汝の思ふところと違ふ 五二―五四

いまだ巔にいたらざるまに、汝は今山腹にかくれて汝のため
にその光を碎かれざる物また歸り來るを見む 五五―五七

されど見よ、かしこにたゞひとりゐて我等の方かたをながむる魂
あり、かの者我等にいと近き路を教へむ。 五八―六〇

我等これが許にいたりぬ、あゝロムバルディアの魂よ、汝の

姿は軒昂けだかくまたいかめしく、汝の目は嚴おごそかにまた緩ゆるやかに動ける

よ 六一—六三

かの魂何事をもいはずして我等を行かしめ、たゞ恰もやすらふ獅子のごとく我等を見たり 六四—六六

されどヴィルジリオこれに近づき、登るにいと易きところを我等に示さむことを請へるに、その問ひに答へず 六七—六九

たゞ我等に我等の國と状態ありさまをたづねき、このときうるはしき導者マントヴァ……といひかくれば、己ひとりを世とせし魂

七〇—七十二

立ちて彼のかたにむかひてそのゐし處をはなれつゝ、あゝマントヴァ人よ、我は汝の邑まちの者ソルデルロなりといひ、かくふたりて二者相抱きぬ 七三—七五

あゝ屈辱のイタリアよ、憂ひの客舎、劇しき嵐の中の水夫な
き船よ、汝は諸州くにぐさの女王にあらずして汚れの家なり 七六—
七八

かのたふとき魂は、たゞ己が生れし邑まちの麗しき名のよばるゝ
をきき、かく歡びてこの處ふるさとに同郷人を迎へしならずや 七九
—八一

しかるに今汝の中には生者しやうじや敬ひをやむる時なく、一の垣一の
濠に圍まるゝもの相互あひたがひに噛むことをなす 八二—八四
幸さちなきものよ、岸をめぐりて海の邊ほとりの地をたづね、後汝の懷ふところ
を見よ、汝のうちに一なりとも平和を樂しむ處ありや 八五
—八七

かのユステイニア—ノ汝のために銜くつわを調ととのへしかど、鞍空しく
ば何の益あらむ、この銜なかりせば恥は却すくつて少なかるべし

八八—九〇

あゝ眞心まごころをもて神を崇めあがかつチェーザレを鞍に載すべき（汝

等もしよく神の言ことばをさとりなば）人々よ 九一—九三

汝等手綱をとれるよりこのかた、拍車たけによりて矯めらるゝこ

となければ、見よこの獸のいかばかり悍たけくなれるやを 九四

—九六

あゝドイツ人びとアルベルトよ、汝は鞍に跨るべき者なるに、こ

の荒き御しがたき獸を棄つ 九七—九九

ねがはくは正しき審判星さばきより汝の血の上に降り、奇くすしく且つ

顯著あらはにて、汝の後を承くる者恐れをいだくにいたらんことを

一〇〇—一〇二

そは汝も汝の父も貪焚むさぼりのためにかの地に抑められ、帝國の園

をその荒るゝにまかせたればなり 一〇三—一〇五

來りて見よ、思慮なき人よ、モノテツキとカツペルレッティ、
モナルデイとフィリッペスキを、彼等既に悲しみ此等はおそ
る 一〇六一一〇八

來れ、無情の者よ、來りて汝の名門の虐げらるゝを見、これ
をその難より救へ、汝またサンタフィオルのいかに安全なる
やをみん 一〇九一一一

來りて汝のローマを見よ、かれ寡婦やもめとなりてひとり残され、
晝も夜も泣き叫びて、わがチエーザレよ汝何ぞ我と俱にゐざ
るやといふ 一一二一一四

來りて見よ、斯民このたみの相愛することいかに深きやを、若し我等
を憐れむの心汝を動かさずば、汝己が名に恥ぢんために來れ
一一五一一七

また斯く言はんも畏かしこけれど、あゝいと尊きジョーヴェ、世に

て我等の爲に十字架にかゝり給へる者よ、汝正しき目を他^{ほか}の
處にむけたまふか 一一八—一二〇

はたこは我等の全く悟る能はざる福祉^{さいはひ}のためいと深き聖旨^{みむね}の

奥に汝の設けたまふ備^{そなへ}なるか 一二一—一二三

そは專横の君あまねくイタリアの諸邑^{まち}に満ち、匹夫朋黨に加

はりてみなマルチエルとなればなり 一二四—一二六

わがフィオレンツアよ、汝この他事^{あだしこと}をきくともこは汝に干係^{かゝはり}

なければまことに心安からむ、汝をこゝにいたらしむる汝の

民は讃むべきかな 一二七—一二九

義を心に宿す者多し、されど漫りに弓を手にするなからんた

めその射ること遅きのみ、然るに汝の民はこれを口の端^{はし}に置

く 一三〇—一三二

公共^{おほやけ}の荷を拒むもの多し、然るに汝の民は招かれざるにはや

くも身を進めて我自ら負はんとさけぶ 一三三—一三五

いざ喜べ、汝しかするは宜^{うべ}なればなり、汝富めり、汝泰平な

り、汝智^{さと}し、わがこの言^{ことば}の偽りならぬは事實よくこれを證^{あかし}す

一三六—一三八

文運かの如く開け、且つ古の律法^{おきて}をたてしアテーネもラチエ

デーモナも、汝に比^{くら}ぶればたゞ小^さやかなる治國の道を示せる

のみ 一三九—

汝の律法^{おきて}の絲は細^{こま}かなれば、汝が十月に紡^{つむ}ぐもの、十一月の

半^{なかば}まで保たじ 一四四

げに汝が汝のおぼゆる時の間に律法^{おきて}、錢^{ぜに}、職務^{つとめ}、習俗^{ならはし}を變へ

民を新たにせること幾度^{いくたび}ぞや 一四五—一四七

汝若しよく記憶^{おのれ}をたどりかつ光をみなば、汝は自己^{おのれ}があたか

も病める女の軟毛^{わたげ}の上にやすらふ能はず、身を左右にめぐら

して 一四八―一五〇

苦痛^{いたみ}を防ぐに似たるを見む

一五一―一五三

第七曲

ふさはしきうれしき會釋^{ゑしやく}三度^{みたび}と四度^{よたび}に及べる後、ソルデルし
ざりて汝は誰なりやといふ 一—三

登りて神のみもとにいたるを魂等未だこの山にむかはざりし
さきに、オッタヴィアーンわが骨を葬りき 四—六

我はヴィルジリオなり、他^{ほか}の罪によるにあらずたゞ信仰なき
によりてわれ天を失へり。導者この時斯く答ふ 七—九

ふと目の前に物あらはるればその人あやしみて、こは何なり
否あらずといひ、信じてしかして疑ふことあり 一〇—一二
かの魂もまたかくのごとくなりき、かくて目を垂れ、再びう
やく／＼しく導者に近づき、僕^{しもべ}の抱くところをいだきて 一三

——一五

いひけるは。あゝラチ才人の榮よ——汝によりて我等の言葉
その力の極をあらはせり——あゝわが故郷の永遠の實よ 一

六——一八

我を汝に遭はしめしは抑々何の功德何の恩恵ぞや我若し汝の
言を聞くの幸をえば請ふ告げよ汝地獄より來れるかそは何の
圍の内よりか。 一九——二一

彼これに答ふらく。我は悲しみの王土の中なる諸々の獄をへ
てこゝに來れり、天の威力我を動かしぬ、しかしてわれこれ
とともに行く 二二——二四

爲すによるにあらず爲さざるによりて我は汝の待望み我の後
れて知るにいたれる高き日を見るをえざるなり 二五——二七
下に一の處あり、苛責のために憂きにあらねどたゞ暗く、そ

ここにきこゆる悲しみの聲は歎息ためいきにして叫喚さけびにあらず 二八―

三〇

かしこに我は、人の罪より釋とかれざりしさきに死の齒に噛まれし稚兒をさなごとともにあり 三一―三三

かしこに我は、三の聖なる徳を着ざれど惡を離れ他ほかの諸の徳を知りてすべてこれを行へる者とともにあり 三四―三六
されど汝路をしりかつ我等に示すをうべくば、請ふ我等をして淨火のまことの入口にとくいたるをえせしめよ。 三七―

三九

答へて曰ふ。我等は定まれる一の場所におかるゝにあらず、
上のぼるも廻めぐるも我これを許さる、われ導者となりて汝と俱に

四〇―

わが行くをうる處までゆくべし、されど見よ日は既に傾きぬ、

夜登る能はざれば、我等うるはしき旅宿やどりを求めむ ― 四五
 右の方かたなる離れし處に魂の群むれあり、汝肯うけがはば我は汝を彼等の
 許に導かむ、汝彼等を知るを喜びとせざることあらじ。 四

六―四八

答へて曰ふ。いかにしてこの事ありや、夜登らんとおもふ者
 は他ほかの者にさまたげらるゝかさらずば力及ばざるため自ら登
 る能はざるか。 四九―五一

善きソルデル口指にて地を擦すりていふ。見よ、この線すぢをだに
 日入りて後は汝越えがたし 五二―五四

されど登のぼりの障礙しやうげとなるもの夜の闇のほかにはあらず、この闇
 能力ちからを奪ひて意志をさまたぐ 五五―五七

天涯晝をとちこむる間は、汝げに闇とともにこゝをくだりま
 たは迷ひつゝ山の腰をめぐるをうるのみ。 五八―六〇

この時わが主驚くがごとくいひけるは。さらば請ふ我等を導き、汝の我等に喜びてとゞまるをうべしといへる處にいたれ。

六一―六三

我等少しかしこを離れしとき、我は山の窪みてあたかも世の大溪おほたにの窪むに似たるところを見たり 六四―六六

かの魂曰ふ。かなたに山腹のみづから懷ふところをつくるところあり、

我等かしこにゆきて新たなる日を待たむ 六七―六九

忽ち嶮けはしく忽ち坦たひらかなる一條の曲路我等を導いてかの坎あなの邊ほとり、
縁半ふちなかばより多く失せし處にいたらしむ 七〇―七二

金、純銀、朱、白鉛、光りてあざやかなるインドの木、碎け
し眞際まぎはの新しき縁の珠も 七三―七五

各々その色を比ぶれば、かの懷の草と花とに及ばざることな
ほ小の大に及ばざることくなるべし 七六―七八

自然はかしこをいろどれるのみならず、また千の良き薫よかをりをも
て一の奇しきわけ難にほひき香を作れり 七九―八一

我見しにこゝには溪のため外部そとよりみえざりし多くの魂サル
ウェ・レーギーナを歌ひつゝ縁草あをくさの上また花の上に坐しゐた
り 八二―八四

我等をともしなへるマントヴァ人びといふ。たゞしばしの日全くそ
の巢に歸るまでは、汝等我に導かれてかしこにゆくをねがふ
なかれ 八五―八七

汝等窪地くぼちにくだりてかの衆と俱にあらんより、この高臺パルツオにあ
りて彼等を見なば却つてよくその姿と顔を認むるをえむ 八
八―九〇

いと高き處に坐し、その責務つとめを怠りしごとくみえ、かつ侶ともの
歌にあはせて口を動かすことをせざる者は 九一―九三

皇帝ロドルフオなりき、かれイタリアの傷を癒すをえたりし
にその死ぬるにまかせたれば、人再びこれを生かさんとする
ともおそし 九四―九六

また彼を慰むるごとくみゆるは、モルタ、アルビアに、アル
ビア、海におくる水の流れいづる地を治めし者にて 九七―
九九

名をオッタケツルロといへり、その襁褓むつきに裹つまれし頃も、淫
樂安逸をむさぼるその子ヴェンチエスラーオの鬚ある頃より
遙に善かりき 一〇〇―一〇二

姿いと貴き者たふとと親したしく相かたらふさまなるかの鼻の小さき者
は百合の花を萎しをれしめつゝ逃げ走りて死したりき 一〇三―

一〇五

かしこに此これのしきりに胸をうつをみよ、また彼のなげきつゝ

その掌^{たなび}をもて頬の床となすを見よ 一〇六一一〇八

彼等はフランスの禍ひの父と舅なり、彼等彼の邪^{よこしま}にして穢れ

たる世を送れるを知りこれがためにかく憂ひに刺さる 一〇

九一一一一

身かの如く肥ゆとみえ、かつかの鼻の雄々しき侶^{とも}と節^{ふし}をあは

せて歌ふ者はその腰に萬の徳の紐を纏ひき 一一二一一四

若し彼の後^{うしろ}に坐せる若き者その王位を繼ぎてながらへたりせ

ば、この徳まことに器^{うつは}より器に傳はれるなるべし 一一五―

一一七

但し他^{ほか}の嗣子^{よつぎ}についてはかくいひがたし、ヤーコモとフェデ

リーゴ今かの國を治む、いと善きものをばその一^{ひと}だに繼^つがざ

りき 一一八―一二〇

それ人の美德は枝を傳ひて上^{のぼ}ること稀なり、こはこれを與ふ

るもの、その己より出づるを知らしめんとてかく定めたまふ
による 一二一—一二三

かの鼻の大いなる者も彼と俱にうたふ。ピエルと同じくわがい
へるところに適^{かな}ふ、此故にプーリアもプロヴェンツアも今悲
しみの中にあり 一二四—一二六

げにコスタンツアが今もその夫に誇ること遠くベアトリ―
チェ、マルゲリータの上に出づる如くに、樹は遠く種に及ば
じ 一二七—一二九

簡易の一生を送れる王、イギリスのアルリーゴのかしこにひ
とり坐せるを見よ、かれの枝にはまされる芽^めあり 一三〇—
一三二

彼等のうち地のいと低きところに坐して仰ぎながむる者は侯爵^{マルケーゼ}
グイリエルモなり、彼の爲なりきアレツサンドリアとその師^{いくさ}

とが 一三三―一三五

モンフェルラートとカナヴェーゼとを歎かしむるは。

一三

六―一三八

第八曲

なつかしき友に別れを告げし日、海行く者の思ひ歸りて心やはらぎ、また暮るゝ日を悼^{いた}むがごとく 一―三
鐘遠くより聞ゆれば、はじめて異郷の旅にある人、愛に刺さるゝ時とはなりぬ

我は何の聲をもきかず、一の魂の立ちて手をもて請ひて、耳をかたむけしむるを見たり 七―九

この者手を合せてこれをあげ、目を東^{かた}の方にそゝぎぬ、そのさま神にむかひて、われ思ひをほかに移さずといふに似たり
き 一〇―一二

テー・ルーキス・アンテその口よりいづるに、信念あらはれ

調^{しらべ}うるはしくして悉くわが心を奪へり 一三一—一五

かくて全衆これに和し、目を天球にむかはしめつゝ、聲うるはしく信心深くこの聖歌をうたひをはりき 一六一—一八

讀者よ、いざ目を鋭くして眞^{まこと}を見よ、そは被物^{おほひ}はげに今いと

薄く、内部^{うち}をうかがふこと容易なればなり 一九—二一

我はかの際^{きはたか}貴き者の群^{むれ}の、やがて色蒼^{あを}ざめ且つ謙^{へりくだ}り、何者を

か待つごとくに黙^{もだ}して仰ぎながむるを見き 二二—二四

また尖^{さき}の削りとられし二の焰^{つるぎ}の劔をもち、高き處よりいでて

下り來れるふたりの天使を見き 二五—二七

その衣^{ころも}は、今萌^もえいでし若葉のごとく縁なりき、縁の羽に打

たれ翻^{あふ}られて彼等の後方^{うしろ}に曳かれたり 二八—三〇

そのひとりは我等より少しく上方^{うへ}にとゞまり、ひとりは對面^{むかひ}

の岸にくだり、かくして民をその間に挟^{はさ}めり 三一—

我は彼等の頭^{かうべ}なる黄金^{こがね}の髪をみとめしかど、その顔にむかへば、あたかも度を超ゆるによりて能力^{ちから}亂るゝごとくわが目眩^{くら}みぬ — 三六

ソルデルロ曰ふ。彼等ふたりは溪をまもりて蛇をふせがなためマリアの懷^{ふところ}より來れるなり、この蛇たゞちにあらはれむ。

三七—三九

我これを聞きてそのいづれの路よりなるを知らざればあたりをみまはし、わが冷えわたる身をかの頼もしき背に近寄せぬ

四〇—四二

ソルデルロまた。いざ今より下りてかの大いなる魂^{むね}の群^{むれ}に入り、彼等に物言はむ、彼等はいたく汝等を見るを悦ぶなるべし。 四三—四五

下ることたゞ三步ばかりにて我はやくも底につきしに、こゝ

にひとり、わが誰なるを思出さんと願ふ如く、たゞ我をのみ
見る者ありき 四六―四八

はや次第に空の暮行く時なりしかど、その暗さははじめかく
れたりしものを彼の目とわが目の間にあらはさざるほどにあ
らざりき 四九―五一

彼わが方^{かた}に進み我彼の方に進めり、貴き國司ニーンよ、汝が
つみびと
罪人の中にあらざるを見て、わが喜べることいかばかりぞや

五二―五四

我等うるはしき會釋^{えしやく}の數をつくせしとき、彼問ひていふ。汝
はるかに水を渡りて山の麓に來れるよりこの方いくばくの時
をか經たる。 五五―五七

我彼に曰ふ。あゝ悲しみの地を過ぎてわが來れるは今朝^{けさ}の事
なり、我は第一の生をうく、かく旅して第二の生をえんとす

れども。 五八一六〇

わが答を聞けるととき、俄に惑へる人々のごとく、ソルデルロ
もかれもあとにしざりぬ 六一―六三

その一はヴィルジリオに向へり、また一は彼處ひとりのかしこに坐せる者に

むかひ、起きよクルラード、來りて神の惠深き聖旨みむねより出し

事を見よと叫び 六四―六六

後我にむかひ。渉わたるべき處なきまで己が最初はじめの故由ゆゑよしを祕ひめた

まふものに汝の負ふ稀有けうの感謝を指して請ふ 六七―六九

汝大海おほうみのかなたに歸らば、わがジョヴァンナに告げて、罪な

き者の祈り聽かるゝところにわがために聲をあげしめよ 七

〇―七二

おもふに彼の母はその白き首帕かしらぎぬを變へしよりこのかた（あは

れ再びこれを望まざるをえず）また我を愛せざるなり 七三

―七五

ためし

人この例をみてげにたやすくさとるをえむ、女の愛なるものは見る^いこと觸るゝことによりて屡々燃やされずば幾何^{いくばく}も保つ

能はざるを 七六―七八

びと

には

まむし

ミラーノ人を戦ひの場にみちびく蝮蛇も、ガルルーラの鶏のごとくはかの女の墓を飾らじ。 七九―八一

ほどよく心の中に燃ゆる正^{ただ}しき熱^{あつ}き思ひの印を姿に捺^おしてか

れ斯くいへり 八二―八四

わが飽かざる目は天にのみ、あたかも軸いとちかき輪のごとく星のめぐりのいとおそき處にのみ行けり 八五―八七

わが導者。子よ何をか仰ぎながむるや。我彼に。かの三の燈火^{ともしび}

なり、南極これが爲にことごとく燃ゆ。 八八―九〇

彼我に。今朝^{けさ}汝が見たる四のあざやかなる星かなたに沈み、

此等は彼等のありし處に上のぼれるなり。 九一―九三

彼語りゐたるとき、ソルデル口彼をひきよせ、我等の敵を見よといひて指ぎしてかなたをみせしむ 九四―九六

かの小さき溪かこひの圍なきところに一の蛇ゐたり、こは昔エーヴァに苦にがき食物くひものを與へしものとおそらくは相似たりしなるべし

九七―九九

身なめらかを滑なめならしむる獸のごとくしばく頭を背にめぐらして舐ねぶりつゝ草と花とを分けてかの禍ひもひの紐きは來ぬ 一〇〇―一〇

二

天の鷹の飛立ちしさまは我見ざればいひがたし、されど我は彼も此も俱に飛びゐたるをさだかに見たり 一〇三―

縁そらの翼空そらを裂く響のぼきをききて蛇逃げさりぬ、また天使等は同じ早さに舞ひ上りつゝその定まれる處に歸れり 一〇八

國司に呼ばれてその傍にゐたる魂は、この争ひのありし間、
かたとぎ

片時も瞳を我より離すことなかりき 一〇九—一一一

さていふ。願はくは汝を高きに導く燈火、ともしび 汝の自由の意志の

うちにて、かの※藥の巔に到るまで盡きざるばかりの多くの

蠟をえんことを 一一二—

汝若しヴァル・デイ・マーグラとそのあたりの地のまことの
おとづれ

消息をしらば請ふ我に告げよ、我は昔かしこにて大いなる者

なりき 一一七

われ名をクルラード・マラスピーナといへり、かの老にあら
ちゆう

ずしてその裔なり、己が宗族にそゝげるわが愛今こゝに淨め
すゑ うから きよ

らる。 一一八—一二〇

我彼に曰ふ。我は未だ汝等の國を過ぎたることなし、されど

エウロパ全洲の中苟も人住む處にその聞なきことあらんや

一二一—一二三

汝等の家をたかむる美名は、君をあらはし土地をあらはし、

かしこにゆけることなきものもまた能くこれを知る 一二四

—一二六

我汝に誓ひて曰はむ（願はくはわれ高きに達するをえんことを）、汝等の尊き一族は財布と劔における譽の飾を失はず 一

二七—一二九

習慣と自然これに特殊の力を與ふるがゆゑに、罪ある首世を枉ぐれどもひとり直く歩みて邪の道をかろんず。 一三〇—

一三二

彼。いざゆけ、牡羊四の足をもて蔽ひ跨がる臥床の中に、日の七度やすまざるまに 一三三—一三五

ねんごろなるこの意見は、人の言よりも大いなる釘をもて汝
の頭かうべの正中たゞなかに釘付けらるべし 一三六―一三八
審判さばきの進路支ゆくてへられずば。 一三九―一四一

第九曲

年へしティトネの妾そばめそのうるはしき友の腕かひなをはなれてはや東

の臺うてなに白しろみ 一―三

その額ひたひは尾をもて人を撃つ冷やかなる生物いきものに象かたどれる多くの珠たま

に輝けり 四―六

また我等のゐたる處にては、夜はその昇のぼりの二歩を終へ、第三

歩もはやその翼を下方に枉ゆづりげたり 七―九

このとき我はアダモの讓ゆづりを受くるによりて睡りに勝たれ、我

等五者いつたりみな坐しゐたりし草の上に臥しぬ 一〇―一二

そのかみの憂ひを憶ひ起すなるべし可憐いとほしの燕朝近く悲しき歌

をうたひいで 一三―一五

また我等の心、肉を離るゝこと遠く思にとらはるゝこと少なくして、その夢あたかも神しんに通ずるごとくなる時

我は夢に、黄金こがねの羽ある一羽の鷲しゆの、翼をひらきて空そらに懸かり、

降らんとするをみきとおぼえぬ 一九—二一

また我はガニメーデさくらが攫さらはれて神集かんづとひにゆき、その侶ともあとに残

されしところにゐたりとおぼえぬ 二二—二四

我ひそかに思へらく、この鳥恐らくはその習ひによりて餌を

こゝにのみ求むるならむ、恐らくはこれを他ほかの處に得て持もちて

舞上まひのぼるを卑しむならむと 二五—二七

さてしばらく廻めぐりて後、このもの電光いなづまのごとく恐ろしく下り

來りて我をとらへ、火にいたるまで昇るに似たりき 二八—

三〇

鳥も我もかの處にて燃ゆとみえたり、しかして夢の中なる火

燒くことはげしかりければわが睡りおのづから破れぬ 三一

— 三三 —

かのアキルレが、目覺めてそのあたりを見、何處いづこにあるやをしらずして身をゆるがせしさまといふとも 三四—三六

(こはその母これをキロネより奪ひ、己が腕かひなにねむれる間にシロに移せし時の事なり、その後かのギリシア人びとこれにかしこを離れしむ) 三七—三九

睡顔ねむりより逃げしときわがうちふるひしさまに異ならじ、我はあたかも怖れのため氷に變る人の如くに色あをざめぬ 四〇

— 四二 —

わが傍には我を慰むる者のみみたり、日は今高きこと二時ふたときにあまれり、またわが顔は海のかたにむかひゐたりき 四三—

四五

わが主曰ふ。おそろゝなかれ、心を固うせよ、よき時來りたればなり、汝の力をみなあらはして抑おさふるなかれ 四六―四八

汝は今淨火に着けり、その周邊まはりをかこむ岩をみよ、岩分るゝ

とみゆる處にその入口あるをみよ 四九―五一

今より暫しばし前さき、晝にさきだつ黎明あけぼのの頃、汝の魂かの溪を飾る

花の上にて汝の中に眠りゐたるとき 五二―五四

ひとりの淑女來りて曰ふ、我はルーチアなり、我にこの眠れる者を齎らすを許せ、我斯くしてその路を易からしめんと

五五―五七

ソルデルとほかの貴き魂は残れり、淑女汝を携へて日の出づるとともに登り來り、我はその步履あゆみに従へり 五八―六〇

彼汝をこゝに置きたり、その美しき目はまづ我にかの開きた

る入口を示せり、しかして後彼も睡りもともに去りにき。

六一—六三

眞^{まこと}あらはるゝに及び、疑^{まじ}ひ解けて心やすんじ、恐れを慰めに
變ふる人のごとく 六四—六六

我は變りぬ、わが思ひわづらふことなきをみしとき、導者岩
に沿ひて登り、我もつづいて高處^{たかみ}にむかへり 六七—六九
讀者よ、汝よくわが詩材のいかに高くなれるやを知る、され
ば我さらに多くの技^{わざ}をもてこれを支へ固むるともあやしむな
かれ 七〇—七十二

我等近づき、一の場所にいたれるとき、さきにわが目に壁を
分つ罅^{われめ}に似たる一の間^{ひま}ありとみえしところに 七三—七五

我は一の門と門にいたらんためその下に設けし色異なれる三
の段^{きだ}と未だ物言はざりしひとりの門守^{かどもり}を見たり 七六—七八

またわが目いよ／＼かなたを望むをうるに従ひ、我は彼が最高き段きだの上に坐せるをみたり、されどその顔をばわれみるに堪へざりき 七九―八一

彼手に一の白刃しらばを持てり、この物光を映うつしてつよく我等の方

に輝き、我屡々目を擧ぐれども益なかりき 八二―八四

彼曰ふ。汝等何を欲するや、その處にてこれをいへ、導者いづこにかある、漫りに登り來りて自ら禍ひを招く勿れ。 八

五―八七

わが師彼に答へて曰ふ。此等の事に精くはしき天の淑女今我等に告げて、かしこにゆけそこに門ありといへるなり。 八八―

九〇

門守かどもりねんごろに答へていふ。願はくは彼幸さいはひの中に汝等の歩みを導かんことを、さらば汝等我等の段きだまで進み來れ。 九一

—九三—

我等かなたにすゝみて第一の段きだのもとにいたれり、こは白き大理石にていと清くつややかなれば、わが姿そのまゝこれに映うつりてみえき 九四—九六

第二の段は色ペルソより濃き、粗あらき焼石にて縦にも横にも罅ひ裂ぎありき 九七—九九

上にありて堅き第三の段は斑岩はんがんとみえ、脈より迸る血汐のごとく赤く煌きらけり 一〇〇—一〇二

神の使者つかひもろあし兩足をこの上に載せ、金剛石とみゆる闕のうへに坐しめたり 一〇三—一〇五

この三の段をわが導者は我を拉ひきてよろこびて登らしめ、汝うやうやしく彼に肩とがしをあけんことを請へといふ 一〇六—一

〇八

我まづ三度わが胸を打ち、後つゝしみて聖なる足の元にひれ

ふし、慈悲をもてわがために開かんことを彼に乞へり 一〇

九——一一

彼七のPを劔の尖にてわが額に録し、汝内に入らば此等の疵

を洗へといふ 一一二——一一四

灰または掘上し乾ける土はその衣と色等しかるべし、彼はかゝ

る衣の下より二の鑰を引出せり 一一五——一一七

その一は金、一は銀なりき、初め白をもて次に黄をもて、か

れ門をわが願へるごとくにひらき 一一八——一二〇

さて我等にいひけるは。この鑰のうち一若し缺くる處ありて

ほどよく肩の中にめぐらざればこの入口ひらかざるなり 一

二——一二三

一は殊に價貴し、されど一は纈を解すものなるがゆゑにあく

るにあたりて極めて大なる技と智を要む 一二四—一二六
 我此等をピエルより預かれり、彼我に告げて、民わが足元に
 ひれふさば、むしろ誤りて開くとも誤りて閉ぢおく勿れとい
 へり。 一二七—一二九

かくて聖なる門の扉を押していひけるは。いざ入るべし、さ
 れど汝等わが誠めを聞け、すべて後方を見る者は外に歸らむ。

一三〇—一三二

聖なる門の鳴なりよき強き金屬かねの肘金ひぢがね、肘壺ひぢつぼの中にまはれるとき
 にくらぶれば 一三三—一三五

かの良きメテルロを奪はれし時のタルペーアも（この後これ
 がために瘠す）その叫喚わめきあらがへることなほこれに若かざ
 りしなるべし 一三六—一三八

我は最初はじめの響きに心をとめてかなたにむかひ、うるはしき調しらべ

にまじれる聲のうちにテ・デウム・ラウダームスを聞くと
おぼえぬ 一三九―一四一

わが耳にきこゆるものは、あたかも人々立ちて樂がくの器うつはにあは
せてうたひその詞きこゆることあり 一四二―一四四

きこえざることある時の響きに似たりき 一四五―一四七

第十曲

我等門の闕の内に入りし後（魂の惡き愛歪^{ゆが}める道を直^{なほ}く見えしむるためこの門開かるゝこと稀なり） 一—三

我は響きをききてその再び閉されしことを知りたり、我若し目をこれにむけたらんには、いかなる詫^{わび}も豈この咎にふさはしからんや 四—六

我等は右に左に紆^{うね}行りてその状^{さま}あたかも寄せては返す波に似たる一の石の裂目^{さけめ}に登れり 七—九

わが導者曰ふ。我等は今縁^{ふち}の逼らざるところを求めてかなたこなたに身を寄するため少しく技^{わざ}を用ゐざるをえず。 一〇

この事我等の歩みをおそくし、虧けたる月安息やすみを求めてその床に歸れる後 一三―一五

我等はじめてかの針眼はりのめを出づるをえたり、されど山後方しりへにかたよれる高き處にいたりて、我等自由に且つ寛ゆるやかになれるとき 一六―一八

われ疲れ、彼も我も定かに路をしらざれば、われらは荒野あらのの道よりさびしき一の平地ひらちにとゞまれり 一九―二一

空處とこに隣となれるその縁へりと、たえず聳ゆる高き岸の下もととの間は、人の身長みのたけ三度たびはかるに等しかるべし 二二―二四

しかしてわが目その翼をはこぶをうるかぎり右にても左にてもこの臺うてなすべて斯かくの如く見えき 二五―二七

我等の足未だその上を踏まざるさきに、我は垂直にして登るあたはざるまはりの岸の 二八―三〇

純白の大理石より成り、かのポリクレートのみならず、自然もなほ恥づるばかりの彫刻ほりものをもて飾らるゝをみたり 三一—

三三

天を開きてその長き禁いましめを解きし平和あまた（許多の年の間、世の人泣いてこれを求めき）を告げしらせんとて地に臨める天使の

三四—三六

うるはしき姿との處に刻きざまれ、ものいはぬ像と見えざるまで眞に逼りて我等の前にあらはれぬ 三七—三九

誰か彼が幸さちあれといひゐたるを疑はむ、そは尊き愛を開かんとて鑰まはを廻かたちせる女の象かしこにあらはされたればなり 四〇

—四二

しかして神はしための婢を見よといふ言葉、あたかも蛾かたに印影おの捺おさるゝごとくあざやかにその姿に摺すられき 四三—四五

汝思ひを一の處にのみ寄する勿れ。人の心臓こころのある方かたに我をおきたるうるはしき師斯くいへり 四六―四八

我即ち目をめぐらして見しに、マリアの後方うしろ、我を導ける者のゐたるかなたに 四九―五一

岩に彫りたる他の物語ほかありき、このゆゑに我はこれをわが目の前まへにあらしめんとてヴィルジリオを超えて近づきぬ 五二

―五四

そこには同じ大理石の上に、かの聖なる匱はこを曳きゐたる事と牛ぎうと刻きざまれき（人この事によりて委ねゆたられざる職務つとめを恐る）

五五―五七

その前には七の組に分たれし民見えたり、彼等はみなわが官能の二のうち、一に否と一に然り歌ふといはしむ 五八―六

○

これと同じく、わが目と鼻の間には、かしこにゑりたる薰物たきもの
の煙について然と否との争ひありき 六一―六三
かしこに謙遜へりくだれる聖歌の作者衣きぬひき褰かげて亂れ舞ひつゝ恩惠めぐみ
の器うつはにさきだちゐたり、この時彼は王者わうじやに餘りて足らざりき

六四―六六

對むかひの方かたには大いなる殿とのの窓の邊ほとりにゑがかれしミコル、蔑視さげすみ悲

しむ女の如くこれをながめぬ 六七―六九

我わが立てる處をはなれ、ミコルの後方うしろに白く光れる一の物

語をわが近くにみんとて足をはこべば 七〇―七二

こゝには己が徳によりてグレゴリオを動かしこれに大いな
る勝利かちをえしめしローマの君の榮光高き事蹟を寫せり 七三

―七五

わが斯くいへるは皇帝トラヤーノの事なり、ひとりの寡婦やもめ涙

と憂ひを姿にあらはし、その轡のほとりに立てり 七六―七八

君のまはりには多くの騎馬武者群むらがりて押しあふごとく、またその上には黄金こがねの中なる鷺風たゞよに漂ふごとく見えたり 七九

―八一

すべてこれらの者のなかにてかの幸さちなき女、主よわがためにわが子の仇を報いたまへ、彼死にてわが心いたく傷いたむといひ

八二―八四

彼はこれに答へて、まづわが歸るまで待てといふに似たりき、また女、あたかも歎きのために忍ぶあたはざる人の如く、我主よ 八五―八七

若し歸り給はずばといひ、彼、我に代る者汝の爲に報いんといひ、女又、汝己の爲すべき善を思はずば人善を爲すとも汝

に何の係かはり在らん 八八一

といひ、彼聞きて、今は心を安んぜよ、我わが義務つとめを果して
後行かざるべからず、正義これを求め、慈悲我を抑とむといふ
に似たりき 一九三

未だ新しき物を見しことなきもの、この見るをうべき詞を造
りたまへるなり、こは世にあらざるがゆゑに我等めづらに奇し 九
四一九六

かく大いなる謙遜を表はしその造主つくりぬしの故によりていよくた
ふときこれらの象かたちをみ、われ心を喜ばしむるに 九七一九
九

詩人さゝやきていふ。見よこなたに多くの民あり、されどそ
の歩あゆみは遅し、彼等われらに高き階きざはしにいたる路を教へむ。一

眺^{なが}むること^にのみ凝^これるわが目も、その好む習ひなる奇^{めづ}しき
 物をみんとて、たゞちに彼^{かた}の方にむかへり 一〇三—一〇五
 讀者よ、げに我は汝が神何によりて負債^{おひめ}を償はせたまふやを
 聞きて己の善き志より離るゝを願ふにあらず 一〇六—一〇

八

心を苛責^{ありさま}の状態にとむるなかれ、その成行^{なりゆき}を思へ、そのいかに
 あしくとも大なる審判^{さばき}の後まで續かざることを思へ 一〇

九—一一一

我曰ふ。師よ、こなたに動くものをみるに姿人の如くならず、
 されどわが目迷ひて我その何なるを知りがたし。 一一二—

一一四

彼我に。苛責^{おもに}の重荷彼等を地に屈^{かゞ}ましむ、されば彼等の事に
 つきわが目をはじめ争へるなり 一一五—一一七

されど汝よくかしこをみ、かの石の下になりて来るものをみ
わくべし、汝は既におのおのいかなやむやを認むるをえ
む。 一一八——一二〇

噫々心傲^{たかぶる}が基督教徒^{クリステイアン}よ、幸なき弱れる人々よ、汝等精神^{たましひ}の視

力衰へ、後退^{あとじさり}して進むとなす 一二一——一二三

知らずや人は、裸^{はだか}のまゝ飛びゆきて審判^{さばき}をうくる靈體の蝶を

造らんとて生れいでし蟲^{まつた}なることを 一二四——一二六

汝等は羽ある蟲の完^{まつた}からず、這ふ蟲の未だ成り終らざるもの

に似たるに、汝等の精神^{たましひ}何すれぞ高く浮び出づるや 一二七

——一二九

天井または屋根を支ふるため肱木^{ひぢぎ}に代りてをりふし一の像の

膝を胸にあて 一三〇——一三二

眞^{まこと}ならざる苦しみをもて眞の苦しみを見る人に起さしむるこ

とあり、われ心をとめて彼等をみしにそのさままた斯の如く
なりき 一三三―一三五

但し背に負ふ物の多少に従ひ、彼等の身を縮むること一様な
らず、しかして最も忍耐強しと見ゆる者すら 一三六―一三八
八

なほ泣きつゝ、我堪へがたしといふに似たりき 一三九―一
四一

第十一曲

限らるゝにあらず、高き處なる最初はじめの御業みわざをいと潔く愛した

まふがゆるゑに天に在います我等の父よ 一—三

願よろづのものはくは萬物よろづのものうるはしき聖息みいきに感謝するの適ふさはしきをおもひ、

聖名みなと聖能みちからを讃ほめたたへんことを 四—六

爾國みくにの平和を我等の許もとに來らせたまへ、そは若し來らずば、

我等こゝろばせ意を盡すとも自ら到るあたはざればなり 七—九

天使等みつかひたちオザンナを歌ひつゝ己が心を御前みまへにさゝげまつるなれ

ば、人またその心をかくのごとくにさゝげんことを 一〇—

一二

けふ 今日けふも我等に日毎のマンナを與へたまへ、これなくば、この

あらの
曠野をわけて進まんとて、最もつとむる者も退く 一三―一

五

我等のうけし害そこなひをわれら誰にも赦すごとく、汝も我等の功德くどく

を見たまはず、聖恵みめぐみによりて赦したまへ 一六―一八

いとよわき我等の力を年へし敵の試こころみにあはせず、巧みにこれ

を唆そゝかす者よりねがはくは救ひ出したまへ 一九―二一

この最後をほりの事は、愛する主よ、我等祈ねぎまつるに及ばざれど

も、かくするはげに己の爲にあらずしてあとに残れる者のた

めなり。 二二―二四

斯く己と我等のために幸多さちき旅を祈りつゝ、これらの魂は、

人のをりふし夢に負ふごとき重荷おもにを負ひ 二五―二七

等しからざる苦しみをうけ、みな疲れ、世の濃霧こきぎりを淨めつゝ

第一の臺うてなの上をめぐれり 二八―三〇

彼等もし我等のためにかしこにたえず幸を祈らば、己が願ひに良根よきねを持つ者、こゝに彼等のために請ひまた爲しうべき事いかばかりぞや 三一—三三

我等は彼等が清く軽くなりて諸々の星の輪にいたるをえんため、よく彼等を助けて、そのこゝより齎もたらせし汚染しみを洗はしむべし 三四—三六

あゝ願はくは正義と慈悲速かに汝等の重荷おもにを取去り、汝等翼を動かして己が好むがまゝに身を上ぐるをえんことを 三七—三九

請ふいづれの道の階きざはしにいとちかきやを告げよ、またもし徑こみち一のみならずば、嶮けはしからざるものを教へよ 四〇—四二
そは我にともなふこの者、アダモの肉の衣ころもの重荷おもにあるによりて、心いそげど登ることおそれければなり。 四三—四五

我を導く者斯くいへるとき、彼等の答への誰より出でしやは
あきらかならざりしかど 四六―四八

その言にいふ。岸を傳ひて我等とともに右に來よ、さらば汝
等は生くる人の登るをうべき徑を見ん 四九―五一

我若しわが傲慢の項を矯め、たえずわが顔を垂れしむるこの
石に妨げれずば 五二―五四

名は聞かざれど今も生くるその者に目をとめ、わが彼を知る
や否やをみ、この荷のために我を憐ましむべきを 五五―五
七

我はラチオの者にて、一人の大きいなるトスカ―ナ人より生れ
ぬ、グイリエルモ・アルドブランデスコはわが父なりき、こ
の名汝等の間に 五八―

聞えしことありや我知らず、わが父祖の古き血と讃むべき業

我を僭越ならしめ、我は母の同じきをおもはずして　―六三
何人をもいたく侮りしかばそのために死しぬ、シエーナ人^{びと}こ
れを知り、カムパニヤティーコの稚兒^{をさなご}もまたこぞりてこれ
しる　六四―六六

我はオムベルトなり、たゞ我にのみ傲慢害^{たかぶり}をなすにあらず、
またわが凡ての宗族^{うから}をば禍ひの中にひきいれぬ　六七―六九
神の聖心^{みこころ}の和^{やは}らぐ日までわれ此罪のためにこゝにこの重荷を
負ひ、生者^{しやうじや}の間に爲さざりしことを死者の間になさざるべ
からず。　七〇―七十二

我は聞きつゝ頭^{かうべ}を垂れぬ、かれらのひとり（語れる者にあら
ず）そのわづらはしき重荷の下にて身をゆがめ　七三―七五
我を見て誰なるやを知り、彼等と俱に全く屈^{かゞ}みて歩める我に
辛うじて目を注ぎつゝ我を呼べり　七六―七八

我彼に曰ふ。あゝ汝はアゴッビオの譽ほまれ、巴里パリージにて色彩しきさいと稱となへ
らるゝ技わざの譽なるオデリジならずや。 七九—八一

彼曰ふ。兄弟よ、ボローニア人びとフランコの描けるものの華はなやか
なるには若かじ、彼今すべての譽ほまれをうく、我のうくるは一部
のみ 八二—八四

わが生ける間は我しきりに人を凌しのがんことをねがひ、心これ
にのみむかへるが故に、げにかく譲ゆづるあたはざりしなるべし

八五—八七

我等こゝにかゝる傲慢たかぶりの負債おひめを償ふ、もし罪を犯すをうると
きわれ神に歸らざりせば、今もこの處にあらざるならむ 八

八—九〇

あゝ人力さかえの榮むなは虚し、衰へる世の來るにあはずばその頂いたゞきの縁
いつまでか残らむ 九一—九三

繪にてはチマーブエ、覇を保たんとおもへるに、今はジオツ
 トの呼聲^{よびごゑ}高く、彼の美名^{よぎな}微^なになりぬ 九四―九六

また斯の如く一のグイード他のグイードより我等の言語^{ことば}の榮
 光を奪へり、しかしてこの二者^{ふたり}を巢より逐ふ者恐らくは生れ
 出たるなるべし 九七―九九

夫れ浮世^{うきよ}の名聞^{きこえ}は今此方^{こなた}に吹き今彼方^{かなた}に吹き、その處を變ふ
 るによりて名を變ふる風の一息^{ひといき}に外ならず 一〇〇―一〇二
 汝たとひ年へし肉を離るゝため、パツポ、デインディを棄て
 ざるさきに死ぬるよりは多く世にしらるとも 一〇三―一〇

五

豈^{ちとせ}千年に亙らむや、しかも千年を永劫に較ぶればその間の短
 きこと一の瞬^{またゝき}をいとおそくめぐる天に較ぶるより甚し 一〇

六―

路を刻みてわが前をゆく者はかつてその名をあまねくトスカ
 ナに響かせき、しかるに今はシェーナにても（その頃たかぶ
 り今けがるゝフィレンツェの劇しき怒亡いかりぼされし時彼はかし
 この君なりき）殆んど彼のことをさゝやく人なし ― 一一四
 汝等の名は草の色のあらはれてまたきゆるに似たり、しかし
 て草をやはらかに地より生え出いしむるものまたその色をうつ
 ろはす。 一一五―一一七

我彼に。まこと汝の眞の言善き謙遜をわが心にそゝぎ、汝わが大い
 なる誇をしづむ、されど汝が今語れるは誰の事ぞや。 一一

八―一二〇

答へて曰ふ。プロヴェンツアン・サルヴァーニなり、彼心驕
 りてシェーナを悉くその手に握らんとせるがゆゑにこゝにあ
 り 一二―一二三

彼は死にしより以來このかたかくのごとく歩みたり、また歩みて休やすらふことなし、凡て世に膽きものあまりに大ふとき者かゝる金かね錢ねを納めて贖あがなひの代しろとす。 一二四—一二六

我。生命いのちの終り近づくまで悔ゆることをせざりし靈かの低き處に残り、善き祈りの助けによらでは 一二七—

その齡よはひに等しき時過ぐるまで、こゝに登るあたはずば、彼何ぞかく來るを許されしや。 — 一二三—

彼曰ふ。彼榮達を極めし頃、一切の恥を棄て、自ら求めてシエーナのカムポにとゞまり 一三三—一三五

その友をカルロの獄ひとやの中にうくる苦しみの中より救ひいださんとて、己が全身をかしこに震はしむるにいたれり 一三六

— 一三八

我またいはじ、我わが言ことばの暗くらきを知る、されど少時しばらくせば汝の

となりびと
隣人等その爲すところによりて汝にこれをさとりをえしめむ

一三九―一四一

この行なりき彼のためにかの幽閉を解きたるものは。 一四

二―一四四

第十二曲

我はかの重荷を負へる魂と、あたかも軛くびきをつけてゆく二匹の
牡牛のごとく並びて、うるはしき師の許したまふ間歩めり

一―三

されど師が、彼をあとに残して行け、こゝにては人各々帆と
櫂をもてその力のかぎり船を進むべしといへるとき 四―六
我は行歩あゆみの要求もとめに従ひ再び身を直なほくせり、たゞわが思ひはも
のごとく屈みてかつ低かりき 七―九

我既に進み、よろこびてわが師の足にしたがひ、彼も我も既
に身のいかに軽きやをあらはしゐたるに 一〇―一二

彼我に曰ふ。目を下にむけよ、道をたのしからしめむため、

汝の足を載する床ゆかを見るべし。 一三―一五

埋められし者の思出おもひでにとて、その上なる平地ひらちの墓に、ありし

昔の姿刻まれ 一六―一八

たゞ有情うじやうの者をのみ蹴る記憶の刺はりの痛みによりてしばらく涙

を流さしむることあり 一九―二一

我見つぎしに、山より突出つぎでて路を成せるかの處みなまた斯の如

く、象かたちをもて飾られき、されど技わざにいたりては巧みなること

その比に非ず 二二―二四

我はかたがは一側よろづのものに、萬物のうち最も尊く造られし者が天より電光いなづまの

ごとく墜下おちくだるを見き 二五―二七

また一側に、ブリアレオが、天の矢あたに中り、死ひやに冷されて重

く地に伏せるを見き 二八―三〇

我はティムプレオを見き、我はパルラーデとマルテを見き、

彼等猶武器をとりその父の身邊まはりにゐて巨人等の切放たれし體からだ
を凝視みつむ 三一—三三

我はネムブロットが、あたかも惑へるごとく、かの大いなる
建物たてもののほとりに、己と共にセンナールにてたかぶれる民をな
がむるをみき 三四—三六

あゝニオベよ、殺されし汝の子七人なつたりと七人の間に彫られし汝
の姿を路にみしときわが目はいかに憂うれはしかりしよ 三四—

三六

あゝサウルよ、汝の己が劔つるぎに伏してジェルボエ（この山この
後雨露あめつゆをしらざりき）に死せるさまさながらにこゝに見ゆ

四〇—四二

あゝ狂へるアラ―ニエよ、我また汝が既に半蜘蛛なかばとなり、幸さいち
なく織りたる織物の截餘きれの上にて悲しむを見き 四三—四五

あゝロボアムよ、こゝにては汝の姿も、はやおびやかすあた
はじとみえ、未だ人に追はれざるにいたく恐れて車を走らす

四六―四八

硬き鋪石しきいしはまたアルメオンが、かの不吉なる飾かざりの價たふとの貴さを

その母にしらしめしさまを示せり 四九―五一

またセンナケリプをその子等神宮みやの中にて襲ひ、その死する

や、これをかしこに残して去れるさまを示せり 五二―五四

またタミーリの行へる殘害そこなひと酷むごき屠ほふりを示せり――この時彼チ

口にいふ、汝血に渴きたりき、我汝に血を満さんと 五五―

五七

またオロフェルネの死せるとき、アッシーリア人びとの敗れ走れ

るさまと殺されし者の遺物かたみを示せり 五八―六〇

我は灰となり窟いはやとなれるトロイアを見き、あゝイーリオンよ、

かしこにみえし彫物ほりものの象かたちは汝のいかに低くせられ衰へたるや

を示せるよ 六一—六三

すぐるゝ才ある者といふとも誰とて驚かざるはなき陰かげと線すぢと

をあらはせるは、げにいかなる畫筆えふでまたは墨筆すみふでの妙手ぞや

六四—六六

死者は死するに生者は生くるに異ならず、面ま見のあたりし人なりと

て、わが屈かみて歩める間に踏みし凡ての事柄を我よりよくは

見ざりしなるべし 六七—六九

エーヴァの子等よいぎ誇れ、汝等頭かうべを高うして行き、己が禍

ひの路を見んとて目をひくく垂るゝことなかれ 七〇—七二

繋つなぎはなれぬわが魂のさとれるよりも、我等はなほ多く山をめ

ぐり、日はさらに多くその道をゆきしとき 七三—七五

常に心を用ゐて先に進めるものいひけるは。頭かうべが擧げよ、時

足らざればかく思ひに耽りてゆきがたし 七六―七八

見よかなたにひとりの天使ありて我等の許もとに來らんとす、見

よ第六の侍婢はしための、晝につかふること終りて歸るを 七九―八

一

うやまひ

敬すがたをもて汝の姿容かたちを飾れ、さらば天使よろこびて我等を上うへに

導かむ、この日再び晨あしたとならざることをおもへ。 八二―八

四

我は時を失ふなかれとの彼の誠めに慣れたれば、彼のこの事

について語るところ我に明かならざるなかりき 八五―八七

美しき者こなたに來れり、その衣ころもは白く、顔はさながら瞬またく

朝の星のごとし 八八―九〇

彼腕かひなをひらきまた羽をひらきていふ。來れ、この近方ちかくに階きざしあ

り、しかして汝等今より後は登り易し。 九一―九三

それ來りてこの報知しらせを聞く者甚だ罕まれなり、高く飛ばんために
生れし人よ、汝等些すこしの風にあひてかく墜ちるは何故ぞや 九
四―九六

彼我等を岩の截られたる處にみちびき、こゝに羽をもてわが
額を打ちて後、我に登のぼりの安らかなるべきことを約せり 九七
―九九

ルバコンテの上方かみてに、めでたく治まる邑まちをみおろす寺ある山
に登らんため、右にあたりて 一〇〇―一〇二
のぼり登の險しさ段きた（こは文書ふみと樽板たるいたの安全なりし世に造られき）
に破らる 一〇三―一〇五

こゝにても次の圓よりいと急に垂るゝ岸、かゝる手段てだてにより
て緩ゆるまりぬ、されど右にも左にも身は高き石に觸る 一〇六
―一〇八

我等かしこにむかへるとき、聲ありて、靈の貧しき者は福なりと歌へり、そのさま詞をもてあらはすをえじ 一〇九—一

一一

あゝこれらの徑こみちの地獄のそれと異なることいかばかりぞや、こゝにては入る者歌に伴はれ、かしこにては恐ろしき歎きの聲にともなはる 一二—一一四

我等既に聖なる段きだを踏みて登れり、また我はさきに平地ひらちにありしときより身のはるかに輕きを覺えき 一一五—一一七

是に於てか我。師よ告げよ、何の重き物我より取られしや、我行けども殆んど少しも疲勞つかれを感じず。 一一八—一二〇

答へて曰ふ。消ゆるばかりになりてなほ汝の顔に現れるピ、その一のごとく全く削り去らるゝ時は 一二—一二三

汝の足善き願ひに勝たるゝがゆゑに疲勞つかれをしらざるのみなら

ず上方^{うへ}に運ばるゝをよろこぶにいたらむ。

一二四—一二六

頭に物を載せてあゆみ自らこれを知らざる人、他^{ほか}の人々の素振^{そぶり}

をみてはじめて異^{あやし}の心をおこせば 一二七—一二九

手は疑^{うた}ひを霽^{はら}さんため彼を助け探^{さぐ}り得て、目の果し能はざる

役^{つとめ}を行ふ、この時わが爲せることまたかゝる人に似たりき

我はわがひらける右手^{めて}の指によりて、かの鑰を持つもののわ

が額^{きび}に刻める文字たゞ六となれるをしりぬ 一三三—一三五

導者これをみて微笑^{ほゝゑ}みたまへり

第十三曲

我等階きざはしの頂にいたれば、登りて罪を淨むる山、こゝにふたゝ

び截りとられ 一―三

一の臺うてなをか邱を卷くこと第二の圈の如し、たゞ異なるはその弧線アルコ

のいよくはやく曲まがるのみ 四―六

こゝには象かたも文あやもみえず、岸も路も滑なめらかにみえて薄黒き石の

色のみあらはる 七―九

詩人曰ふ。我等路を尋ねんためこゝにて民を待たば、我は我等の選ぶことおそきに過ぐるあらんを恐る。 一〇―一二

かくて目を凝らして日を仰ぎ、身をその右の足に支へ、左の脇わきをめぐらして 一三―

いふ。あゝ麗しき光よ、汝に頼^{よりのたの}待みてこの新らしき路に就く、
願はくは汝我等を導け、そは導く者なくば我等この内に入る
をえざればなり 一八

汝世を暖^{あた}め、汝その上に照る、若し故ありて妨げられずば我
等は汝の光をもて常に導者となさざるべからず。 一九—二
一

心進むによりて時立たず、我等かの處よりゆくこと既にこの
世の一哩^{ミリア}にあたる間におよべり 二二—二四

この時多くの靈の、愛の食卓^{つくろ}に招かんとて懇に物いひつゝこ
なたに飛來る音きこえぬ、されど目には見えざりき 二五—
二七

飛過ぎし第一の聲は、彼等に酒なしと高らかにいひ、これを
くりかへしつゝ後方^{うしろ}に去れり 二八—三〇

この聲未だ遠く離れて全く聞えざるにいたらざるまに、いま一つの聲、我はオレステなりと叫びて過行き、これまた止まらず 三一—三三

我曰ふ。あゝ父よ、こは何の聲なりや。かく問へる時しもあれ、見よ第三の聲、汝等を虐げし者を愛せといふ 三四—三六

この時善き師。この圈嫉妬の罪をむちうつ、このゆるゑに鞭の紐愛より採らる 三七—三九

銜は必ず響きを異にす、我の量るところによれば、汝これを赦の徑に着かざるさきに聞くならむ 四〇—四二

されど目を据ゑてよくかなたを望め、我等の前に坐する民あり、各々岩にもたれて坐せり。 四三—四五

このとき我いよく大きく目を開きてわが前方を望み、その

色石と異なることなき衣ころもを着たる魂を見き 四六―四八

我等なほ少しく先に進める時、マリアよ我等の爲に祈り給へ
と喚よばはりまたミケーレ、ピエル及び諸々の聖徒よと喚ばはる
聲を我は聞きたり 四九―五一

思ふに今日地上を歩むいかに頑かたくななる人といふとも、このとき
わがみしものをみて憐憫あはれみに刺されざることはあらじ 五二―

五四

我彼等に近づきてその姿をさだかに見しとき、重き憂ひは涙
をわが目よりしばれり 五五―五七

彼等は粗あらき毛織を纏へる如くなりき、互ひに身を肩にて支へ、

しかして彼岸にさゝへらる 五八―六〇

生活なりはひの途なき瞽等めしひが赦罪の日物乞はんとてあつまり、彼頭かれを
此これに寄せ掛け 六一―六三

詞の節ふしによるのみならず、その外見みえによりてこれに劣らず心に訴へ、早く憐あはれみを人に起さしめんとするもそのさままた斯かくの如し 六四―六六

また日が瞽くらの益とならざるごとく、わがいま語れるところに
ては、天の光魂くろがねに己を施すを好まず 六七―六九

鐵くろがねの絲凡まふたての者の臉まふたを刺し、これを縫ふこと恰もしづかなら
ざる鷹を馴らさんとする時に似たりき 七〇―七二

我はわが彼等を見、みづから見られずして行くの非なるをお
もひてわが智さとき議者はからひとにむかへるに 七三―七五

彼能くいはざる者のいはんと欲するところをしり、わが問ひ
を待たずしていふ。語れ約つづまやかにかつ適ふきはしく。 七六―

七八

ヴィルジリオは臺うてなの外側そとは、縁高ふちく繞めぐるにあらねば落下る恐れ

あるところを行けり 七九―八一

わが左には信心深き多くの魂ありき、その恐ろしき縫線ぬいめより

涙はげしく洩れいでて頬を洗へり 八二―八四

我彼等にむかひていふ。己が願ひの唯一たゞの目的めあてなる高き光を

必ず見るをうる民よ 八五―八七

願はくは恩恵速めぐみかに汝等の良心の泡沫あわを消し、記憶の流れこ

れを傳ひて清く下るにいたらむことを 八八―九〇

汝等の中にラチオ人びとの魂ありや、我に告げよ、我そのしらせ

を愛めで喜ばむ、また我これを知らば恐らくはその者に益あら

む。 九一―九三

あゝわが兄弟よ、我等は皆一まことの眞の都の民なり、汝のいへる

は旅客たびびととなりてイタリアに住める者のことならむ。 九四―

九六

わが立てるところよりや、先にこの答へきこゆるごとくなり
ければ、我わが聲をかなたにひゞくにいたらしむ 九七―九
九

我は彼等の中にわが言を待つ状なる一の魂を見き、若し人い
かなる状ぞと問はば、瞽の習ひに従ひてその頤を上げゐたり
と答へむ 一〇〇―一〇二

我曰ふ。登らむために己を矯むる魂よ、我に答へし者汝なら
ば、處または名を告げて汝の事を我に知らせよ。 一〇三―
一〇五

答へて曰ふ。我はシェーナ人なりき、我これらの者と共にこゝ
に罪の生命を淨め、御前に泣きて恩恵を求む 一〇六―一〇

八
われ名をサピアといへるも智慧なく、人の禍ひをよろこぶ

こと己が福ひよりもなほはるかに深かりき 一〇九―一一一
 汝我に欺かると思ふなからんため、わがみづからいふごとく
 愚なりしや否やを聞くべし、わが齡の坂路さかみちはや降くだりとなれるこ
 ろ 一一二―一一四

わが邑まちの人々その敵とコルレのあたりに戦へり、このときわ
 れ神に祈りてその好みたまへるものを求めき 一一五―一一
 七

彼等かしこに敗れて幸さちなくも逃にぐれば、我はその追はるゝを
 見、身に例ためしなき喜びをおぼえて 一一八―一二〇

あつかましくも顔を上げつゝ神にむかひ、さながら一時ひとときの光
 にあへる黒鳥メルロのごとく、今より後我また汝を恐れずと叫べり

一二一―一二三

我わが生命いのちの極はてに臨みてはじめて神と和やはらがんことを願へり、

またもしピエル・ペッティナーイオその慈愛の心よりわがた
 めに悲しみその聖なる祈りの中にわが身の上を憶はざりせば、
 わが負債おひめは今も猶苦楚くるしみに減へらさるゝことなかりしなるべし

一二四——一二六

されど汝は誰ぞや——汝我等ありさまの状態をたづね、氣息いきをつきて
 物いふ、またおもふに目に絆きづななし。 一三〇——一三二

我曰ふ。わが目もいつかこゝにて我より奪はるゝことあらむ、
 されどそは暫時しばしのみ、その嫉妬ねたみのために動きて犯せる罪少すくな
 ければなり 一三三——一三五

この下なる苛責の恐れはなほはるかに大いにしてわが魂を安
 からざらしめ、かしこの重荷いま我を壓おす。 一三六——一三

八

彼我に。汝かなたに歸るとおもはば、誰か汝を導いてこゝに

登り我等の間に入らしめしや。我。我と俱にゐて物言はざる者ぞ是なる 一三九―一四一

我は生く、されば選ばれし靈よ、汝若し我の己が死すべき足をこの後汝のために世に動かすことをねがはば我に請へ。

一四二―一四四

答へて曰ふ。あゝこは耳にいと新しき事にて神の汝をめで給ふ大いなる体徴しるしなれば、汝をりふしわがために祈りて我を助けよ 一四五―一四七

我また汝の切せちに求むるものを指して請ふ、若しトスカーナの地を踏むことあらば、わが宗族うからの中に汝再びわが名を立てよ 一四八―一五〇

汝は彼等をタラモネに望みを寄する虚榮の民の間に見む（この民その望みを失ふことディアーナを求めしときより大いな

らむ 一五一―一五三

されどかしこにて特にこと危険あやふきを顧みざるは船手をす統ぶる人々なるべし。 一五四―一五六

第十四曲

死にまだ羽を與へざるに我等の山をめぐり、己が意のまゝに
目を開きまた閉づる者は誰ぞや。 一―三

誰なりや我知らず、我たゞその獨りならざるをしる、汝彼に
近ければ自ら問ふべし、快く彼を迎へてもいいはしめよ。

四―六

たがひに凭れし二の靈右の方にてかくわが事をいひ、さて我
に物いはむとて顔をあげたり 七―九

その一者曰ふ。あゝ肉體につゝまれて天にむかひてゆく魂よ、

請ふ愛のために我等を慰め、我等に告げよ 一〇―一二

汝いづこより來りしや、また誰なりや、我等汝の恩恵をみて

いたく驚く、たえて例なきことのかく驚かすは宜なればなり。
ためし

一三一—一五

我。トスカーナの中部をわけてさまよふ一の小川あり、ファ
ルテロナよりいで、流るゝこと百哩ミリアにしてなほ足れりとなさ

ず 一六一—一八

ほとり

その邊より我はこの身をはこべるなり、我の誰なるを汝等に
告ぐるは、わが名未だつよく響かざれば、空しく言を費すに
ことば

過ぎず。 一九—二一

はじめ語れるものこの時我に答へて曰ふ。我よく智をもて汝
の意中を穿つをえば、汝がいへるはアルノの事ならむ。 二

二—二四

とも

その侶彼に曰ふ。この者何ぞかの流れの名を匿すこと恰も恐
るべきことを人のかくすごとくするや。 二五—二七

かく問はれし魂その負債おひめ つぐのを償ひていふ。我知らず、されどかゝ

る溪の名はげに滅び失するをよしとす 二八—三〇

そはその源、ペロロを斷たれし高山たかやまの水豊ゆたかなる處（かの山の

中うちこれよりゆたかなる處少なし）より 三一—三三

海より天の吸上ぐる物（諸々の川これによりてその中に流るゝ
ものを得う）を返さんとて、その注ぐ處にいたるまで 三四—

三六

地の幸さちなきによりてなるか、または惡しき習慣ならはしにそゝのかさ

るゝによりてなるか、人皆徳を敵と見做おひだして逐出すること蛇の

如し 三七—三九

此故にかのあはれなる溪に住む者、いちじるしくその性さがを變

へ、あたかもチルチェくひものに飼かはるゝに似たり 四〇—四二

人の爲に造られし食物くひものよりは橡實つるばみを喰ふに適ふさはしき汚きたなき豚の

間に、この川まづその貧しき路を求め 四三―四五

後くだりつゝ群る小犬の己が力をかへりみずして吠え猛るを

見ていやしとし、その顔を曲げて彼等をはなる 四六―四八

くだりくゝ次第に水嵩を増すに従ひ、この詛はるゝ不幸の

溝、犬の次第に狼に變はるをみ 四九―五一

後また多くの深き淵を傳ひてくだり、智の捕ふるを恐れざる

ばかりに欺罔満ちたる狐の群にあふ 五二―五四

われ聞く者あるがために豈口を噤まんや、この者この後眞の

靈の我にあらはすところを想はば益をえむ 五五―五七

我汝の孫を見るに、彼猛き流れの岸にかの狼を獵り、かれら

をことごとく怖れしむ 五八―六〇

彼その肉を生けるまゝにて賣り、後これを屠ること老いたる

獸に異ならず、多くの者の生命を奪ひ自ら己が譽をうばふ

六一—六三

彼血に塗れつゝかの悲しき林を出づれば、林はいたくあれす
まみ
たれて今より千年にいたるまで再びもとのさまにかへらじ。
ちとせ

六四—六六

いたましき禍ひの報をうくれば、その難いづれのところより
しらせ
襲ふとも、聞く者顔を曇らすごとく 六七—六九

むきなほりて聞きゐたるかの魂もまたこの詞にうたれ、氣色
をかへて悲しみぬ 七〇—七二

一者の言と一者の容子は、彼等の名を知らんと願ひを我に
ひとり ことば けはひ
起させき、我はかつ問ひかつ請へり 七三—七五

最初に我に物いへる靈即ち曰ふ。汝は汝のわがために爲すを
はじめ
好まざることを、枉げて我に爲さしめんとす 七六—七八
されど神の聖旨によりてかく大いなる恩恵汝の中に輝きわた
みむね めぐみ

れば我も汝に寄に吝やぶさかならじ、知るべし我はグイード・デル・

ドウーカなり 七九―八一

わが血は嫉妬ねたみのために湧きたり、我若し人の福ひを見たらん
には、汝は私の憎惡にくしみの色に被おほはるゝをみたりしなるべし 八

二―八四

我自ら種を蒔きて今かゝる藁を刈る、あゝ人類よ、侶ともを除か

ざるをえざるところに何ぞ汝等の心を寄するや 八五―八七

此はリニエールとてカールボリ家の誇また譽なり、彼の力を
襲つぐものその後かしこよりいでざりき 八八―九〇

ポーと山と海とレーノの間にて、眞まことと悦びに缺くべからざる
徳をかくにいたれるものたゞその血統ちすぢのみならず 九一―九

三

有毒うどくの雜木ざつぼくこれらの境界さかひの内に滿つれば、今はたとひ耕すと

もたやすく除き難^{のぞ}からむ 九四―九六

善きリーチオ、アルリーゴ・マナルデイ、ピエール・トラヴェ
ルサーロ、グイード・デイ・カルピーニア今何處^{いづこ}にかある、噫
ゝ庶子となれる 九七―

ローマニア人等^{びと}よ、ファッツブロの如き者いつか再びボローニ
アに根差^{ねざ}さむ、賤しき草の貴き枝ベルナルディン・デイ・フォ
スコの如き者

いつか再びファエンツァよりいでむ、トスカーナ人^{びと}よ、か
のグイード・ダ・プラータ、我等と住めるウゴリーン・ダッ
ツォ

フェデリーゴ・ティニョーソ及び^{とも}その侶、トラヴェルサーラ
家アナスタージ（いづれの族^{やから}も世繼なし）

また淑女騎士、人の心かく悪しくなりし處にて愛と義氣には

げまされて我等が求めし苦樂を憶ひ出づる時、我泣くともあ
やしむなけれ — 一一一

あゝブレッティノロよ、汝の族と多くの民は罪を避けてはや
去れるに、汝何ぞ亡びざるや 一一二 — 一一四

バーニアカヴァールは善し、再び男子なんしを生まざればなり、カ
ストロカーロは惡し、而してコーニオは愈々つとあし、今も力め
てかゝる伯等きみたちを 一一五 —

生めばなり、パガーニはその鬼去るの後よからむ、されど無垢むく
の徴しるしをあとに残すにいたらじ — 一二〇

あゝウゴリーン・デ・ファントリーンよ、汝の名は安し、そ
は父祖に劣りてこれを辱はづしむる者いづるの憂ひなければなり

一二一 — 一二三

いざ往けトスカーナ人よ、われらの談話ものがたりいたく心を苦しめた

れば、今はわれ語るよりなほはるかに泣くをよろこぶ。一

二四——二六

我等はかの愛する魂等がわれらの足音を聞けるを知れり、されば彼等の黙すをみて路の正しきを疑はざりき 一二七——

二九

我等進みてたゞふたりとなりしとき、空を擘く電光のごとき

聲前より來り 一三〇——一三二

およそ我に遇ふ者我を殺さむといひ、雲遽に裂くれば音細り
てきゆる雷のごとく過ぐ 一三三——一三五

この聲我等の耳に休歇をえさせし程もなく見よまた一の聲、
疾く續く雷に似て高くはためき 一三六——一三八

我は石となれるアグラウロなりといふ、この時われ身を近く
詩人に寄せんとて一步あとに（まへに進まず）退きぬ 一三

九―一四一

四方よもの空はや靜かになりぬ、彼我に曰ふ。これは硬き銜くつわにて

己おのれが境界さかひの内に人をとどめおくべきものなり 一四二―一四

四

しかるに汝等は餌をくらひ、年へし敵の魚釣はりにかゝりてその

許に曳かれ、銜くつわも呼よびも殆んど益なし 一四五―一四七

天は汝等を招き、その永遠とこしへに美しき物を示しつゝ汝等をめぐ

る、されど汝等の目はたゞ地を見るのみ 一四八―一五〇

是に於てか萬事よろづのことをしりたまふもの汝等を撃つ。 一五一―一

五三

第十五曲

暮^{くれ}にむかひてすゝむ日のなほ残せる路の長さは、たえず戯るゝ

こと稚子^{をさなご}のごとき球のうち 一―

晝の始めより第三時の終りに互りてあらはるゝところと同じ
とみえたり、かしこは夕^{ゆふべ}こゝは夜^よ半なりき 一六

我等既に多く山をめぐり、いまはまさしく西にむかひて歩め
るをもて光まともに我等をてらしむたりしに 七―九

我はその輝^{かがやき}ひときは重くわが額^おを壓すをおぼえしかば、事の

奇^{くす}しきにおどろきて 一〇―一二

雙手^{もろて}を眉のあたりに翳^{かざ}し、つよきに過ぐる光を減^へらす一の蔽^{おほひ}物

をわがために造れり 一三―一五

水または鏡にあたりて光反する方に跳はぬれば、くだるとおなじさまにてのぼり 一六―

その間隔あはひをひとしうして垂線をはなるゝは、學理と經驗によりてしらる 一二―

我もかゝる時に似て、わが前に反映てりかへす光に射らるゝごとくおぼえき、さればわが目はたゞちに逃げぬ 二二―二四

われいふ。やさしき父よ、かの物何ぞや、我これを防ぎて目を護らんとすれども益なし、またこはこなたに動くに似たり。

二五―二七

答へて我に曰ふ。天の族やから今なほ汝をまばゆうすとも異あやしむなかれ、こは人を招きて登らしめんために來れる使者つかひなり 二八―三〇

これらのものをみると汝の患うれへとならずして却つて自然が

汝に感ずるをえさするかぎりの悦樂たのしみとなる時速かにいたらむ。

三一—三三

我等福さいはひなる天使の許にいたれるに、彼喜ばしき聲にていふ。

汝等こゝより入るべし、さきの階きざはしよりははるかに易き一の階

そこにあり。 三四—三六

我等既にかしこを去りて登れるとき、慈悲ある者は福なり、

また、悦べ汝勝者かつものよとうたふ聲後うしろに起れり 三七—三九

わが師と我とはたゞふたりにて登りゆけり、我は行きつゝ師

の言ことばをききて益をえんことをおもひ 四〇—四二

これにむかひていひけるは。かのローマニアの魂が除くとい

ひ侶りよといへるは抑おさへ何の意こころぞや。 四三—四五

是に於てか彼我に。彼は己の最大いとおほいなる罪より來る損害そこなひを知

る、此故にこれを責めて人の歎なげきを少なからしめんとすとも異あや

しむに足らず 四六―四八

それ汝等の願ひの向ふ處にては、侶と頌わかてば分減ずるがゆゑに、嫉妬ねたみふいごを動かして汝等に太息といきをつかしむれども 四九―

五一

至高いとたかき球の愛汝等の願ひを上うへにむかはしむれば、汝等の胸に

このおそれなし 五二―五四

そはかしこにては、我等われらの所有もつものと稱とふる者愈々多ければ、各自おのづか

の享うくる幸愈々多さいはひく、かの僧院に燃ゆる愛亦愈々多ければな

り。 五五―五七

我曰ふ。我若しはじめより黙もだしたりせば、斯く足たらはぬこと

なかりしものを、今は却つて多くの疑ひを心に集む 五八―

六〇

一の幸さいはひを頌ほめつにあたり、これを享くる者多ければ、享くる者

少なき時より所得多きは何故ぞや。 六一―六三

彼我に。汝は心を地上の物にのみとむるがゆゑに眞まことの光より

闇を摘む 六四―六六

かの高きにいまして極きはみなくかつ言ひ難さいはひき幸は、恰も光線の艶つや

ある物に臨むがごとく、馳せて愛にいたり 六七―六九

熱に應じて己を與ふ、されば愛の大いなるにしたがひ永劫の
力いよくその上に加はる 七〇―七十二

心を天に寄する民愈々多ければ、深く愛すべき物愈々多く、
彼等の愛亦愈々多し、而して彼等の互ひに己を映うつすこと鏡に
似たり 七三―七五

若しわが説くところ汝の饑うゑを鎮しづめずば、汝ベアトリーチエを
見るべし、さらば彼は汝のために全くこれらの疑ひを解かむ

七六―七八

今はたゞ、痛みの爲にふさがる五の傷きずの、とくかの二のごとく消ゆるにいたる途を求めよ。 七九―八一

我はこのとき我よくさとりといはんとおもひしかど、わがすでに次の圓に着けるを見しかば、目の願ひのために黙もだせり

八二―八四

こゝにて我俄かにわが官能をはなれて一の幻まぼろしの中に曳かれ、多くの人を一の神殿みやの内にみしごとくなりき 八五―八七

母たる者のやさしさを姿にあらはせしひとりの女、入口に立ち、わが子よ、何ぞ我等にかくなしたるや 八八―九〇

見よ、汝の父と我と憂へて汝を尋ねたりといひ、いひをはりて黙もだせしとき、第一の異象消ゆ 九一―九三

次にまたひとりの女わが前にあらはれき、はげしき怒りより生るゝとき憂ひのしたたらす水その頬をくだれり 九四―九

六

彼曰ふ。汝實にかゝる都——これが名について神々の間にか

のごとき争ひありき、また凡ての知識の光この處より閃きい

づ——の君ならば 九七—九九

ピシストラートよ、我等の女が抱きたる不敵の腕に仇をむく

いよ。されど君は寛仁柔和の人とみえ 一〇〇—一〇二

さわぐ氣色もなくこれに答へて、我等己を愛する者を罪せば、

我等の禍ひを求むる者に何をなすべきやといふごとくなりき

一〇三—一〇五

我また民が怒りの火に燃え、殺せくとのみ聲高く叫びあひ

つゝ石をもてひとりの少年を殺すをみたり 一〇六—一〇八

死はいま彼を壓しつゝ地にむかひてかゝましむれど、彼はた

えず目を天の門となし 一〇九—一一一

かゝる争ひのうちにも憐憫あはれみを惹ひく姿にてたふとき主に祈り、

己しひたを虐しぐる者のために赦しを乞へり 一一二——一一四

わが魂そと外部にむかひ、その外部そとなる眞まことの物に歸れる時、我は

己の偽りならざる誤りをみとめき 一一五——一一七

わが導者は、眠りさむる人にひとしきわが振舞をみるをえて
いふ。汝いかにせる、何ぞ自ら身をさゝふるあたはずして

一一八——一二〇

半レীগ餘の間、目を閉ぢ足をよろめかし、あたかも酒や睡
りになやむ人のごとく來れるや。 一二一——一二三

我曰ふ。あゝやさしきわが父よ、汝耳をかたむけたまはば、
我かく脛はぎを奪はれしときわが前にあらはれしものを汝に告ぐ
べし。 一二四——一二六

彼。汝たとひ百の假面めんにて汝の顔を覆ふとも、汝の思ひのい

と微小なるものをすら、我にかくすことあたはじ 一二七—

一二九

それかのものの汝に見えしは、汝が言遁るゝことなくしてかの永遠の泉より溢れいづる平和の水に心を開かんためなりき

一三〇—一三二

わがいかにせると汝に問へるも、こは魂肉體を離るれば視る能はざる目のみをもて見るものの問ふごとくなせるにあらず

一三三—一三五

たゞ汝の足に力をえさせんとて問へるなり、總て怠惰にて覺醒己に歸るといへどもこれを用ゐる事遅き者はかくして勵ますを宜しとす。 一三六—一三八

我等は夕の間、まばゆき暮の光にむかひて目の及ぶかぎり遠く前途を見つゝ歩みゐるに 一三九—一四一

見よ夜の如く黒き一團の煙しづかにくこなたに動けり、し
かして避くべきところなければ 一四二―一四四

我等は目と澄める空氣をこれに奪はれき 一四五―一四七

第十六曲

地獄の闇または乏しき空そらに雲みち／＼て暗き星なき夜よの闇と
いふとも 一—三

我等をおほへる烟のごとく厚き粗あらき面帕かほおほひを造りてわが目を遮
りわが官に觸れしことはあらじ 四—六

われ目をひらくあたはざれば、智さとき頼たのもしきわが導者は我にち
かづきてその肩をかしたり 七—九

我は瞽めしひが路をあやまりまたは己そこなを害ふか殺しもすべき物にう
ちあたるなからんためその相者てびきに従ふごとく 一〇—一二
苛からき濁れる空氣をわけ、わが導者の、汝我と離れざるやう心
せよとのみいへる言ことばに耳を傾けて歩めり 一三—一五

こゝに多くの聲きこえぬ、各々平和と慈悲とを、かの罪を除きたまふ神の^{こひつじ}羔に祈るに似たりき 一六―一八

祈りはたえずアーグヌス・デイーにはじまり、詞も節もみな同じ、さればすべての聲全く相和せるごとくなりき 一九―

二一

我曰ふ。師よ、かくうたふは靈なりや。彼我に。汝のはかるところ正し、彼等は怒りの結を^{むすび}解くなり。 二二―二四

我等の烟を裂き、いまだ時を月に分つ者のごとく我等の事を語る者よ、汝は誰ぞや。 二五―二七

一の聲斯く曰へり、是に於てかわが師曰ふ。汝答へよ、しかして登りの道のこなたにありや否やを問ふべし。 二八―三

○

我。あゝ身を麗しうして己が^{つくりぬし}造主に歸らんため罪を淨むる者

よ、汝我にともなはば奇しき事を聴くをえむ。 三一—三三
 答へて曰ふ。我汝に従ひてわが行くをうる間はゆかむ、烟は
 見るを許さずとも聞くことこれに代りて我等を俱にあらしめ
 む。 三四—三六

このとき我曰ふ。我は死の解く纏布をまきて登りゆくなり、
 地獄の苦しみを過ぎてこゝに來れり 三七—三九

神はわがその王宮を、近代に全く例なき手段によりて見るを
 好したまふまで、我をその恩恵につゝみたまへるなれば 四
よみ

〇—四二

汝死なざる前は誰なりしや請ふ隠さず我に告げよ、また我の
 かくゆきて徑にいたるや否やを告げて汝の言を我等の導とな
 らしめよ。 四三—四五
さき
こみち
しるべ

我はロムバルディアの者にて名をマルコといへり、我よく世

の事を知り、今はひとりだに狙^{ねら}ふ人なき徳を慕へり 四六―
四八

汝登らんとてこなたにゆくはよし。かく答へてまたいふ。高
き處にいたらば請ふ汝わがために祈れ。 四九―五一

我彼に。我は誓ひて汝の請ふところをなさむ、たゞ我に一の
疑ひあり、我もしこれを解かずば死すべし 五二―五四

こは初め單^{ひとへ}なりしも今二重^{ふたへ}となりぬ、そは汝の言^{ことば}、これと連^{つら}
なる事の眞^{まこと}なるをこゝにもかしこにも定かに我に示せばなり

五五―五七

世はげに汝のいふごとく全く一切の徳を失ひ、邪惡を孕みて
かつこれにおほはる 五八―六〇

されど請ふ我にその原因^{もと}を指示^{さしめ}し、我をして自らこれを見ま
た人にみするをえしめよ、そは或者これを天に歸し或者地に

歸すればなり。

六一—六三

憂ひの噫あゝに終らしむる深き歎息ためいきをつきて後彼曰ひけるは。兄

弟よ、世は盲めしひなり、しかして汝まことにかしこより來る 六

四—六六

汝等生者は一切の原因もとをたゞ上なる天にのみ歸し、この物必

然の力によりてよく萬事を定むとなす 六七—六九

若し夫れ然らば自由の意志汝等の中に滅ぶべく、善のために
喜び惡のために悲しみを得るは正しき事にあらざるべし 七

〇—七十二

天は汝等の心の動うごきに最初はじめの傾向かたむきを與ふれども、凡てに於て然

るにあらず、また假りに然りと見做すも汝等には善惡を知る

の光と 七三—七五

自由の意志と與へらる（この意志もしはじめて天と戰ふ時の

疲勞^{つかれ}に堪へ後善く養はるれば凡ての物に勝つゝ 七六―七八

汝等は天の左右しあたはざる智力を汝等の中に造るもの即ち
天より大いなる力、まされる性^{さが}の下^{もと}に屬して而して自由を失
はず 七九―八一

此故に今の世路^よを誤らば、その原因^{もと}汝等の中にあり、汝等己
が中にたづねよ、我またこの事について今明かに汝に告ぐべ
し 八二―八四

それ純なる幼き魂^{をさな}は、たゞ己を樂しますものに好みてむかふ
^{よろこび}
(喜悦の源なる造主よりいづるがゆゑに) 外何事^{ほか}をも知らず

八五―

あたかも泣きつゝ笑ひつゝ遊び戯るゝ女童^{めのわらは}のごとくにて、そ
の未だあらざるさきよりこれをめづる者の手を離れ ―九〇
まづ小^さやかなる幸^{さいはひ}を味ひてこれに欺かれ、導者^{くつわ}か銜^{くつわ}その愛を

枉げずば即ち馳せてこれを追ふ 九一―九三

是に於てか律法おきてを定めて衡となし、またせめて眞まことの都の塔を

見分くる王を立てざるあたはざりき 九四―九六

律法なきに非ず、されど手をこれにつくる者は誰ぞや、一人ひとり

だになし、これ上かみに立つ牧者つめ齟むことをうれどもその蹄分れ

ざればなり 九七―九九

このゆゑに民は彼等の導者が彼等の貪さいはひる幸にのみ心をとむる

をみてこれを食はみ、さらに遠く求むることなし 一〇〇―一

〇二

汝今よく知りぬらむ、世よこしまの邪になりたる原因もとは、汝等の中の

腐れし性さがにあらずして惡しき導みちびきなることを 一〇三―一〇五

善き世を造れるローマには、世と神との二の路をともに照ら

せし二の日あるを常とせり 一〇六―一〇八

一は他ほかの一を消しぬ、劔つるぎは杖と結ばれぬ、かくして二を一に
 すとも豈よう宜しきをうべけんや 一〇九—一一一
 これ結びては互ひに恐れざればなり、汝もし我を信ぜずば穂
 を思ひみよ、草はすべて種によりて知らる 一一二—一一四
 アディーチェとポーの濕ほす國にては、フェデリーゴがいま
 だ争ひを起さざりしころ、常に武あり文ありき 一一五—一
 一七

今は善き人々と語りまたは彼等に近づくことを恥ぢて避くる
 者かしこをやすらかに過ぐるをう 一一八—一二〇
 されど古をもて今を責め、神の己をまさる生命いのちに復かへし給ふを
 遅しとおもふ三人みたりの翁おきななほまことにかしこにあり 一二一—
 一二三

クルラード・ダ・パラッツオ、善きゲラルド及びフランス人びとの

習ひに依りて素樸のロムバルドの名にて知らるゝグイード・
ダ・カステル是なり 一二四—一二六

汝今より後いふべし、ローマの寺院は二の主權を己の中に亂
せるにより、泥土におちいりて己と荷とを俱に汚すと。 一

二七—一二九

我曰ふ。あゝわがマルコよ、汝の説くところ好し、我は今レ
ヴィの子等がかの産業に與かるあたはざりしゆゑをしる 一

三〇—一三二

されど汝が、消えにし民の記念に残りて朽廢れし代を責むと
いへるゲラルドとは誰の事ぞや。 一三三—一三五

答へて曰ふ。汝の言我を欺くか將我を試むるか、汝トスカ
ナの方言にて我と語りて而して少しも善きゲラルドの事をし
らざるに似たり 一三六—一三八

我彼に異名^{いみやう}あるをしらず——若し我これをその女^{むすめ}ガイアより
取らずば——願はくは神汝と俱にあれ、我こゝにて汝と別れ
む 一三九——一四一

烟をわけてはや白く映^さす光を見よ、天使かしこにあり、我は
わが彼に見えざるさきに去らざるをえず。 一四二——一四四
斯くいひて身をめぐらし、わがいふところを聞かんともせざ
りき 一四五——一四七

第十七曲

讀者よ、霧峻嶺^{たかね}にて汝を襲ひ、汝物を見るあたかも鼯鼠^{もぐら}が膜
を透^{しめ}してみるごとくなりしことあらば、憶^{おも}へ 一―三
濕^{しめ}りて濃き水氣の薄らぎはじむるころ、日の光微かにその中
に入り來るを 四―六

しかせば汝の想像はわが第一に日（このとき沈みかゝりぬ）
を再び見しさまを容易^{たやす}く見るにいたるべし 七―九

我は斯くわが步履^{あゆみ}をわが師のたのもしきあゆみにあはせてかゝ
る雲をいで、はや低き水際^{みぎは}に死せる光にむかへり 一〇―一

二

あゝ千の喇叭^{らっぱ}あたりに響くもしらざるまでに人をしばく外部^{そと}

より奪ふ想像の力よ 一三―一五

若し官能汝に物を與へずば誰ぞや汝を動かすは、天にて形造^{かたちづく}らるゝ光或ひは自ら或ひはこれを地に導く意志によりて汝を動かす 一六―一八

歌ふを最もよろこぶ鳥に己が形を變へたる女の殘忍なりし事の蹟わが想像の中にあらはれぬ 一九―二一

このときわが魂はみな己の中にあつまり外部^{そと}より來るところのものを一だに受けざりき 二二―二四

次にひとりの十字架にかゝれる者わが高まれる想像の中に降りぬ、侮蔑と兇猛を顔にあらはし、死に臨めどもこれを變へず 二五―二七

そのまはりには大いなるアッスエロとその妻エステル、及び言行俱に全き義人マルドケオゐたり 二八―三〇

ことごとく

あたかも覆^{おほ}へる水の乏しくなれる一の泡のごとくこの象おの
づから碎けしとき 三一—三三

わが幻の中にひとりの處女^{をとめ}あらはれ、いたく泣きつゝいひけ
るは。あゝ王妃よ、何とて怒りのために無に歸するを願ひた
まひたる 三四—三六

汝ラヴィーナを失はじとて身を殺し、今我を失ひたまへり、
母上よ、かの人の死よりさきに汝の死を悼^{いた}むものぞ我なる。

三七—三九

新しき光閉ぢたる目を俄かに射れば睡りは破れ、破れてしか
してその全く消えざるさきに揺^ゆめくごとく 四〇—四二

我等の見慣るゝ光よりもなほはるかに大いなるものわが顔に
あたるに及びてかの想像の象消^{かたち}えたり 四三—四五

我はわがいつこにあるやを知らんとて身をめぐらせるに、こ

の時一の聲、登る處はこゝぞといひて凡ての他の思ひよりわ
が心を引離し 四六―四八

語れる者の誰なるをみんとのが願ひを、顔を合すにあらざ
れば絶えて鎮しづまることなきばかり深くせしかど 四九―五一
あたかも我等の視力を壓あつし、強きに過ぐる光によりてその形
を被ひかくす日にむかふ時のごとくにわが力足らざりき 五
二―五四

こは天の靈なり、己が光の中にかくれ、我等の請ふを待たず
して我等に登のぼりの道を示す 五五―五七

彼人を遇あしふこと人の自己おのれをあしらふに似たり、そは人は乏し
きを見て乞はるゝを待つ時、その惡しき心より早くも拒ま
んとすればなり 五八―六〇

いざ我等かゝる招きに足をあはせて暮れざるさきにいそぎ登

らむ、暮れなば再び晝となるまでしかするあたはじ。 六一

―六三―

わが導者かくいへり、我は彼と、足を一の階きざはしにむけたり、か

くてわれ第一の段きだを踏みしとき 六四―六六

ほとり

我は身の邊に翼の如く動きてわが顔を扇ぐものあるを覚え、
また、平和を愛する者（惡しき怒りを起さざる）は福なりと
いふ聲をききたり 六七―六九

夜をともしなふ最後の光ははや我等をはなれて高き處を照し、
かなたこなたに星あらはれぬ 七〇―七二

ちから

あゝわが能力よ、汝何ぞかく消ゆるや。我自らかくいへり、

はぎ

はたらき

や

そは我わが脛の作用の歇むを覺えたればなり 七三―七五

きざはし

我等はかの階登り果てしところに立てり、しかして動かざる
こと岸に着ける船に似たりき 七六―七八

また我はこの新しき圓に音する物のあらんをおもひてしばし
耳を傾けし後、わが師にむかひていふ 七九―八一

わがやさしき父よ告げたまへ、この圓に淨めらるゝは何の咎
ぞや、たとひ足はとゞめらるゝとも汝の言を^{ことば}とどむるなかれ。

八二―八四

彼我に^{さいはひ}。幸を愛する愛、その義務^{つとめ}に缺くところあればこゝ
にて補^{おぎな}はる、怠りて遅^{おそ}くせる權^{かゐ}こゝにて再び早めらる 八五

―八七

されど汝なほ明かにさとらんため心を我にむかはしめよ、さ
らば我等の止まる間に汝善き果^みを摘むをうべし。 八八―九

○

かくて又曰ふ。子よ、造主^{つくりぬし}にも被造物^{つくられしもの}にも未だ愛なきことな
かりき、これに自然の愛あり、魂より出づる愛あり、汝これ

を知る 九一―九三

自然の愛は常に誤らず、されど他はよからぬ目的めあてまたは強さの過ぐるか足らざるによりて誤ることあり 九四―九六

愛第一の幸さいはひをめざすか、ほどよく第二の幸をめざす間は、正義の快樂けらくの原因もとたるあたはず 九七―九九

されど逸それて惡に向ふか、または幸を追ふといへどもその熱よろしき適を失ひて或ひは過ぎ或ひは足らざる時は即ち被造物つくられしもの己を造れる者に逆さかふ 一〇〇―一〇二

是故に汝さとするをうべし、愛は必ず汝等の中にて凡ての徳の種となり、また罰をうくるに當るすべての行爲おこなひの種となるを

一〇三―一〇五

さてまた愛はその主體の福祉より目をめぐらすをえざるがゆゑにいかなる物にも自ら憎むの恐れあるなく 一〇六―一〇

八

いかなる物も第一者とわかれて自ら立つの理なきがゆゑにそ

の情はみなこれを憎むことより斷たる 一〇九——一一一

わがかく説ときわく分る處正しくば、愛せらるゝ禍わざはひひは即ち隣人の禍わざはひ

ひなる事亦おのづ自から明かならむ、而して汝等の泥ひぢの中にこの愛

の生さまずる状三あり 一一二——一一四

己が隣人の倒るゝによりて自ら秀でんことを望み、たゞこの

ためにその高きより墜つるを希ふ者あり 一一五——一一七

人の高く登るを見て己が權ちから、惠めぐみ、譽ほまれ及び名を失はんことをお

それ悲しみてその反對うを求むる者あり 一一八——一二〇

また復讐を貪るほどに損害そこなひを怨むとみゆる者あり、かゝる者

は必ず人の禍わざはひをくはだつ 一二一——一二三

この三様の愛この下に歎かる、汝これよりいま一の愛即ち程度ほど

を誤りて幸を追ふものゝことを聞け 一二四—一二六

それ人各々己が魂を安んぜしむる一の幸をおぼろにみとめて
これを望み、皆争ひてこれに就つかんとす 一二七—一二九

これを見または求むるにあたりて汝等を引くところの愛鈍にぶけ
れば、この臺うてなは汝等を、正しく悔いし後に苛責す 一三〇—

一三二

また一の幸さいはひあり、こは人を幸にせざるものにて眞まことの幸にあら

ず、凡ての幸の果みまたその根なる至上の善にあらず 一三三

—一三五

かゝる幸に溺るゝ愛この上なる三の圈にて歎かる、されどそ
の三に分るゝ次第は 一三六—一三八

我いはじ、汝自らこれをたづねよ。 一三九—一四一

第十八曲

説きはりて後たふとき師わが足れりとするや否やをしらんと心をとめてわが顔を見たり 一―三

我はすでに新しき渴かわきに責められたれば、外そとに黙もだせるも内うちに曰ふ。恐らくは問ふこと多きに過ぎて我彼を累わづらはすならむ。

四―六

されどかの眞まことの父はわが臆ひらして關ひらかざる願ひをさとり、自ら語りつゝ、我をばげましてかたらしむ 七―九

是に於てか我。師よ、汝の光わが目をつよくし、我は汝の言ことばの傳ふるところまたは陳ぶるところをみな明かに認むるをう

されば請ふ、わが愛する麗しき父よ、すべての善惡の行の本もとなりと汝がいへる愛の何物なるやを我にときあかしたまへ。

一三―一五

彼曰ふ。智の鋭き目をわが方にむけよ、しかせば汝は、かの己を導者となす瞽等めしひの誤れることをさだかに見るべし 一六
―一八

夫れ愛し易く造られし魂樂しみのためにさめてそのはたらきを起すにいたればたゞちに動き、凡て己を樂します物にむかふ 一九―二一

汝等の會得あはとくの力は印象を實在よりとらへ來りて汝等の衷うちにあらはし魂をこれにむかはしむ 二二―二四

魂これにむかひ、しかしてこれに傾けば、この傾は即ち愛なり、樂しみによりて汝等の中に新たに結ばるゝ自然なり 二

五—二七

かくて恰も火がその體たいの最や永く保たるゝところに登らんと
する素質によりて高きにむかひゆくごとく 二八—三〇
とらはれし魂は靈ういきの動なる願ひの中に入り、愛せらるゝもの
これをよろこばすまでは休まじ 三一—三三

汝是に依りてさとるをえむ、いかなる愛にても愛そのものは
美ほむべきものなりと斷ずる人々いかに眞まことに遠ざかるやを 三
四—三六

これ恐らくはその客體常よしに良と見ゆるによるべし、されどた
とひ蠟は良とも印影かた悉くよきにあらず。 三七—三九

我答へて彼に曰ふ。汝の言ことばとこれに附隨つぎしたがへるわが智とは我に
愛をあらはせり、されどわが疑ひは却つてこのためにいよく

深し 四〇—四二

そは愛外部そとより我等に臨み、魂他ほかの足にて行かずば、直く行くも曲りてゆくも己ごが業ごふにあらざればなり。 四三―四五

彼我に。理性のこれについて知るところは我皆汝に告ぐるをう、それより先は信仰かうに關かはる事なればベアトリーチエを待つべし 四六―四八

それ物質と分れてしかしてこれと結び合ふ一切の靈體は特殊の力をその中にあつむ 四九―五一

この力はその作用によらざれば知られず、あたかも草木くさきの生命いのちの縁葉みどりのに於ける如くその果くわによらざれば現はれず 五二―五

四

是故に最初の認識の智と、慾の最初の目的めあてを求むる情とは恰も蜜を造る本能蜂の中にある如く汝等の中にありて 五五―
そのいづこより來るや人知らず、しかしてこの最初の願ひは

譽ほめをも毀そしりをもうくべきものにあらざるなり 一六〇

さてこれに他ほかの凡ての願ひの集まるためには、謀りて而して
 許諾うけがひの闕しきみをまもるべき力自然に汝等の中に備はる 六一―六

三

是即ち評價みなもとの源なり、是が善惡二の愛をあつめ且つ簸ひるの如
 何によりて汝等の價值かち定まるにいたる 六四―六六

理をもて物を究めし人々この本然の自由を認めき、このゆる
 に彼等徳義を世界に遣のこせるなり 六七―六九

かかればたとひ汝等の衷うちに燃ゆる愛みな必須より起ると見做
 すも、汝等にはこれを抑おさふべき力あり 七〇―七二

ベアトリ―チエはこの貴き力をよびて自由の意志といふ、汝
 これを憶ひいでよ、彼若しこの事について汝に語ることあら
 ば。 七三―七五

夜半よは近くまでおくれし月は、その形白熱の釣瓶つるべのごとく、星を我等にまれにあらはし 七六―七八

ローマの人がサルディニアとコルシーカの間まに沈むを見る頃の日の炎をあぐる道に沿ひ天に逆ひて走れり 七九―八一
マントヴァの邑まちよりもピエートラを名高くなせる貴き魂わが負はせし荷をはやときおろし 八二―八四

我わが問ひをもて明あきらかにして解げし易き説をはや刈り收めたれば、我は恰も睡氣ねむけづきて思ひ定まらざる人の如く立ちゐたり

八五―八七

されど此時後方うしろよりはやこなたにめぐり來れる民ありて忽ちわが睡氣ねむけをさませり 八八―九〇

テ―ベ人等ひとバツコの助けを求むることあれば、イスメーノとア―ソポがそのかみ夜きよその岸邊きしべに見しごとき狂熱と雜沓とを

九一—九三

我はかの民に見きとおぼえぬ、彼等は善き願ひと正しき愛に

御せられつゝかの圓に沿ひてその歩履あゆみを曲ぐ 九四—九六

かの大なる群むれことぐく走り進めるをもて、彼等たゞちに

我等の許に來れり、さきの二者泣ふたりきつゝ叫びていひけるは。

九七—九九

マリアはいそぎて山にはせゆけり。また。チエーザレはイレ

ルダを服したがへんとて、マルシリアを刺しし後イスパニアに走れ

り。 一〇〇—一〇二

衆つゞいてさけびていふ。とく來れとく、愛の少なきために

時を失ふなかれ、善行よきおこなひをつとめて求めて恩恵めぐみを新たならしめ

よ。 一〇三—一〇五

あゝ善を行ふにあたりて微温ぬるみのためにあらはせし怠惰おこたりと等閑なほざり

を恐らくは今強き熱にて償ふ民よ 一〇六一一〇八

この生くる者（我決して汝等を欺かず）登り行かんとてたゞ
日の再び輝くを待つ、されば請ふ徑こみちに近きはいづ方なりや我
等に告げよ。 一〇九一一一

是わが導者の詞なりき、かの靈の一日ふ。我等と同じ方かたに來
れ、しかせば汝徑を見む 一一二一一四

進むの願ひいと深くして我等止まることをえず、このゆるゆるゑに
我等の義務つとめもし無禮むらいとみえなば宥ゆるせ 一一五一一七

我は良きバルバロッサが（ミラーノ彼の事を語れば今猶愁ふ）
帝國に君たりし頃ヴェロナのサン・ヅエノの院主なりき 一

一八一二〇

既に隻脚かたあしを墓に入れしひとりの者程なくかの僧院のために歎
き、權をその上に揮ふるひしことを悲しまむ 一二一一一二三

彼はその子の身全からず、心さらにあしく、生正うまれしからざるものをその眞まことの牧者に代らしめたればなり。 一二四—一二

六

彼既に我等を超えて遠く走り行きたれば、そのなほ語れるや
または黙もだせるや我知らず、されどかくいへるをきき喜びてこ
れを心にとめぬ 一二七—一二九

すべて乏しき時のわが扶たすけなりし者いふ。汝こなたにむかひて、
かのふたりの者の怠惰おこたひを噛みつゝ來るを見よ。 一三〇—一

三二

凡ての者の後方うしろにて彼等いふ。ひらかれし海をわたれる民は、
ヨルダンがその嗣子よつぎを見ざりしさきに死せり。 一三三—一

三五

また。アンキーゼの子とともに終りまで勞苦を忍ばざりし民

は、榮^{はえ}なき生に身を委ねたり。 一三六―一三八

かくてかの魂等遠く我等を離れて見るをえざるにいたれるとき、新しき想ひわが心に起りて 一三九―一四一

多くの異なる想ひを生めり、我彼より此ときまよひ、迷ひのためにわが目を閉づれば 一四二―一四四

想ひは夢に變りにき 一四五―一四七

第十九曲

晝の暑地球のために、またはしばらく土星のために消え、月

の寒をはややはらぐるあたはざるとき 一—三

ゼオマンテイ

地占者等が、夜の明けざるさきに、その大吉と名づくるもの

の、ほどなく白む道を傳ひて、東に登るを見るころほひ 四

—六

ひとりの女夢にわが許に來れり、口吃り目眇み足曲り手斷た

れ色蒼し 七—九

われこれに目をとむれば、夜の凍えしむる身に力をつくる日

のごとくわが目その舌をかるくし 一〇—

後また程なくその全身を直くし、そのあをぎめし顔を戀の求

むるごとく染めたり　――一五

さてかく詞の自由をえしとき、彼歌をうたひいづれば、我わが心をほかに移しがたしとおもひぬ　一六――一八

その歌にいふ。我はうるはしきシレーナなり、耳を樂しましむるもの我に満ちみつるによりて海の正中たぎなかに水手等かこを迷はす

一九――二一

我わが歌をもてウリッセをその漂泊さすらいの路より引けり、およそ

我と親しみて後去る者少なし、心にたらはぬところなければ。

二二――二四

その口未だ閉ぢざる間に、ひとりの聖なる淑女、これをはちしめんとてわが傍かたへにあらはれ　二五――二七

あゝヴィルジリオよ、ヴィルジリオよ、これ何者ぞやとあららかにいふ、導者即ち淑女にのみ目をそゞぎつゝ近づけり

二八一三〇

さてかの女をとらへ、衣ころもの前を裂き開きてその腹を我に見すれば、惡臭をしうこれよりいでてわが眠りをさましぬ 三一—三三
われ目を善き師にむかはしめたり、彼いふ。少なくとも三たび
我汝を呼びぬ、起きて來れ、我等は汝の過ぎて行くべき門を
尋ねむ。 三四—三六

我は立てり、高き光ははや聖なる山の諸々の圓に滿てり、我
等は新しき日を背にして進めり 三七—三九

我は彼に従ひつゝ、わが額をば、あたかもこれに思ひを積み
入れ身を反橋そりはしの半なかばとなす者のごとく垂れゐたるに 四〇—四
二

この人界にては開くをえざるまでやはらかくやさしく、來れ、
道こゝにありといふ聲きこえぬ 四三—四五

かく我等に語れるもの、白鳥のそれかとみゆる翼をひらきて、
硬き巖の二の壁の間より我等を上にもかはしめ 四六―四八
後羽を動かして、哀れむ者はその魂慰なぐさめの女主となるがゆゑに
福なることを告げつつ我等を扇あふげり 四九―五一
我等ふたり天使をはなれて少しく登りゆきしとき、わが導者
我にいふ。汝いかにしたりとて地をのみ見るや。 五二―五

四

我。あらたなる幻まぼろしはわが心をこれにかたむかせ、我この思ひ
を棄つるをえざれば、かく疑ひをいだきてゆくなり。 五五

―五七

彼曰ふ。汝はこの後唯一者ひとりにて我等の上なる魂を歎かしむる
かの年へし妖女を見しや、人いかにしてこれが継きづなを斷つかを
見しや 五八―六〇

足れり、いざ汝步履あゆみをはやめ、永遠とこしへの王が諸天をめぐらして

汝等ニに示す餌に目をむけよ。 六一—六三

はじめは足をみる鷹も聲かゝればむきなほり、心食物くひもののため
にかなたにひかれ、これをえんとの願ひを起して身を前に伸
ぶ 六四—六六

我亦斯の如くになりき、かくなりて、かの岩の裂け登る者に
路を與ふるところを極め、環めぐりはじむる處にいたれり 六七

—六九

第五の圓にいでしとき、我見しにこゝに民ありき、彼等みな
地うつむに俯き伏して泣きみたり 七〇—七二

わが魂は塵につきぬ、我はかく彼等のいへるをききしかど、
詞ほとんど解げしがたきまでその歎息なげき深かりき 七三—七五

あゝ神に選ばれ、義と望みをもて己が苦しみをかるむる者等

よ、高き登の道ある方^{かた}を我等にをしへよ。

七六―七八

汝等こゝに來るといへども伏すの憂ひなく、たゞいと亟^{すみや}かに道に就かんことをねがはば、汝等の右を常に外^{そと}とせよ。七

九―八一

詩人斯く請ひ我等かく答へをえたり、こは我等の少しく先にきこえしかば、我その言^{ことば}によりてかのかくれたる者を認め

八二―八四

目をわが主にむけたるに、主は喜悅^{よろこび}の休徵^{しるし}をもて、顔にあらはれしわが願ひの求むるところを許したまへり 八五―八七

我わが身を思ひのまゝになすをえしとき、かの魂即ちはじめ詞をもてわが心を惹ける者にちかづき 八八―九〇

いひけるは。神のみ許もとに歸るにあたりて缺くべからざるところの物を涙に熟うましむる魂よ、わがために少時しばらく汝の大いなる意を抑へて 九一―九三

我に告げよ、汝誰なりしや、汝等何ぞ背を上にもくるや、汝わが汝の爲に世に何物をか求むるを願ふや、我は生いきながら彼處かしこよりいづ。 九四―九六

彼我に。何故に我等の背を天が己にむけしむるやは我汝に告ぐべきも、汝まづ我はペトルスの繼承者なりしことを知るべし。 九七―九九

一の美しき流れシエストリとキアーヴェリの間をくだる、しかしてわが血族やからの稱呼となへはその大いなる誇をばこの流れの名に得たり 一〇〇―一〇二

月を超ゆること數日、我は大いなる法衣ころもが、これを泥ひぢに汚さ

じと力^{つと}むる者にはいと重くして、いかなる重荷もたゞ羽と見
ゆるをしれり 一〇三—一〇五

わが歸依はあはれおそかりき、されどローマの牧者となるに
およびて我は生の虚偽^{いつはり}多きことをさとれり 一〇六—一〇八
かく高き地位^{のぼ}をえて心なほしづまらず、またかの生をうくる
者さらに高く上るをえざるをみたるがゆゑにこの生の愛わが
衷^{うち}に燃えたり 一〇九—一一一

かの時にいたるまで、我は幸^{さいち}なき、神を離れし、全く慾深き
魂なりき、今は汝の見るごとく我このためにこゝに罰せらる
一一二—一一四

貪婪^{むさぼり}の爲すところのことは我等悔いし魂の罪を淨むる状^{さま}にあ
らはる、そもくこの山にこれより苦^{にが}き罰はなし 一一五—
一一七

我等の目地上の物に注ぎて、高く擧げられざりしごとくに、

正義はこゝにこれを地に沈ましむ 一一八—一二〇

むさぼり

貪婪善を求むる我等の愛を消して我等の働をとゞめしごとく

に、正義はこゝに足をも手をも擽めとらへて 一二一—

おさ

かたく我等を壓ふ、正しき主の好みたまふ間は、我等いつまでも身を伸べて動かじ。 一二六

我は既に跪きてゐたりしが、このとき語らんと思へるに、わが語りはじむるや彼ただ耳を傾けて我の尊敬をあらはすをし

うやまひ

り 一二七—一二九

いひけるは。汝何ぞかく身をかゞむるや。我彼に。汝の分貴

きはたか

ければわが良心は我の直く立つを責めたり。 一三〇—一三

二

彼答ふらく。兄弟よ、足を直くして身を起すべし、誤るなか

れ、我も汝等とおなじく一の權威ちからの僕しもべなり 一三三―一三五

汝若もししまた嫁よめせずといへる福音の聲をきけることあらば、ま

たよくわがかく語る所以ゆゑをさとらむ 一三六―一三八

いざ往ゆけ、我は汝の尚長く止まるを願はず、我泣いて汝のい

へるところのものを熟うましむるに汝のこゝにあるはその妨さまたげと

なればなり 一三九―一四一

我には世に、名をアラージヤといふひとりの姪めひあり、わが族うから

の惡に染まらずその氣質こころばへはよし 一四二―一四四

わがかしこに残せる者たゞかの女のみ。 一四五―一四七

第二十曲

一の意これにまさる意と戦ふも利なし、是故に我は彼を悦ば
せんためわが願ひに背きて飽かざる海絨うみわたを水よりあげぬ 一

—三—

我は進めり、わが導者はたえず岩に沿ひて障礙しゃうげなき處をゆけ
り、そのさま身を女牆ひめがきに寄せつゝ城壁の上をゆく者に似たり

き 四—六

そは片側かたがはには、全世界にはびこる罪を一滴しづくまた一滴、目より

注ぎいだす民、あまりに縁近ふちくゐたればなり 七—九

禍えものひなるかな汝年へし牝の狼よ、汝ははてしなき饑うゑのため
に獲物えものをとらふること凡ての獸の上にいづ 一〇—一二

あゝ天よ（人或ひは下界の推移を汝の運行に歸するに似たり）、
これを逐ふ者いつか來らむ 一三―一五

我等はおそくしづかに歩めり、我は魂等のいたはしく歎き憂
ふる聲をききつゝこれに心をとめぬたるに 一六―一八

ふと我等の前に、産^{うみ}にくるしむ女のごとく悲しくさけぶ聲き
こえて、うるはしきマリアよといひ 一九―二一

續いてまた、汝の貧しかりしことは汝が汝の聖なる嬰兒^{をさなご}を臥
さしめしかの客舎にあらはるといひ 二二―二四

また次に、あゝ善きファーブリティオよ、汝は不義と大いな
る富を得んより貧と徳をえんと思へりといふ 二五―二七

これらの詞よくわが心に適^{かな}ひたれば、我はかくいへりとみゆ
る靈の事をしらんとてなほさきに進めるに 二八―三〇

彼はまたニツコロが小女^{をとめ}等の若き生命^{いのち}を導きて貞淑^{みさを}に到らし

めんため彼等にをしまず物を施せしことをかたれり 三一—

三三

我曰ふ。あゝかく大いなる善を語る魂よ、汝は誰なりしや、
何ぞたゞひとりこれらの讃^ほむべきわざを新たに陳ぶるや、請
ふ告げよ 三四—三六

果^{はて}をめざして飛びゆく生命^{いのち}の短き旅を終へんためわれ世に歸
らば、汝の詞報酬^{むくい}をえざることあらじ。 三七—三九

彼。我はかしこに慰^{なぐさめ}をうるを望まざれども、かく大いなる恩惠^{めぐみ}
いまだ死せざる汝の中に輝くによりてこれを告ぐべし 四〇

—四二

一の惡しき木その蔭をもてすべてのクリスト數國をおほひ、
良果^{よきみ}これより採らるゝこと罕^{まれ}なり、そもく我はかの木の根
なりき 四三—四五

されどドアジオ、リルラ、ガンド、及びブルーゼスの力足り
なば報速むくいかにこれに臨まむ、我また萬物を裁さき給ふ者にこの
報を乞ひ求む 四六―四八

我は世に名をウーゴ・チャペッタといへり、多くのフィリッ
ピとルイージ我よりいでて近代ちかきよのフランスを治む 五二―五

四

我は巴里パリジのとある屠戸にくやの子なりき、昔の王達はやみな薨かくれて、

灰色の衣を着る者獨り残れるのみなりし頃 五二―五四

我は王國の統御の手綱のかたくわが手にあるを見ぬ、また新
たに得たる大いなる力とあふるゝばかりの友ありければ 五

五―五七

わが子の首擢かうべぬきんでられて、寡やもめとなれる冠を戴き、かの受膏じゅかうの
族やから彼よりいでたり 五八―六〇

大いなる聘物^{おくりもの}プロヴェンツアがわが血族より羞恥の心を奪は

ざりし間は、これに美^ほむべき業^{わざ}もなくさりとてあしき行ひも

なかりしに 六一―六三

かの事ありしよりこの方、暴^{あらび}と偽^{いつはり}をもて掠^{かす}むることをなし、

後贖^{あがな}ひのためにポンティ、ノルマンディア及びグアスコニア

を取り 六四―六六

カルロ、イタリアに來れり、しかして贖のためにクルラデー

ノを犠^{いけにへ}牲となし、後また贖のためにトムマーズを天に歸らし

む 六七―六九

我見るに、今より後程なく來る一の時あり、この時^ほ到らば他

のカルロは己と己^{やから}が族^{なほ}の事を尚よく人に知らせんとてフラン

スを出づべし 七〇―七二

かれ身を固めず、ジユダの試^{ため}せし槍^{ひつさ}を提^ひげてひとりかしこを

いで、これにて突きてフィレンツェの腹を壊らむ やぶ 七三―七五

かれかくして國を得ず、罪と恥をえむ、これらは彼が斯る禍 かひを輕んずるにより、彼にとりていよく重し 七六―七八
我見るに、嘗てとらはれて船を出でしことあるカルロは、己 むすめが女を賣りてその價を爭ふこと恰も海賊が女の奴隸をあしらふに似たり 七九―八一

あゝ貪慾 むさぼりよ、汝わが血族 ちすぢを汝の許にひきてこれに己が肉をさへ顧みざらしめしほどなれば、この上何 うへをなすべきや 八二

―八四

我見るに、過去未來の禍 こしかたゆくすゑひを小さくみえしめんとて、百合 フイオルダリーゾの花アラ―ニアに入り、クリストその代理者の身にてとらはれたまふ 八五―八七

我見るに、彼はふたゝび嘲られ、ふたゝび醋すと膽いとを嘗なめ、生ける盜人の間に殺されたまふ 八八―九〇

我見るに、第二のピラート心殘忍なればこれにてもなほ飽かず、法によらずして強慾の帆をかの殿みやの中まで進む 九一―

九三

あゝ我主よ、聖意みこころの奥にかくれつゝ聖怒みいかりをうるはしうする復讐を見てわがよろこぶ時はなよめいつか來らむ 九四―九六

聖靈のたゞひとりの新婦はなよめについてわが語り、汝をしてその解説ときあかしを聞かんとためわが方にむかはしめしかの詞は 九七―九九

晝の間我等の凡ての祈りにつゞく唱和なり、されど夜いたれば我等これに代へてこれと反する聲をあぐ 一〇〇―一〇二
そのとき我等はかの黄金こがねをいたく貪りて背信、盜竊、殺人の罪を犯せるピグマリオンと 一〇三―一〇五

飽くなきの求めによりて患^{なやみ}艱をえ常に人の笑ひを招く慾深き

ミードのことをくりかへし 一〇六—一〇八

また分^{えもの}捕物を盗みとれるため今もこゝにてヨスエの怒りに刺

さるとみゆる庸愚^{おろか}なるアーカンのことを憶^{おも}ひ 一〇九—一一

一

次にサファイラとその夫を責め、エリオドロの蹴られしことを讃^ほむ、我等はまたポリドロを殺せるポリネストルの汚名をして 一一二—

あまねく山をめぐらしめ、さて最後にさけびていふ、クラツ

ソよ、黄金^{こがね}の味^{あじ}はいかに、告げよ、汝知ればなりと 一一七

ひとりの聲高くひとりの聲低きことあり、こは情の我等^{むちう}を策

ちて或ひはつよく或ひは弱く語らしむるによる 一一八—一

二〇

是故に晝の間我等のこゝにて陳ぶべき徳を我今ひとりいへる
にあらず、たゞこのあたりにては我より外に聲を上ぐる者な
かりしのみ。 一二一—一二三

我等既に彼を離れ、今はわれらの力を盡して路に勝たんとつ
とめゐたるに 一二四—一二六

このとき我は山の震ひ動くこと倒るゝ物に似たるを覺えき、
是に於てかわが身恰も死に赴く人の如く冷ゆ 一二七—一二
九

げにラートナが天の二の目を生まんとて巢を營める時よりさ
きのデロといふともかく強くはゆるがざりしなるべし 一三

〇—一三二

ついでではげしき喊聲^{かいせう}四方に起れり、師即ち我に近づき、わが
導く間は汝恐るゝなかれといふ 一三三—一三五

いとたかきところ○至高處には榮光神にあれ。衆皆斯くいひみたり、かくいひみたるを我は身に近くしてその叫びの聞分けうべき魂によりてさとれるなりき 一三六—一三八

我等はかの歌を最初に聞ける牧者のごとく、あやしみとゞまりて動かず、震動止み歌終るにおよびて 一三九—一四一こゝに再び我等の聖なる行路にいでたち、既にいつもの歎にかへれる多くの地に伏す魂をみたり 一四二—一四四若しわが記憶に誤りなくば、いかなる疑ひもわがかの時の思ひのうちにありとみえしもののごとく大いなる軍を起して

一四五—

その解説を我に求めしことあらじ、されどいそぎのためには、かりてこれを質さず、さりとて自から何事をも知るをえざれば 一五〇

我は臆しつゝ思ひ沈みて歩みにき

一五一—一五三

第二十一曲

サマーリアの女の乞ひ求めたる水を飲まではとゞまることな
き自然の渴に かわき 一—三

なやまされ、かつは急に策たれつゝ、我わが導者に従ひて障
多き道を歩み、正しき刑罰を憐みゐたるに 四—六

見よ、はや墓窟より起き出でたまへるクリストが途をゆく二人
の者に現はれしこと路加の書に録さるゝごとく 七—九

一の魂我等にあらはる、我等かの伏したる群を足元に見ゐた
りしときこの者後に來りしかど我等これを知らざりければ彼
まづ語りて 一〇—一二

わが兄弟達よ、神平安を汝等に與へたまへといふ、我等直ち

に身をめぐらしぬ、而してヴィルジリオは適^{ふさ}はしき表示^{しるし}をも
てこれに答へて 一三―一五

後曰ひけるは。我を永遠^{とこしへ}の流刑^{るけい}に處せし眞^{まこと}の法廷願はくは汝
を福なる集會^{つどひ}の中に入れ汝に平和を受けしめんことを。 一

六―一八

そは如何^{いかに}、汝等神に許されて登るをうる魂に非ずば誰に導か
れてその段^{きだ}をこゝまで踏みしや。彼かくいひ、いふ間^まも我等
は疾^とく行けり 一九―二一

わが師。この者天使の描く標^{しるし}を着く、汝これを見れば汝は彼が

善き民と共に治むるにいたるをさだかに知らむ 二二―二四

されど夜晝^{つむ}紡ぐ女神^{めがみ}は、クロートが人各々のために掛けかつ
押固^{おしかた}むる一束^{たば}を未だ彼のために繰り終らざるがゆゑに 二五

―二七

汝と我の姉妹なるその魂は登り來るにあたり獨りにて來る能はざりき、そは物を見ること我等と等しからざればなり 二

八―三〇

是故に彼に路を示さんため我は曳ひかれて地獄の闊ひろき喉を出づ、
またわが教をしへの彼を導くをうる間は我彼に路を示さむ 三一

―三三

然されど汝若し知らば我等に告げよ、山今かの如く搖ゆるげるは何故ぞや、またその濡ぬるゝ据に至るまで衆齊ひとしく叫ぶと見えしは何故ぞや。 三四―三六

この問ひよくわが願ひの要かなめにあたり、されば望みをいだけるのみにてわが渴かわきはやうすらぎぬ 三七―三九

彼曰ふ。この山の聖なる律法おきてはすべて秩序なきことまたはその習ひにあらざることを容ゆるさず 四〇―四二

この地一切の變異をまぬかる、たゞその原因^{もと}となるをうべき
は天が自ら與へて自ら受くるところの者のみ、この外にはな
し 四三―四五

是故に雨も雹も雪も露もまた霜も、かの三の段^{きだ}より成れる短
き階^{きざはし}のこなたに落ちず 四六―四八

濃^こき雲も淡^{うす}き雲も電光^{いなづま}も、またかの世に屡々處を變ふるタウ
マンテの女^{むすめ}も現はれず 四九―五一

乾ける氣は、わがいへる三の段の頂、ピエートロの代理者が
その足をおくところよりうへに登らず 五二―五四

かしこより下は或ひは幾許^{いくばく}か震ひ動かむ、されど上は、我そ
の次第を知らざれども、地にかくるゝ風のために震ひ動ける
ことたえてなし 五五―五七

たゞ魂の中に己が清きを感じずる者ありて起^たちまたは昇らんと

して進む時、この地震ひ、かのごとき喊次ぐさけび 五八一六〇

清きことの證左あかしとなるものは意志のみ、魂既に全く自由にそ

の侶を變ふるをうるにいたればこの意志におそはれ且つこれを懷くを悦ぶ 六一—六三

意志はげに始めよりあり、されど願ひこれを許さず、こはさきに罪を求めし如く今神の義に従ひ意志にさからひて苛責を求むる願ひなり 六四—六六

我この苦患なやみの中に伏すこと五百年餘に及びこゝにはじめてまされる里に到らんとの自由の望みをいだけるがゆゑに 六七—六九

汝地の震ふを覺え、また山の信心深き諸々の靈の主（願はくは速かに彼等に登るをえさせたまへ）を讃めまつるを聞けるなり。 七〇—七二

彼斯く我等にいへり、しかして渴劇かわきしければ飲むの喜び亦從ひて大いなるごとく、彼の言は我にいひがたき満足を與へき

七三―七五

智さとき導者。汝等をこゝに捕ふる網、その解くる状さま、地のこゝに震ふ所以、汝等の俱に喜ぶところの物、我今皆これを知る
七六―七八

いざねがはくは汝の誰なりしやを我にしらしめ、また何故にこゝに伏してかく多くの代よを経たるやを汝の詞にて我にあらはせ。
七九―八一

かの靈答へて曰ふ。いと高き王の助けをうけて善きテイトがジユダの賣りし血流れ出たる傷の仇をむくいし頃 八二―
最も人にあがめられかつ長く残る名をえて我ひろく世に知らる、されど未だ信仰なかりき ― 八七

わが有聲うせいの靈の麗しければ我はトロサ人びとなるもローマに引かれ、かしこにミルトをもて額を飾るをうるにいたれり 八八

—九〇

世の人わが名を今もスターツイオと呼ぶ、われテーベを歌ひ、後また大いなるアキルレをうたへり、されど第二の荷を負ひて路に倒れぬ 九一—九三

さてわが情熱の種は、千餘の心を燃やすにいたれるかの聖なる焰よりいでて我をあたゝめし火花なりき 九四—九六

わがかくいふは「エーネイダ」の事なり、こは我には母なりき詩めのとの乳母なりき、これなくば豈我に一ドラムマの重おもさあらんや 九七—九九

我若しヴィルジリオと代よを同じうするをえたらんには、わが流罪るざいの期滿ときつること一年ひととせ後るゝともいとはざらん。 一〇

〇——〇二

これらの詞を聞きてヴィルジリオ我にむかひ聲なき顔にて默もだ
せといへり、されど意志は萬事よろづのことを爲しがたし 一〇三——一〇

五

そは笑ゑみも涙もまづその源なる情に従ひ、その人いよく誠實
なればいよく意志に背けばなり 一〇六——一〇八

我たゞ微笑ほゝゑめるのみ、されどその状さまめくばせ 眴する人に似たれば、
かの魂口を嚙み、心のいとよくあらはるゝ處なる目を見て

一〇九——一一一

いふ。願はくは汝幸さいはいひの中にかく大いなる勞苦を終をふるをえん
ことを、汝の顔今笑ゑみの閃ひらめきを我に見せしは何故ぞや。 一一二

——一一四

我今左右に檢束をうく、かなたは我に默もだせといひ、こなたは

我にいへと命ず、是に於てか大息すれば 一一五―

わが師さとりて我に曰ふ。汝語るをおそろゝなかれ、語りて彼にそのかく心をこめて尋ぬるところの事を告ぐべし。――

一二〇

是に於てか我。年へし靈よ、思ふに汝はわがほゝゑめるをあやしむならむ、されど我汝の驚きをさらに大いならしめんとす 一二一―一二三

わが目を導いて高きに到らしむるこの者こそは、かのヴィルジリオ、人と神々をうたふにあたりて汝に力を與へし者なれ 一二四―一二六

若しわが笑ゑみの原因もとと思へるもの他にあらば、眞まことならずとしてこれを棄て、彼が事をいへる汝の言ことばを眞まことの原因もととおもふべし。

一二七―一二九

わが師の足を抱かんとて彼既に身をかゞめゐたりき、されど
師彼に曰ふ。兄弟よ、しかするなかれ、汝も魂汝の見る者も
魂なれば。 一三〇—一三二

彼立^{たちあが}上りつゝ。今汝は汝のために燃ゆるわが愛の大いなるを
さとするをえむ、そは我等の身の空しきを忘れて 一三三—一

三五

我はあたかも固體のごとく魂をあしらひたればなり 一三六
—一三八

第二十二曲

我等すでに天使をあとにす（こは我等を第六の圓にむかはせ、
わが顔より一の疵をとりぞける天使なり 一—三

彼は我等に義を慕ふ者の福なることを告げたり、而してその
詞はたゞシチウントをもてこれを結びき） 四—六

また我は他の徑ほかこみちを通れる時より身輕ければ、疲勞つかれを覺ゆるこ
となくしてかの足早き二の靈に従ひつゝ歩みゐたるに 七—
九

このときヴィルジリオ曰ふ。徳の燃やせし愛はその焰一たび
外にあらはるればまた他の愛を燃やすを常とす 一〇—一二
是故にジヨヴェナーレが地獄のリムボの中なる我等の間に

だりて汝の情愛を我に明^{あか}せし時よりこの方 一三―一五

汝に對してわれ大いなる好意^{よしみ}を持てり、實^{げに}これより固くはま
だ見ぬ者と結べる人なし、かかれば今は此等の段^{きだ}も我に短し
と見ゆるなるべし 一六―一八

されど告げよ――若し心安きあまりにわが手綱弛^{ゆる}みなば請ふ
友として我を赦し、今より友いとして我とかたれ 一九―二

一

貪婪^{むさぼり}はいかで汝の胸の中、汝の勵みによりて汝に滿ちみちし
ごとき大なる智慧の間に宿るをえしや。 二二―二四

これらの詞をききてスターツイオまづ少しく笑を含み、かく
て答へて曰ひけるは。汝の言葉はみな我にとりて愛のなつか
しき表^{しるし}象なり 二五―二七

それまことの理ことわりかくるゝがゆるゑに我等に誤りて疑ひを起さし
むる物げにしぼく現はるゝことあり 二八―三〇

汝が我をば世に慾深かりし者なりきと信ずることは汝の問ひ
よく我に證あかしす、これ思ふにわがかの圈にゐたるによらむ 三

一―三三

知るべし、我は却つてあまりに貪婪むさぼりに遠ざかれるため、幾千

の月この放縱を罰せるなり 三四―三六

我若し汝が恰も人の性を憤るごとくさけびて、あゝ黄金わうごんの不

淨の饑ゑよ汝人慾を導いていづくにか到らざらんと 三七―

いへる處に心をとめ、わが思ひを正さざりせば、今は轉まろばし

つゝ憂うれき牴觸つひやを感じるものを ― 四二

かの時我は費つひやすにあたりて手のあまりにひろく翼を伸ぶるを
うるを知り、これを悔ゆること他ほかの罪の如くなりき 四三―

四五

それ無智のために生くる間も死に臨みてもこの罪を悔ゆるあ
たはず、後髪のちを削りて起き出づるにいたる者その數いくばく
ぞ 四六―四八

汝また知るべし、一の罪とともに、まさしくこれと相反する
咎、その縁みどりをこゝに涸からすを 四九―五一

是故にわれ罪を淨めんとてかの貪婪むさぼりのために歎く民の間にあ
りきとも、これと反する愆とがのゆゑにこそこの事我に臨めるな
れ。 五二―五四

牧歌の歌人いひけるは。汝ヨカスタの二重ふたへの憂ひの酷むじき争ひ
を歌へるころは 五五―五七

クリオがこの詩に汝と關涉かゝりあふさまをみるに、善行よきおこなひにかくべか
らざる信仰未だ汝を信ある者となさざりしに似たり 五八―

六〇

若し夫れ然らばいかなる日またはいかなる燭ともしびぞや、汝がその後かの漁者に従ひて帆を揚ぐるにいたれるばかりに汝の闇を破りしは。 六一―六三

彼曰ふ。汝まづ我をパルナ―ゾの方かたにみちびきてその窟いはやに水を掬むすぶをえしめ、後また我を照して神のみもとに向はしめたり 六四―六六

汝の爲すところはあたかも夜燈火ともしびを己うしろが後に携へてゆき、自ら益を得ざれどもあとなる人々をさとくする者に似たりき 六七―六九

そは汝のいへる詞に、世改まり義と人の古歸り新しき族天やからより降るとあればなり 七〇―七十二

我は汝によりて詩人となり汝によりて基督教徒クリステイアーノとなれり、さ

れどわが概略おほよそに畫えがける物を尚良く汝に現はさんため我今手を
伸のべて彩色いろどらん 七三―七五

眞まことの信仰は永久とこしへの國の使者等つかひたちに播かれてすでにあまねく世に
満ちたりしに 七六―七八

わが今引ける汝の言ことば、新しき道を傳ふる者とその調しらべを同じう
せしかば、彼等を訪おとづるることわが習ひとなり 七九―八一

かのドミチアーンが彼等を責めなやまししとき、わが涙彼等
の歎なげきにともなふばかりに我は彼等を聖なる者と思ふにいたれ

り 八二―八四

われは世に在る間彼等をたすけぬ、彼等の正しき習俗ならはしは我を
して他ほかの教へをあなどらしめぬ 八五―八七

かくてわが詩にギリシア人びとを導きてテ―ベの流れに到らざる
さきにわれ洗禮バプテスマをうけしかど、公おほやけの基督教徒クリステイアンとなるをおそれ

て 八八―九〇

久しく異教の下にかくれぬ、この微温ぬるみなりき我に四百年餘の

間第四の圈をめぐらしめしは 九一―九三

されば汝、かゝる幸さいはひをかくしし蓋をわがためにひらける者よ、

若し知らば、我等が俱に登るをうべき道ある間に、我等の年

へし 九四―

テレンツイオ、チェチリオ、プラウト及びヴァリオの何處いづこに

あるやを我に告げよ、告げよ彼等罪せらるゝや、そは何の地

方に於てぞや。 ―九九

わが導者答ふらく。彼等もペルシオも我もその他の多くの者

も、かのムーゼより最も多く乳を吸ひしギリシア人びととともに

一〇〇―一〇二

無明むみやうの獄ひとやの第一の輪の中にあり、我等は我等の乳母等めのとの常に

とゞまる山のことをしばしばかたる 一〇三——一〇五

エウリピデ、アンティフオンテ、シモニーデ、アガートネそのほかそのかみ桂樹ラウロをもて額を飾れる多くのギリシア人かし

こに我等と俱ともにあり 一〇六——一〇八

汝が歌へる人々の中うちにては、アンティゴネ、デイファイレ、ア

ルジア及び昔の如く悲しむイスメーネあり 一〇九——一一一

ランジアを示せる女あり、ティレジアの女むすめとテーテイ、デイ

ダーミアとその姉妹等あり。 一一二——一一四

登りをはりて壁を離れしふたりの詩人は、ふたゝびあたりを

見ることに心ひかれて今ともに黙もだし 一一五——一一七

晝よたりの四人の侍婢はしためははやあとに残されて、第五の侍婢ながえ輶なのもと

にその燃ゆる尖さきをばたえず上げゐたり 一一八——一二〇

このときわが導者。思ふに我等は右の肩を縁ふちにむけ、山を廻めぐ

ること常の如くにせざるをえざらむ。 一二一—一二三

ならはし

習慣はかしこにてかく我等の導しるべとなれり、しかしてかの貴き

うけが

魂の肯うけがへるため我等いよいよ疑はずして路に就けり 一二四

—一二六

あと

彼等はさきに我ひとり後あとよりゆけり、我は彼等のかたる言葉

に耳を傾け、詩作についての教へをきくをえたりしかど 一

二七—一二九

このうるはしき物語たゞちにやみぬ、そは我等路の中央たぐなかに、

にほひ

香やはらくして良き果みある一本ひともとの木を見たればなり 一三

〇—一三二

もみ

あたかも櫂もみの、枝また枝と高きに従つて細きが如く、かの木

は思ふに人の登らざるためなるべし、低きに従つて細かりき

一三三—一三五

われらの路の塞かたがれる方にては、清き水高き岩より落ちて葉
の上にのみちらばれり 一三六―一三八

ふたりの詩人樹にちかづけるに、一の聲葉の中よりさけびて
いふ。汝等はこの食物くひものに事缺かむ。 一三九―一四一

又曰ふ。マリアは己が口（今汝等のために物言ふ）の事より
も、婚筵のたふとくして全からむことをおもへり 一四二―

一四四

昔のローマの女等はその飲料のみものに水を用ゐ、またダニエル口は
食物くひものをいやしみて知識をえたり 一四五―一四七

古の代は黄金いにしへよの如く美しかりき、饑ゑて橡こがねを味よくし、渴き

て小川を聖酒ネツタレとなす 一四八―一五〇

蜜いなかと蝗蟲いなごとはかの洗禮者バテイスタを曠野あらにやしなへる糧かてなりき、是故

に彼榮え、その大いなること 一五一―一五三

聖史の中にあらはるゝごとし。

一五四―一五六

第二十三曲

我はあたかも小鳥を逐ひて空しく日を送る者の爲すごとくかの青葉に目をとめゐたれば 一—三

父にまさる者いひけるは。子よ、いざ來れ、我等は定まれる時をわかちて善く用ゐざるをえざればなり。 四—六

われ目と歩を齊しく移して聖達に従ひ、その語ることを聞き

つゝ行けども疲れをおぼえざりしに 七—九

見よ、歎なげきと歌ときこえぬ、主よわが唇をと唱ふるさま喜びと

ともに憂ひを生めり 一〇—一二

あゝやさしき父よ、我にきこゆるものは何ぞや。我斯くいへるに彼。こは魂なり、おそらくは行きつゝその負債おひめの縲むすびを解

くならむ。 一三―一五

たとへば物思ふ異郷の族人^{たびびと}、路にて知らざる人々に追^{おひし}及^しき、

ふりむきてこれをみれども、その足をとゞめざるごとく 一

六―一八

信心深き魂の一群^{むれ}、もだしつゝ、我等よりもはやく歩みて後方^{うしろ}

より來り、過ぎ行かんとして我等を目安^{まも}れり 一九―二一

彼等はいづれも眼窪^{まなこ}みて光なく、顔あをぎめ、その皮骨^{かは}の形

をあらはすほどに瘦せむたり 二二―二四

思ふに饑^うゑを恐るゝこといと大いなりしときのエリシトネと

いふともそのためにかく枯れて皮ばかりとはならざりしなら

む 二五―二七

我わが心の中にいふ。マリアその子を啄^{つば}みしときイエルサレ

ムを失へる民を見よ。 二八―三〇

眼窩めあなは珠たまなき指輪に似たりき、○オΣ_モを人の顔に讀よむ者Σ_{エム}を

さだかに認めしなるべし 三一—三三

若しその由來を知らずば誰か信ぜん、果實このみと水の香かをり、劇しき

慾を生みて、かく力をあらはさんとは 三四—三六

彼等の瘦すると膚はだいたはしく荒るゝ原因もと未だ明あきかならざりし

ため、その何故にかく饑ゑしやを我今異あやしみるたりしに 三

七—三九

見よ、一の魂かうべ、頭ふかみの深處より目を我にむけてつらく視、か

くて高くさけびて、こはわがためにいかなる恩惠めぐみぞやといふ

四〇—四二

我何ぞ顔を見て彼の誰なるを知るをえむ、されどその姿の毀

てるものその聲にあらはれき 四三—四五

この火花はかの變れる貌かたちにかゝはるわが凡ての記憶を燃やし、

我はフオレーゼの顔をみとめぬ 四六―四八

彼請ひていふ。あゝ、乾ける痂かさぶたわが膚はだの色を奪ひ、またわが

肉乏しとも、汝これに心をとめず 四九―五一

故に汝の身の上と汝を導くかしこの二の魂の誰なるやを告げよ、我に物言ふを否むなかれ。 五二―五四

我答へて彼に曰ふ。死しにてさきに我に涙を流さしめし汝の顔は、かく變りて見ゆるため、かの時に劣らぬ憂ひを今我に與へて

泣かしむ 五五―五七

然されば告げよ、われ神を指さして請ふ、汝等をかく枯からす物は何

ぞや、わが異あやしむ間我に言いはしむる勿れ、心に他ほかの思ひ滿つれ

ばその人いふ事宜よろしきをえず。 五八―六〇

彼我に。永遠とこしへの思量はからひによりて我等の後方うしろなるかの水の中樹の中に力くだる、わがかく瘦するもこれがためなり 六一―六

三

己が食慾に耽れるため泣きつゝ歌ふこの民はみな饑ゑ渴きて

こゝにふたゝび己を清くす 六四―六六

このみ
果實より、また青葉にかゝる飛沫みづけぶりよりいづる香氣かをりは飲食のみくひの慾

を我等うちの中に燃やすなり 六七―六九

しかして我等のこの處めぐを廻りて苦しみを新たにすることたゞ

一度たびにとゞまらず——われ苦しみといふ、まことに慰なぐさめといは

ざるべからず 七〇―七十二

そはクリストの己が血をもて我等を救ひたまへる時、彼をし

てよろこびてエリ〇〇といはしめし願ひ我等を樹下このもとに導けばなり。

七三―七五

我彼に。フォレーゼよ、汝世を變へてまさる生命いのちをえしより

この方とせいまだ五年の月日經ず 七六―七八

若し我等を再び神に嫁^{とつ}がしむる善き憂ひの時到來ざるまに、
汝の罪を犯す力既に盡きたるならんには 七九—八一

汝いかでかこゝに來れる、我は汝を下なる麓、時の時を補^{おぎな}ふ
ところに今も見るならんとおもへるなりき。 八二—八四

是に於てか彼我に。わがネルラそのあふるゝ涙をもて我をみ
ちびき、苛責の甘き茵^{いん}蔭^{ちん}を飲ましむ 八五—八七

彼心をこめし祈^{いのり}禱^{ためいき}と歎息をもて、かの魂の待つ處なる山の腰
より我を引きまた我を他の諸々の圓より救へり 八八—九〇

わが寡^{やもめ}婦^めわが深く愛せし者はその善行^{よきおこなひ}の類^{たぐひ}少なきによりてい
よく神にめでよろこばる 九一—九三

そは婦^{をんな}人^{つゝし}の愼^{しみ}に於ては、サールディニアのバルバジアさへ、
わがかの女を残して去りしバルバジアよりはるかに上にあれ
ばなり 九四—九六

あゝなつかしき兄弟よ、我汝に何を告げんや、今を昔となさ
ざる未來すでにわが前にあらはる 九七—九九

この時到来ば教壇に立つ人、面皮厚きめんぴフイレンツエの女等の、
乳房ちゆうぶさと腰を露あらはしつゝ外そとに出るをいましむべし 一〇〇—一

〇二

いかなる未開の女いかなるサラチーノの女なりとて、靈また
は他ほかの懲戒こらしめなきため身を被はずして出でし例ためしあらんや 一〇

三—一〇五

されどかの恥知らぬ女等、若し廻轉めぐり早き天が彼等の爲に備ふ
るものをさだかに知らば、今既に口をひらきてをめくなるべ
し 一〇六—一〇八

そはわが先見に誤りなくば、今子守歌ナナンナを聞きてしづかに眠る
者の頬に鬚生おひぬまに彼等悲しむべければなり 一〇九—一

一一

あゝ兄弟よ、今は汝の身の上を我にかくすことなかれ、見よ
我のみかは、これらの者皆汝が日を覆ふところを凝視^{みつ}む。

一二二——一二四

我即ち彼に。汝若し汝の我と我の汝といかに世をおくれるや
をおもひいでなば、その記憶は今も汝をくるしめむ 一一五
——一二七

わが前にゆく者我にかゝる生を棄てしむ、こは往日^{さきつひ}これの——
かくいひて日をさし示せり——姉妹の圓く現はれし時の事な
り 一一八——一二〇

彼我を彼に従ひてゆくこの眞^{まこと}の肉とともに導いて闌^ふけし夜^よを
過ぎ、まことの死者をはなれたり 一二一——一二三

我彼に勵まされてかしこをいで、汝等世の爲に歪める者を直

くするこの山を登りつつまた廻りつゝこゝに來れり 一二四
―一二六

彼はベアトリーチェのあるところにわがいたらん時まで我を
ともなはむといふ、かしこにいたらば我ひとり残らざるをえ
ず 一二七―一二九

かく我にいふはこの者即ちヴィルジリオなり（我彼を指させ
り）、またこれなるは汝等の王國を去る魂なり、この地今 一
三〇―一三二
その隅々までもゆるげるは彼のためなりき。

第二十四曲

ことばあゆみ

言歩を、歩言をおそくせず、我等は語りつゝあたかも順風

に追はるゝ船のごとく疾く行けり 一―三

再び死にし者に似たる魂等はわが生くるを知り、我を見て驚愕

おどろき

を目の坎あなより吐けり 四―六

我續いてかたりていふ。彼若し伴侶とものためならずは、おそら

くはなほ速かに登らむ 七―九

されど知らば我に告げよ、ピツカルダはいづこにありや、また告げよ、かく我を視る民の中に心をとむべき者ありや。

一〇―一二

わが姉妹（その美その善いづれまされりや我知らず）は既に

高きオリムポによるこびて勝利勝ちの冠をうく。 一三——一五

彼まづ斯くいひて後。我等の姿斷食のためにかく搾しぼり取らるゝ
がゆゑに、こゝにては我等誰たが名をも告ぐるをう 一六——一八

此は——指ぎしつゝ——ボナジュンタ、ルツカのボナジュン
タなり、またその先のきはだちて憔悴やつれし顔は 一九——二一
かつて聖なる寺院を抱けり、彼はトルソの者なりき、いま斷
食によりてボルセーナの鰻うなぎとヴェルナツチャを淨む。 二二

——二四

その他多ほかくの者の名を彼一々我に告ぐるに、彼等皆名をいは
るゝを厭はじとみえ、その一者ひとりだに憂うれき状さまをなすはあらざり
き 二五——二七

我はウバルディーン・デラ・ピーラと、杖にて多くの民を牧

せしボニファーチヨとが、饑ゑの爲に空しくその齒を動かす
を見たり 二八―三〇

我はメッセル・マルケーゼを見たり、この者フォルリにあり
し頃はかく劇しき渴かわきなく且つ飲むに便宜たより多かりしかどなほ飽
く事を知らざりき 三一―三三

されど恰も見てその中よりひとりを擇ぶ人の如く我はルツカ
の者をえらびぬ、彼我の事を知るを最希いとふさまなりければ

三四―三六

彼はさゝやけり、我は彼がかく彼等を瘦せしむる正義の苦痛いたみ
を感じるところにてゼントウツカといふを聞きし如くなりき

三七―三九

我曰ふ。あゝかく深く我と語るを望むに似たる魂よ、請ふ汝
のいへることを我にさとらせ、汝の言葉をもて汝と我の願ひ

を満たせよ。 四〇—四二

彼曰ふ。女生れていまだ首帕かしらぎぬを被かづかず、この者わが邑まちを、人

いかに誹るとも、汝の心に適かなはせむ 四三—四五

汝この豫言を忘るゝなかれ、もしわが低語ささやき汝の誤解を招ける

ならば、この後まことの事汝にこれをとときあかすべし 四六

—四八

されど告げよ、かの新しき詩を起し、戀を知る淑女等とその
はじめにいへる者は即ち汝なりや。 四九—五一

我彼に。愛我を動かせば我これに意を留めてそのわが衷うちに口授くじゅ
するごとくうたひいづ。 五二—五四

彼曰ふ。あゝ兄弟よ、我今かの公の證人とおほやけあかしびととグイットネと我と
をわが聞く麗はしき新しき調しらべのこなたにつなぐ節ふしをみる 五

五—五七

我よく汝等の筆が口授者^{くじゅしや}にちかく附隨^{つきしたが}ひて進むをみる、われ

らの筆にはげにこの事あらざりき 五八—六〇

またなほ遠く先を見んとつとむる者も彼と此との調^{しらべ}の區別^{けぢめ}を

この外にはみじ。かくいひて心足れるごとく黙^{もだ}しぬ 六一—

六三

二—口の邊^{ほとり}に冬籠^{ふゆごも}る鳥、空に群^{むら}り集^{つど}ひて後、なほも速かに飛

ばんため達^{つらな}り行くことあるごとく 六四—六六

その瘦すると願ひあるによりて身輕^{あゆみ}きかしこの民は、みな首^{かうべ}

をめぐらしつゝふたゝびその步履^{あゆみ}をはやめぬ 六七—六九

また走りて疲れたる人その侶におくれ、ひとり歩みて腰の喘^{あへぎ}

のしづまる時を待つごとく 七〇—七二

フォレーゼは聖なる群^{むれ}をさきにゆかしめ、我とともにあとよ

り來りていひけるは。我の再び汝に會^あふをうるは何時^{いつ}ぞや。

七三―七五

我彼に答ふらく。いつまで生くるや我知らず、されどわが歸ること早しとも、我わが願ひの中に、それよりはやくこの岸に到らむ 七六―七八

そはわが郷土ふるさととなりたる處は、日に日に自ら善を失ひ、そのいたましく荒るゝことはや定まれりとみゆればなり。 七九

―八一

彼曰ふ。いざ行け、我見るに、この禍ひに關かはりて罪の最も大いなるもの、一の獸の尾の下もとにて曳かれ、罪赦さるゝ例ためしなき溪にむかふ 八二―八四

獸はたえずはやさを増しつゝ、一足毎にとくすゝみ、遂に彼を踏み碎きてその恥づべき軀むくろを棄つ 八五―八七

これらの輪未だ長く廻めぐらざるまに（かくいひて目を天にむく）、

わが言いしごのなほよく説明ときあかす能はざるもの汝あきらかに明なるにいたらむ

八八—九〇

いざ汝あとに残れ、この王國にては時いと尊し、汝と斯く相
並びてゆかば、わが失ふところ多きに過ぎむ。 九一—九三

たとへば先登さきがけの譽をえんとて、馬上の群むれの中より一人ひとりの騎士、
馳せ出づることあるごとく 九四—九六

彼足をはやめて我等を離れ、我は世の大いなる軍帥ぐんすゐなりし二者ふたり
とともに路に残れり 九七—九九

彼既に我等の前を去ること遠く、わが目の彼に伴ふさま、わ
が心の彼の詞にともなふごとくなりしとき 一〇〇—一〇二

いま一本もとの樹みゆたかの、果饒みゆたかにして盛なる枝我にあらはる、また我
この時はじめてかなたにめぐれるなればその處甚だ遠からざ

りき 一〇三—一〇五

我見しに民その下にて手を伸べつゝ葉にむかひて何事をかよ
 ばはりゐたり、罪なき嬰兒物をさなごを求めて 一〇六―

乞へども乞はるゝ人答へず、かへつて願ひを増さしめんため
 その乞ふ物をかくさずして高く擡もたぐるもこの類たぐひなるべし ―

一一一

かくて彼等はあたかも迷ひ覺めしごとく去り、我等はかく多
 くの請こひと涙しりぞを卻おほきくる巨樹のもとにたゞちにいたれり 一一二

― 一一四

汝等過ぎゆきて近づくなかれ、エーヴァのくらへる木この上
 にあり、これはもとかの樹よりいづ。 一一五―一一七

誰ならむ小枝の間よりかくいふ者ありければ、ヴィルジリオ
 とスターツイオと我とは互ほとひに近く身を寄せつゝ聳ゆる岸の
 邊ほとりを行けり 一一八―一二〇

かの者またいふ。雲間に生れし^{のろひ}詛の子等即ち飽いてその二重^{ふたへ}の腰をもてテゼオと争へる者を憶へ 一二一—一二三
また貪り飲みしたため、マディアンにむかひて山を下れるゼデオンがその侶となさざりし^{エブレオびと}希伯來人を憶へ。 一二四—一二六

かく我等は二の縁^{へり}の一を傳ひて、幸^{さち}なき報^{むくい}のともなへる多食の罪の事をきゝつゝこゝを過ぎ 一二七—一二九
後身を寛^{ゆるやか}にしてさびしき路を行き、いづれも言葉なく思ひに沈^{ゆたか}みて裕に千餘の歩履^{あゆみ}をはこべり 一三〇—一三二

汝等何ぞたゞみたり行きつゝかく物を思ふや。ふと斯くいへる聲ありき、是に於てか我は恰もおぢおそるゝ獸の如く顫^{ふる}ひ

一三三—一三五

その誰なるやを見んとて首^{かうべ}を擧ぐればひとり^{ひとり}の者みゆ、爐の

中なる玻璃または金屬かねといふとも斯く光り 一三六一

かく赤くみゆるはあらし、彼曰ふ。汝等登らんことをねがはばこゝより折れよ、往いて平和をえんとする者みなこなたにむかふ。 — 一四一

彼の姿わが目の力を奪へるため、我は身をめぐらして、あたかも耳に導かるゝ人の如く、わがふたりの師うしの後にいたれり

一四二—一四四

曉告そよかぜぐる五月の輕風ゆたかに草と花とを含み、動きて佳よき香かを放つごとくに 一四五—一四七

うるはしき風わが額の正中ただなかにあたれり、我は神饌アムプロージャの匂におひを我に知らしめし羽の動くをさだかにしれり 一四八—一五〇

また聲ありていふ。大いなる恩恵めぐみに照され、味あじはひの愛飽さいはひくなき慾を胸に燃やさず常に宜よろしきに従ひて饑うる者は福なり。

第二十五曲

時は昇のぼりの遲きを許さず、そは子午線を日は金牛に夜は天蠍に

はや付わたしたればなり 一—三

さればあたかも必要の鞭むちにむちうたるゝ人、いかなる物あら
はるゝとも止まらずしてその路きざしを行くごとく 四—六

我等はひとりづつ徑こみちに入りて階きざしを登れり（階狭きため昇る者
並び行くをえず） 七—九

たとへば鶴こうづるの雛、飛ぶをねがひて翼をあぐれど、巢を離るゝ
の勇なくして再びこれを收むるごとく 一〇—一二

わが問はんと欲する願ひ燃えてまた消え、我はたゞいひいだ
さんと構ふる者の状さまをなすに過ぎざりき 一三—一五

あゆみ

歩速かなりしかどもわがなつかしき父は默^{もだ}さで、汝^{やじり}鏟^{やじり}までひきしぼれる言^{ことば}の弓を射よといふ 一六―一八この時我これにはげまされ、口を啓きていふ。滋養^{やしなひ}をうくる

に及ばざるものいかにして瘦するを得るや。 一九―二一

彼曰ふ。汝若しメレアグロの身が、炬火^{たいまつ}の燃え盡くるにつれ

て盡きたるさまを憶ひ出でなば、この事故にさとりがたきに

あらざるべく 二二―二四

また鏡に映^{うつ}る汝等の姿が、汝等の動くにつれて動くを思はば、

今硬くみゆるもの汝に軟かにみゆるにいたらむ 二五―二七

されど汝望むがまゝに心を安んずることをえんため、見よ、

こゝにスターツイオあり、我彼を呼び彼に請ひて汝の傷を癒

さしむべし。 二八―三〇

スターツイオ答ふらく。我^{とこよ}この常世^{ありさま}の状態を汝のをる處にて

彼に説明^{ときあか}すとも、こは汝の請^{こひ}をわが否む能はざるが爲なれば
咎むるなかれ。 三一—三三

かくてまたいふ。子よ、汝の心わが詞を見てこれを受けなば、
これは即ち汝の質^{たゞ}す疑ひを照す光とならむ 三四—三六

それ血の完全にして、渴ける脈に吸はるゝことなく、あたかも食卓^{つくろ}よりはこびさらるゝ食物^{くひもの}のごとく残るもの 三七—三

九

人の諸々の肢體を營む力をば心臓の中に得^う、これ此等の物とならんため脈を傳ひて出づるにいたるものなればなり 四〇

—四二

いよく清くなるに及びて、この血は人のいふを憚かる處にくだり、後又そこより自然の器^{うつは}の中なる異なる血の上にしたゝ

り 四三—四五

二の血こゝに相合ふ、その一には堪ふる性さがあり、また一には

その出づる處全きがゆゑに行ふ性あり 四六―四八

此これ彼と結びてはたらしき、まづ凝固こりかたまらせ、後己が材としてそ

の固め整へる物に生命いのちを與ふ 四九―五一

活動の力恰も草木の魂の如きものとなりて（但し一は道程に
あり一は彼岸に達す、異なるところたゞこれのみ）後 五二

―五四

なほその作用をとゞめず、この物動きかつ感ずること海の菌

の如きにいたれば、さらに己を種として諸々の力を組立ては

じむ 五五―五七

子よ、生む者の心臓即ち自然が諸々の肢體に意を用ゐる處よ

りいづる力は今や既に弘がりて延ぶ 五八―六〇

されど汝は未だ生物のいかにして人間となるやを聞かず、こ

は汝よりさとかりし者の嘗て誤れる一の點なり 六一―六三
そは彼靜智に當つべき何の機官をも見ざるによりて、その教
への中にこれを魂より離れしめたればなり 六四―六六

汝わが陳ぶる眞まことにむかひて胸をひらき、而して知るべし、胎

兒における腦の組織くみたて全く成り終るや否や 六七―六九

第一の發動者、自然のかく大いなる技わざをめでてこれにむかひ、

力満ちたる新しき靈を嘘ふきい入れたまひ 七〇―七二

靈はかしこにはたらきゐたるものを己が實體の中にひきいれ、
たゞ一の魂となりて、且つ生き且つ感じ且つ自ら己をめぐる

七三―七五

汝この言ことばをふかくあやしむなからんため、思ひみよ、太陽の

熱葡萄の樹よりしたゝる汁あひまじと相混りて酒となるを 七六―七

八

ラケージスの絲盡くる時は、この魂、肉の繫つなぎを離れ、人と神

とに屬するものをその實質において携ふ 七九―八一

他の能力ほかちからはみな默もだせども、記憶、了知及び意志の作用はたらきは却つ

てはるかに前よりも強し 八二―八四

かくて止まらずしてあやしくも自ら岸の一に落ち、こゝには

じめて己が行くべき路を知る 八五―八七

處一たび定まれば、構成いとなみの力たゞちにあたりを輝かし、その

状さまもその程ほども、生くる肢體におけるに同じ 八八―九〇

しかしてたとへば空氣雨を含むとき、日の光これに映うつるによ

りて多くの色に飾らるるごとく 九一―九三

あたりの空氣はそこにとゞまれる魂が己の力によりてその上

に捺おす形をうく 九四―九六

かくてあたかも火の動くところ焰これにともなふごとく、新

しき形靈にともなふ 九七—九九

この物この後これによりてその姿を現すがゆるゑに影オムブラと呼ばれ、
またこれによりて凡ての官能をとゝのへ、見ることをさへ得
るにいたる 一〇〇—一〇二

我等これによりて物言ひ、これによりて笑ふ、またこれによ
りて我等に涙あり歎息なげきあり（汝これをこの山の上に聞けるな
るべし） 一〇三—一〇五

諸々の願ひまたはその他の情の我等に作用はたらきを及ぼすにしたが
ひ、影も亦姿を異にす、是ぞ汝のあやしとする事の原因もとなる。

一〇六—一〇八

我等はこの時はや最後の曲路にいたりて右にむかひ、心を他ほか
にとめゐたり 一〇九—一一一

こゝにては岸焰の矢を射、縁ふちは風を上におくりてこれを追返

さしめ、そこに一の路を空くあ 一一二——一四

されば我等は開きたる處を傳ひてひとりぐに行かざるをえ
ざりき、我はこなたに火を恐れかなたに下に落るおつをおそれぬ

一一五——一七

わが導者曰ふ。かたく目の手綱を緊めてこゝを過ぎよ、たゞ
すこし

些の事のために足を誤るべければなり。 一一八——一二〇

この時こよなき憐憫の神と猛火の懷ふところにうたふ聲我にきこえて

わが心をばまたかなたにもむかはしむ 一二一——一二三

かくて我見しに焰の中をゆく多くの靈ありければ、我は彼等
を見またわが足元あしもとをみてたえずわが視力をわかつてり 一二四

——一二六

聖歌終れば、彼等は高くわれ夫を知らずときけび、後低く再
びこの聖歌をうたひ 一二七——一二九

これを終ふればまた叫びて、ディアーナ森にとゞまりて、かのヴェーネレの毒を嘗めしエリーチエを逐へりといふ 一三

〇——一三二

かくて彼等歌に歸り、後またさけびて、徳と縁えにしの命ずる如く

貞操みさをを守る妻と夫の事を擧ぐ 一三三——一三五

おもふに火に焼かるゝ間は、彼等たえずかく爲すなるべし、

かゝる薬かゝる食物くひものによりてこそ 一三六——一三八

その傷きずつひにふさがるなれ 一三九——一四一

第二十六曲

我等かく縁^{ふち}を傳^ひひ一^{ひとつ}列となりて歩める間に、善き師しばく
いふ。心せよ、わが誠めを空しうするなかれ。 一―三

はや光をもて西をあまねく蒼より白に變ふる日は、わが右の
肩にあたれり 四―六

我は影によりて焰をいよく赤く見えしめ、また多くの魂の
かゝる表徴^{しるし}にのみ心をとめつゝ行くを見たり 七―九

彼等のわが事を語るにいたれるもこれが爲なりき、かれらま
づ、彼は虚^{むな}しき身のごとくならずといふ 一〇―一二
かくていくたりか、焼かれざる處に出でじとたえず心を用ゐ
つゝ、その進むをうるかぎりわが方^{かた}に來れる者ありき 一三

――一五

あゝ汝おそき步履あゆみのためならずして恐らくは敬うやまひのために侶の

あとより行く者よ、渴かわきと火に燃ゆる我に答へよ 一六―一八

汝の答を求むる者我獨りに非ず、此等の者皆これに渴く、そ

のはげしきに比くらぶればインド人又はエチオピア人の冷つめたき水に

かわくも及ばじ 一九―二一

請ふ我等に告げよ、汝未だ死の網あみの中に入らざるごとく、身

を壁として日を遮おさへぎるはいかにぞや。 二二―二四

その一斯ひとつく我にいへり、また若しこの時新しき物現はれて心

をひくことなかりせば、我は既にわが身の上をあかせしなる

べし 二五―二七

されどこの時顔をこの民にむけ燃ゆる路の正中ただなかをあゆみて來

る民ありければ、我は彼等をみんとて詞をとゞめぬ 二八―

三〇

我見るにかなたこなたの魂みないそぎ、たがひに接吻くちづけすれど

も短き會釋あしやくをもて足れりとして止まらず 三一—三三

あたかも蟻がその黒める群むれの中にてたがひに口を觸れしむる

（こはその路と幸さちとを採さぐるためなるべし）に似たり 三四—三

六

したしみの會釋をはれば、未だ一步も進まざるまに、いづれ

も競うてその聲を高くし 三七—三九

新しき群むれは、ソツドマ、ゴモルラといひ、残りの群は、牝牛

をさそひて己の慾を遂げんためパシフェの牝牛の中に入ると

いふ 四〇—四二

かくてたとへば群鶴むらづるの、一部はリフエの連山やまぐにむかひ、また

一部は砂地すなぢにむかひ、此氷これを彼日かれを厭ひて飛ぶごとく 四三

―四五

民の一群むれかなたにゆき、一群こなたに來り、みな泣きつゝ、さきにうたへる歌と、彼等にいとふさはしき叫びに歸れり 四

六―四八

また我に請へるかの魂等は、聽くの願ひをその姿にあらはしつゝ前の如く我に近づきぬ 四九―五一

我斯く再び彼等の望みを見ていひけるは。あゝいつか必ず平安を享くる魂等よ 五二―五四

熟うめるも熟まざるもわが身かの世に残るにあらず、その血その骨節ふしみな我とともにこゝにあり 五五―五七

我こゝより登りてわが盲めしひを癒さんとす、我等の爲に恩恵めぐみを求むる淑女天に在り、是故にわれ肉體を伴ひて汝等の世を過ぐ

五八―六〇

ねがはくは汝等の大望速かに遂げ、愛の満ち／＼且ついと廣く弘がる天汝等を住はしむるにいたらんことを 六一―六三

請ふ我に告げてこの後紙にしるすをえしめよ、汝等は誰なり

や、また汝等の背せの方かたにゆく群むれは何ぞや。 六四―六六

粗野なる山人やまびと都に上れば、心奪はれ思ひ亂れて、あたりをみ

つゝ言葉なし 六七―六九

かの魂等またみなかくのごとく見えき、されど驚愕おどろき（貴き心

の中にてはそのしづまること早し）の重荷おろされしとき

七〇―七二

さきに我に問へる者またいひけるは。福なる哉汝生を善くせ

んとてこの地の經驗を船に載す 七三―七五

我等と共に來らざる民の犯せる罪は、そのかみ勝誇れるチエー

ザルをして王妃といへる罵詈ののしりの叫びを聞くにいたらしめしも

のなりき 七六―七八

是故に汝等の聞けるごとく彼等自ら責めてソツドマとさけびて去り、その恥をもて焰をたすく 七九―八一

我等の罪は異性によれり、されど獸の如く慾に従ひ、人の律法おきてを守らざりしがゆゑに 八二―八四

我等彼等とわかるゝ時は、かの獸となれる板の内にて獸となるる女の名を讀み、自ら己をはづかしむ 八五―八七

汝既に我等の行爲おこなひと我等の犯せる罪を知る、恐らくはさらに我等の名を知るを望むべけれど告ぐるに時なく又我然しかするをえざるなるべし 八八―九〇

たゞわが身に就つては我汝の願ひを満みたさむ、我はグイード・グイニツエルリなり、未だ最後いまはとならざる先に悔いしたため今既に罪を淨む。 九一―九三

我及び我にまさりて愛のうるはしきけだかき調が奏でしこと
ある人々の父かく己が名をいふを聞きしとき 九四―

我はさながらリクルゴの憂ひのうちに再び母をみしときの二人
の男の子の如くなりき、されど彼等のごとく激せず ―九九
たゞ物を思ひつゝ長く彼を見てあゆみ、聞かず語らず、また
火をおそれてかなたに近づくことをせざりき 一〇〇―一〇

二

かくてわが目飽くにおよび、われかたく誓ひをたてて彼のた
めに能くわが力を盡さんと告ぐれば 一〇三―一〇五

彼我に。わが汝より聞ける事の我心にとゞむる痕跡いとあざ
やかなるをもてレーテもこれを消しまたは朦朧おぼろならしむるあ

たはず 一〇六―一〇八

されど今の汝の詞我に眞まことを誓へるならば、請ふ告げよ、汝の

我を愛すること目にも言にもかくあらはるゝは何故ぞや。
ことば

一〇九——一一一

我彼に。汝のうるはしき歌ぞそれなる、近世ちかきよの習ひつゞくか

ぎりは、その文字もじ常に愛せらるべし。一一二——一一四

彼曰ふ。あゝ兄弟よ、わが汝にさししめす者は（前なる一の
靈を指ざし）我よりもよくその國語くにことばを鍛きたへし者なり 一一五

——一一七

戀の詩散文の物語にては彼衆かれにぬきんず、レモゼスの人をも
てこれにまさるとなすは愚者なり、彼等をそのいふにまかせ

よ 一一八——一二〇

彼等は眞まことよりも評うはさをかへりみ、技わざと理ことわりを問はざるさきにはや

くも己みづかが説ふを立つ 一二一——一二三

多くの舊人のグイットネにおけるも亦斯の如し、さらに多く

の人を得て眞の勝つにいたれるまでは彼等たゞ響きを傳へて

彼のみを讃めぬ ほ 一二四—一二六

さて汝ゆたかなる恩恵をうけて、僧侶の首にクリストを戴く

かの僧院に行くことをえば 一二七—一二九

わが爲に彼に向ひて一遍の主の パテルノストロ 祈を唱へよ、但しこの世

界にて我等の求むる事にて足る、こゝにては我等また罪を犯

すをえざれば。 一三〇—一三二

かくいひて後、うしろ後方に近くゐたる者を己に代らしむるためな

るべし、みなそこ恰も水底深く沈みゆく魚の如く火に入りて見えざり

き 一三三—一三五

我は指示されし者の方に少しく進みて、わが願ひ彼の名のた

めにゆかしき處を備へしことを告ぐれば 一三六—一三八

彼こゝろよく語りて曰ふ。汝の問ひのねんごろなるにめでて、

我は己を汝にかくすこと能はず、またしかするをねがはざる
なり 一三九―一四一

我はアルナルドなり、泣きまた歌ひてゆく、われ過去こしかたをみて
わが痴おろかなりしを悲しみ、行末ゆくすゑをみてわが望む日の來るを喜ぶ

一四二―一四四

この階きざしの頂きざしまで汝を導く權能ちからをさして今我汝に請ふ、時到ら
ばわが苦患なやみを憶おもへ。 一四五―一四七

かくいひ終りて彼等を淨むる火の中にかくれぬ 一四八―一
五〇

第二十七曲

今や日はその造主^{つくりぬし}血を流したまへるところに最初^{はじめ}の光をそゝ
ぐ時（イベロは高き天秤^{はかり}の下にあり 一—
ガンジェの浪は亭午^{まひる}に焼かる）とその位置を同じうし、晝既
に去らんとす、この時喜べる神の使者^{つかひ}我等の前に現はれぬ

一六

彼焰^{そと}の外岸の上に立ちて、心^{こころ}の清き者は福なりとうたふ、そ
の聲爽^{さわや}かにしてはるかにこの世のものにまされり 七—九
我等近づけるとき彼曰ひけるは。聖なる魂等よ、まづ火に嚙
まれざればこゝよりさきに行くをえず 一〇—
汝等この中に入りまたかなたにうたふ歌に耳を傾けよ。かく

いふを聞きしとき我はあたかも穴に埋^{いけ}らるゝ人の如くになり
き 一五

手を組合^{くみあは}せつゝ身をその上より前に伸べて火をながむれば、
わが嘗て見し、人の體^{からだ}の焼かるゝありさま、あざやかに心に
浮びぬ 一六―一八

善き導者等わが方にむかへり、かくてヴィルジリオ我に曰ふ。

我子よ、こゝにては苛責はあらむ死はあらじ 一九―二一

憶^{おも}へ、憶へ……ジェーリオンに乘れる時さへ我汝を安らかに

導けるに、神にいよいよ近き今、しかするをえざることあら

んや 二二―二四

汝かたく信ずべし、たとひこの焰の腹の中に千年^{ちとせ}の長き間立

つとも汝は一筋^{すぢ}の髪をも失はじ 二五―二七

若しわが言^{ことば}の偽なるを疑はば、焰にちかづき、己が手に己が

衣の裾をとりてみづからこれを試みよ 二八―三〇

いざ棄てよ、一切の恐れを棄てよ、かなたにむかひて心安く
進みゆくべし。かくいへるも我なほ動かずわが良心に従はざ
りき 三一―三三

わがなほ頑かたくなにして動かざるをみて彼少しく心をなやまし、子
よ、ベアトリーチェと汝の間にこの壁あるを見よといふ 三

四―三六

桑眞紅しんくとなりしとき、死に臨めるピラーモがティスベの名を
聞き目を開きてつらつら彼を見しごとく 三七―三九

わが思ひの中にたえず湧わき出づる名を聞くや、わが固き心や
はらぎ、我は智さとき導者にむかへり 四〇―四二

是に於てか彼首かうべを振りて、我等此方こなたに止まるべきや如何いかにとい
ひ、恰も一の果實このみに負くる稚兒をさなごにむかふ人の如くにほゝゑみ

ぬ 四三―四五

かくて彼我よりさきに火の中に入り、またこの時にいたるま
でながく我等の間をわかつてるスターツイオに請ひて我等の後あと
より來らしむ 四六―四八

我火の中に入りしとき、その燃ゆることかぎりなく劇しけれ
ば、煮え立つ玻璃の中になりとも身を投入れて冷ひやさんとおも
へり 四九―五一

わがやさしき父は我をはげまさんとて、ベアトリーチェの事
をのみ語りてすゝみ、我既に彼の目を見るごとくおぼゆとい
ふ 五二―五四

かなたにうたへる一の聲我等を導けり、我等はこれにのみ心
をとめつゝ登るべきところにいでぬ 五五―五七

わが父に恵まるゝ者よ來れ。かしこにありてわが目をまばゆ

うし我に見るをえざらしめたる一の光の中にかくいふ聲す

五八―六〇

またいふ。日は入り夕ゆふべが来る、とゞまるなかれ、西の暗くならざる間に足をはやめよ。六一―六三

路直く岩を穿ちて東の方に上るのぼがゆゑに、すでに低き日の光を我はわが前より奪へり 六四―六六

しかしてわが影消ゆるを見て我もわが聖等ひじりたちも我等の後方うしろに日の沈むをしりたる時は、我等の試みし段きたなほ未だ多からざり

き 六七―六九

はてしなく濶ひろき天涯未だ舉こぞりて一の色とならず、夜その闇をことごとく頒きたち與へざるまに 七〇―七二

我等各一の段きたを床となしぬ、そはこの山の性さが、登るの願ひよりもその力を我等より奪へばなり 七三―七五

くひもの

食物をえざるさきには峰の上に馳せ狂へる山羊も、日のいと
熱き間蔭にやすみて聲をもいださず 七六―

その牧者（彼杖にもたれ、もたれつゝその群を牧ふ）にまも

られておとなしく倒嚼むことあり ―八一

また外に宿る牧人、そのしづかなる群のあたりに夜を過して、

野の獸のこれを散らすを防ぐことあり 八二―八四

我等みたりもまたみな斯の如くなりき、我は山羊に彼等は牧

者に似たり、しかして高き岩左右より我等をかこめり 八五

―八七

外はたゞ少しく見ゆるのみなりしかど、我はこの少許の處に、

常よりも燦かにしてかつ大なる星を見き 八八―九〇

我かく倒嚼み、かく星をながめつゝ睡りに襲はる、即ち事を

そのいまだ出来ぬさきにに屡々告知らす睡りなり 九一―九

三

たえず愛の火に燃ゆとみゆるチテレアがはじめてその光を東の方よりこの山にそゝぐ頃かとおもはる 九四―九六

我は夢に、若き美しきひとりの淑女の、花を摘みつゝ野を分けゆくを見しごとくなりき、かの者うたひていふ 九七―九八

わが名を問ふ者あらば知るべし、我はリーアなり、我わがために一の花^{はな}圈^{なみだり}を編まんとて美しき手を動かして行く 一〇〇

―一〇二

鏡にむかひて自ら喜ぶことをえんため我こゝにわが身を飾り、わが妹ラケールは終日^{ひねもす}坐してその鏡を離れず 一〇三―一〇四

五

われ手をもてわが身を飾るをねがふごとくに彼その美しき目

を見るをねがふ、見ることを彼の、行ふこと我の心を足^{たら}はす。

一〇六—一〇八

異郷の旅より歸る人の、わが家^やにちかく宿るにしたがひ、い
よく愛^めづる曉^{あかつき}の光 一〇九—一一一

はや四方より闇を逐ひ、闇とともにわが睡りを逐へり、我即
ち身を起^{おこ}せば、ふたりの大いなる師この時既に起きゐたり

一一二—一一四

げに多くの枝によりて人のしきりに尋ね求むる甘き果^みは今日
汝の饑^うゑをしづめむ。 一一五—一一七

ヴィルジリオかく我にいへり、またこれらの語^{ことば}のごとく心に
適^{かな}ふ賜^{たまもの}はあらじ 一一八—一二〇

わが登るの願ひ願ひに加はり、我はこの後一足毎に羽生^はえい
でて我に飛ばしむるをおぼえき 一二一—一二三

我等階^{きざはし}をことごとく渡り終りて最高^{いとたか}き段^{きだ}の上に立ちしとき、

ヴィルジリオ我にその目をそゞぎて 一二四—一二六

いふ。子よ、汝既に一時^{ひととき}の火と永久^{とこしへ}の火とを見てわが自から

知らざるところに來れるなり 一二七—一二九

われ智^{さとり}と術^{わざ}をもて汝をこゝにみちびけり、今より汝は好む所

を導者となすべし、汝嶮^{けは}しき路を出で狹き路をはなる 一三

〇—一三二

汝の額を照す日を見よ、地のおのづからこゝに生ずる若草と

花と木とを見よ 一三三—一三五

涙を流して汝の許に我を遣はせし美しき目のよろこびて來る

まで、汝坐するもよし、これらの間を行くもよし 一三六—

一三八

わが言^{ことば}をも表示^{しるし}をもこの後望^{のぞ}み待つことなかれ、汝の意志は

自由にして直く健全すこやかなればそのむかふがまゝに行はざれば誤
らむ 一三九―一四一

是故にわれ冠と帽を汝に戴かせ、汝を己が主たらしむ。

第二十八曲

あらたに出し日の光を日にやはらかならしむる茂れる生ける
神の林の内部うちをも周邊まはりをも探さがらんとて 一―三

我ためらはず岸を去り、しづかにく野を分けゆけば、地は
いたるところ佳香よきかを放てり 四―六

うるはしき空氣變化かはりなく動きてわが額を撃ち、そのさまさな
がら軟かき風の觸るゝに異ならず 七―九

諸々の枝これに靡かたきてふるひつゝ、みな聖なる山がその最初はじめ
の影を投ぐる方かたにかゞめり 一〇―一二

されどはなはだしく撓たわむにあらねば、梢こずえの小鳥その一切の技わざ
を棄つるにいたらず 一三―一五

いたくよろこびて歌ひつゝ、そよふく朝風を葉の間にうけ、
葉はエオロがシロツコを解き放つとき 一六―

キアツシの岸の上なる松の林の枝より枝に集まるごとき音を
もてその調しらべにあはせぬ ― 二一

しづかなる歩履あゆみ我を運びて年へし林の中深く入らしめ、我既
にわがいづこより入來れるやを見るあたはざりしとき 二二

― 二四

見よわが行手を遮れる一の流れあり、その細波さいなみをもて、縁ふちに
生はえ出し草を左に曲げぬ 二五―二七

日にも月にもかしこを照すをゆるさざる永劫の蔭に蔽はれ、
黒み黒みて流るれども 二八―

一物として隠るゝはなきかの水にくらぶれば、世のいと清き
水といふともみな雜まじりありとみゆべし ― 三三

わが足とどまり、わが目は咲ける木々の花の類たぐひ甚だ多きを見
んとて小川のかなたに進めるに 三四—三六

このときあたかも物不意にあらはれて人を驚かし、他の思ほかひ
をすべて棄てしむることあるごとくかしこにあらはれし 三

七—三九

たゞひとりの淑女あり、歌をうたひて歩みつゝ、その行道ゆくみちを
ことごとくいろいろどれる花また花を摘みゐたり 四〇—四二

我彼に曰ふ。あゝ美しき淑女よ、心の證あかしとなる習ひなる姿に
信を置くをうべくば愛の光にあたゝまる者よ 四三—

ねがはくは汝の歌の我に聞ゆるにいたるまで、この流れのか
たにすゝみきたれ 四八

汝は我にプロセルピーナが、その母彼を彼春を失へるとき、
いづこにゐしやいかなるさまにありしやを思ひ出でしむ。

四九―五一

たとへば舞をまふ女の、その二の蹠あしうらを地にまた互ひに寄せて
すゝみ、ほとんど一足かたあしを一足の先に置かざるごとく 五二―

五四

彼は紅と黄の花を踏みてこなたにすゝみ、そのさま目をしと
やかにたるゝ處女をとめに異ならず 五五―五七

かくて麗はしき聲その詞とともに我に聞ゆるまで近づきてわ
が願ひを満たせり 五八―六〇

まさしく草がかの美しき流れの波に洗はるゝところに來るや
いなや、彼わがためにその目を舉げぬ 六一―六三

思ふにヴェーネレのあやまちてわが子に刺されし時といふと
も、その眉の下に輝ける光かく大いならざりしなるべし 六
四―六六

彼は種なきにかの高き邱をかに生ずる色をなほも己が手をもて摘
みつゝ、右の岸に微笑ほゑみりたり 六七―六九

流れは三步我等を隔てき、されどセルセの渡れる（このこと
今も人のすべての誇りを誠しむ）エルレスポントが 七〇―
七二

セストとアビードの間の荒浪のためにレアンドロよりうけし
怨みも、かの流れが、かの時開かざりしたために我よりうけし
怨みにはまさらじ 七三―七五

彼曰ふ。汝等は今初めて來れる者なれば、人たる者の巢に擇
ばれしこの處に我のほほゑむをみて 七六―七八

驚きかつ異あやしむならむ、されど汝我を樂しませ給へりといへ
る聖歌は光を與へて汝等の了知さとの霧を拂ふに足るべし 七九

また汝先に立つ者我に請へる者よ、聞くべきことあらばいへ、
我はいかなる汝の問ひにも足はぬ事なく答へんと心構して來
れるなれば。 八二―八四

我曰ふ。水と林の響きとはあらたに起せるわが信を攻む、そ
はわが聞けるところ今見るところと異なればなり。 八五―
八七

是に於てか彼。我は汝のあやしむものにそのいで來る原因あ
るを陳べて汝を蔽ふ霧をきよめむ 八八―九〇

それ己のみ己が心に適ふ^{かな}至上の善は人を善にまた善行の爲に
造り、この處をこれに與へて限りなき平和の契約となせり

九一―九三

人己が越度^{をちど}によりてたゞ少時^{しばらく}こゝにとゞまり、己が越度によ
りて正しき笑ひと麗はしき悦びを涙と勤勞^{ほねをり}に變らせぬ 九四

―九六

水より地よりたちのぼりてその力の及ぶかぎり熱に従ひゆく
もののこの下に起す亂みだれが 九七―九九

人と戦ふなからんため、この山かく高く天に聳えき、しかし
てその鎖とぎさるゝところより上はみなこれを免かる 一〇〇―

一〇二

さて空氣は、若しその廻まはることいづこにか妨げられずば、こ
とぐく第一の回轉とともに圓を成してめぐるがゆゑに一

〇三―一〇五

かゝる動き、純なる空氣の中にありて全く絆ほどしなやこの高嶺たかねを
撃ち、林に聲を生ぜしむ、これその繁きによりてなり 一〇

六―一〇八

また撃たれし草木くさきにはその性さがを風に満たすの力あり、この風

その後吹きめぐりてこれをあたりに散らし 一〇九——一一
かなたの地は己が特質と天の利にしたがひて孕み、性^{さが}異なる
諸々の木を生む 一一二——一一四

かゝればわがこの言^{ことば}を聞く者、たとひ見ゆべき種なきにかし
こに萌えいつる草木を見るとも、世の不思議とみなすに足ら
ず 一一五——一一七

汝知るべし、この聖なる廣野^{ひろの}には一切の種満ち、かの世に摘
むをえざる果^みのあることを 一一八——一二〇

また汝の今見る水は、漲^{みなぎ}り涸^かるゝ河のごとくに、冷えて凝れ
る水氣^{おぎな}の補^{おぎな}ふ脈より流れいつるにあらず 一二一——一二三

變らず盡きざる泉よりいづ、而して泉は神の聖旨^{みむね}によりて、
その二方の口よりそゝぐものをば再び得^う 一二四——一二六
こなたには罪の記憶を奪ふ力をもちてくだりゆき、かなたに

は諸々の善行を憶ひ起さしむ 一二七—一二九

こなたなるはレーテと呼ばれ、かなたなるをエウノエといふ、

この二の水まづ味はれざればその功德なし 一三〇—一三二

こは他の凡ての味にまさる、我またさらに汝に教ふことを

せずとも、汝の渴はや全くやみたるならむ、されど 一三三

—一三五

己が好にまかせてなほ一の事を加へむ、思ふにわが言たとひ

約束の外にいづとも汝の喜びに變りはあらじ 一三六—一三

八

いにしへ黄金の代とその幸多きさまを詩となせる人々、恐ら

くはパルナードにて夢にこの處を見しならむ 一三九—一四

一

こゝに罪なくして人住みぬ、こゝにとこしへの春とすべての

實^みあり、彼等の所謂^{うしろ}ネツタレは是なり。 一四二―一四四
我はこの時身を後方^{うしろ}にめぐらしてわがふたりの詩人にむかひ、
彼等が笑を含みつゝこの終りの言をきけるを見 一四五―一
四七

後ふたゝび目をかの美しき淑女にむけたり 一四八―一五〇

第二十九曲

彼かたりをはれるとき、戀する女のごとく歌ひて、罪をおほ
はるゝものは福なりといひ 一—三

かくてたとへばひとり日は日を見ひとりはこれを避けんとて林
の蔭をあゆみゆきしきびしきニンファの群むれのごとくに 四—

六

岸をつたひ流れにさかのぼりて進み、また我はわが歩みを細こまか
にしてそのこまかなる歩みにあはせ、これと相並びて行けり

七—九

ふたりの足數合せて百とならざるさきに、岸兩つながら等し
くその方向むきを變へたれば、我は再び東にむかへり 一〇—一

二

またかくしてゆくことなほ未だ遠からざりしに、淑女全くわが方にむかひて、わが兄弟よ、視よ、耳を傾けよといふ 一
三―一五

このとき忽ち一の光かの大なる林の四方に流れ、我をして電光いなづまなるかと疑はしめき 一六―一八

されど電光はその現はるゝごとく消ゆれど、この光は長くつゞきていよく輝きわたりたれば、我わが心の中に是何物ぞやといふ 一九―二一

また一のうるはしき聲あかるき空をわけて流れぬ、是に於てか我は正しき憤りよりエーヴァの膽のふと大きを責めたり 二二

―二四

彼は造られていまだ程なきたゞひとりの女なるに、天地神にあめつち

したが

おほひ

遵へるころ、被物おほひの下に、しのびてとゞまることをせざりき
 彼その下に信心深くとゞまりたりせば、我は早くまた永くこ
 のいひがたき樂しみを味へるなるべし 二八―三〇

かぎりなき樂しみの初穂かく豊かなるに心奪はれ、たゞいよ
 く大いなる喜びをうるをねがひつゝ、我その間を歩みゐた
 るに 三一―三三

我等の前にて縁の技の下なる空氣燃ゆる火のごとくかゞやき、
 かのうるはしき音おと今は歌となりて聞えぬ 三四―三六

あゝげに聖なる處女等をとめよ、我汝等のために饑ゑ、寒さ、また
 は眠りをしのびしことあらば、今その報むくいを請はざるをえず

三七―三九

いざエリコナよわがためにそゝげ、ウラーニアよ、歌の侶と
 ともに我をたすけて、おもふだに難き事をば詩となさしめよ

四〇―四二

さてその少しく先にあたりてあらはれし物あり、我等と是とはなほ離るゝこと遠かりければ、誤りて七の黄金こがねの木と見えぬ 四三―四五

されど相似て官能を欺く物その時性の一をも距離へだたりのために失はざるまで我これに近づけるとき 四六―四八

理性に物を判たしむる力わかは、これの燭臺なるとうたへる歌のオザンナなるをさとりたり 四九―五一

この美しき一組の燭臺、上より焰を放ちてその燦かなること澄みわたれる夜半よはの空の望月もちづきよりもはるかにまされり 五二

―五四

我はいたくおどろきて身をめぐらし、善きヴィルジリオにむかへるに、我に劣らざる怪訝あやしみを顔にあらはせる外答へなかり

き 五五―五七

我即ちふたゝび目をかのたふとき物にむくれば、新婦はなよめにさへ
負くるならんとおもはるゝほどいとゆるやかにこなたにすゝ
めり 五八―六〇

淑女我を責めていふ。汝いかなればかくたゞ生くる光のさま
に心を燃やし、その後方うしろより來るものを見ざるや。 六一―

六三

このとき我見しに、白き衣を着（かくばかり白き色世にあり
し例ためしなし）、己が導者に従ふごとく後方うしろより來る民ありき 六

四―六六

水はわが左にかゞやき、我これを視れば、あたかも鏡のごと
くわが身の左の方を映うつせり 六七―六九

われ岸のこなた、たゞ流れのみ我をへだつるところにいたれ

るとき、なほよくみると、わが歩みをとめて 七〇―七二
視しに、焰はそのうしろに彩色いろどれる空氣を残してさきだちす、

み、さながら流るゝ小旗のごとく 七三―七五

空氣は七の線すぢにわかたれ、これに日の弓、デリアの帶のすべ

ての色あり 七六―七八

これらの旌後はたうしろの方に長く流れてわが目及ばず、またわがはか

るところによれば左右の端はしにあるものの相離るゝこと十歩な

りき 七九―八一

かく美しきさにおほはれ、二十四人の長老、百フイオルダリーゾ合の花の冠

をつけてふたりづつならび來れり 八二―八四

みなうたひていふ。アダモの女子むすめのうちにて汝は福なる者な

り、ねがはくは汝の美にとこしへの福あれ。 八五―八七

かの選ばれし民、わが對面むかひなるかなたの岸の花と新しき草を

はなれしとき 八八―九〇

あたかも天にて光光に従ふごとく、そのうしろより四の生物いきもの各々かしら頭に縁の葉をいただきて來れり 九一―九三

皆六の翼をもち、目その羽に滿つ、アルゴの目若し生命いのちあらばかくのごとくなるべし 九四―九六

讀者よ、彼等の形を録しるさんとして我またさらに韻語を散らさじ、そは他の費つひえに支さへられてこの費を惜しまざること能はざればなり 九七―九九

エゼキエレを讀め、彼は彼等が風、雲、火とともに寒き處より來るを見てこれを描えがけり 一〇〇―一〇二

わがこゝにみし彼等の状さまもまたかれの書ふみにいづるものに似たり、但し羽については、ジヨヴァンニ彼と異なりて我と同じ

これらの四の生物いきものの間を二の輪ある一の凱旋車占む、一頭の
グリフォネその頸くびにてこれを曳ひけり 一〇六一一〇八

この者二の翼を、中央なかの一と左右の三の線すぢの間に伸べたれば、
その一をも斷たたず損そこなはず 一〇九一一一

翼さきは尖とがの見えざるばかり高く上あれり、その身うちの中に鳥なると
ころはすべて黄金こがねにて他ほかはみな紅まじれる白なりき 一一二

一一四

アフリカーノもアウグストもなく美しき車をもてローマを喜
ばせしことなきはいふに及およばず、日の車さへこれに比ひぶれば
映はえなからむ 一一五一一一七

(即ち路をあやまれるため、信心深きテルラの祈りによりて
ジョーヴェの奇くすしき罰をうけ、焼盡されし日の車なり) 一
一八一一二〇

右の輪のほとりには、舞ひめぐりつゝ進み來れるみたりの淑女あり、そのひとりは、火の中にては見分け難しと思はるゝばかりに赤く 一二一—一二三

次なるは、肉も骨も縁の玉にて造られしごとく、第三なるは、

新たに降^ふれる雪に似たり 一二四—一二六

或時は白或時は赤^{ほか}他のふたりをみちびくと見ゆ、しかしてその歌にあはせて、侶のゆくこと或ひはおそく或ひははやし

一二七—一二九

左の輪のほとりには、紫の衣を着てたのしく踊れるよたりの淑女あり、そのひとり頭に三の目ある者ほかのみたりをみちびきぬ 一三〇—一三二

かく擧げ來れる凡ての群^{むれ}の後^{うしろ}に、我はふたりの翁を見たり、その衣は異なれどもおごそかにしておちつきたる姿は同じ

一三三—一三五

ひとりとは己がかのいと大いなるイツポクラテ（即ち自然がその最愛の生物のために造れる）の流れを汲むものなるをあらはし 一三六—一三八

またひとりとは、川のこなたなる我にさへ恐れをいだかしめしほど光りて鋭き一の劔を持ちて、これと反する思ひをあらはせり 一三九—一四一

我は次に外見みえの劣れるよたりの者と、凡ての者の後うしろよりたゞひとりにて眠りて來れる氣色鋭き翁を見たり 一四二—一四四

四

この七者ななたりは衣第一の組と同じ、されど頭を卷ける花圈はなわ百合にあらずして 一四五—一四七

薔薇とその他の紅の花なりき、少しく離れしところにてもす

べての者の眉の上にまさしく火ありと見えしなるべし 一四

八―一五〇

輦くるまわが對面むかひにいたれるとき雷いかづちきこえぬ、是に於てかかのたふ

とき民はまた進むをえざるごとく 一五一―一五三

最初の旌とともにかしこにとゞまれり 一五四―一五六

第三十曲

第一天の七星（出沒いづづるを知らず、罪よりほかの雲にかくれしこともなし 一一三

しかしてかしこにをる者に各々その任務つとめをしらしめしこと恰も低き七星の、港をさして舵取るものにおけるに似たりき）

四一六

とゞまれるとき、是とグリフォネの間に立ちて先に進める眞まことの民、己が平和にむかふごとく、身をめぐらして車にむかへば 七一九

そのひとりは、天より遣はされしものの如く、新婦はなよめよりバはー
ノはより來れと三度みたびうたひてよばはり、ほかの者みなこれに倣

へり 一〇——二

最後の喇叭らつぱの響きとともに、すべて恵めぐまるゝ者、再び衣を着たる聲をもてアレルヤをうたひつゝ、その墓より起出づること
く 一三——一五

かの大いなる翁おきなの聲をきゝて神の車の上にたちあがれる永遠とこしへの生命いのちの僕しもべと使者つかひ百ありき 一六——一八

みないふ。來たる者よ汝は福なり。また花を上とあたりに散らしつゝ。百合ひよひを手に満たして撒まけ。 一九——二一

我かつて見ぬ、晝の始め、東の方ことごとく赤く、残りの空すみてうるはしきに 二二——二四

日の面曇おもてりて出で、目のながくこれに堪ふるをうるばかり光水氣みづけに和やはらげらるゝを 二五——二七

かくのごとく、天使の手より立昇りてふたゝび内外うちそとに降れる

花の雲の中に 二八―三〇

かほおほひ

白き面帟の上には橄欖を巻き、縁の表衣うはぎの下には燃ゆる焰の

色の衣を着たるひとりの淑女あらはれぬ 三一―三三

わが靈は（はやくく久しく彼の前にて驚異おどろきのために震ひつゝ

挫くじかるゝことなかりしに） 三四―三六

目の能くこれに教ふるをまたず、たゞ彼よりいづる奇くしき力

によりて、昔の愛がその大いなる作用はたらきを起すを覚えき 三七

―三九

わらべ

わが童の時過ぎざるさきに我を刺し貫けるたふとき力わが目を射るや 四〇―四二

我はあたかも物に恐れまたは苦しめらるゝとき、走りてその母にすがる稚兒をさなごの如き心をもて、たゞちに左にむかひ 四三

―四五

一滴だに震ひ動かずしてわが身に残る血はあらず、昔の焰の名残をば我今知るとヴィルジリオにいはんとせしに 四六—
四八

ヴィルジリオ、いとなつかしき父のヴィルジリオ、わが救ひのためわが身を委ねしヴィルジリオははや我等を棄去れり
四九—五一

昔の母の失へるすべてのものも、露に淨められし頬をして、涙にふたゝび汚れしめざるあたはざりき 五二—五四

ダンテよ、ヴィルジリオ去れりとて今泣くなかれ今泣くなかれ、それよりほかの劔に刺されて汝泣かざるをえざればなり。

五五—五七

己が名（我已むをえずしてこゝに記せり）の呼ばるゝを聞き
てわれ身をめぐらせしとき、我はさきに天使の撒華におほは

れて 五八一

我にあらはれしかの淑女が、さながら水軍の大將の、艦に立ち舣へんに立ちつゝあまたの船に役つかはるゝ人々を見てこれをはげまし

よくその業わざをなさしむるごとく、車の左の縁ふちにゐて、流れのこなたなる我に目をそそぐを見たり 一六六

ミネルヴァの木葉このはに巻かれし面帕かほおほひその首かうべより垂るゝがゆるゑに、我さだかに彼を見るをえざりしかど 六七—六九

凛々りゝしく、氣色けしきなほもおごそかに、あたかも語りつゝいと熱あつき言ことばをばしばし控ひかふる人の如く、彼續いていひけるは 七〇

—七二

よく我を視よ、げに我は我はげにベアトリーチェなり、汝い如何かしてこの山に近づくことをえしや汝は人が福さいはひをこゝに受くる

を知らざりしや。 七三―七五

わが目は澄める泉に垂れぬ、されどそこに己が姿のうつれる
をみて我これを草に移しぬ、恥いと重く額を壓おせしによりて
なり 七六―七八

母たる者の子に嚴いかめしとみゆる如く彼我にいかめしとみゆ、き
びしき憐憫あはれみの味は苦味あぢを帶ぶるものなればなり 七九―八一
彼は黙せり、また天使等は忽ちうたひて、主よわが望みは汝
にありといへり、されどわが足をの先をいはざりき 八二―

八四

スキアヴォーニアの風に吹寄せられてイタリアの背なる生く
る梁木うつばりの間にかたまれる雪も 八五―八七

陰を失ふ國氣を吐くときは、火にあへる蠟かとばかり、溶け
滴りて己の内に入るごとく 八八―九〇

つねにとこしへの球の調にあはせてしらぶる天使等いまだう
たはざりしききには、我に涙も歎息もあらざりしかど 九一

— 九三 —

かのうるはしき歌をきゝて、彼等の我を憐むことを、淑女よ
何ぞかく彼を叱責むやと彼等のいふをきかんよりもなほ明か
に知りし時 九四—九六

わが心のまはりに張れる氷は、息と水に變りて胸をいで、苦
しみて口と目を過ぎぬ 九七—九九

彼なほ輦の左の縁に立ちてうごかず、やがてかの慈悲深き群
にむかひていひけるは 一〇〇—一〇二

汝等とこしへの光の中に目を醒しをるをもて、夜も睡りも、
世がその道に踏みいだす一足をだに汝等にかくさじ 一〇三

— 一〇五 —

是故にわが答への求むるところは、むしろかしこに泣く者を
 してわが言を^{ことば}さとらせ、罪と憂ひの量^{はかり}を等しからしむるにあ
 り 一〇六—一〇八

すべて生るゝ者をみちびきその侶なる星にしたがひて一の目的^{めあて}
 にむかはしむる諸天のはたらきによるのみならず 一〇九—
 一一一

また神の恩恵^{めぐみ}（その雨のもととなる水氣はいと高くして我等の
 目近づくあたはず）のゆたかなるによりて 一一二—一一四
 彼は生命^{いのち}の新たなるころ實^{まこと}の力すぐれたれば、そのすべての
 良き傾向^{かたむき}は、げにめざましき證^{あかし}となるをえたりしものを 一
 一五—一一七

種を擇ばず耕さざる地は、土の力のいよくさかんなるに従
 ひ、いよく悪くいよく荒る 一一八—一二〇

しばらくは我わが顔をもて彼を支^さへき、わが若き目を彼に見
せつゝ彼をみちびきて正^{ただ}しき方にむかはせき 一二一—一二
三

我わが第二の齡の闕^{よはひ しきみ}にいたりて生を變ふるにおよび、彼たゞ

ちに我をはなれ、身を他人にゆだねぬ 一二四—一二六

われ肉より靈に登りて美も徳も我に増し加はれるとき、彼却

つて我を愛せず、かへつて我をよろこばす 一二七—一二九

いかなる約束をもはたすことなき空^{さいはひ}しき幸^{かたち}の象を追ひつゝそ

の歩を眞^{あゆみ まこと}ならざる路にむけたり 一三〇—一三二

我また乞ひて默示をえ、夢幻^{ゆめまぼろし}の中にこれをもて彼を呼戻さん

とせしも益なかりき、彼これに心をとめざりければなり 一

三三—一三五

彼いと深く墜ち、今はかの滅亡^{ほろび}の民を彼に示すことを措きて

はその救ひの手段てだてみな盡きぬ 一三六―一三八

是故にわれ死者の門を訪とひ、彼をこゝに導ける者にむかひて、

泣きつゝわが乞ふところを陳べぬ 一三九―一四一

若し夫れ涙をそゝぐ悔くいの負債おひめを償つぐのはざるものレーテを渡りま

たその水を味あじふをうべくば 一四二―一四四

神のたふとき定さだめは破れむ。

第三十一曲

あゝ汝聖なる流れのかなたに立つ者よ、いへ、この事眞なり
や否や、いへ、かくきびしきわが責に汝の懺悔のともなはで
やは 一―三

彼は刃さへ利しとみえしその言の銚を我にむけつゝ、たゞち
に續いてまた斯くいひぬ 四―六

わが能力の作用いたく亂れしがゆゑに、聲は動けどその官を
離れて外にいでざるさきに冷えたり 七―九

彼しばらく待ちて後いふ。何を思ふや、我に答へよ、汝の心
の中の悲しき記憶を水いまだ損はざれば。 一〇―一二

惑ひと怖れあひまじりて、目を借らざれば聞分けがたき一の

シをわが口より逐へり 一三——一五

たとへば弩いしゆみを放つとき、これを彎ひくことつよきに過ぐれば、

弦つる切れ弓折れて、矢の的に中る力の減へるごとく 一六——一八

とめどなき涙大息といきとともにわれかの重荷おもにの下にひしがれ、聲

はいまだ路にあるまに衰へぬ 一九——二一

是に於てか彼我に。われらの望みの終極いははてなるかの幸さいはひを愛せん

ため汝を導きしわが願ひの中に 二二——二四

いかなる堀またはいかなる鏈を見て、汝はさきにすゝむの望

みをかく失ふにいたれるや 二五——二七

また他ほかの幸の額なぐさめにいかなる慰なぐさめまたは益のあらはれて汝その前

をはなれがたきにいたれるや。 二八——三〇

一のくるしき大息といきの後、我にほとんど答ふる聲なく、唇から

うじてこれをつくれり 三一——三三

我泣きて曰ふ。汝の顔のかくるゝや、眼前めのまへに在る物その偽り

の快樂けらくをもてわが步履あゆみを曲げしなり 三四—三六

彼。汝たとひ黙もだしましたは今の汝の懺悔をいなみきとすとも汝

の愆とが何ぞかくれ易からん、かのごとき士師さばきづかさ知りたまふ 三七

—三九

されど罪を責むる言犯ことばせる者の口よりいづれば、我等の法廷しらす

にて、輪はさかさまに刃はにむかひてめぐる 四〇—四二

しかはあれ汝今己が過ちを恥ぢ、この後シレーネの聲を聞く

とも心を固うするをえんため 四三—四五

涙の種を棄てて耳をかたむけ、葬られたるわが肉の汝を異な

る方にむかしむべかりし次第を聞くべし 四六—四八

さきに我を包みいま地にちらばる美しき身のごとく汝を喜ば

せしものは、自然も技わざも嘗て汝にあらはせることあらざりき

四九―五一

わが死によりてこのこよなき喜び汝に缺けしならんには、そ
もく世のいかなる物ぞその後汝の心を牽^ひきてこれを求むる
にいたらしめしは 五二―五四

げに汝は假^{かり}初の物の第一の矢のため、はやかゝる物ならざり
し我に従ひて立昇るべく 五五―五七

稚^{をさな}き女そのほか空しきはかなきものの矢を待ちて翼をひくく
地に低るべきにあらざりき 五八―六〇

それ二の矢三の矢を待つは若き小鳥の事ぞかし、羽あるもの
の目のまへにて網を張り弓を彎^ひくは徒爾^{いたづら}なり。 六一―六三

我はあたかもはぢて言なく、目を地にそゝぎ耳を傾けて立ち、
己が過ちをきとりて悔ゆる童^{わらべ}のごとく 六四―六六

立ちゐたり、彼曰ふ。汝聞きて憂ふるか、鬚を上げよ、さら

ば見ていよく憂へむ。 六七―六九

たくましき櫟ところの木の、本土の風またはヤルバの國より吹く風
に抜き倒さるゝ時といふとも、そのこれにさからふこと 七

〇―七十二

わが彼の命をきゝて頤おとがひをあげしときに及ばじ、彼顔といはず

して鬚といへるとき、我よくその詞の毒を認めぬ 七三―七

五

我わが顔をあげしとき、わが目は、かのはじめて造られし者

等が、ふりかくることをやめしをさとり 七六―七八

また（わが目なほ定かならざりしかど）ベアトリーチェが、身

たゞ一にて性さが二ある獸のかたにむかふを見たり 七九―八一

面帋かほおほひにおほはれ、流れのかなたにありてさへ、彼はその未だ

世にありし頃世の女等たちに優まされるよりもさらに己が昔の姿にま

されりとみゆ 八二―八四

悔の刺草いらきいたく我を刺ししかば、すべてのものの中にて最も

深く我を迷はしわが愛を惹けるものわが最も忌嫌いみきらふものとは

なりぬ 八五―八七

我かく己が非をさとり心の痛みに堪へかねて倒れき、此時我のいかなるさまにてありしやは我をこゝにいたらしめし者ぞ

知るなる 八八―九〇

かくてわが心その能力ちからを外そと部に還せし時、我は先に唯獨りに

て我に現れし淑女をば我上うへの方かたに見たり、彼曰ふ。我を捉とらへ

よ我をとらへよ。 九一―九三

彼は流れの中に既に我を喉まで引入れ、今己が後うしろより我を曳

きつゝ、杼ひのごとく軽く水の上を歩めるなりき 九四―九六

われ福さいはひの岸に近づけると、汝お我に注ぎ給へといふ聲聞えぬ、

その麗はしき類たぐひなければ思出づることだに能はず何ぞ記しるすを

うべけんや 九七—九九

かの美しき淑女腕かひなをひらきてわが首かうべが抱き、なほも我を沈め

て水を飲まざるをえざらしめ 一〇〇—一〇二

その後我をひきいだして、よたりの美しき者の踊かひなれるなかに、
かく洗はれしわが身をおき、彼等は各々その腕かひなをもて我を蔽

へり 一〇三—一〇五

こゝには我等ニンフエなり、天には我等星ぞかし、ベアトリー
チェのまだ世に降らざるさきに、我等は定まりきその侍女はしためと

一〇六—一〇八

我等汝を導いて彼の目の邊ほとりに到らむ、されどその中うちなる悦び
の光を見んため、物を見ること尚深き彼處かしこの三者汝の目みたりをば
強くせむ。 一〇九—一一一

かくうたひて後、彼等は我をグリフォネの胸のほとり、ベア
トリーチェの我等にむかひて立ちゐたるところに連行^{つれゆ}き 一
一二——一四

いひけるは。汝見ることを惜しむなかれ、我等は汝を縁の珠
の前におけり、愛かつて汝を射んとてその矢をこれより抜き
たるなりき。 一一五——一七

火よりも熱き千々^{ちゞ}の願ひわが目をしてかのたえずグリフォネ
の上にとまれる光ある目にそ^ゞがしむれば 一一八——一二〇
二様の獸は忽ち彼忽ち此の姿態^{みぶり}をうつしてその中にか^ゞやき、
そのさま日輪の鏡におけるに異なるなかりき 一二一——一二二

三

讀者よ、物みづから動かざるにその映^{うつ}れる象變^{かたち}るを視しとき
我のあやしまざりしや否やを思へ 一二四——一二六

いたくおどろき且つまた喜びてわが魂くひものこの食物（飽くに從ひ

ていよく慾を起さしむ）を味へる間に 一二七—一二九

かのみたりの女、姿に際きはのさらにすぐれて貴たかきをあらはし、

その天使の如き舞の詞しらべにつれてをどりつゝ進みいでたり 一

三〇—一三二

むけよベアトリ―チェ、汝に忠實まめやかなるものに汝の聖なる目を

むけよ、彼は汝にあはんとてかく多くの歩履あゆみをはこべり 一

三三—

ねがはくは我等のために汝の口を彼にあらはし、彼をして汝

のかくす第二の美を辨わきまへしめよ。是彼等の歌なりき 一三

八

あゝ生くるとこしへの光の輝かざやきよ、パルナーゾの蔭に色あをざ

めまたはその泉の水をいかに飲みたる者といふとも 一三九

――一四一

汝が潤^{ひろ}き空氣の中に汝の面帕^{かほおほひ}を脱^ぬぎて天のその調^{しらべ}をあはせつゝ

汝の上を覆ふ處に現はれし時の姿をば寫し出さんとするにあ
たり 一四二――一四四

豈その心を亂さざらんや

第三十二曲

ととせ かわき
十年の渴をしづめんため、心をこめてわが目をとむれば、他

の官能はすべて眠れり 一―三

またこの目には左右に等閑 なほざりの壁ありき、聖なる微笑 ほゝゑみ昔の網を

もてかくこれを己の許に引きたればなり 四―六

このときかの女神等 めがみたち、汝あまりに凝視 みつむるよといひてしひてわ

が目を左の方にむかはしむ 七―九

日の光に射られし目にてたゞちに物を見る時のごとく、我やゝ

久しくみることもあたはざりしかど 一〇―一二

視力 もと舊に復りて かへ小さき輝 ちひ かゞやきに堪ふるに及び（わがこれを小さし

といへるはしひてわが目を離すにいたれる大いなる輝に比ぶ

ればなり） 一三―一五

我は榮光の戰士等が身をめぐらして右にむかひ、日と七の焰の光を顔にうけつゝ歸るを見たり 一六―一八

たとへば一の隊伍の、己を護らんとて盾にかくれ、その擧りて方向を變ふるをえざるまに、旗を持ちつゝめぐるがごとく

一九―二一

かの先に進める天の王國の軍人等は、車がいまだその轅を枉げざるまに、皆我等の前を過ぐ 二二―二四

是に於てか淑女等は輪のほとりに歸り、グリフォネはその羽の一をも揺がさずしてたふとき荷をうごかし 二五―二七

我をひきて水を渉れる美しき淑女とスターツイオと我とは、轍に残せし弓の形の小さき方なる輪に従ひ 二八―三〇

かくしてかの高き林、蛇を信ぜし女の罪に空しくなりたる地

をわけゆけば、天使のうたふ一の歌我等の歩履あゆみを齊ととのへり 三

一—三三

彎ひき放たれし矢の飛ぶこと三度たびにして届くとみゆるところまで我等進めるとき、ベアトリーチェはおりたちぬ 三四—三

六

衆皆聲をひそめてアダモといひ、やがて枝に花も葉もなき一本もとの木のまはりを巻けり 三七—三九

その髭は森の中なるインド人びとをも驚かすばかりに高く、かつ高きに従ひていよく伸び弘ひろがれり 四〇—四二

福なるかなグリフォネよ、この木口に甘しといへどもいたく腹をなやますがゆるゑに汝これを啄つばまず。 四三—四五

たくましき木のまはりにて衆かくよばはれば、かの二様の獸は、すべての義の種かくのごとくにして保たるといひ 四六

— 四八

曳き來れる轅ながえにむかひつゝこれを裸なる幹もとの下にひきよせ、

その小枝をもてこれにつなげり 四九—五一

大いなる光天上の魚うしろの後にかゝやく光にまじりて降るとき、

わが世の草木くさき 五二—五四

膨れいで、日がその駿馬しゅんめを他の星の下に装はざるまに、各々

その色をもて姿を新たにすることく 五五—五七

さきに枝のさびれしこの木、薔薇ばらより淡うすく堇より濃き色をい

だして新たになりぬ 五八—六〇

このときかの民うたへるも我その歌の意こころを解げせず——世にう

たはるゝことあらじ——またよく終りまで聞くをえざりき

六一—六三

我若しかの非情の目、その守まもきびしきために高き價を拂へる

目が、シリリングの事を聞きつゝ眠れる状を寫すをうべくば

六四―

我自らの眠れるさまを、恰も様式かたを見てゑがく畫家の如くに
録しるさんものを、巧みに睡りを現はす者にあらざればこの事望
み難きがゆゑに ―六九

わがめさめし時にたゞちにうつりて語るらく、とある光の煌きらめき
と起きよ汝何を爲すやとよばはる聲とはわが睡りの幕を裂き
たり 七〇―七十二

林檎（諸々の天使をしてその果をみしきりに求めしめ無窮の婚

筵を天にいとなむ）の小さき花を見んため 七三―七五

ピエートロとジョヴァンニとヤーコポと導かれて氣を失ひ、
さらに大いなる睡りを破れる言葉をきゝて我にかへりて 七
六―七八

その侶の減りたる——モイゼもエリアもあらざれば——とその師の衣の變りたるとをみしごとく 七九—八一

我もまた我にかへりてかの慈悲深き淑女、さきに流れに沿ひてわが步履あゆみをみちびけるもののわがほとりに立てるを見 八

二—八四

いたくあやしみていひけるは。ベアトリーチェはいづこにありや。彼。新しき木葉このはの下にてその根の上に坐するを見よ

八五—八七

彼をかこめる組くみをみよ、他はみないよくうるはしき奥深き歌をうたひつゝグリフォネの後あとより昇る。 八八—九〇

我は彼のなほかたれるや否やをしらず、そはわが心を塞ぎてほかにむかはしめざりし女既にわが目に入りたればなり 九

一—九三

彼はかの二様の獸の繋げる輦くるまをまもらんとてかしこに残るもののごとくひとり眞まことの地の上に坐し 九四―九六

七のニンフェは北風アキイロネも南風アウストロも消すあたはざる光を手にし、彼

のまはりに身をもてまろき圍かこひをつくれり 九七―九九

汝はこゝに少時しばらく林の人となり、その後かぎりなく我と俱にか

のローマ即ちクリストをローマ人びとの中にかぞふる都の民のひ

とりとなるべし 一〇〇―一〇二

さればもとれる世を益せんため、目を今輦くるまにとめよ、しかし

て汝の見ることをかなたに歸るにおよびて記せしる。 一〇三―

一〇五

ベアトリーチェ斯く、また我はつゝしみてその命に従はんと

のみ思ひゐたれば、心をも目をもその求むるところにむけた

り 一〇六―一〇八

いと遠きところより雨の落つるとき、濃き雲の中より火の降
るはやしといへども 一〇九―一一一

わが見しジョーヴェの鳥に及ばじ、この鳥木をわけ舞ひくだ
りて花と新しき葉と皮とをくだき 一二二―一二四

またその力を極めて輦くるまを打てば、輦はゆらぎてさながら嵐の
中なる船の、浪にゆすられ、忽ち右舷忽ち左舷に傾くに似た
りき 一一五―一一七

我また見しにすべての良き食物くひものに饑うとみゆる一匹の牝狐か
の凱旋車の車内にかけいりぬ 一一八―一二〇

されどわが淑女はその穢けがらはしき罪を責めてこれを逐ひ、肉な
き骨のこれに許すかぎりわしらしむ 一二一―一二三

我また見しにかの驚はじめのごとく舞下りて車の匣はこの内に入
り己が羽をかしこに散ちらして飛去りぬ 一二四―一二六

この時なやめる心よりいづるとき聲天よりいでていひける
は。ああわが小舟^{をぶね}よ、汝の積める荷はいかにあしきかな。

一二七—一二九

次にはわれ輪と輪の間の地ひらくがごときをおぼえ、またそ
の中より一の龍のいで來るをみたり、この者尾をあげて輦^{くるま}を
刺し 一三〇—一三二

やがて輦^{はり}を收むる蜂のごとくその魔性の尾を引縮め車底の一
部を引出^{ひきいだ}して紆^{うね}曲りつつ去りゆけり 一三三—一三五

残れる物は肥えたる土の草におけるがごとく羽（おそらくは
健全^{すこやか}にして厚き志よりさゝげられたる）に 一三六—一三八

おほはれ、左右の輪及び轅^{ながえ}もまたたゞちに——その早きこと
一の歎息^{ためいき}の口を開く間にまされり——これにおほはる 一三

九—一四一

さてかく變りて後この聖なる建物たてものその處々ところ／＼より頭を出せり、

即ち轅かどよりは三、稜かどよりはみな一を出せり 一四二—一四四

前の三には牡牛のごとき角あれども後の四には額たましに一の角あるのみ、げにかく寄くすしき物かつてあらはれし例ためしなし 一四五

—一四七

その上には高山たかやまの上の城のごとく安らかに坐し、しきりにあ

たりをみまはしゐたるひとりのしまりなき遊女あそびめありき 一四

八—一五〇

我また見しにあたかもかの女の奪ひ去らるゝを防ぐがごとく、

ひとりの巨人その傍に立ちてしば／＼これと接吻くちづけしたり 一

五一—一五三

されど女ながその定まらずみだりなる目を我にむくるや、かの

心猛なき馴染なじみ頭より足にいたるまでこれを策むちうち 一五四—一五

六

かくて嫉みと怒りにたへかね、異形いぎやうの物を釋き放ちて林の奥
に曳入あそびめるれば、たゞこの林盾たてとなりて 一五七―一五九
遊女あそびめも奇くすしき獸も見えざりき 一六〇―一六二

第三十三曲

神○ことくにびとよ異邦人は來れり、淑女等涙を流しつゝ、忽ちみたり忽ち
 よたり、かはるぐ詞を次ぎてうるはしき歌をうたひいづれ
 ば 一—三

ベアトリーチェは憐み歎きて、さながら十字架のほとりのマ
 リアのごとく變りつゝ、彼等に耳をかたむけぬ 四—六

されどかの處女等をとめ彼にそのものいふ機をりを與へしとき、色あた
 かも火のごとく、たちあがりて 七—九

わが愛する姉妹等よ、少時しばらくせば汝等我を見ず、またしばらく
 せば我を見るべしと答へ 一〇—一二

後七者なぐたりをことごとくその前におき、我と淑女とひじり残れる聖とを

たゞ表示しるしによりてその後うしろにおくれり 一三―一五

彼かくして進み、その第十歩の足いまだ地につかじとおもは
るゝころ、己が目をもてわが目を射 一六―一八

容かたちを和らげて我に曰ふ。とく來れ、さらば我汝とかたるに、

汝我に近くしてよくわが言ことばを聽くをえむ。 一九―二一

我その命にしたがひて彼の許にいたれるとき、彼たゞちにい
ふ。兄弟よ、汝今我と俱にゆきて何ぞ敢て我に問はざるや。

二二―二四

たとへば長者のまへに、敬ひはゞかりてものいふ人の、その
聲こゑを齊ひとふるをえざるごとく 二五―二七

我もまた言葉を亂みだしていひけるは。わが淑女よ、汝はわが求
むるものとこれに適ふさはしきものを知る。 二八―三〇

彼我に。汝今より後怖れと恥の縛れをはなれよ、さらば再び

夢見る人のごとくものいふなからむ 三一—三三

知るべし蛇の破れる器はさきうつはにありしもいまあらず、されど

罪ある者をして、神の復讐がサツピを恐れざるを信ぜしめよ

三四—三六

羽を輦くるまに残してこれを異形いぎやうの物とならしめその後獲物えものとなら

しめし鷺は常に世繼なきことあらじ 三七—三九

そは一切の妨碍障礙を離れし星の、一の時を來らせんとては
や近づくを我あきらかに見ればなり（此故に我これを告ぐ）

四〇—四二

この時來らば神より遣はされし一の五百と十と五とは、かの
盗人をばこれと共に罪を犯す巨人とともに殺すべし 四三—

四五

おそらくはわが告ぐることテミ、スフィンジェの如くおぼろ

にて、その智を暗ます^{さま}状また彼等と等しければ汝さとするをえ
じ 四六―四八

されどこの事速かに起りてナイアーデとなり、羊、穀物^{こくもつ}の損害^{そこなひ}
なくしてこのむづかしき謎を解かむ 四九―五一

心にとめよ、しかし死までの一^{ひと}走^{はしり}なる生をうけて生くる者
等にこれらの語^{ことば}をわがいへるごとく傳へよ 五二―五四

またこれを録^{しる}すとき、こゝにて既に二度^{たび}までも掠められたる
樹についてすべて汝の見しことを隠すべからざるを忘るゝな
かれ 五五―五七

凡そこれを掠め又はこれを折る者は行爲^{おこなひ}の謗^{ばう}※をもて神に逆^{さか}
らふ、そは神はたゞ己のためにとてこれを聖なる者に造りた
まひたればなり 五八―六〇

これを噛めるがゆゑに第一の魂は、噛める罪の罰を自ら受けしものを待ちつゝ、苦しみと願ひの中に五千年餘の時を経たりき 六一―六三

若しことさらなる理によりてこの樹かく秀でその頂かくうらがへるを思はずば汝の才は眠れるなり 六四―六六

また若し諸々の空しき想汝の心の周邊おもひ まはりにてエルザの水となら

ず、この想より起る樂しみ桑を染めしピラーモとならざりせば 六七―六九

たゞかく多くの事柄によりて、汝はこの樹の禁制いましめのうちに神の正義の眞まことの意義を認めしものを 七〇―七二

我見るに汝の智石に變り、石となりてかつ黒きがゆゑに、わが言ことばの光汝の目をしてまばゆからしむ、されどわがなほ汝に望むところは 七三―

汝がこの言を心に畫えがきて（たとひ書しるさざるも）こゝより携へ
歸るにあり、かくするは巡禮が棕櫚にて卷ける杖を持つとそ
の理ことわり相同じ。 —七八

我。あたかも印の形をとゞめてこれを變へざる蠟のごとく、
わが腦は今汝の捺おせし象かたをうく 七九—八一
されどなつかしき汝の言の高く飛びてわが目およはず、いよ
くみんとつとむればいよくみえざるは何故ぞや。 八二

—八四

彼曰ふ。こは汝が汝の學べるところのものをかへりみて、そ
の教へのわが語ことばにともなふをうるや否やを見 八五—八七
しかして汝等の道の神の道に遠ざかることかのいと高き疾き
天の地を離るゝごとなるをさとるをえんためぞかし。 八

八—九〇

是に於てか我答へて彼に曰ふ。我は一度も汝を離れしことあるを覺えず、良心我を責めざるなり。 九一―九三

彼笑みつゝ答へて曰ふ。汝覺ゆるあたはずば、いざ思ひいでよ今日この日汝がレーテの水を飲めるを 九四―九六

それ烟をみて火あるを知る、かく忘るゝといふことは他に移りし汝の思ひに罪あることをさだかに證す 九七―九九

げにこの後はわが詞いとあらはになりて、汝の粗き目にもみゆるにふさはしかるべし。 一〇〇―一〇二

光いよくはげしくして歩いよく遅き日は、見る處の異なるにつれてこゝかしこにあらはるゝ亭午の圈を占めたり

一〇三―一〇五

この時あたかも導者となりて群よりさきにゆく人が、みなれぬものをその路に見てとゞまるごとく 一〇六―一〇八

七人ななたりの淑女は、とある仄闇ほのぐらき蔭（縁の葉黒き枝の下なる冷やかなる流れの上にアルペの投ぐる陰に似たる）果はつる處にとゞまれり 一〇九―一一一

我は彼等の前にエウフラ―テスとティーグリと一の泉より出で、わかれてゆくのおそきこと友のごときを見しとおぼえぬ
一一二―一一四

あゝ光よ、すべて人たる者の尊榮さかえよ、かく一の源よりあふれいでてわかれ流るゝ水は何ぞや。 一一五―一一七

わがこの問ひに答へて曰ふ。マテルダに請ひ彼をしてこれを汝に告げしめよ。この時かの美しき淑女、罪を辨解いひひらく人のごとく 一一八―

答ふらく。さきに我この事をもほかの事をも彼に告げたり、またレーテの水いかでこれを忘れしめんや。 一二三―

ベアトリーチエ。さらにつよく心を惹きてしばく記憶を奪ふもの、彼の智の目を昧ませしなるべし 一二四—一二六
されど見よかしこに流るゝエウノエを、汝かなたに彼をみちびき、汝の常に爲す如く、その萎えたる力をふたゝび生かせ。

一二七—一二九

たとへば他人の願ひ表示となりて外部にあらはるゝとき、尊
き魂言遁るゝことをせず、たゞちにこれを己が願ひとなすこ
とく 一三〇—一三二

美しき淑女我を拉きてすゝみ、またスターツイオにむかひて
しとやかに、彼と俱に來よといふ 一三三—一三五

讀者よ、我に餘白の満すべきあらば、飲めども飽かざる水の
甘さをいさゝかなりともうたはんものを 一三六—一三八
第二の歌に充てし紙はやみなこゝに盡きたるがゆゑに、技巧

の手綱にとゞめられて我またさきにゆきがたし 一三九―一

四一

さていと聖なる浪より歸れば、我はあたかも若葉のいでて新
たになれる若木のごとく、すべてあらたまり 一四二―一四

四

清くして、諸々の星にいたるにふさはしかりき 一四五―一

四七

註

第一曲

ダンテ、ウエルギリウスと淨火の海濱に立ち、こゝに島守カトーにあふ、カトー詩人等のこゝに來れる次第をききてその登山を許し且つウエルギリウスに命じまづ岸邊の藺をダンテの腰に束ねまた彼の顔を洗ひて地獄の穢れを除かしむ

一—三

【酷き海を】地獄の刑罰の如き恐ろしき詩材をはなれ
【優れる水を】淨火の歌をうたはんとて

四一六

【第二の王國】淨火即ち救はれし魂天堂にいたるの前まづその罪を淨むる處。當時寺院の教ふるところによれば淨火は地獄に接してこれと同じく地下にあり、これをかく南半球の孤島に聳ゆる美しき山となせるはダンテの創意なり

七一一二

【ムーゼ】ムーサ、詩・音樂等を司る女神（地、二・七一九註參照）

【汝等のもの】汝等を尊崇するもの

【死せる詩】滅亡の民を歌へる詩。これを再起せしむるは望み絶えざる淨火の民をうたはんためなり

【カルリオペ】ムーサの一にして史詩を司る

【ピーケ】テッサリア王ピロスの九人の女。ムーサを侮りこ

れと歌を競^{くら}べんことを求む、カルリオペ即ちムーサの代表者となりこれに應じて勝ち、彼等のなほ罵るを惡み變じて鵲となす（オウイディウスの『メタモルフォセス』五・三〇二以下）

【赦】彼等の僭上に對する

一三一—一五

【碧玉】ブーチの註に曰。碧玉に二種あり、一を東の碧玉といふ、東の方メディアの産なればなり、この珠他の一種のものにまさりて光を透さず云々

【第一の圓】地平線。即ち地平線にいたるまで一天蒼碧となるをいふ

ムーア本には「清き中^{なかぞら}空より第一の圓にいたるまでのどけき姿にあつまりて」とあり

一六―一八

【死せる空氣】暗き地獄の空氣

一九―二一

【戀にいざなふ】その光によりて（天、八・一以下參照）

【美しき星】金星即ちこゝにては明^{あけ}の明星

【雙魚】金星の光強くしてこれとともにめぐる雙魚宮の星の光を消せるなり

以上四月十日早朝の景を敘せるなり、金星この時雙魚宮にありとすれば時は日出前一時と二時の間即ち午前四時と五時の間の頃なるべし（地、一一・一二―四註參照）

二二―二四

【第一の民】アダムとエヴァ。彼等樂園を逐はれし後は南半球に人の住めることなし

【四の星】想像の四星。註釋者曰、四星は四大徳即ち思慮、公義、剛氣及び節制を表はすと

二五―二七

【北の地】人の住む處なる北半球。星を見ざるは徳の光を失へるなり

三一―三三

【翁】マルクス・ポルチウス・カトー・ウティチェンシス（前九五―四六年）。自由を唱道してポムпейウスに與^{くみ}せしがポムпейウス、カエサルに敗らるゝに及びウティカに退き自刃して死す

カトーは自由の保護者として淨火の島の島守となり、罪の羈絆を脱却して靈の自由を求むる魂等を勵ますなり、ダンテは他の著作に於ても屡々カトーを激賞せり（『デ・モナルキア』）

二、五・一三二以下。『コンヴィヴィオ』四、二八・一二一以下等）

又カトーは自殺者として地獄の第七圈に罰せらるべきものなれども古來俗衆の間にてもまた寺院内にても彼の尊重せらるゝこと深く且つウエルギリウス自身その『アエネアス』の中に彼を敬虔なる者の首長となして彼等に法を與へしめたれば（八・六七〇）ダンテも彼にかゝる大切なる地位を保たしめしなり
四〇―四二

カトーは兩詩人を地獄より逃げ來れる魂なりとおもへるなり
【失明の川】閻を流るゝ地下の小川（地、三四・一二七以下）
四六―四八

【淵の律法】地獄の律法即ち地獄に罰せらるゝものその刑場を離るゝをえざるをいふ

四九―五一

【目】原文、眉。ウエルギリウスはダンテをして跪き且つ目を垂れしめしなり

五二―五四

【淑女】ベアトリーチェ（地、二・五二以下参照）

五八―六〇

【最後の夕をみず】死せるにあらず。神恩全く絶えて靈的生命を失へるにあらざる意を寓せり

【たゞいと短き】或ひは、今少時^{しばらく}せばその踵をめぐらしがたし
六一―六三

【路ほかに】地、一・九一以下及び一二以下参照
六七―六九

【詞】教へ（九四行以下）

七〇―七二

【自由】罪を離れて靈の自由を得ること

七三―七五

【そがために】カトーは自由を失ひて世に生きんより自由の身として世を去らんとて死せるなり（『デ・モナルキア』二、五・一三六以下参照）、その求めし自由は政治上の自由なれども靈の自由と基づくところ相同じ

【大いなる日】最後の審判の日

【衣】肉體

七六―八一

【ミノス】地獄の法官（地、五・四以下）

【マルチア】カトーの妻（『コンヴィヴィオ』四、二八・九七以下参照）リムボにあり（地、四・一二八）

八二―八四

【七の國】淨火の七圈

八五―八七

【世に】原文、かなたに。以下この例多し、一々註せず

八八―九〇

【禍ひの川】アケロンテ（地、三・七〇以下参照）

【かしこを出し】リムボを出し

スカルタツツイニ曰。カトーの死はキリスト（クリスト）の死より早きこと約八十年なり、而してキリストの地獄を訪はざりしさきには人の魂救はれしことなし（地、四・六三）さればカトーもまた多くの魂とともにリムボにありて救ひの日即ち權威ある者の地獄に來る日を待てるなるべし

【律法】救はれし者は地獄に罰をうくるもののためにその心

を動かすをえず（ルカ、一六・二六参照）

九四―九六

【齋】罪を淨むるにあたりて最も主要の徳なる謙遜のしるし

【汚穢】地獄の空氣よりうけし

九七―九九

【霧】地獄の

【最初の使者】淨火の門を守る天使（淨、九・七六以下）

一〇三―一〇五

【打たれて】浪に。藺はよく屈折して打つ浪に逆はざるが故に水際に生を保てども他の草木は然らず

謙遜の人は心を屈して神に従ふがゆゑによく刑罰に耐へてその罪を淨むるをうれども、この徳は有せざる人はしからず

一一二―一一四

【端】水際

【後に】詩人等北極の方に向ひてカトーを見、後うしろにむかひて海濱にいたる、知るべし彼等のはじめ島の南方にあらはれしを

一一五——一一七

【朝の時】lora matutina 曉の前、明方あけがた近き夜の時をいふ。

残りの闇曉に追はれて逃げゆき、海のさゝ波みゆるなり

或日。ora は微風なり、日出前の微風黎明に追はれて海原遠く小波をたゞふるをいふと

一二一——一二三

【日と戦ひ】長く日の光に耐ふるをいふ

一二七——一二九

【涙】地獄にて流せる

【色】 本來の色。ウエルギリウスは地獄の惡氣のために汚れしダンテの顔を露にて洗ひ、再びもとの色にかへせり

一三〇—一三二

【歸りしことなき】 地、二六・一三九—四一並びに註參照

一三三—一三六

【かの翁】 原文、他者 (altrui)

【再び】 穂は頒つによりて減ずることなし

第二曲

詩人等なほ汀に立てるに、ひとりの天使船をあやつりて岸に着き一群の魂を置いて去る、ダンテの友カセルラこの魂の中

にあり、請はれて戀歌をうたふ、衆その聲のうるはしきにめで、とゞまりてこれに耳を傾け、つひにカトーの戒めを受く
一一三

四月十日午前六時に近き頃即ち淨火の朝イエルサレム（ゼレサレムメ）の夕、イスパニアの晝、インドの夜なり

【天涯】イエルサレムは北半球の子午線のいと高き處にあり（地、三四・一二二―七註参照）、しかして淨火はイエルサレムの反対面にあるが故にその地平線は即ち聖都の地平線と同じ
四―六

【夜】夜（即ち夜半）は日と反対の天にあり（地、二四・一―三註参照）而して日は此時白羊宮にあるがゆゑに夜はその反対面の天宮即ち天秤宮にあり、日の登るに従つて夜はインドなるガンジスの河口を去り、次第に西に向ふ

【その手より落つ】秋分にいたれば日天秤宮に入る、これ故に天秤夜の手を離るといへり、秋分以降夜は次第に晝より長し
七―九

【アウローラ】エオス、あけがた明方の空色を朝の女神と見倣せるなり。この色始め白く後赤く日出づるに及びて橙黄色となる、恰も女神の老ゆるにつれてその頬の色變るに似たり

一〇―一二

【路のことをおもひて】路定かならざるため

一三―一五

【濃き霧】火星の赤色に濃淡あるはこれを蔽ふ水氣の厚薄によるといふこと『コンヴィヴィオ』二、一四・一六一以下に見ゆ

一六―一八

【光】天使

【あゝ我】死後救はるゝものの群に入りて再びこの光を見る
をえんことを

二二―二四

【白き物】光の左右の白き物は天使の翼下方の白き物はその
衣なり

三一―三三

【隔たれる】テーヴェレ（テーヴェル・テーヴェロ）の河口
（二〇〇―二〇二行並びに註参照）と淨火の島の間の如く遠く
へだたれる

三四―三六

【朽つべき毛】鳥の羽等

三七―三九

【神の鳥】 天使。翼あるによりて鳥といふ

四三―四五

【福その】 *parea beato per iscritto* 消えざる福その姿にあらはる

異本。 *faria beato pur descritto* その姿振舞いと尊ければ彼を見ずともたゞそのありさまを聞くのみにて人福をえんとの意
四六―四八

【イスラエル】 詩篇一一四の初めにあり、イスラエルの族エジプトを出で奴隸の境界を脱して神の自由民となれりとの聖經の歴史には魂罪の絆を離れ榮光かぎりなき自由を得るの意含まるゝがゆゑに（『コンヴィヴィオ』三、一・五二以下及びダントがカン・グランデ・デルラ・スカラに與ふる書一四九行以下参照）新たに來れる魂等特にこの聖歌をうたへるなり

五五―五七

【磨羯】白羊宮地平線上にある時磨羯宮は中天にあり、白羊宮の太陽次第に登るに従ひ磨羯宮は中天より次第に西方に傾きはじむ

六七―六九

【呼吸】地、二三・八八參照

七〇―七十二

【橄欖】橄欖の枝は古へ平和のしるしとして用ゐしものなりしがダンテの時代にては平和勝利等おしなべて吉報を齎らす使者これを手にする例なりきといふ

七三―七五

【美しくする】罪を淨むる

七六―七八

【ひとり】カセルラ。ダンテの親友にして歌を善くす、傳不詳
七九―八一

【三度】『アエネイス』（六・七〇〇以下）にアエネアス冥府
にくだりて父アンキセスの魂にあひ三度これを抱かんとせる
こといづ、その一節に曰く

抱けどかひなし父の姿はたゞ輕き風かりそめの夢にひとしく
三度みたびその手をはなれたり

八八―九〇

【繼】肉體の

九一―九三

【再び】この旅路の教訓に基づきて徳の生涯を送り、死後救
ひを得て魂再びこの處に歸らんとす

【かく多く時を】汝の死せるは久しき以前のことなるに今漸

くこゝに來れるは何故ぞや

異本、「かく大いなる國」(即ち淨火)とあり、意の歸する所
同じ

九四―九六

【もの】載すべき時を定め載すべき魂をえらびてこれを船に
載せ淨火の島に送る天使

九七―九九

【正しき意】天意

【三月の間】法王ボニファキウス八世の令旨の中なる大赦の
初めの日、即ち一二九九年のキリスト降誕祭より(地、一八・
二八―三〇註參照)一三〇〇年四月十日まで三箇月餘の間を
いふ。大赦の恩恵に浴するもの悉く天使の船に乗るをうるな
り

テ・ヴェレの河口に集まる魂皆船に乗るをうれども生前の徳不徳によりてその乗るに先後あり、さればカセルラムも屡々天使に拒まれて空しく時をすごせるうちジュビレーオの年いたりて特に渡海を許されしなり

一〇〇——一〇二

【テ・ヴェロ】ローマを過ぐる著名の川なればローマの寺院を代表す、地獄に下らざるもの萬國よりこの河口にあつまるといへるは寺院が救はるゝ魂を神と結びて淨めの途につかしむるを示せるなり

一〇三——一〇五

【アケロンテ】地獄の川（地、三・七〇以下）

一〇六——一〇八

【律法】境遇の變化にともなひて新たなる天の律法のもとに

おかれ、そのため昔の技能をあらはす能はざるにあらずば

一一二——一四

【わが心の中に】Amor che ne la mente mi ragiona ダンテの歌集にある歌の始めの一行なり、『コンヴィヴィオ』第三篇にこの歌の解釋いづ、古註にはカセルラこれが譜を作れりといへり

一一八——一二〇

【翁】カトー

一二一——一二三

【穢】scoglio 蛇の皮魚の鱗等のごとく魂をつゝむ罪の汚れ

一二七——一二九

【まさる願ひ】危きを避くるの願ひ食を求むるの願ひに勝ち
て

第三曲

詩人等やがて山の麓にいたれるに岩石高くして登るをえざればかなたより歩み來れる一群の靈を迎へてこれに路を問ひその教へをきく、彼等の一なるマンフレディ己が身の上をダンテにあかし且つ寺院に背きて死せるものの刑罰をうくるさまを述ぶ

一―三

【理性】理性の聲人をはげまして淨めの道に就かしむ

或日。ragion は神の正義なり fruga は懲すなり、神の正義淨火の山に人を懲すをいふと

四―六

【伴侶】ウエルギリウス

七―九

【みづから】船より下れる魂等はカトーの戒めをききて悔い、
ウエルギリウスは自ら省みて悔ゆ

一〇―一二

【狭まれる】カセルラの事及びカトーの戒めにのみその思ひ
の集中せるをいふ

一三―一五

【求むる】こゝにては處のさまを知るを願ふこと

一九―二一

【棄てられし】ウエルギリウスに。ダンテはウエルギリウス
の靈にして影なきを思はず、己獨りを残して去れるにあらず

やと疑へるなり

二五―二七

【夕】淨火の午前六時過はイエルサレムの午後六時過にあたる、イタリアは聖都とイスパニアの中央にあればこの時既に夕（午後三時過）なり（淨、一五・一―六註参照）

【ブランディツイオ】ブルンディジウム、ブリンディシ。イタリアの南アドリアティコ海濱の町

紀元前一九年ヴェルギリウス、ブルンディジウムに死す、皇帝オクタウィアヌス・アウグストウス命を下してその遺骸をナポリに移し厚くこゝにこれを葬る

二八―三〇

【光を堰かざる】諸天は透明なれば一天より出る光他の天のためにせかるゝことなし

三一—三三

【威力】神の

【かゝる】わが體からだの如く影もなき

【されど】神の大能のいかなるさまにはたらくやは人知らず
三四—三六

若し人智をもて神のきはみなきみわざを知り盡しうべしとお
もふ者あらば

三七—三九

【事を事として】*al quia* (|| *ché*) たゞ事物の事物たるを知
りて何故に然るやを究めんとせざるをいふ

【マリアは子を】キリストの出現によりて人はじめて天啓を
うくるに及ばざりしなるべし

四〇—四二

リムボにとゞまる聖賢の如く一切を知るの願ひを果すに最も
適せる人々すら世にその願ひを成就するにいたらず、今や却
つて望みなき願ひのために（地、四・四二）永遠の憂ひをい
だく

四三―四五

【アリストーテレ、プラトー】アリストテレス、プラトン。俱
にリムボにあり（地、四・一三一―二及び一三四）

【思ひなやみて】ウエルギリウスも彼等と境遇を同じうすれ
ばなり（地、四・三七―九参照）

四九―五一

【レリーチェとツルビア】レリーチェはスペチア灣（ゼノー
ヴァの東南）に臨める古城、ツルビアはフランス領ニースに
近き町。この兩地の間はほゞリグーリアの海濱といふに同じ

く、東西リヴィエーラに分たれ、連山高くゼーノヴァ灣上に
突出す

五八一六〇

【一群の魂】悔い改めて世を去れるも寺院と和することをせ
ざりし者

【おそく】救ひに入るのおそきを表示す

六四一六六

【望み】路を聞くをうるの望み

七〇一七二

【岸】山側

【動かず】道行く人、物におそれてその足をとゞむる如く魂
等は詩人等が彼等に路を問はんとて左に進みいづるを見、そ
の淨火の通則に反するをあやしみてとゞまれるなり

滅亡ほろびの路は常に左にむかひ（地、九・一三〇—一三二註参照）救

ひの路は常に右にむかふ

七三—七五

【福に終れる】神と和して死せる

【選ばれし】えらばれて救ひの路にある

七六—七八

【知ること】路を知らずして歩めば時を失ふ、しかして人はその智進むに従つていよく時の重んずべきを知る

八八—九〇

【右に】詩人等路を問はんとて左にむかへるがゆゑに山右に、

日左にあり

九七—九九

【壁】山の嶮なるをいへり

一〇三—一〇五

【ひとり】マンフレディ。皇帝フリートリヒ二世の庶子、一二三一年の頃シケリアに生れ一二五八年より同六六年までナポリ及びシケリアに王たり、ローマの寺院その放逸を惡みこれと相敵視すること久し、法王クレメンス四世、フランス王聖ルイの弟なるシャルル・ダンジューを招きてこれにマンフレディの領地を與ふることを約す、一二六六年一月シャルル、ナポリ王國を攻む、マンフレディ敗れ、同年二月ベネヴェントの戦ひに死す（地二八・一三—八註參照）

一一二—一一四

【コスタンツァ】コンスタンツェ。皇帝ハインリヒ六世の妃にしてフリートリヒ二世の母なり（天、三・一一八—二〇並びに註參照）。マンフレディは庶子なればこゝに父の名をいは

ずして祖母の名ないへるなり

一一五——一七

【名譽の母】王位に登れる者の母

【女】マンフレディの女にして曾祖母と同じく名をコンスタンツェといふ、アラゴン（イスパニア）王ペドロ（ピエートロ）三世の妃となりアルフォンソ、ヤーコモ、フェデリーコの三子を生めり、一二九一年アルフォンソ死して後ヤーコモはアラゴンにフェデリーコはシケリアに王たり（淨、七・一一五以下並びに註參照）

【實】寺院の破門をうけしをもて世の人我を地獄に罰せらると思はば、汝コスタンツアに我の淨火にあるを告げよ

一一八——一二〇

身は戦場に殞れ、魂神のもとに歸れり

一二一―一二三

【されど】神は喜びてすべてそのもとかへるものをうけいれ給ふ

一二四―一二六

【コセンツアの牧者】コセンツアはイタリアの南カラブリア州にある町の名なり、牧者（コセンツアの大僧正）の誰なりしやはあきらかならず

法王クレメンス四世の命によりてかの大僧正、マンフレディの遺骸をベネヴェント附近なるその墓より掘出しこれをヴェルデの川邊に棄てたりとの説あるによれるなり

【この教へ】原文、この頁。註釋者多くはヨハネ、六・三七を引照す。かの大僧正その頃もしよくこの聖語をさとりたらんには敢てわが遺骨に侮辱を加ふることなかりしなるべし

一二七—一二九

【堆石】シャルル・ダンジューの兵士等がその遺骸の上に積める小石

一三〇—一三二

【王土】ナポリ王國

【ヴェルデ】ナポリ王國國境の一部を洗ふガリリアーノ川のことなるべしといふ、異説多し

【消せる燈火】普通の葬儀の時と異なり蠟燭に火を點せざるをいふ

一三三—一三五

【縁の一點】植物の全く枯れ果てずして縁なるところあるごとく人未だ死せずして悔いて神に歸るをうべき一縷の望みある間は

【彼等】牧者等

【永遠の愛】神の恩愛再びその人に臨む能はざるにいたることなし

一三六―一四一

寺院に破門せられしものはたとひ悔いて後死すともその破門の中にへし年月の三十倍の間は淨火門外の山麓にとゞまるのみにて罪の淨めをうくるをえず

【善き祈り】世に住む善人彼等のために神に祈れば彼等は三十倍の時過ぎざる先に淨火門内に入ることをう

一四二―一四四

【コスタンツァ】即ちマンフレディの女

【禁制】世人の祈りによらざれば、定まれる時過ぐるまで淨火の門内に入るあたはざること

【悦ばす】わがために善人の祈りを求めて

一四五

【こゝ】淨火全體を指す、善人祈りによりて淨火の靈をたすくるをうとは當時寺院の教へしところなり、この事以下處々にいづ（淨、四・一三〇以下、六・二五以下、一一・三一以下等）

第四曲

詩人等狭き岩間の路をのぼりてとある高臺にいたりその上にいこふ、導者こゝに日の左よりいづる所以をダンテに説きあかし、後共に一巨岩に近づきて多くの魂をそのうしろに見る、

即ち怠惰のため死に臨みてはじめて悔改めし魂なり、彼等の
一ベラツクワ、ダンテとかたりこれに己が境遇を告ぐ

一―六

喜び又は悲しみ等の強き刺激をうけて魂心の能力の一（即ち
喜び又は悲しみを感ずる）に集まれば他の能力のはたらきす
べて止むに似たり、さればプラトン學派の唱ふる如く人に多
くの魂ありとなすは誤りなり、そをいかにといふにもし魂多
からば一の魂一方に集まるとも他の魂よく他方を顧みるをう
ればなり

一〇―一二

單なる視聽の能力は強き刺激をうけて魂を獨占する能力と異
なる、後者にありてはその能力刺激を與ふるものに固定し（繫
がる）て活動の自由を失へども前者にありてはしからず

一三——一八

【かの靈】マンフレディの

【五十度】日の登ること一時間に十五度なれば今は日出後三時二十分即ち年前九時過なり

一九——二四

【たゞ一束】原文、たゞ一熊手

葡萄熟する頃農夫垣根の孔を塞ぎて盗人の入るを防ぐなり

二五——二七

【サンレオ】ウルビーノ市（中部イタリア）附近の小さき町にて嶮しき山の上にあり

【ノーリ】西リヴィエーラ（淨、三・四九——五一註参照）の中サーヴォナとアルベンガの間にある小さき町にて絶壁の下にあり

【ビスマントヴァ】エミリア州レッジオ地方の嶮山の名

二八―三〇

【わが光となりし】理性の光によりてわが行路を照らせる
こゝを登らんとするものはわがなせる如く信賴すべき導者に
従ひ徳に進まむとの深き願ひをその羽翼として飛ばざるべか
らず

三一―三三

【崖】原文、端。即ち左右の岩の縁ふち

三四―三六

【高き陵】山の下方を指す

【上縁】岩間の狹路盡くるところ

三七―三九

【枉ぐる】歩を左右に轉ずる

四〇―四二

【象限の中央の線】原文、半象限より中心（圓の）にいたる線。即ち四十五度の角度

四六―四八

【バルツォ】balzo 岩石の山腹より突出せる處。詩人等の目の及ぶかぎり一帯をなして山を圍繞せり

四九―五一

【圓】即ちバルツォ

五五―五七

【あやしめり】わが世界にては東に向ふ人日が右の方（即ち南の方）にかたよるを見る例なればなり

五八―六〇

【光の車】太陽

【アクイロネ】北の風。こゝにては北を指す

六一―六三

【若し】もし太陽雙兒宮にありて

【カストレとポルルーチェ】カストルとポリュデウケース。
ゼウスとレダの間の二子。化して宿星（雙兒宮の）となれり
といふ

【鏡】太陽。光を南北半球におくる

六四―六六

【舊き道】黄道。太陽もし地球の周圍を回轉するにあたりて
其年毎の軌道を誤ることなくば

【赤き】太陽その中にあるがゆゑに

太陽もし雙兒宮にあらばそのめぐるところは今よりもなほ北
にあたる、これ雙兒宮の星は白羊宮（太陽現にこゝにあり）の

星よりさらに北にあるによりてなり

六七―七五

【シオン】イエルサレム

イエルサレムと淨火の山とは地球の正反對面にあり、面して前者は夏至線以北に後者は冬至線以南にあるがゆゑに東に向ふ人前者にては日を右に後者にては日を左に見るなり

【天涯を同じうし】淨、二・一―三註參照

【フエートン】フエトンテ。地、一七・一〇六以下並びに註參照

【路】黃道

【此、彼】此は淨火の山、彼は聖都

七九―八一

【さる學術】天文學

【日と冬の間】 冬期北半球にては太陽冬至線若しくはその附近にあるが故に赤道は冬の世界と太陽の間にあり、南半球冬期に入れば太陽夏至線若しくはその附近にあるが故に赤道は冬の淨火と太陽の間にあるなり

【中帶】 運行する諸天の中の最も高きもの即ち第九天の中帶
八二―八四

淨火の島とその北なる赤道の間の距離は聖都とその南なる赤道の間の距離に等し

【希伯來人^{エブレオビと}】 古、ヘブライ人がイエルサレムを中心としてパレスチナにのみ居住せる頃をいへるなるべし

八八―九〇

徳の路は入り難しといへども進むに従つて易し

九七―九九

【それよりさき】山の頂即ち疲れを休むるところに達せざる
さき

一〇三——一〇五

【群】怠惰のため死に臨むまで悔改めざりし人の魂

一一二——一一四

【目を】不精のため目のみを動かして顔をあげざるなり

【汝は】汝はわがごとく不精の兄弟にあらざれば

一二一——一二六

【ベラックワ】フィレンツェの樂器製造者、ダンテと相識の

間柄なりしこと本文によりて知らる

【憂へず】救ひの道にあれば

【習慣】生前の怠惰なる慣習

一二七——一二九

【神の鳥】淨火の門を守る天使（啓、九・七六以下）

【苛責】門内にてうくる淨めの苛責

一三〇―一三二

【善き歎息】罪を悔ゆる

【天はまづ】淨火の門内に入るの前、我はまづその門外にて
私の世に享けし齡と同じ年月を過ぎざるをえず

一三三―一三五

若し世に住む善人わがために神に祈らばそれよりさきに門内
に入りて罪を淨むることをうれども（淨、三・一三六以下參
照）

一三六―一三九

【日】時正午なれば太陽中天にあり

【岸邊】ガンジスの（淨、二・四以下參照）

【モロッコ】アフリカの西北端の國。イスパニアのシヴィリアと同じく北半球の西端を指すに用ふ

淨火の正午は聖都の夜半、モロッコの夕にあたる

第五曲

詩人等なほ少しく登り進みて他の一群の魂にあふ、こは皆横死し、しかして死に臨むまでその罪を悔いざりし者なり、彼等のうちみたりヤコポ・デル・カッセロ、ブオンコンテ・ダ・モンテフェルトロ及びピア、ダンテとかたる

四―六

【左】東を背にして登るがゆゑに今は日右にあり（淨、四・

五二以下參照）影左に落つ

七―九

【碎けし】影のため（淨、三・八八以下參照）

一〇―一二

【心ひかれ】原文、魂とらはれ。怠惰者の言に心こころひかるゝなり

一六―一八

思ひ多ければ專なる能はず、ダンテかの魂の言にその心をと
むる時は登山の念さまたげられて時空しく過ぐるの恐れあり
二二―二四

【横方より】兩詩人は山を登り魂等はその腰をめぐるがゆゑ
に

【かはるぐ】a verso a verso 群集二部にわかれてその一部
最初の一節をうたひ終れば他の一部第二節をうたひかくして

漸次にうたひつぎ歌ひ終るなり

【憐みたまへ】Miserere 詩篇第五一篇をうたへるなり

二五―二七

【あゝ】驚きとあやしみをあらはす

三四―三六

【益を】ダンテ世に歸りて後善人に請ひて彼等のために祈らしむれば

三七―三九

【光】原文、燃ゆる氣體。初更の頃の流星または夏の夕の電光

五二―五四

【横死】戦ひ（ブオンコンテ）、私怨（ヤーコポ）、家庭の悲劇（ピーア）等

【天の光】神恩の光

五五―五七

【赦しつゝ】人を（マタイ、六・一四）

六一―六三

【平和】天堂の幸福

六四―六六

【一者】ヤーコポ・デル・カッセロ。

ファアーノ（地、二八・七六―八一註参照）の名族、一二九六年より翌七年までボローニアのポデスタたり此間フェルラーの侯爵エステイ家のアッツォ八世の怨みを買ふ、一二九八年ミラーノのポデスタとなりエステイ家の領地を過ぐるならんためまづ海路を取りてヴェネツィアにいたる、しかしてこゝよりパードヴァ人の地を過ぎてその任地に赴かんとしオリアーゴの附近に達するに及びアッツォの命を受けし者の要

撃するところとなりて死す

【助け】原文、恩恵。ダンテが彼等の親戚知己に乞ひて彼等のために祈らしむること

【もし力】若し已むを得ざる理由ありて汝の好意も果す能はざるにいたらずば

六七―六九

【間の國】マルカ・ダンコナ。ローマニアとナポリ王國の間にあり、後者は當時シヤルル・ダンジュー二世の治めしところ
七〇―七十二

【ファアーノ】マルカ・ダンコナにある町

【淨むる】はやく淨火の門内に入りて

七三―七五

【私の宿れる血】我ヤーコポの魂のやどれる血、わが肉體を

生かしめし血

レビ記一七・一一に曰。肉の生命は血にあり

【アンテノリ】パードヴァ人。トロイア人アンテノールの子孫なりとの傳説あるによれり、アンテノリの懷といふはバードヴァ人の領地内といふに同じ

七六―七八

【安全】敵地を距たること遠ければ（六四―六行註參照）

【エステイの者】エステイ家のアッツオ八世

七九―八一

【オリアーコ】（オリアーゴ）パードヴァとヴェネツィアの間にある村

【ラ・ミーラ】オリアーコの附近にてブレンタ川に通ずる運河の一の岸にある村

【我は】我は今も世に生きながらふることをえたりしなるべし

八五―八七

【汝の願ひ】平安を得るの望み（六一―三行参照）

【わが願ひ】門内にて罪を淨むるの願ひ

八八―九〇

【ボンコンテ】ブオンコンテ、地、二七に見えしグイード・ダ・モンテフェルトロの子。アレツツオのギベルリニ黨の爲に屢々戦場に臨み一二八九年六月カムパルデイーノの戦ひに死す

【モンテフェルトロ】地、二七・二八―三〇並びに註参照

【ジヨヴァンナ】ブオンコンテの妻。世に残れるわが妻もその他の親戚も一人としてわが事を思ふものなし

九一—九三

【カムパルデイーノ】カセンティイーノ（地、三〇・六四—六
註参照）なるアルノの溪の一部ビビエーナ附近の平原。一二
八九年六月アレツツオのギベルリニ黨フィレンツェのグエル
フィ黨とこゝに戦ひて敗る

ダンテは當時フィレンツェ騎兵の中にありてこの戦ひに與か
れりとの説あり（地、二二・四—九註参照）、若しこの説にし
て信ずべくんば彼はブオンコンテの討死せしこと及びその遺
骸の戦場に見出されざりしこと等をその頃委しく知りえたる
なるべし

九四—九六

【隱家】カマルドリの僧院をいふ、こは十一世紀の初めの頃
聖ロムアルド（一〇二七死）の開基にかゝる

【アルキアーノ】僧院の上なる二水相合して下りビビエーナの北なる丘の麓にいたりてアルノに注ぐ、これをアルキアーノといふ、溪を横ぎりてアルノに入るが故によこさまにといへるなり

九七―九九

【名消ゆる處】アルキアーノとアルノの落合。アルキアーノこゝにいたりてその名を失ふ、こゝより海に赴くまでたゞアルノと稱へらるればなり

カムパルディーノよりこの落合まで約二哩半ありといふ

一〇〇―一〇二

【マリア】臨終に聖母の名を呼べるなり

一〇三―一〇八

【地獄の使者】鬼。地、二七・一一二以下にボンコンテの父に

つきて聖フランチェスコと鬼と争へることいづ、すべてこの種類の物語中古の傳説に多かりきといふ、ミカエル（ミケーレ）と鬼とモーゼの屍を争へりとの記事すでに聖書の中（ユダ、九）にあるをおもへ

【天に屬する】異本。天より來れる

【不朽の物】魂

一一二——一四

以下鬼がブオンコンテの遺骸を虐待せるさまを敘す、但しこの一聯、文の組立につきて異説多し

【性より】靈體として風雲を左右するの力を有す

一一五——一九

【プラートマーニオ】カセンティーノの西の境にある高山

【連山】アペンニノ山脈。プラートマーニヨと相對して東に

あり

一二一―一二三

【流れ】カセンティーノの諸川。アルキアーノも其一なり

【たふとき川】fume real 直接に海に注ぐ川にてこゝにては
アルノを指す

一二四―一二九

【苦しみに】悔恨の

【身をもて造れる】腕を胸の上に組みて十字架の形をつくれ
るなり

【獲物】大水に押流さるゝ草木砂泥の類

一三三―一三六

【ピーア】シエーナなるトロメエイ家の者にてマレムマなる
ピエートラの城主ネルロ・デ・パンノツキエスキに嫁せしが

後これに殺されたりといふ、殺害の原因、年月及び其他の事につきては諸説ありて定かなること知り難し

【シエーナ我を造り】我はシエーナに生れてマレムマ（地、一三・七―九註參照）に死せり

【縁の】指輪を與へて後、妻に迎ふること正しき結婚の慣例なればピアはその私にひそかネルロに嫁せるにあらざるを示せるなりとの説採るべきに似たり、異本異説俱に多し

【與へしもの】即ち夫ネルロ

第六曲

横死の際にはじめて悔改めし他の多くの魂を見て後、詩人等

神の審判と生者の祈祷についてかたり遂にソルデルロ（ソルデル）のたゞひとり坐してゐたる處にいたる、ダンテは彼が同郷の好みをもてウェルギリウスをよろこび迎ふるを見、己が郷國を思ふの念に堪へず、悲歌慷慨す

一―三

【ツァーラ】*zara* 中古、最も流行せる遊戲の一。三個の骰子さいを用ゐて勝敗を決す

【くりかへし】悲しみつゝも屡々骰子を投げて練習を積み次の勝負に勝たんとするなり

四―六

懷ゆたかなる勝者に従ひ行きて各々多少の恩澤にあづからんとす

一〇―一二

【約束】彼等のために善人の祈りを請ふの約束

一三―一五

【死せるもの】ベニンカーサ・ダ・ラテリーナ。アレツツオの法官にて、十三世紀の人なり、シエーナの貴族ギーノ（ギーノ）・デイ・タツコの近親（ギーノと同じく奪掠を事とせるもの）に死刑を宣せしことありしかばギーノこれを含みベニンカーサがローマの法官となりてかの地に赴ける後己もまたローマにいたり法廷に於てこれを殺しその首級を提げて去れり

【追ひて】或ひは、追はれて（敵に）

【溺れし者】名をグツチョといひ、アレツツオなるギベルリニ黨の首領なりしタルラーティ家の者なり、嘗てグエルファイ黨と戦ひてこれを追へるときその馬アルノの川に入れりといふ

一六一八

【フェデリーゴ・ノヴェルロ】カセンティーノの伯爵グイド・ノヴェルロの子。一二八九年（或曰九一年）ビビエーナの附近にてアレツツオなるボストリ家の者に殺さる。

【ピサの者】古註に曰。こはフアリナータとてピサなるスコルニジア―ニ家のマールヅツコの子なり、彼ピサの市民に殺されしとき、その頃故ありてフランチェスコ派の僧となりゐたりし父マールヅツコ、他の僧侶と共にいでてその葬儀を営みかつ神の旨に従はんため殺害者の罪を容せりと

【強きを】わが子を殺せる者を赦せるをいふ

一説に曰。フアリナータはウゴリーノ伯爵がピサを治めし頃罪を得て斬首せられし者なり、その遺骸久しく市に放棄せられしかばマールヅツコ姿を變へて伯爵の許にゆき埋葬の事を

乞ふ、ウゴリーノその何人なるやを知り、汝の堅忍よくわが
固陋と拗執に勝てり行きて汝の欲するところを爲せといひ、
その請ひを容れたるなりと

一九―二一

【オルソ】オルソ・デーリ・アルベルティ。ナポレオネ伯（地、
三二・五五―七註参照）の子なり、一二八六年その従弟即ち
アレッサンドロの子アルベルトの殺すところとなる、アルベ
ルトはこれによりてその父の怨みを報いしなり

二二―二四

【ピエール・ダ・ラ・ブロッチア】もと下賤の生れなりしが
フランス王フィリップ三世の信任を得て高官に陞る、のち君
寵次第に衰へ遂に反逆の罪をうけて絞罪に處せらる

【ブラバンテの淑女】ブラバンテの公爵エンリコ六世の女に

してマリーといひ、フィリップ三世の後妻なりし者。當時の人。ピエールの死をもて王妃の怨みにもとづくと思はれしなり。一説に曰。一二七六年フィリップの長子ルイ死せる時、ピエールその死因をマリーの毒殺（即ち己の子を位に即かしめんため）に歸し、かくして王妃の怨みを買ひ従つてフィリップの信任を失ふにいたれり、フィリップ、カステイリア王アルフォンソ十世と戦ひを開くに及び、ピエールを嫉む者彼が敵と内通して機密をこれに漏せりとこの事を王に具申し王妃一味の者と力を合せ、遂に彼を陥れきと

【これより惡しき群】地獄に罰せらるゝ者。人を讒せる罪によりて死後地獄（第八獄第十囊）の刑罰をうくるなからんため未だ世にある間にその罪を悔ゆべし
マリーは一三二一年に死せり

二八一三〇

【詩の中にて】『アエネイス』の中にて（四〇—四二行註參照）

三四—三六

【わが筆】わがしるせるところと彼等の求むるところと矛盾せず

三七—三九

神たとひ世人の祈りを聴きたまふとも神の正義は依然として變ることなし

【愛の火】たとひ世にある人あたゝかき愛の心より淨火門外の魂のために祈りこの祈りによりてはやく天意を滿たし（若しこの祈りなくばかの魂等天の定むる時至るに及びてはじめて神慮を和ぐべきに）彼等をはやく門内に入らしむるとも

【審判の頂】神の審判のきびしくおごそかなるはかはらじ

四〇―四二

【陳べし處】アエネアス冥府に入りてステイージェの川に近づけるとときパリヌルスの魂、これに己をも俱に渡らしめむことを乞ふ、アエネアスの導者シビルラこれを許さず、且つ曰く

神々の定めたまふこと、祈りのために變りうべしと思ふなかれ

と（『アエネイス』六・三三七以下）

【神より】パリヌルスの如きは神の恩寵をうくる者にあらざるがゆゑにその咎赦されずその願ひ聽かれざれしなり（淨、四・一三三―五參照）

四三―四五

【眞と智】靈界の奥義は人智のみを以て覺り難し、大智と雖

もなほ天啓の光によりてはじめて眞を見るをうるなり

四九―五一

【主よ】異本、善き導者よ

五二―五四

【違ふ】登るべき路は汝の思ふよりも遠く且つ難し

五五―五七

汝未だ山の巔に達せざるうち、日は入り日は出でむ

六一―六三

【ロムバルディア】地、一・六七―九註參照

七〇―七二

【マントヴァ】同上

七三―七五

【ソルデルロ】マントヴァの出なるトルヴァドル派の詩人（十

三世紀)

一説に曰。ソルデルロはマントヴァの領域内なるゴイトの人、十三世紀の初めに生る、後本國を去りてプロヴァンスに赴きシャルル・ダンジュ一世に擢用せられ武人として又詩人としてこれに事ふ、シャルル、イタリアに進軍せしときソルデルロこれに従ひて本國に歸り一二六九年の頃死すと(異説多し、委しくはロングフェローの註を見よ)

『デ・ウルガリー・エーロクエンチアー』一、一五・一一以下にダンテがソルデルロの才藻を賞讃せし詞見ゆ

七六一七八

【屈辱の】國に一統の君主なく政權侯伯の恣にするところとなるをいふ

【水夫】皇帝に當る

七九―八一

【魂】ソルデルロ

八五―八七

チルレーノ、アドリアティコ兩海沿岸の諸州より内地にいた
ろまであまねくイタリアをたづねみよ

八八―九〇

皇帝ユステイニアヌス（天、六・一〇―一二註参照）汝イタ
リアの爲に多くの法をたてたりしかどその法に従ひて國を治
むべき君主なくば何の益あらむ、法ありて行はれざるは法な
きに若かず

九一―九三

【人々】法王僧侶等、即ち専ら靈界の事にたづさはりて國政
を皇帝（カエサル）に委ぬべき人々

【神の言】カエサルの物はカエサルに復し神の物は神に復すべし（マタイ、二二・二一）

九四―九六

汝等國政に關與せるよりこの方帝王の統御を缺けるイタリア（馬）がいかに亂れて秩序なきにいたれるやを見よ

九七―九九

【アルベルト】ハプスブルク王家のアルブレヒト一世。皇帝ルドルフの子、一二九八年選ばれてローマ皇帝となりしもイタリアに赴かず、一三〇八年五月その甥ヨハンの弑するところとなる

一〇〇―一〇二

【奇しく】かの弑逆は即ち奇しく著しき天罰なり

【後を承くる者】ルクセンブルクのハインリヒ（アルリーゴ）

七世（天、三〇・一三六―八參照）

一〇三―一〇五

【父】ルドルフ（淨、七・九一以下參照）

【かの地に】ドイツ諸州の中にとゞまり

一〇六―一〇八

【モンテツキ】ロメオとジュリエトの悲劇にて名高きヴェロナ市のモンテツキ（モンタギュー）カッペルレッティ（キャピュレト）兩家（共にギベルリニ）、及びオルヴェイェート市のモナルディ（グエルフィ）ヒリツペスキ（ギベルリニ）兩家。處を同じうして而して相争へる者の例をあげしなり、但し異説あり

【彼等】前の兩家は既に禍ひをうけて悲しみ、後の兩家も亦今不安の状態にあり

一〇九——一一

【サンタフィオル】サンタフィーオラ。シエーナ市の領域内なるアルドブランデスコ（ギベルリニ）家の所有地。この一族一時勢ひ旺盛なりしもシエーナのグエルフィと争ひてその勢ひを失ひ、サンタフィオルには當時盜賊横行せりといふ
一一五——一二七

【相愛する】軋轢争闘の甚しきを嘲れるなり

【己が名に】汝皇帝に對するイタリア人の侮蔑の目を見んた
めに

一一八——一二〇

【ジョーヴェ】ゼウス神（地、一四・五二——四註參照）

【他の處に】イタリアをその罪惡のために棄てたまふか

一二一——一二三

或ひは後の福ひの女めに今この禍ひを下したまふか

一二四——一二六

【マルチエル】マルチエルロ。カエサルの勁敵マルクス・クラウディウス・マルチエルスを指せるなるべしといふ。匹夫も政争を利用してよく帝國の大敵となるをいへるなり

一二七——一二九

争亂の中心にして無主義無秩序なるフィレンツエを嘲れる反語

【汝をこゝに】汝にわが非難をも安んじて聞くをえせしむる
一三〇——一三二

他のイタリアの市民の中には心に正義の念を宿せども言責を重んじて漫りに口にせざる者多し、然るにフィレンツエの市民は心にもなき正義を口にす

一三三——一三五

【公共の荷】公職。フィレンツェの市民が私慾の爲に公職を貪るを罵れるなり

一三九——一四四

【ラチエデーモナ】ラケダイモン。スパルタ

【十月に紡ぐ】フィレンツェの法令の常に變じて定まらざるをいふ

一四五——一四七

【汝のおぼゆる】未だ幾年も經ざる間に

【民】一黨勢ひを得れば他黨逐はれ、市に住する者屡々變ず
一四八——一五一

【光を見なば】物を見るの明あらば

第七曲

ウエルギリウス、ソルデルロ（ソルデル）に己が身の上をあ
かせし後ダンテとともにこれに導かれて山腹の美しき一小溪
にいたりこゝに著名の君主侯伯の靈を見る

四―六

【登りて】善人の魂すべてリムボにくだり、未だ淨火の山に
ゆかぎりしさき、即ちキリストの未だ世を去りたまはざりし
さき

【オツタヴィアーン】オクタウイアヌス・アウグストウス（淨、
三・二五―七註参照）

七―九

【他の罪】地、四・三七以下參照。

一三一—一五

【抱くところ】膝より下

一六一—一八

【我等の言葉】ラテン語

一九—二一

【功德】ソルデルロ自身の

【恩恵】神の

【圍の内】chiostro (地、二九・四〇—二註參照) 地獄の圈

二五—二七

我は罪を行へるにあらざれども信仰なく神をあがむるの道を
盡さざりしたため神（即ち汝がその許にいたらんことを待望み
我わが死後にいたりてはじめて知れる神）を見るをえざるな

り

二八一三〇

【處】リムボ（地、四・二五以下參照）

三一―三三

【人の罪】始祖アダム罪を犯してより人類一般に相傳し普及せる罪惡的傾向

【釋かれ】洗禮を受けて

三四―三六

【聖なる徳】信と望と愛（コリント前、一三・二三）。リムボの聖賢は多くの徳を有すれども宗教教理の三徳を缺く

四六―四八

【魂】八二―四行註參照

五二―五四

【日】日の光は神より出づる光なり、人神恩に浴せざれば一歩と雖も救ひの途に進むあたはず（ヨハネ、一一・九—一〇、一二・三五參照）

五八—六〇

【間】夜間。神恩なくば人たゞ罪に歸るか、さなくも淨めの道に進むをえずして徒に時を費すのみ

七〇—七十二

【忽ち嶮】Tra erto e piano 或ひは、嶮しきにもあらず坦なるにもあらざる

【坎】溪

【縁半より】溪の縁の一部の他の部分に比ぶれば低くしてその半にあたらざるところ。溪に下るに極めて容易なるところ
七三—七五

【光りてあざやかなるインドの木】Indico legno lucido e sereno
(ムーア本) 或ひはこの一行を二分し「藍、光りて鮮かなる木」と讀み、後者は磨ける櫟の木などの色淡黒なるを指せりと解する人あり、また然らずしてインドの木と讀む人の中にも或ひはこれを以て藍を指せりとし、或ひは烏木こくたんを指せりとし註釋者の説一ならず

學會本 indaco, lugno lucido, sereno,

八二―八四

【魂】國事に没頭せるため死に臨むまで罪を悔いざりし帝王侯伯の靈。溪の美しきは世の榮華をあらはせるなるべし

【サルウェ・レーギーナ】Salve Regina (あゝ女王よ)、日没後の禮拜のをり寺院内にうたふ祈りの歌

こは涙の溪(うき世)より聖母を呼び御子耶穌を我等に現は

したまへと請ふ歌なればダンテその意を寓し靈の事を顧みざりし君主等をしてその悲境を訴へしめしなり。この歌全部、英譯とともにノルトンの註にいづ

八五―八七

【しばしの日】残り少なき日暮れはつるまでは

九一―九三

【いと高き】世の地位最も高ければなり、この曲の終りに侯爵グイリエルモがいと低き處にあるも理同じ

【責務】ローマ皇帝としてイタリアに赴き親しく統御の任に當ること（淨、六・一〇三―五參照）

九四―九六

【ロドルフォ】ハプスブルク家のロドルフ。一二一八年に生れ、同七三年十月アクイスグラナム（ドイツ）にて皇帝の位

に登り、同九一年七月死す

【傷】閥族黨與の争ひ。

【人再び】ハインリヒ七世（淨、六・一〇〇—二註參照）がイタリアの統一を圖りて事成らざりしにいひ及べるならんといふ、ハインリヒのイタリアにいたれるは一三一一年なりされど神曲のこの部分をハインリヒの死（二三一三年八月）以前の作となす人は九六行の *fardì* をおそきに過ぐる意にあらずして容易ならざる意に解すべきか（淨、三三・四三—五註參照）

九七—九九

【慰むる】昔の仇敵も今の友となりて

【地】ボヘミア。モルダウ（モルタ）川の水源この國にあり、この川エルベ（アルビ）と合し北流して海に注ぐ

一〇〇—一〇二

【オツタケツルロ】オットカール。ルドルフの勁敵オットカール二世、一二五三年ボヘミアの王となり屡々ルドルフと戦ひ一二七八年ウィーン附近に戦死す

【襴褌に】弱年のオットカールも今壯年のヴィンチスラーオよりはなほはるかにまされる君主なりき

【ヴェンチスラーオ】ヴィンチスラーウス四世。一二七〇年に生れ、同七八年父の後を承けてボヘミア王となり一三〇五年に死す（天、一九・一二四—六参照）

一〇三—一〇五

【貴き者】ナヴァール王テバルド二世（地、一二一・五二—四）の兄弟エンリケ。一二七〇年ナヴァールの王位を繼ぎ同七四年に死す、その女ジヨヴァナは父の死後フィリップ四世の

妃となれり

【鼻の小さき者】フランス王フィリップ三世。ルイ九世の次子、一二四五年に生れ、同七〇年父につぎてフランス王となり同八五年に死す

【百合の花】アラゴン（イスパニアにあり）王ペドロ三世との戦ひにフランスの艦隊利を失ひ、カタローニアに攻入りしフィリップはその退却中ペルピニアール（フランスの南端）にて死せり（一二八五年）。フランス王家の旗は青地に三の金の百合なれば退きて軍旗を辱しめしを花を萎れしむといへるなり

一〇六一一〇八

フィリップ三世の己が胸を打ち、エンリケの己が手に顔を支へて歎くは前者の子後者の女婿なるフィリップ四世の罪惡を

恥づるなり

一〇九—一一一

【フランスの禍ひ】フランス王フィリップ四世（一二六八—一三二四年）。フィリップ三世の子なり、『神曲』中ダンテ處々にその非を擧ぐ（地、一九・八五—七。淨、二〇・九一—三。天、一九・一一八—二〇等）

一二二—一二四

【身かの如く】アラゴン王ペドロ（ピエートロ三世。一二三六年に生れ同七六年アラゴンの王位を繼承し、同八二年「シケリアの虐殺」ありし後、彼地の王となり、同八五年に死す、その妻はマンフレディの女コンスタンツェなり（淨、三・一一五—七參照）

【鼻の雄々しき】シャルル・ダンジュー一世（一二二〇—一

二八五年）。フランス王聖ルイ（ルイ九世）の弟にしてプーリア及びシケリアに王たり

一一五―一一七

【若き者】ペドロ三世の長子アルフォンソ三世。一二八五年父の後を承けてアラゴンの王となり一二九一年に死す

【器より器に】父より子に

一一八―一二〇

【ヤーコモとフェデリーゴ】ハイメ（ヤーコモ）はペドロ三世の次子、初めシケリアに王たりしが兄アルフォンソの死後アラゴンの譲りを受け、一三二七年死す。フェデリーゴ（フェデリーゴ）はハイメの弟、ハイメ、アラゴンの王となるに及びてシケリアを治め一三三七年に死す

【善きもの】父の徳

一二一—一二三

【それ人の】父の美德、子に傳へらるゝこと稀なり

【與ふるもの】神。神は徳の神より出ずるものにして遺傳によりて人の有するものにあらざることを世に知らしめたまはんとて

一二四—一二六

ハイメとフェデリーコがその父の徳を嗣がざるごとくシャルル二世もまたその父シャルル一世（鼻の大いなる者）の徳を有せず

【プーリア、プロヴェンツア】シャルル・ダンジューに次ぎてプーリアとプロヴァンスを治めし者はその子シャルル二世（一二四三—一三〇九年）なり、このシャルルは父に及ばずして統御の道その宜しきをえず、民悲歎にくるゝなり

プロヴァンスはシャルル一世がベアトリスを娶れる時その所領となりしところ

一二七―一二九

シャルル二世（樹）のその父シャルル・ダンジュー（種）に及ばざることあたかもシャルル・ダンジュー自身のペドロ三世に及ばざるに似たり

【コスタンツァ】ペドロ三世の妻（一三〇三年死）

【ベアトリーチェ】ベアトリス。プロヴァンスの伯爵ライモンドの女にしてシャルル一世の初めの妻

【マルゲリータ】ボルゴニアの公爵エウデの女。一二六八年即ちベアトリスの死せし翌年シャルルの後妻となれり

一三〇―一三二

【アルリーゴ】英王ヘンリー三世（一二〇六―一二七二年）

【枝には】その子エドワード一世（一二四〇—一二三〇七年）の明君なりしをいふ

【まされる】シヤルル、ペドロ等の子に比して

一三三—一三五

【グイリエルモ】モンフェルラートの侯爵グイリエルモ七世。北部イタリアに多くの地を領しギベルリニ黨の首領となりて大いにグエルフィと戦へり、一二九〇年アスチ（ピエモンテの中）の人々アレクサンドリアを唆かしてグイリエルモに叛かしむるやグイリエルモその亂を鎮めんとてかの地に赴き却つてアレクサンドリア人の捕ふるところとなり（同年九月）鐵籠の中に幽せられて死す（一二九二年二月）

一三六

【モンフェルラート】北イタリアの中なるポー川の南の地に

て今のピエモンテの一部にあたる

【カナヴェーゼ】北イタリアの西部ポーの北の地。モンフェルラートと共にグイリエルモの侯爵領地たり

グイリエルモの子ジヨヴァンニ父の仇を報いんとてアレクサンドリア人と戦ひしも利あらず、侯爵領地の民久しくその禍亂になやめり

第八曲

ウエルギリウス及びソルデルロとともにダンテなほ君王の溪にありてニーノ・ヴィスコンティの靈とかたる、溪を襲へる一匹の蛇ふたりの天使に逐はれし後、彼またコルラード・マ

ラスピーナと語りかつその豫言を聞く

一―六

【思ひ歸りて】思ひ郷に歸りて

【時】夕暮

七―九

【きかず】ソルデル口語らず、君王の魂その歌をうたひ終りてまた聞ゆるものなければ

一〇―一二

【東】往時祈祷を捧ぐる人東に向ふを例とせり

一三―一五

【テ―ルーキス・アンテ】Te lucis ante (terminum) (光消えざるさきに) 一日中の最終の禮拜の時 (compieta) 寺院内にうたふ祈りの歌にて夜の間の加護をねぎもとむるもの

一九―二一

【被物は】難解の譬喩にあらざれば容易にその眞義をさとりうべきをいへり

蛇は誘惑なり、天使は冥助なり、救ひの道にあるものといへどもその初めにあたりては誘惑にあふを免かれず、されどその信仰により天の冥助をえて罪を犯すにいたることなし

二二―二四

【蒼ざめ】誘惑を恐れ神前に謙りてその祐助を待つ

二五―二七

【焰の劔】（創世記三・二四參照）註釋者曰。劔に切尖なきはたゞ敵を防ぐためにて殺すためにあらざればなりと

二八―三〇

【縁】縁色は希望の象徴なり

三七―三九

【マリアの懷】聖母マリアの座所即ちエムビレオの天（天、三一・一一八以下）

四〇―四二

【背】ウエルギリウスの

四九―五一

【はじめかくれ】未だ眞の闇にあらねば、さきにはあはひ遠くして見えざりし互ひの姿も今は近くして見ゆるなり

五二―五四

【ニーン】ニーノ・ヴィスコンティ。ピサ市グエルフ黨の首領なるジョヴァンニ・ヴィスコンティとウゴリーノ伯の女との間の子（地、三三・一三一―五註參照）、一二七五年サールデニア島の一州ガルルーラの知事となり（地、二二・七九―八

四註參照）後また祖父ウゴリーノと共にピサの市政に與かるも幾何もなくこれと相争ひ、一二八八年ピサを去り一二九六年サールディニアに死す

五五―五七

【水を渡りて】テーヴェレの河口より天使の船に乗りて。二ノはダンテの境遇を知らざれば斯くいへり

五八―六〇

【今朝】四月十日の朝（淨、一・一九―二一註參照）

【第二の生】原文、他の生。永遠の生命

六一―六三

【しざりぬ】驚き惑ひて。ダンテにあふ者或ひはその呼吸により（淨、二・六七以下等）或ひはその影により（淨、三・九一以下等）てその生者なるを知れり、されどソルデル口は

ウェルギリウスの事に心奪はれて深くダンテに注意するの暇なく、且つこの頃日既に山の後にかくれゐたれば（淨、六・五六―七）影をみるをえざりしなり

六四―六六

【その一】ソルデルロ

【また一】ニーノ

【クルラード】クルラード・マラスピーナ（一〇九―一一行

註参照）

【事】人に生きながら冥界をめぐるをえさせたまひしこと

六七―六九

水の深きがごとく奥深くして人智もこれを知る能はざるまでにみ業わざの源をかくしたまふ神より汝のうくる特殊の恵みを指して

七〇—七二

【ジヨヴァンナ】ニーノの女、一三〇〇年には九歳ばかりなりきといふ

【罪なき者の】わがために祈りを天にさゝげしめよ

七三—七五

【母】ベアトリーチェ・オピッツォ・ダ・エステイ（地、一一・一一一）の女、一二九六年夫ニーノ死して後己が郷里フエルラーラに歸り、一三〇〇年ミラーノの君なるマッテオ・ヴィスコンティの子ガレアッツォに嫁す

【白き首帕】中古、寡婦の服裝は黒衣に白の首帕なりき、ベアトリーチェがこれを棄てて再嫁しミラーノに赴きしは一三〇〇年の半の頃なりしかど『神曲』示現の當時婚約既に成立ちゐたりしなるべしといふ

【あはれ】再嫁を悔いて寡婦の昔を慕ふなり。註釋者曰、一三〇二年ガレアツツオ、ミラーノを逐はれしよりこの方その一家久しく悲境に沈淪せりと

七九―八一

再嫁の記念を世に残すは貞操の記念を世に残すごとく名譽の事にあらざるべし

蝮蛇はミラーノのヴィスコンティ家の紋所、鶏はピサのヴィスコンティ家の紋所なり、家紋を墓所にあらはすこと日本に於てもその例多し

【ガルルーラ】地、二二・七九―八四註參照

八五―八七

【處】こゝにては南極の天を指す、極の星は赤道に近き處よりもその運行おそければなり

八八―九〇

【三の燈火】註釋者曰。この三の星は信仰、希望、愛を表はす、思慮、公義、剛氣、節制の諸徳は活動の徳にして晝に適し、神學上の三徳は默想の徳にして夜に適すと

九一―九三

【今朝】淨、一・二二以下參照

九四―九六

【我等の敵】默示録、一二・九參照

九七―九九

【エーヴァ】蛇、アダムの妻エヴァを誘ひて禁斷の木の實を食はしむ（創世記、三・一以下）、始祖の罪業は全人類の禍ひの本なりければ苦きといふ

一〇三―一〇五

【天の鷹】 天使。ダンテ蛇にのみ心ひかれて天使の飛びはじめし有様を見ざりしなり

一〇九―一一一

【魂】 クルラード（コルラード）・マラスピーナ（幼）。ヴィルラフランカの侯爵フェデリーゴの子、一二九四年頃死す
一一二―一一七

【汝を】 汝を導いて天にむかはしむる神恩の光汝がこの山の巔に達するまで、汝の意志のはたらきと相結びて、消ゆることなからんことを

【※薬の巔】 美しくして變らざる地上の樂園³

【ヴァル・ディ・マーグラ】 ルーニジアーナの一部（地、二四・一四五―七註参照）。ヴィルラフランカの城その中央にあ

り

一一八一—一二〇

【老】クルラード・マラスピーナ（老）。侯爵フェデリーゴの父（即ち前出クルラード・マラスピーナの祖父）、一二五〇年頃死す

【愛】己が宗族の榮達をのみ希へるわが地上の愛

一二七—一二九

【財布と劔】人に施して惜しまず且つ勇武なりとの家の譽を傷けず

一三〇—一三二

【習慣と自然】家風と天性

【罪ある首】法王（ボニファキウス八世か）。政務に關涉して
一三三—一三五

【牡羊四の】今より後七年の月日過ぎぬまに

牡羊の蔽ふ臥床は白羊宮なり、この時太陽白羊宮にありしが
ゆゑにかくいへり

一三六―一三八

【意見】汝のわが一家に對していただく

【人の言より】汝は世の風評以上に力あるもの即ち自己の經驗によりて汝の意見に誤りなきを知るならむ

一三〇六年の秋逐客のダンテ、ルーニジアーナにいたりてマラスピーナ一家の歡待をうけしを指す

一三九 若し神の定めたまふこと（ダンテの逐客となりて處々に流寓すべきこと等）かはらずば

第九曲

ダンテ、君王の溪に眠りて夢み、眠り覺むれば日既に高く身は淨火の門に近し、その傍にはたゞウエルギリウスあるのみ、門を守る天使兩詩人のいふところをきき扉をひらきて内に入らしむ

一―六

淨火の夜景を敍せるなるべし、されど極めて難解にして意義明かならざるところ多し、こゝにてはたゞ諸註の中、主なるものの一をあぐ（委しくはムーアの『ダンテ研究』第三卷七四頁以下を見よ）

【ティトネの妾】月のエオス（アクローラ）（月代）即ち月まきに出でんとして東方の白むをいへり（ラーナ）ティトノス

(ティーンネ)はトロイア王ラオメドンの子、朝の女神エオスに慕はれこれを妻として不死の身となれりといふ(神話)。ダンテこの傳説にもとづき日のエオスをティトノスの正妻と見做し月のエオスをその妾と見做せるか

【友】 テイトノス

【臺】 地平線上

【生物】 蠍。天蠍宮の星東の空にあらはれしをいふ

七―九

【夜は】 夜の八時半過。春分の頃の夜の半即ち午後六時より夜半までを昇のぼりとしその他を降くだりとすれば昇の二歩を終ふるは午後八時なり、第三步翼を下に曲ぐるは八時と九時の間も既に半を過ぎたるなり

【アダモの】肉體の係累あるにより

【五者】ダンテ、ウエルギリウス、ソルデルロ、ニーノ、クルラード

一三―一八

【憂ひ】化して燕となれるピロメラがトラキア王テレウスの辱しめをうけし昔の悲しみを訴ふるなり（淨、一七・一九―二一註参照）

【時】曙（地、二六・七―一二註参照）

二二―二四

【ところ】プリュギアのイデ（イーダ）山。ガニユメデスはトロイア王トロスの子にして世にたぐひなき美男子なり、かつてその朋輩とイデ山上に狩す、ゼウス一羽の鷲をおくりてこれをさらはせ天にとゞめて神々に奉仕せしむ（神話）

二五―二七

【こゝに】イデ山に

二八―三〇

【火】火炎界。中古の學說に空氣を圍繞する火、空氣と月天の間にあり

三四―三九

キロネはアキレウスをはぐくめるケンタウロスなり（地、一

二・七〇―七二參照）

アキレウスの母テティス、トロイアの難をおそれてわが子を

キロネより奪ひその眠れる間にこれをエーゲ海中の一島シロ

（或ひはスキュロス）に移せり（神話）、眠り覺めしアキレウ

スのおどろきあやしめるさまスタティウスの『アキルレース』

一・二四七以下にいづといふ

【ギリシア人】オデュセウスとディオメデス（地、二六・六一―三註參照）

四三―四五

【慰むる者】ウエルギリウス

【日は】四月十一日の午前八時頃

五二―五四

【汝の中に】汝の肉體の中に

五五―五七

【ルーチア】神恩の光（地、二・九七―九註參照）

五八―六〇

【魂】原文 *forme* 肉體を形成するものの義（地、二七・七三參照）

六一―六三

【開きたる】岩分るゝとみゆるをいふ（四九―五一 行並びに
七三―五行 参照）

七〇―七二

【技】詩材にふさはしき作詩の技巧

七六―七八

【門守】門を守る天使は僧侶を代表す、懺悔を聞きて人を淨
めの途に就かしむればなり

八二―八四

【目を擧ぐれども】かの白刃を見んとて

八五―八七

【導者】天使は兩詩人の淨火にとゞまるべき魂にあらざるを
知り、たゞ何の力に導かれてかしこにいたれるやを問へるな
り

【禍ひを】神恩とまことの改悔によりて人の罪淨めらる、その道によらずして罪を淨めんとする者は自ら禍ひを招くに等し
九四―一〇二

註釋者曰。淨火門前の三段は改悔の三要素すなはち心の悔、罪の告白、行の贖の象徴なり、第一の段即ち最下方にあるものは汚れなき心に寫して己が姿を見、己が眞状を知るを表示す、第二の段は色の黒きによりて心の暗き影を表示し縦横の龜裂によりて罪の告白能く心の拗執に勝つを表示す、第三の段即ち最上方にあるものはその赤色によりて、改悔を行ひに顯はし神意を満さんとする心の愛燃ゆるばかりなるを表示すと

【ペルソ】地、五・八八―九〇註參照

一〇三―一〇五

【金剛石】神意によりて定まれる懺悔の僧の立場の堅固なるを表はす

一〇九―一一一

【胸を】ルカ、一八・一三に税吏神前に罪を悔いて己が胸をうちしこといづ

一一二―一一四

【七のP】淨火の七界に淨めらるべき七の罪 (Peccati) のしるし。たとひ罪の行ひを赦さるともその行ひの本なる邪念を心に宿すときは人天堂に入ること能はず

一一五―一一七

註釋者曰。灰色は懺悔を聞く僧が謙遜の心をもてその任務を果すを表はすと

【二の鑰】天國の鑰（マタイ、一六・一九）

一二一—一二六

金の鑰は人の罪を釋くことをうる僧侶の權能の象徴にて銀の鑰は改悔者の眞の状態を知悉し、その適不適を判ずる僧侶の技能の象徴なり、僧侶もしその一に於て備はらざるところあれば救ひの門ひらかるゝことなし

【價貴し】僧侶キリストの血によりてはじめてかの權能をうけたればなり

【纈を解す】罪ある者の罪と心の状態とを審議してその罪を釋くべきや否やを定むるなり

一二七—一二九

【ピエル】ピエートロ鑰をキリストよりうけてしかして天使に托せるなり（地、一九・九二參照）

一三〇—一三二

【後方を】罪に歸るものは神の恩寵を失ふ（ルカ、九・六二及びマタイ、一二・四三―五參照）

一三六―一三八

【メテルロ】ルキウス・カエキリウス・メテルルス。ローマの保民官なり、カエサルがタルペア岩と稱する岩山（ローマにあり）よりローマの寶物を奪ひ去らんとせし時これを守るメテルルス争ひ止めしかども及ばず、轟然の響きとともに堂宇の藏の戸開かれきといふ

【瘠す】寶物を失へるをいふ

一三九―一四一

【最初の響き】門内に入りて聞ける最初の響き即ち歌

【調にまじれる聲】歌謠の抑揚にまじりて歌詞のきこゆるをいふ

【デー・デウム・ラウドームス】Te Deum laudamus (神よ、我等汝を讃美す) 有名なるラテン聖歌の一

一四二―一四五

【詞】歌詞。歌詞のあきらかにきこゆることと器聲に壓せられてきこえざることとあるなり

第十曲

詩人等淨火の門より岩間の小徑を登りゆきて山をめぐる一帯の平地即ち淨火の第一圏にいたり山側なる大理石の上に彫り刻まれし謙遜の例を見また石を負ひて傲慢の罪を淨むる一群の靈にあふ

一—三

【魂の惡き愛】ダンテ思へらく、善惡の行爲すべて愛より出づ（淨、一七・一〇三—五參照）、愛正しければ善行を生み正しからざれば惡業を生む、しかるに人多くは惡に傾くがゆゑに淨火門内に入りて罪を淨むる者稀なり

四—六

【我若し】後を顧みたらんには悔ゆとも及ばざりしなるべし（淨、九・一二三參照）

七—九

【紆行りて】原文、動きて。石の動くをいへるにあらずして路の紆曲するをいへるなり

一〇—一二

路狹ければ側面の岩の路を壓して行手を妨ぐることなき處を

えらぶなり

一三―一五

【月】月、床に歸るとはその西に没するをいふ、満月より五日目の月（地、二〇・一二七参照）にてその入るは午前九時過なるべし

一六―一九

【針眼】岩間の狹路

【後方に】山後方にかたよりて前方に平地（即ち淨火の圈）を残せるところ

二二―二四

圈の外側と内側の間即ち幅は人の身長の三倍なり

二五―二七

【臺】cornice 圓柱の上部の意より轉じて淨火の圈の意に用ゐ

らる

二八一三〇

【垂直にして登るあたはぐる】ムーア本、Che, dritta (= essendo dirtta quasi a perpendicolo) , di salita aveva manco 學會本、
Che dritto (= possibilita) di, etc. 登るすぐなき

三二一—三三三

【ポリクレート】ポリュクレイトス、有名なるギリシアの彫刻家（前五世紀）

三四—四五

七罪に對する七徳の諸例の中第一例をすべて聖母の事蹟より引けり、第一圈にては聖母の謙遜を徳の第一例とす

【天使】ガブリエル（ルカ、一・二六以下）

救世主の出現を告げ知らせんため天使ガブリエル神より遣は

されて聖母マリアの許に來れるさまを表はせり、キリストの降誕によりて神人相和し始祖アダム罪を犯せしよりこの方閉ぢて人の入る能はざりし天開け人はその涙を流して久しく求めしものをえたり

【幸あれ】Aue ガブリエルがマリアにのべし會釋の詞（ルカ、一・二八）

【女】マリア。尊き愛は人間に對する神の愛

【神の婢を見よ】マリアの天使にいへる詞（ルカ、一・三八）
四六―四八

【人の心臓のある方】左方
四九―五一

【後方】聖母の像よりなほ右に當る方即ちウエルギリウスの
みたる方

五五―六九

第二の例としてイスラエル王ダヴィデの謙遜を擧ぐ

【聖なる匱】神がモーゼに命じて作らせたまひし契約の匱（出エジプト記、二五・一〇以下）、ダヴィデこれをイエルサレムに移さんとしてアビナダブの家より曳出せり（サムエル後、六・一以下）

【人この事により】ウザが神の命なきに手を契約の匱に觸れ、神罰をうけて死せること（サムエル後、六・六―七）を思ひ【七の組】ラテン語譯の聖書に *septem chori* とあるによれり【一に否と】民の歌をうたふさま眞に逼れば耳は彼等うたはずといへど目は否彼等歌ふといふ

【目と鼻】目は香ありといひ鼻はこれなしといふ

【聖歌の作者】詩篇の詩人、王ダヴィデ

【衣ひき褰げ】サムエル、後六・二〇參照

【器】神の匱

【王者に餘り】身もあらはに亂舞せること王者にふさはしき振舞にあらず（足らず）、されどこれ皆謙遜の念より出でたる事なればむしろ世の王者にまさる（餘る）

【ミコル】ミカル。サウルの女にしてダヴィデの妃たりし者。王宮の窓より王の群集にまじりて躍り狂ふ姿を見、これを侮り且つ悲しめること聖書にいづ（サムエル後、六・一六及び二〇）

七三―九六

第三の例は皇帝トラヤヌスの物語なり、この物語はディオ・カッシウスの話説よりいでて中古廣く世に行はれきといふ【グレゴリーオ】傳説に曰。皇帝トラヤヌス（五六―一一七

年）の死後法王グレゴリウス一世その魂の救はれんことを神に祈りたれば皇帝この祈りのために地獄の苦しみを脱して天堂に入るをえたりと。一説には皇帝地獄より再び世に歸り洗禮を受くるにいたれりともいふ（天、二〇・一〇六―八參照）

【勝利】その祈りによりてトラヤヌスの魂を救ひ出せること即ち地獄に對する勝利

【鷲】ローマの軍旗として黄地に縫ひとれる鷲

【歸るまで】戦ひ終りて

【新しき物】神は時間に超越す、しかして萬物は皆神の顯現なり、故に神には新しき物あることなし

【奇し】かく複雑なる情の變化をあらはすは世の彫刻家の爲しあたはざるところなり

【こなた】左

【民】傲慢の罪を淨むる者。この罪は七大罪のうち最も重き罪なれば最も低き處に淨めらる

一〇三―一〇五

或ひは「その好む習なる奇めづらしき物をみんとて眺むることにのみ凝れるわが目も、たゞちに彼の方にむかへり」

一〇六―一〇八

罪を淨むる者の苦しみ甚だ大なるを聞きて心臆し、悔改めの道を離るゝは非也

一〇九―一一一

苦しみの大なるをのみ思はずして後の福をおもへ、またいか
に悪しき場合にても最後の審判の日到ればその苛責止むをおもへ

一一五——一七

【わが目も】はじめは人の姿なるや否やを判じえざりしなり
一一八——一二〇

【石】罪の性質に應じて罰を異にすること地獄に於けるに同じ、世に自ら高うせる者今大石を負うて地にかゝむ

【なやむ】*si picchia*（打たるゝ、自ら打つ）註釋者多くはこれを罪を悔いて己が胸をうつ意に解すれど大石を負うて低くかゝめる者にふさはしからざるに似たり

一二四——一二六

【靈體の蝶】*l'angelica farfalla*（天使の如き蝶）人の魂。蟲の羽化して飛ぶどとく、我等の魂肉體をはなれ己が罪をかくさずしてゆいて審判をうくるなり

一二七——一二九

世に住む人の完全ならざるをいひてその高慢を誡めしなり

一三〇——一三二

【肱木】 *mensola* 壁より凸出して梁の類を支ふるもの、往々人物の彫像を用ゐこれをしてその上にあるものを支ふごとく見えしむ

第十一曲

第二圈にいたらんため詩人等道をかの一群の靈に問ひ、その一オムベルト・アルドブランデスコの答へをききて彼等と共に右に向ふ、グッビオのオデリジまたかの群の中にありダンテを認めてこれと語りかつこれにプロヴェンツアーン・サル

ヴァーニの事を告ぐ

一―三

一行より二四行までは傲慢の罪を淨むる魂の祈りにてマタイ、
六・九以下及びルカ、一一・二以下にみゆる主の祈りを敷衍
せるもの

【限らるゝ】神の天にいますは空間の制限によりてそのいま
すところ定まれるがゆゑにあらざ、たゞ最初の被造物即ち諸
天及び天使を愛したまふこと特に深きによりてなり

四―六

【聖息】vapore 神の靈みたまのはたらき萬物に及ぶをいふ

七―九

【爾國の平和】天上の福

一〇―一二

人その私心を棄ててよく神意に服従すること天使のごとくなるべし

【オザンナ】 Osanna 神を讃美する語（マタイ、二一・九）
一三一―一五

【マンナ】 manna 糧。昔イスラエルの民がアラビアの曠野にて食せるものにて（出エジプト、一六・一三以下）こゝにては神の恩恵を指す

【曠野】 マンナに因みて淨火を指せり。神恩によらざれば人、罪を淨むるあたはず

一六一―一八

【功德】 我等の功德微少にして罪を贖ふにたらざれば

一九―二一

【敵】惡魔

二二―二四

我等淨火門内にある者は惡の誘惑にあふことなければこの最後の祈りは我等のためにあらずして世人のためなり（淨、八・一九―二一註參照）

二五―二七

【旅】淨めの旅

【夢に】人魔おそはれて恰も重荷に壓せらるゝ如く感ずるをいふ
二八―三〇

【等しからざる】石の輕重により

【濃霧】誇りの氣

【臺】圈（淨、一〇・二五―七註參照）

三一―三三

【良根】神恩。神は世に住む善人の祈りを受納したまふ（淨、四・一三三―五參照）

【こゝに】世に

三四―三六

【諸々の星の輪】諸天

三七―三九

以下四五行までウエルギリウスの詞

【正義と慈悲】神の

四〇―四二

【階】第一圈と第二圈の間の

【徑】第一圈より第二圈に通ずる狹路

五八―六三

【我】オムベルト・アルドブランデスコ。サンタフィオルの伯爵アルドブランデスコ家（淨、六・一〇九―一一註參照）の者、ギベルリニ黨に屬し屢々シエーナと爭へるため一二五九年シエーナ人刺客を遣はしてこれを殺さしむといふ

【ラチオの者】イタリア人

【古き血】舊家なること

【母の同じ】人皆地（或曰エヴァと）を母とす

六四―六六

【カムパニヤテイーコ】オムブロネの溪なる一丘上の城にてアルドブランデスコ家の所有なり、オムベルトこゝに殺さる七〇―七二

【生者】生前傲慢にして罪を淨めざりしかば死後この罪を贖はざるをえず

七三―七五

【垂れ】ダンテ自ら省みて傲慢の罪を恐れしなり

七九―八一

【アゴッビオ】クツビオ。マルケにあり

【色彩】*aluminar* (*Fr. enluminer*) 色彩を用ゐて書籍の裝飾等をなす技

【オデリジ】グツビオの色彩畫家、一二九九年ローマに死す
八二―八四

【フランコ】ボローニアの色彩畫家、十三世紀の末より世に知らる

【一部】我はたゞ先輩として譽の一部を分つのみ。或曰、オデリジはフランコの師なりきと

八八―九〇

【もし罪を】我若し在世の間に悔改むることなかりしならば
今猶淨火の門内に入るをえざりしなるべし

九一―九三

【衰へる世】先輩を凌駕する人の出でざる世

【その頂の】人の榮えの時めく間いつまでか續かむ

九四―九六

【チマーブエ】ジョヴァンニ・チマーブエ。有名なるフィレンツェの畫家（一二四〇―一三〇二年頃）

【ジオット】有名なるフィレンツェの畫家。一二六六年フィレンツェの附近なる一小村に生れ、一三三七年フィレンツェに死す、ダンテの親友なりきといふ

九七―九九

【一のグイード】グイード・カヴァルカンティ（地、一〇・五

八―六〇註參照)

【他のグイード】グイード・グイニツエルリ、ボローニアの詩人（淨、二六・九一―三註參照）

【巢より逐ふ者】ダンテがかの二詩人を凌駕するを暗示したりとの説あり、されど殊更に或一人を指せるにあらずしてたゞ一般に榮枯盛衰の定めなきをいへりとの註穩當なるに似たり
一〇三―一〇八

たとひ老いて後死すとも未だ千年經ざるまに世に忘れられ疎んぜられて稚き時に死すると異なるなきにいたらむ

【パツポ、デインデイ】papro (＝pane), dindi (＝denari) 小兒の語、邦語にて飯、^{まんま}錢といふにあたる。パツポ、デインデイを棄つるは人生長じて小兒の言語を用ゐざるにいたるをいふ

【いとおそくめぐる天】原文、天にいとおそくめぐる圈。恆星の天（第八天）を指す、當時の天文學によればその一廻轉に三萬六千年を要すといふ

一〇九―一一四

【ゆく者】プロヴェンツアン・サルヴァーニ。シエーナなるギベルリニ黨の首領としてその勢力あまねくトスカーナに及ぶ、一二六〇年モンタペルティの戦ひ（地、一〇・八五―七註参照）の際大いにその黨與のために力め、翌六一年モンタプルチアーノにポデスタたり、一二六九年コルレの戦ひ（淨、一三・一一五―七註参照）に敗れ、虜はれて首斬らる

【亡ぼされし】モンタペルティの戦ひにフィレンツェ人（グエルファイ黨に屬する）の大敗せるをいふ

一一五―一一七

太陽はその光熱によりて地に草を生ぜしめ後これを枯らす、
かくの如く時は人を榮えしめ後その榮を奪ふ

一二四―一二六

【かくのごとく】小股に（一〇九行）、荷重ければなり

【かゝる金銭】かゝる苦しみによりてその罪を淨む

―二七―一三二

【低き處】門外（淨、四・一二七以下參照）

【善き祈り】善人の祈り

【かく來る】死後直ちに門内に來る

一三三―一三八

古註曰。ターリアコツツオの戦ひ（地、二八・一三―一八並びに
註參照）にプロヴェンツァーンの一友某コルラヂーノのため
にシヤルルと戦ひ、とらはれて獄に下さる、この時プロヴェ

ンツアーン、一萬フィオリーノ（金貨）を以てその命を贖ふをうるを聞き、シエーナ市中央のピアッツァ（ピアッツァ・デル・カムポ）に座を設け自ら人の憐みを乞ふ、シエーナ人尊大彼がごときもの今身を低うして人の助けを求むるを見てその志をあはれみ各々分に應じて施與す、獄中の友これによりて救はるゝことをえたりと

【震はしむ】人の憐みを乞ふのつらきに身震ふなり

一三九―一四一

【暗き】憐みを乞ふくるしさは經驗によらざれば知り難し

【隣人】フィレンツェ人。汝フィレンツェ人のために郷土を逐はれ自ら人の憐みを乞ひ自ら身を震はすに及びてはじめてよくわが詞を解せむ

一四二

【幽閉を】彼が門外に長く止まらずして早くこの處に來るを
えしはこの愛この謙遜の行爲ありたるによりてなり

第十二曲

ダンテ、ウエルギリウスの誠しめに従ひオデリジの魂とわか
れて進み路上に刻める慢心の罰の例を見、かくて階きざはしのほとり
にいたればひとりの天使その額上なる七字の一を消しこれを
勵まして第二圈にむかはしむ

一—三

【魂】オデリジの

四—六

【人各々】人皆いそぎて改悔の途に進むべきをいへり
七―九

我は歩を早めんため、自然の要求に従ひて身を直くせるもわが心は傲慢のおそろべきものなるを知りてもとのごとく低く屈めり

一六―一八

【平地の墓】*tombe terragne* 高く築き上げたる墓に對していへり、表を上に向けし大理石の墓石などに生前の姿を刻して死後の記念となすこと中古世に行はるといふ

一九―二一

死者の追憶を拍車にたとへしなり

二五―二七

傲慢の罰の第一例として魔王ルチーフェロを擧ぐ

【尊く】地、三四・一六―八參照

【電光】我は電光の如くサタンの天より墜ちるを見たり（ルカ、一〇・一八）

二五行より三六行に亙る四聯は皆 *Vedea*（我は見たり）に、次の四聯は皆〇（あゝ）に、次の四聯は皆 *Mostrava*（示せり）にはじまり、その又次の一聯のうち第一行は *Vedea* に第二行は〇に第三行は *Mostrava* にはじまる

二八―三〇

第二の例はブリアレオスなり、神話にいつる巨人の一にして巨人等が神々と争へる時ゼウスの電光の矢に射られて死せるもの（地、三一・九七―九並びに註參照）

三一―三三

第三例。神々と戦ひて死せる巨人等

彫像にはアポロン、アテナ、アレスの三神がその父ゼウスの傍にありてフレーグラの戦ひ（地、一四・五五―六〇参照）に死せる巨人等の骸を見る状をあらはせり

【ティムブレオ】アポロン。トロアデ（トロイア地方の名）のテュムブレにこの神を祭れる宮あるよりかく呼べり

三四―三六

第四例は聖書よりいづ、巨人ニムロッドネムブロット（地、三一・七六―八註参照）シナルの野にて高塔を築き、その頂を天に達せしめんとして神怒に觸る（創世記、――一・一以下）

【惑へる】言語亂れて通ぜざれば

【建物】原文、勞苦。バベルの高塔を指す

三七―三九

第五例は神話にいづるニオベの物語なり、ニオベはタンタロ

スの女、テバイ王アムピオンの妻となりて七男七女を生みその血統、富貴、美貌及び子女の多きに誇りて己をレト神にまされりとしテバイ人のこの神に供物を捧ぐるを責めしかば、レトその二子アポロン、アルテミスを遣はしてニオベの子女を悉く殺さしむ、ニオベは悲歎のあまり化して石となれり（オウィディウスの『メタモルフオセス』六・一四六以下参照）

四〇―四二

第六例。イスラエル王サウル、ペリシテ人と戦ひて利あらず、ギルボア山上に（パレスチナにあり）自刃して死す（サムエル前、三一・一以下）

【雨露】サウルの死を悼めるダヴィデの哀歌に曰く。ギルボアの山々よ、願はくは汝等の上に露も雨も降らざれ（サムエル後、一・二一）

四三―四五

第七例は神話にいつるアラクネ（アラーニエ）の物語なり（地、一七・一六―二四註参照）

【截餘】アテナは己が技のわざアラクネに及ばざるをみて怒り織女の織りたる布帛を斷てり

四六―四八

第八例。レハベアムはイスラエル王ソロモンの子なり、父の死後その民これに苛政の苦しみを訴ふ、しかるにレハベアム、少年等の言に従ひ民の請ひを退けしかば民背きて王の税吏アドラムを殺せり、王即ちいそぎ車に乗りてイエルサレムに逃ぐ（列王紀略上、一二・一以下）

【おびやかす】イスラエルの民を

四九―五一

第九例として神話にいつるエリピュレを擧ぐ

彫像にはエリピュレがその子アルクマイオンに殺さるゝ状をあらはせり

ギリシア七王の一なるアムピアラオス、己がテバイの役に死する（地、二〇・三一―六註参照）を卜知しその所在をくらしたりしに妻エリピュレ、ヘファイストスの作なる金の頸飾を得んためポリュネイケスに誘はれて夫の隱家をこれに告げたり、アルクマイオン即ち母を殺して父の仇を報ゆ

【不吉なる】これを持つ者必ず禍ひに遭ふといはるればなり
五二―五四

第十例。セナケリブ、アッシリアの王なり、倨傲にして眞の神を侮りしが嘗て己の神ニスロクを宮の中にて拜せるとき其二子アデランメレクとシヤレゼルこれを殺して逃げ去れり（列

王記略下、一九・三六―七及びイザヤ、三七・三七―八)

五五―五七

第十一例にはペルシア王キルス(クロス)をあげたり、マツサガテ人の女王トミス激戦の後キルスを破りその屍を求めて頭を截り取りこれを血をもて満たせし革囊の中に入れ、血に渴ける者よ今血に飽けといへりといふ古の史家の記事により

五八―六〇

第十二例。アッシリアの大將オロフェルネ(ホロフェルネス)、

ユダヤのベツーリアといへる町を圍めるとき、寡婦ユウデイトその郷土を救はんため敵陣に赴き謀をもてホロフェルネスを殺せり、アッシリア人潰走す(『ユウデイト』一一・一以下)

【遺物】首なきホロフェルネスの軀

六一―六三

第十三例。トロイア（地、一・七三―五註及び地、三〇・一三―五參照）

【イーリオン】イリオン、トロイアの異名。或曰、トロイアは町、イリオンは城の名と

六四―六六

【陰と線】線は像の輪郭をいひ、陰は高低をあらはす輪郭内の變化をいふ

【墨筆】*stile* 鉛錫等にて作れる筆にて最初の輪郭をあらはすに用ゐるもの

六七―六九

【面見し】原文、事實を見し。實際にそれぐの事柄を目撃

せるをいふ

七〇―七二

【エーヴァの子等】人類。ダンテは世人が古來慢心の罰せられたる多くの例あるをおもはずして相率ゐてこの罪に陥るを嘲れるなり

七三―七五

思へるよりも時の早く過ぎたるをいふ

【繫はなれぬ】彫像にのみ心奪はれて他の事を思ふの餘地なき（淨、四・一以下參照）

【さらに多く】詩人等の歩みおそければ

七九―八一

【第六の侍婢】時を晝の侍女といへり、故に今は晝の第六時の終り即ち正午なり

九一―九三

【今より後】誇りの罪除かれたれば（一一八行以下参照）

九四―九六

ダンテの叫びか天使の詞かあきらかならず

【報知】天使の言を指す、これを聞く者の罕なるは謙遜の人の少なきなり

【高く】天に昇らんために生れし人類よ、汝等誇りの誘ひにあひ世の榮光をのみ求めて地に墜るは何故ぞ

九七―九九

【額を打ち】七のP（淨、九・一二二）の一を消せるなり（一

三三―五行参照）

一〇〇―一〇八

第一圏より第二圏に到る徑こみちの階きざはしを、ファイレンツェ市外の一丘

モンテ・アルレ・クローチ (Monte alle Croci) の階と比較せるなり

【ルバコンテ】アルノ河に架せる橋の名、今は改めてポンテ・アルレ・グラーチエといふ

【邑】フィレンツェ。非政を嘲りて反語を用ゐしなり

【寺】「サン・ミニアート・ア・モンテ」(San Min iata a Monte) といふ、モンテ・アルレ・クローチの上にあり

【右にあたり】山門をくぐりて登りゆけばしばらくにして路二つにわかる、こゝにしるせし階はそのうちの右の路にあり

【文書と樽板】當時フィレンツェに行はれし二大詐偽をあぐ一二九九年フィレンツェのポデスタ、モンフィオリートなる者不正の行爲ありて免官せられし時その自白の中にメッセル、ニッコラ・アッチヤイオリのため虚偽の陳述を人になさしめ

きとの一事あり、ニッコラ聞きて、その發覺を防がんと欲し
メッセル・バルト・ダグリオネ（天、一六・五五―七參照）と
共謀して市の記録の中より己に不利なる事項を抹殺せり
またこの頃鹽の出納役なりしキアラモンテージ家の一人、市
より鹽を受取る時は普通の量器を用ゐ、これを市民に賣渡す
時は樽板一枚を取去りて小さくせるものを用ゐ、以て不正の
利を貪れりといふ

【安全なりし世に】かゝる惡事の行はれざりし昔

【右にも左にも】この階のモンテ・アルレ・クローチの階と
異なるところは、その甚だ狭くして登るとき左右の石身に觸
るゝにあり

一〇九―一一一

【聲】voci への語も Cantaron（歌へり）も共に複數なれば

歌へる者の何なるやにつきては異説多し、但し他の多くの場合と同じくこれを以てPの一を消せし天使なりとしvociをparole (詞) の義に解し又は複數を單數の意に用ゐしものと解する人あり(ムーア『批判』四一〇六頁參照)

【靈の貧しき者】マタイ、五・三。一の罪淨まれば天使その額より一のPを消しかつキリスト山上の垂訓の始めなる九福の一句を歌ふを例とす、讀者その句と淨めらるゝ罪と相關聯するを思ふべし

一一五——一七

【平地】第一圈の

一二一——一二三

【消ゆるばかりに】人慢心によりて神を離れ、神を離るゝによりて諸惡を行ふ、故に慢心は即ち諸惡の根源なり(箴言二

一・四（參照）慢心滅すれば他の罪亦皆消ゆるに近し

一二七—一三二

頭に羽毛などのつきたるを知らずして歩む者、人の笑ふをきゝてはじめて異しと思ひ、手をもてさぐり求むる類

一三三—一三五

【鑰を持つもの】淨火の門を守る天使（淨、九・一二—一四）

第十三曲

詩人等第二圈即ち嫉妬の罪の淨めらるゝところにいたれば愛の例をあぐる聲きこゆ、また毛の衣を着、瞼を縫はれて岩石の邊に坐せる多くの魂あり、その一シエーナのサピーア己が

境遇をダンテに告ぐ

一―三

【截りとられ】山の側面きりひらかれて圓形の路を成すをいふ

四―六

【弧線】第二圈は第一圈よりも小さければ圈の弧線の彎曲すること従つて急なり

七―九

【象も文も】或ひは、陰も線も。石面に彫像なきをいふ

一〇―一二

【選ぶこと】路を

一三―一五

【身を】原文、右脇を動うごの中心として身の左方をめぐらし。日

右にありたれば身をめぐらして右にむかへるなり

一六―一八

【光】比喩の意にては神恩の光

一九―二一

【故ありて】罪のために

二五―二七

【愛の食卓】愛は嫉妬と相反す、愛の食卓に招くは愛の例を告げ示して罪を淨むる魂に愛心を養ふを求むるなり

この圈の魂はその臉を縫はれて（七〇―七二行）物を視る能はざるがゆゑに彫像によらず聲によりて教へらる

二八―三〇

聖母マリアの事蹟を第一例とす。カナの婚禮に招かれしとき酒盡きしかばマリア人々を憐みてキリストにむかひ、彼等に

酒なしといふ、キリスト即ち水を變じて酒としたまふ（ヨハネ、二・一以下）

三一―三三

第二例としてピュラデス（ピラーデ）をあぐ。神話に曰く、アガ멤ノン（トロイアの役にて名高きギリシア軍の總大將）の子オレステス（オレステ）、ポキス王ストロピオスの子ピュラデスと水魚の交りありき、アガ멤ノンを殺せしアイギストスさらにオレステスを殺さんとせしときピュラデス叫びて我こそオレステスなれといひその友に代りて死せんとせりと

三四―三六

キリストの教訓を第三例とす（マタイ、五・四四）

三七―三九

【鞭の紐】善に導く方法即ち教訓の例

四〇―四二

【銜は】嫉妬の罪を避けしむる方法はこれと異なる例即ち嫉妬の罰の例を示してこの罪を恐れしむるにあり

鞭は魂をむちうち勵まして善に向はしむる積極的教訓をいひ銜は魂を抑制して惡に遠ざからしむる消極的教訓をいふ、前者には徳の例をあげ後者には罪の罰の例をあげ、淨火の七圈各々この二者を備ふ

【赦の徑】第二圈と第三圈の間にある徑、こみちこの下にいたれば天使額上より卐字の一を消去るなり、嫉妬の罰は淨、一四・一三三以下にいづ

四三―四五

【かなたを】原文、空氣を透して

四九―五一

【聖徒よと喚ばはる】或ひは、聖徒をよばはる。聖母を初め諸天使諸聖徒の助けを求むる祈りの歌 (Litanie de Santi) をうたへるなり

五八一六〇

【毛織】cilicio 馬の毛等を結びあはせて造れる粗き衣にて昔隠者これを肌に着けそのたえず身を刺すを忍びて一種の行となせりといふ

六一一六六

【赦罪の日】寺院に特赦の式ある日近隣の人々赦罪を乞はんためそこに集まるを例とす、かゝる折を待ちて盲目の乞丐等また寺前に集まり憐れなる言葉をいだし、あはれなる姿を示してかの人々に物乞はんとするなり

七〇一七二

目を大にして他人の境遇をうかゞふは嫉妬の人の常なれば目を縫ひふさぎてこの罪を矯む

【鷹】馴れざる鷹は人を見ればたえず恐れて逃げんとするがゆゑにこれを馴らさんため始め絲をもてその瞼を縫ひ合はす習ひありきといふ

七九―八一

路の右方即ち圏の外側は第一圏に接する斷崖あるところにてその縁平らかなればウエルギリウスはダンテの墜落を防ぎかつは圏の状況をしたしくこれに見せしめんとて自ら右側を行けるなり

八五―八七

【高き光】神

八八―九〇

願はくは神恩によりて汝等の心の汚穢けがれ洗ひ去られその記憶だ
にあとに残らざるにいたらんことを

【これを】良心を

九一―九三

【ラチオ人】イタリア人

【益あらむ】生者に請ひてその者のために祈らしむべければ

九四―九六

【眞の都】天の都（エペソ、二・一九參照）

【旅客】天は郷土、人は旅客なり

九七―九九

【かなたに】かの魂に聞えしめんため聲を高くして語れる（二

〇三―五行）をいふ

一〇三―一〇五

【登らむ】天に

一〇九―一一一

【サピール】シエーナの貴婦人、家系不明

【智慧なく】Savia non fui 名の Sapia と savia (賢き) とを

通はして文飾となせるなり

一一二―一一四

【はや降と】^{くだり}われ三十五歳を過ぎしとき (地、一・一―三註

参照)

一一五―一二七

【コルレ】エルザの溪の一丘上にある町の名。一二六九年シエーナ及びその他のギベルリニ黨、フィレンツェ人とこゝに戦ひて敗れ、シエーナ軍の主將プロヴェンツアーノ・サルヴァーニ (淨、一一・一二二) 虜はれて殺さる

【好みたまへるもの】シエーナ軍の敗北。サピアーは極めて嫉妬深き女なればその同郷人特には當時權勢並びなきプロヴェンツアーンをそねみてその敗戦を希へるなるべしといふ

一二一—一二三

【メルロ】鳥の名、異鶇くろつぐみの類

註釋者曰。こは昔の人の話柄かたりぐさに、メルロは雪の頃身を縮めて元氣なけれど空少しく晴るゝをみれば直ちに勢ひを得て、冬すでに過ぐ、主よ我また汝を恐れずといふといへるによれるなりと

【恐れず】わが願ひすでに成就したれば

一二四—一二九

【ピエル・ペッティナーイオ】ピエートロ・ダ・カムピ、幼少の頃よりシエーナに住み櫛を商へるをもてペッティナーイ

才（櫛商）の異名あり、その行ひ極めて清廉にして善行多し、
一二八九年シェーナに死す、市民公費を以てその墓を建つと
いふ

【負債は】我はこゝに來りてたとひ一部なりともわが罪を贖
ひ終ることあたはず、臨終に悔改めし魂の例に従ひ今猶淨火
の門外に止まれるなるべし

一三三―一三五

我もいつかこのところ來りて嫉みの罪を淨めんために汝等
の如く目を縫はるゝことあらむ、されどわがこゝに止まる間
は短かかるべし

一三六―一三八

【この下なる】第一圈の。ダンテ自から誇りの罪をおそるゝ
こと嫉みの罪より甚しきをいへるなり

【かしこの重荷】かしこに罪を淨むる者の背にする石を我今
みづから負ふ心地す

一三九―一四一

【かなたに】原文、下に（即ち第一圈に）

サピールはダンテが淨火の各圈をめぐりゆく者なるを知らず、
再び第一圈に歸りて罪を淨むる者なりとおもへるなり

一四二―一四四

【選ばれし】選ばれて禍ひを享くべき（淨、三・七三―五參
照）

【動かす】汝の知人に請ひて汝のために祈らしめんとて

一四八―一五〇

【求むるもの】天上の福

【わが名を立てよ】彼等我を地獄に罰せらるるとおもへば實を

告げて

一五一—一五三

【タラモネ】トスカーナの南海岸にある一小港。シエーナ人これを以て商業及び軍事上の要港となさんと欲し久しく望みを囑しゐたるが一三〇三年にいたりて遂にこれを買取り、その地勢悪くして効果少なきにかゝはらず多くの資本と勞力とをこれがために費せるなり

【デアーナ】シエーナ市及びその附近の地下にありと信ぜられし川の名。シエーナ市水に乏しければ市民費を惜しまずしてこの水を得んとせりといふ

一五四

註釋者曰。タラモネの築港工事を監督せる海軍の將士等、處の空氣あしきたため病みて死せるをいへるなりと、されど異説

多くして意義分明ならず

【危険を顧みざるは】異本、失ふところ多きは

第十四曲

かの魂の一グイード・デル・ドゥーカ、アルノ沿岸の諸市及びローマニアの腐敗を慨く、また聲ありて嫉妬の罰せられし例を擧ぐ

一―三

グイード（七九―八一行註参照）の詞

四―六

リニエール（八八―九〇行註参照）の詞

一〇——一五

【一者】グイード

【汝の恩恵】汝が神よりうくる恩恵即ち生きながら冥界をめぐるをうること

一六——一八

【小川】アルノ。紆曲してトスカーナの中部を流る、長さ百二十哩

【ファルテロナ】アペンニノ山脈中の一高嶺

二八——三〇

【負債を償ひて】答へて。問はるれば答ふる義務あるがゆゑにかくいへり、グイードはりニエールの問ひに對してその義務を果せるなり

【溪の名】川の名といふに同じ、溪は川に因みてアルノの溪

とよばる

三二―三三

【ペロロ】シケリア島東端の岬。シケリアはもとイタリア本土の一部なりしが地勢の變化によりてこれと分離するにいたりとの説に従ひペロロを斷たれし云々といへるなり（『アエネイス』三・四一四以下參照）

【高山】アペンニノ連山

【水豊なる】pregno（孕める）或ひは支脈多き意に解する人あり

三四―三六

この一聯、海にいたるまでといふに同じ。天太陽の熱によりて海水を蒸發せしむれば、その蒸發せるもの雨となりて川に入り、川またこれを海に注ぐ

【その中に流るゝもの】原、己と俱に行く物

四〇―四二

【溪】アルノの溪即ちアルノ沿岸の地

【性を變へ】人たるの性を失ひて獸の如くなり

【チルチエ】名高き妖女（地、二六・八八―九三註參照）、人を獸に變ぜしむ（『アエネイス』七・一〇以下參照）

四三―四五

【豚】アルノ上流の地カセンチイーノ（地、三〇・六四―六參照）の民を指す

【貧しき】水少なき

四六―四八

【小犬】Bofoli（小さくして善く吠ゆる犬）アレツツオ人を指す

【顔を曲げ】カセンティーノを南に下れるアルノはアレツツ
オ市を距る三哩の處にいたり忽ち曲折して西に向ふ

四九―五一

【狼】フィレンツェ人を指す

五二―五四

【狐】ピサ人を指す

五五―五七

【聞く者】主としてダンテを指す

【眞の靈の】聖靈の教へに従つてわが豫言するところ

五八―六〇

【汝の孫】フルチェーリ・ダ・カールボリ。リニエールの孫、
一三〇二年フィレンツェのポデスタとなりて大いに白黨を虐
ぐ

六一―六三

【賣り】黒黨の賄賂をうけて多くの白黨をその敵の手に渡し
たればなり

六四―六六

【血】市民の

【林】フィレンツェ市

七〇―七二

【魂】リニエール

七六―七八

【好まざる】二〇―二一行参照

七九―八一

【グイード・デル・ドゥーカ】ブレッティノロ（一一二―四
行註参照）の民族の出、十三世紀の人にてギベルリニ黨に屬

す、傳不詳

八五―八七

【我自ら】我は己が罪によりてこの淨めの罰をうく（ガラテヤ、六・八參照）

【侶】を他人とともに頒つあたはざる世の福に（淨、一五・四三以下參照）

八八―九〇

【リニエール】リニエール・ダ・カールボリ。フオルリの名族の出、十三世紀の後半の人にてグエルフィ黨に屬す

九一―九三

【ポーと山と海とレーノの間】ローマニア。北はポー河、南はアペンニノ山脈、東はアドリアティコ海、西はレーノ河をその堺とす（地、二七・二八―三〇註參照）

【眞と悦びに】精神上及び處世上に必要な文武の徳

【その血統】カールボリ一家

九四―九六

【有毒の雜木】敗徳の民

九七―一一一

【リーチオ】リーチオ・ダ・ヴァールボナ

リーチオ、アルリーゴ、ピエートロ、グイード等皆ローマニアの名族の出、十三世紀の人々にて仁侠を以て名高かりきといふ

【庶子】父祖の徳を繼ぐ能はざるをいふ

【ファツブロ】ファツブロ・デ・ラムベルタッチ。ボローニ

アのギベルリニ黨（一二五九年死）

【ベルナルデイン・ディ・フォスコ】卑賤より身を起しその

徳によりてファーエンツァ（ローマニア州ラーモネ河畔の町）
第一流の市民となれるもの

【トスカーナ人】ダンテを指す

【グイード・ダ・プラータ】プラータはファーエンツァの附
近にある町

【ウゴリーノ・ダッツォ】トスカーナに名高きウバルデイー
ニ家の者にて長くローマニアに住めりといふ

【フェデリーゴ・ティニョーソ】リミニの人

【トラヴェルサーラ、アナスタージ】ともにラヴェンナ第一
流の家柄なりしが一三〇〇年の頃殆んど斷絶の悲境にありき
といふ

【處】ローマニア

【愛と義氣】或ひは戀愛のため或ひは義侠のため騎士等が多

くの冒険を試みしたしく苦樂を味ひたりしその昔の日をしのぶなり

一一二——一四

【ブレッティノロ】（今ベルティノロといふ）フォルリとチェゼナの間の町にて前出グイード及びアルリーゴ・マナルデイの郷里なり

【汝の族と多くの民】族はブレッティノロを治めしマナルデイ家を指せるか。スカルタツツイニ曰く、こは一二九五年ギベリリニ黨がブレッティノロより逐はれしをいふと

一一五——一二〇

【バーニアカヴァル】バーニアカヴァルロ、ラヴェンナの西にある町。十三世紀の頃この町を治めしマルヴィチーニ伯爵家には男子なかりきといふ

【カストロカーロ】モントネの溪にある町

【コーニオ】イモラ附近の町

不徳の子孫仁侠の父祖に代りて君たれば惡しといへり

【パガーニ】ファーエンツアの貴族

【鬼】パガーニ家の家長マギナルド・パガーニ・ダ・スシナー
ナ（地、二七・四九―五一参照）

【去る】一三〇二年に死す

【徴】美名

一二一―一二三

【ウゴリーン・デ・ファントリーン】ファーエンツアの人、徳
を以て知らる、一二八二年に死し、その二子また相尋で死し
て家絶ゆ

一二七―一二九

かの魂等足音によりてわれらが右にゆくを知り而して何をもいはざるは即ち我等が方向を誤らざる證據なり、若し誤らば彼等必ず我等に教ふべければなり

一三〇―一三二

【聲】見えざる靈の（淨、一三・二五―七參照）

一三三―一三五

嫉妬の罰の第一例としてカインをあぐ、カインは嫉みのためにその弟アベルを殺せし者なり（創世記、四・三以下）

【およそ我に】神罰をおそれしカインの詞（創世記、四・一四）

一三九―一四一

罰第二例。アグラウロはアテナイ王ケクロプスの女アグラウロスなり、その姉妹ヘルセがヘルメス神に愛せらるゝを嫉

み、神罰を蒙りて化石す（オウイディウスの『メタモルフオ
セス』二・七〇八以下）

一四二―一四四

【これは】これ等の例は人の心を抑制して他人の福を嫉むこ
となからしむるための善き誠めなり

一四五―一四七

【汝等】世人

【敵】惡魔

【銜】罰の例（淨、一三・四〇―二註參照）

【呼】徳に誘ふもの即ち徳の例。鳥を呼ぶにたとふ（地、三・
一一五―七註參照）

一四八―一五〇

【美しき物】諸星（地、三四・一三六―八參照）

一五一

これ故に神は汝等を罰したまふ

第十五曲

詩人等天使の教へに従つて階を踏み幸福の分與を論じつゝ、第三圈即ち忿怒の罪の淨めらるゝところにいたる、ダンテこゝに異象によりて寛容柔和の例をみ後導者と共にすゝみて遂に一團の黒煙につゝまる

一―六

今見ゆる太陽と地平線との間は日出時の太陽と第三時（午前九時頃）の終りの太陽との間に同じ。即ち此時は日没より三

時間前（午後三時頃）なり

【球】太陽の天。そのつねに廻轉して止まざること稚兒の戯るゝに似たり

【かしこ】淨火

【夕】Vespero 午後三時より日沒迄の間をいふ

【こゝ】イタリア。ダンテの計算に従へば淨火の午後三時はイエルサレムの午前三時に當り、聖都の西四十五度の位置にあるイタリアの夜半にあたる

一〇——一二

【輝】光輝のひときは強くなりてダンテの目を眩くらめかせしは（額を壓す）天使の光日光に加はりたればなり

一六——二一

ダンテは直接に天使より來る光を被はんとて手を目に翳せる

もなほ間接の光（即ち天使よりいでて路にあたり反射してダ
ンテを射る光）に堪ふる能はざりし次第を説きあかさんため
光線反射の原理をこゝに敘せるなり

【くだるとおなじ】反射角の投射角と相等しきをいふ、この
兩角相等しきがゆゑに反射線と垂線の間は投射線と垂線の間
に等し

【垂線】原文、石の墜下（*cader de la pietra*）

二二―二四

【目は】光を避けんとてウエルギリウスの方にむかへるをい
ふ

三一―三三

罪清まるに従ひて光を喜ぶことよく深し

三七―三九

【慈悲ある者】（マタイ、五・七）慈悲仁愛は嫉妬に反す

【勝者】嫉みの罪に勝つ者

四三―四五

【ローマニアの魂】グイード・デル・ドゥーカ（淨、一四・八

五―七参照）

四六―四八

【最大^{いと}なる罪】嫉み（淨、一四・八二以下参照）

四九―五一

【處】地上の幸

五二―五四

汝等天上の幸を愛して心をこれに向はしむれば分の減ずる憂

ひなし

【至高き球】エムピレオの天

五五―五七

【我等の所有と稱ふる者】 幸を享くる者

【かの僧院に】 聖徒の心に燃ゆる愛、僧院は天堂を指す（淨、

二六・一二七―九註參照）

六四―六六

【眞の光より】 われ眞を告ぐれども汝さとらず

六七―六九

【幸】 神。神が己を愛する者に臨みたまふこと恰も太陽の光が光澤ある物體に臨むごとし

七〇―七二

神は己を愛する者の愛の熱度に應じて幸を與へたまふ、このゆゑに神を愛することいよく深ければその者のうくる幸またいよく大なり

七三―七五

天上の幸を愛するもの愈々多ければ神の賜ふ幸従つて多く彼等の神を愛する愛また従つて深し（五五―七行参照）、しかして彼等がおの／＼自己の幸を他の者に映すこと鏡に似たり

七九―八一

【五の傷】 天使が劔を以てダンテの額にしるせし七のPの中の五（淨、九・一一二―五参照）即ち悔恨の苦しみによりて清まる五の罪

【かの二】 誇りと嫉みの

八二―八四

【次の圓】 第三圈、忿怒の罪を淨むるところ

【目の】 處のさまを見んとの

八五―九三

寛容の徳の第一例として聖母マリアの事蹟をあぐ。マリアその子イエスを見失ひ夫と俱にこれを尋ね求むること三日、漸くにしてそのイエルサレムの神殿内にあるを知れるも怒らず罵らず、たゞ言葉を和らげて我子よ云々といへること聖書にみゆ（ルカ、二・四一以下）

【多くの人】イエスと問答しむたる教師等（ルカ、二・四六）
九四―一〇五

第二例としてアテナイの君ペイシストラトス（前五二七年頃死）の寛容をあぐ。嘗て一青年路にてペイシストラトスの女に接吻せしかば母怒りて夫に復讐を求めしかども夫これに應ぜざりきといふことローマ古代の文人ヴァレリウス・マクスムスの説話集にいづといふ

【これが名に】アテナイの都ははじめその命名に就いてポセイ

ドン、アテナ二神の間に激しき争ひありしもアテナの勝となりしためかく名づけられたりとの傳説によれり（オウイデイウス『メタモルフオセス』六・七〇以下参照）

一〇六——一四

己を殺すもののために神の赦しを乞へる最初の殉教者ステパノをあげて第三例とす（使徒、七・五四以下）

【民】ユダヤ人

【目を天の】目をひらきて天を望み

一一五——一七

【わが魂】わが魂己が外なる實在に歸れるとき、換言すればわが魂夢幻の境界を脱して五官の覺醒に歸れるとき

スカルタツツイニ曰。ダンテはこゝに客觀と主觀の別を明かにせるなり、彼がその幻の中に見し物は眞（實物）なれども

そは主の眞即ち己が心の中にある物にて心の外の眞うちに非ず、されど人には己の外の存在として物を見るの習ひあれば己の内のみの現象を己の外の現象と見做し主の實を客の實に變へ易し、此故にダンテはその夢心地なりし間己が見もし聞きもせることを己の外にて實際に起れること即ち客の眞客の實なりと思へるなり、而してかく思へることの誤りなるをさとれるはその心外物の感觸に歸れる刹那にあり、されど彼がこの誤りを偽りならざる誤りといへるは、いまだ欺かるとの自覺なく己が前に現はれしもの（こは存在の象かたちにして實在の象にあらねど）を實際に見たりと思ひたればなり、物の現はれしは眞なれどもこれをまことに彼に見せしめしものはその肉眼にあらずしてその心その魂その靈の眼なり

【偽りならざる】主觀の眞なれば

一二一—一二三

【レーガ】二三哩^{ミリア}

一三〇—一三二

【泉】神

【平和の水】寛容の徳

一三三—一三五

我は肉眼のみをもて物を見る人と異なりてよく物の内部をみるが故に今かくの如く汝に問へるも汝の足の定まらざりし理由を問へるにあらずしてたゞ汝を勵ませしなり

一三六—一三八

【怠惰】怠惰のため眠り覺めて後もなほ容易に活動せざるもの

一四二—一四四

【煙】忿怒の罪を淨むる烟。烟の目を冒して物を見るあたは
ざらしむるは怒りの智をくらまして是非を辨ぜしめざるに似
たり

第十六曲

黒烟につゝまれて忿怒の罪を淨むる魂の一、ロムバルディア
のマルコ、ダンテの問ひに答へて意志の自由と世の腐敗を論
ず

一―三

【乏しき】限界狭き

【星】原文、遊星。すべての天體の光をいふ

一三―一五

【のみ】pur これをウエルギリウスの詞とし、汝たゞ我と離れざるやう心せよと讀む人あり

一六―一八

【神の羔】キリスト（ヨハネ、一・二九）

一九―二二

【アーグヌス・デイー】Agnus Dei（神の羔）名高き祈りの歌にてその各節この二語にはじまる

神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等を憐みたまへ
神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等を憐みたまへ
神の羔、世の罪を取去りたまふものよ、我等に平安を與へたまへ

二二―二四

【怒りの結を】怒りの罪を淨む

二五―二七

【いまだ】猶世に生くる者のごとく

【月】calendi（各月の第一日）。永遠の世にては時をかく分つことなし

三一―三三

【奇しき事】生者にして冥界に旅すること

三四―三六

【行くをうる】罪を淨むる者烟の外に出づる能はず、されどその内にては進むも退くも自由なるに似たり

三七―三九

【纏布】肉體

四〇―四二

【近代に】使徒パウロ以來（地、二・二八以下參照）

四六―四八

【ロムバルディアの者】Lombardo 或曰。ロムバルドは國を
指せるにあらず、マルコがヴェネツィアのロムバルデイ家の
出なればかくいへるなりと

【マルコ】十三世紀の人、傳不詳

【ひとりだに狙ふ人なき】原文、人みな弓を弛むべし

四九―五一

【高き處】天の王宮

五二―五四

【死すべし】その苦しみに堪へずして

五五―五七

この疑ひ（世の腐敗の原因に關する）はさきにグイード・デ

ル・ドゥーカよりイタリアの罪惡を聞きしとき（淨、一四・二九以下）既に起れるものなるが今また汝より人類のおしなべて徳に遠ざかることを聞き彼此相對比していよいよ世の眞相をたしかめ疑ひ従つていよく深し

【これと連なる事】わがこの疑ひに關すること即ち世の腐敗【こゝにもかしこにる】マルコの言とグイードの言とを指す。

ダンテはマルコの言によりてマルコ自らいへることとグイードのいへることとの眞なるをかたく信ずるにいたれるなり

六一―六三

【或者】或者は世の墮落を星辰（諸天）の人間に及ぼす影響に歸し、或者はこれを人間の惡に傾く性情、その自由の意志の濫用に嫁す

六四―六六

【汝まことに】汝の無智は汝が世より來り世に屬する者なるを示す

七〇―七二

善惡の應報は自由の意志を豫想す

七三―七五

【天は】星辰の影響は人慾の最初的作用に及べどもその作用の全體に及ぶにあらず（星辰以外の影響あり）

七六―七八

【天と戰ふ】星辰の人慾に及ばず影響と戰ふ。自由の意志もしこの戦ひに勝ちて而して後修養を経れば遂に何物の影響をもうけざるにいたる

七九―八一

汝等は神の大能の下に屬してしかして自由を失はず、この大

能は星辰の力の左右し能はざる理智の魂を汝等に賦與す

八二―八四

【明かに】原文、眞まことの説明者とならむ。spia は穿鑿者の義より轉じて説明者若くは報告者の意に用ゐられしもの

八五―九三

創造の初めに於ては人の魂無邪氣にして思慮なくたゞ本能に従つて己を楽しめます物にむかふ、かくて世の幸を味ふに及び、これに欺かれて以て眞まことの幸となしたゞこれをのみ追ひ求む

【未だあらざるさきより】人の魂はそのいまだ造られざるさきに既に神の聖意みこころの中に存在す、神見てこれを善しとしたまふ

【導者か銜】皇帝（及び法王）か律法、もしその愛慾を正しき道に向はしめずば

九四―九六

【眞の都の塔】天の王宮の塔如ち正義

九七―九九

【手をこれにつくる者】律法を施行する者

【牧者】法王

【齧む】モーゼの律法はイスラエル人が反芻せず蹄分れざる
獸の肉を食ふことを禁ぜり（レビ、一一・三以下）

註釋者曰。反芻は智をあらはし雙蹄は善惡の別をあらはす、
即ち法王が聖典の事に通ずれども善惡の別をあきらかにせず、
天上の幸を顧みずして地上の幸をのみ求め、帝王に代りて正
義を行ふ能はざるをいふと

一〇〇―一〇二

【幸】地上の。民その導者に倣ひて地上の慾を追ひ、靈の幸

を求むることなし

一〇三―一〇五

かく見來れば世の腐敗の原因は星辰にあらずして人間にあり、人間にありと雖もこは人の性惡しきの謂にあらずして治者の指導その宜しきをえざるの謂なり

一〇六―一〇八

【二の日】二の主權即ち皇帝と法王（地、三四・六七―九註
参照）

一〇九―一一一

【一は】然るにその後法王の權は皇帝の權を奪ひ、地上の權は靈界の權に合せらる

【杖】pastorale 僧官のしるしの杖

一一二―一一四

【恐れざれば】二個の獨立せる主權相扶掖してはじめて治國の道を全うす、しかるに政教一途よりいづれば互ひに相顧みて警戒するの要なく互ひに相助くるの要なきがゆゑに従つてその權を恣にするにいたる

【穂を】二主權混合の結果のいかなるやを思ふべし、すべて草木の善惡はその結ぶ實によりて知らるゝなり（マタイ、七・一六以下參照）

一一五——一七

以下實例を擧げて政教混亂の禍ひを示せり

【國】ロムバルディア。アデーチエ（アディージェ）及びポーの兩河の流るゝ國

【フェデリーゴ】皇帝フリートリヒ二世（地、一〇・一一八一—二〇註參照）。フリートリヒがいまだ法王と爭はざりし頃

一一八——一二〇

己あしきたため善人と語りまたはこれに近づくことをすら恥づ
る者今は恐れずしてかの地を過ぐるを得、かの地に善人なけ
ればなり

一二一——一二三

【神の己を】かの敗徳の地を去りて神の許に歸るをうる日を
待侘^{まちわぶ}る三人の翁

一二四——一二六

【クルラード・ダ・パラッツオ】ブレッシアの貴族

【ゲラルド】ゲラルド・ダ・カーミノ。トレヴィーゾの人にて
長くこの町を治めしもの（一二三〇六年死）、ダンテ『コンヴィ
ヴィオ』の中に（四、一四・一二四以下）その徳を稱せり
【グイード・ダ・カステル】レッジオの人

【ロムバルド】（ロムバルディアの人）グイードはこの異名によりて却つてよく知らるとの意、フランス人云々については或ひはグイードの聞えフランス人の間に高く彼等グイードを呼ぶにこの異名を以てせりといひ或ひはフランス人はイタリア人をおしなべてロムバルドと呼べりともいふ

一二七——一二九

【荷】政教の

一三〇——一三二

【レーヴィ】イスラエルの民の中なる僧侶の族にて代々産業をうくるをえず（民數紀略一八・二三）。ダンテはマルコの言を聞きて寺院の徒に俗慾に腐心するの非なるを思ひ、レーヴィの族が専心神に事ふるをえんため産業に與かる能はざりし次第をさとりえたりとの意

一三三―一三五

【消えにし民】昔の民（文武の徳あまねかりし頃の）

一三六―一三八

我汝の言を聞き違へたるか或ひは汝我になほもゲラルドの事をいはしめんとてかくいひて我を試むるか、汝トスカーナの者にして少しも彼の事を知らざる筈なし

【トスカーナ】ゲラルドの名はトスカーナにて最も人に知られきといふ

一三九―一四一

我若し彼をゲラルドと呼ばずばガイアの父といふの外なし

【ガイア】ゲラルドの女（一二二一年死）、素行修まらざるを以て知らるといふ（但し異説あり、されど思ふにこゝにては善き父と惡しき子とを對照せるならむ）

一四二——一四四

【光】天使よりいづる

【彼に見えざるさきに】罪未だ清まらざるがゆゑに天使の前にいづるをえず

第十七曲

ウエルギリウスとともに黒烟をいでて後ダンテまづ忿怒の罰の例を異象に觀、次で天使の教へに従ひ階を上りて第四圈即ち懶惰の罪の淨めらるゝ處にいたる、この時日既に暮れてまた進むこと能はざれば導者はこゝにダンテのために人間の愛慾を論じ、淨火の罪の分類を明かにす

一—三

【鼯鼠】鼯鼠の眼は薄き膜に蔽はれて物を見る能はずといへる古説によれり

七—九

【第一に】烟をいでて第一に

一〇—一二

【雲】黒烟

【水際に死せる】水際即ち山麓を照らさざる

一三—一五

【外部より奪ふ】外物の刺激を人に感ぜしめざる

一六—一八

想像の力を刺激してこれを活動せしむるもの官能にあらざる
ときは即ち星辰若くは天意なり

【光】力。天より出づる力は或ひは星辰の影響により（自ら）
或ひは上帝の聖旨（意志）によりて人の想像を刺激す

一九―二一

怒りの罰の第一例、プロクネ（プロニエ）

【鳥】鶯

【女】プロクネ。トラキア王テレウスの妻なり、その妹ピロ
メラ、テレウスに辱しめられしとき、仇を報いんため己とテ
レウスの間の子イテュスを殺し、夫を欺いてこれが肉をくら
はしむ、神々即ちその罪を惡み化して鳥となす（オウイディ
ウス『メタモルフオセス』六・四一二以下参照）

ギリシアの物語によればプロクネは鶯に。ピロメラは燕に化し、
ラテンの物語によれば前者は燕に後者は鶯に化す、ダンテは
ギリシアの物語に従へり

二二—二四

【わが魂は】心異象にのみ凝りて外部の印象をうけざるをいふ

二五—三〇

第二例、ハマン。ハマンはペルシア王アハシュエロス（アツスエロ）の臣なり、君寵淺からず諸民跪きてこれを拜す、しかるにユダヤ人モルデカイ（マルドケオ）なるもの獨りこれを敬はざりしかばハマン大いに怒り諸州のユダヤ人を悉く殺さんと謀れり、王妃エステルこの謀を王に告げハマン遂に木に懸けて殺さる（エステル書、三以下）

三四—三九

第三例、アマータ。ラチオ人の王ラティヌスの妻なり、アエネアスの軍近づくを見てこれと戦へるツルヌス（女婿となる

の約ありし）既に死せりと思ひその女ラウイニアがかの漂流の客アエネアスの妻とならんこと恐れ怨みの餘り縊りて死す（『アエネイス』一二・五九五以下參照）

【處女】ラウイニア

【かの人】ツルヌス（地、一・一〇六―八並びに註參照）

四〇―四二

【消えざるさきに】睡り未だ全く去らずしばらく覺醒と戦ひ眠れる者をして夢現の間にさまよはしむるをいふ、ダンテの異象の一時に消え失せずしてなほしばらく眼前にちらつきたるにたとへしなり

四二―四五

【見慣るゝ光】日光

【もの】天使の光

四九―五一

【顔を合す】物を見るの願ひ切なる時はまのあたりこれを見るにあらざればしづまることなし

五二―五四

【わが力】わが視力

五八―六〇

かの天使の人を愛することは人の己を愛するごとく深し、彼は人に請はるゝを待たずして進んで人を助け導き、人は他人の乏しきをみれば未だ乞はれざるにはやくも助けを拒まんとす

六一―六三

夜の間は一步もさきに進むをえざること前に見ゆ（淨、七・五二以下参照）

六七―六九

【顔を】天使羽をもて詩人の額上なる「字の一を消せるなり
【平和を愛する】マタイ、五・九。惡しき怒り云々はその解
にて善き怒り（義憤）に對す

八五―八七

ウエルギリウスはダンテの問ひに答へて懶惰の罪のこの圈に
淨めらるゝをつげたり、懶惰の罪は即ち第一の幸を愛してそ
の熱心足らず（義務に缺く）、あたかも舟人の擢を怠りて徒に
時を失ふに似たる罪なればなり

九一―九三

【自然の愛】宇宙萬物の中に自然に備はる愛即ち本能的の愛
慾

【魂より出づる愛】自由意志により選びて物を求むる愛即ち

理性的の愛慾

九四―九六

【他は】選擇の愛の誤るさま三あり、（一）人の禍ひを愛する
とき、即ち誇り、嫉み、怒り（一二二行以下參照）、（二）第
一の幸（神）を愛してその愛足らざるとき、即ち懶惰（一二
七―三二行參照）、（三）第二の幸を過度に愛するとき、即ち、
貪慾、多食、邪淫（一三三行以下參照）

九七―九九

【第一の幸】（複數）天上の幸特に上帝

【第二の幸】地上の幸

一〇六―一〇八

愛慾の目的はこれを起すもの（主體）の福にあるがゆゑに苟
くも愛慾を起しうるものにして己が禍ひを求むるはなし

一〇九——一一一

何物も神を離れて自ら存在し能はざるがゆゑに従つて神を憎む能はず、神を憎むは己を憎むにほかならざればなり

一二二——一二四

禍ひを愛する愛かく己にも神にもむかはずばたゞ他人にむかふのみ

【汝等の泥】人間の性情

一二五——一二七

傲慢

一二八——一二〇

嫉妬

一二一——一二三

忿怒

一二四―一二六

【下に】下の三圈に

一二七―一二九

【一の幸】神

一三三―一三五

【また一の幸】地上の幸

【凡ての幸の】眞の幸福の因たり果たるものはたゞ神のみ

一三六―一三八

【三に分る】貪慾、暴食、邪淫の

第十八曲

ウエルギリウスまたダンテのために愛慾と自由意志の關係を論じ、論じ終れば時既に夜半に近し、懶惰の罪を淨むる一群の靈後うしろより來て彼等を過ぎつゝ熱心の例及び懶惰の罰の例を唱ふ、靈遠く去るに及びてダンテ眠る

四―六

【渴】求知の念

一三―一五

【すべての善惡の】淨、一七・一〇三―五參照

一六―一八

【瞽等】無智の徒。彼等はいかなる愛に於ても愛その者はあしからずとの謬見をいだき（三四―六行）而して自ら世の指導者たらんとす

一九―二一

人の魂には物を求むる天授の力あり、誘ふものにあはざる間はこの方内に眠れども一たび幸のために目覺むれば直ちに外にあらはれて凡てその幸と認むる物を求めんとす（淨、一六・八五以下參照）

二二―二四

汝等の智力は外物の印象をとらへ來りてこれを汝等の心に示す

二五―二七

若し心この印象に傾きこれと結合するにいたればこゝに愛生ず、これ覺醒の愛即ち外物の刺激によりて心の中なる自然に物を求むる情とあらたに合する力なり

二八―三〇

【ところ】火炎界（淨、九・二八―三〇註參照）。古、火の上

方に向ふを以て火炎界に登らんとするその本來の性向による
とおもへるなり、火こゝにあれば即ちその處をえ、地上にあ
るよりも長く保つを得

三一—三三

實在の樂しみに捉へられし魂はその愛慾の目的に到達せんと
の願ひを靈的作用によりて起しこの願ひを満たさざればやま
じ

ダンテは『コンヴィヴィオ』三、二・一八以下に愛の眞義を論
じて、こは魂と愛せらるゝものとの靈的結合に外ならず、魂
はたとひその自由なると然らざるとによりて緩急の差ありと
も、その本來の性質にもとづき走りてこの結合を求むといへ
り

三七—三九

凡そ人はその自ら認めて幸となすところのものを求むるが故に目的めあて（客體）常に善しとみゆれど、その實常によきにあらざる（淨、一七・九四以下參照）、また假りによしと見做すも愛の過不足によりて罪を犯すことあるは恰も良き蠟の上にあしき印影かたおを捺すがごとし

四三―四五

若し外物の印象をうけて愛生じ、魂は物を求むるその自然の性に従つて動くの外なしとせばその向ふところ正しとも正しからずとも何ぞこれがために善惡の報いをうくるに當らむや
四九―五一

物質と類を異にし而してなほこれと相合するすべての靈魂は一種特有の力即ち人自然に物を認め且つ愛する性向を有す

【靈體】forma sostanzial 主要の本質。人間に於てはその靈魂

五二―五四

この性向魂の中に潜む間は見えざとられず、そのはたらきによりてはじめてさとられ結果によりてはじめてあらはる

五五―六〇

物を認むる最初の力（理智の基）と物を求むる最初の情（愛慾の基）とは自然に魂に備はるものにてそのいづこより來るやは人知り難し

【最初の願ひ】自然に物を認めてこれを愛する情。自由の愛にあらざるがゆゑに毀譽褒貶を受くべきものにあらず

六一―六三

他の諸々の愛慾がこの自然の愛と相結び相和するにあたりては即ち自然の愛が自由の愛にうつるにあたりては善惡をわかちてしかして取捨すべき一種の力（理性）汝等の中にあり

六七―六九

古來哲人が徳義を説けるは意志の自由を認めたればなり

七三―七五

【ベアトリッチェ】月天に自由の意志を説く（天、五・一九以下）

七六―七八

【月】四月十一日と十二日の間の夜半近き月。その一面缺く
れども猶小さき屋の光を没するに足る

おくれしは月出のおそきをいへるにあらずして、夜半近きほど
おそき時にみえしをいふ、月の出では午後十時の頃なり
【釣瓶】 secchion イタリアに用ゐらるゝ金屬製の釣瓶、その
形球の上部を切り取れるごとし

七九―八一

十一月後半の頃ローマより見れば日はサルディニアとコルシーカ兩島の間に當る方向（やゝ南にかたよれる西）に没す【天に逆ひて】西より東に。即ち諸天の運行に従つて東より西に運行するのほか、その固有の廻轉によりて西より東に逆行するなり（ムーア『ダンテ研究』第三卷六―七頁並びに脚註同七二頁以下參照）

八二―八四

【マントヴァーナの邑よりも】或ひはマントヴァ（マントヴァーナ）領内の何れの村よりもの意と解する人あり

【ピエートラ】古名アンデス、ウエルギリウスの生地にしてマントヴァ市の附近にあり

【わが負はせし荷】わが彼に負はせし疑ひの荷或ひは、わが負へる荷

八八―九〇

【民】懶惰の罪を淨むる

九一―九三

【イスメーノ、アースポ】イスメノス、アソポス。テバイ附近の河の名。テバイ人等夜燈火をともし、これらの川の邊に群がり走りてこの町の守護神なるバツコス（バツコ）の助けを求めきといふ

一〇〇―一〇二

熱心の例。マリア、カエサル

【マリア】聖母マリアがその親戚エリザベツを訪はんとて山地なるユダの邑にいそぎてゆけることルカ傳（一・三九）にいづ

【チエーザレ】ユーリウス・カエサル。

カエサル、マルシリア（マッシリア、今のマルセイユ）を圍み、ブルートウスをこゝにとゞめて急遽イスパニアに赴き、ポムпейウス部下の將アフラニオ等をイレルダ（今のレリダ）に攻む

一〇三——一〇五

【恩恵】神恩

一〇九——一一一

【徑】*portugio*（孔又は裂目）掘り穿たれし岩間の徑をいふ、

一一四行の *buca* これと同じ

一一五——一二七

【我等の】我等の止まらざるは神の正義に従はんためなれば
無禮とみゆとも許せとの意

一一八——一二〇

【バルパロッサ】フリートリヒ一世（一一五二年より一一九〇年まで皇帝）の異名

【ミラーノ】一一六二年。バルパロッサこの市を破壊す

【院主】註釋者或曰。こは一一八七年に死せる「サン・ヅエノ」僧院の院主ゲラルド二世の事を指すと

一二一——一二三

【ひとりの者】ヴェロナの君アルベルト・デルラ・スカーラ（一二三〇一年死）。一二九二年その庶子ジュセッペをかの僧院の主となせり

一二四——一二六

【身全からず】跪者なりきといふ、モーゼの律法に従へば不具者聖職を奉ずるをえず（レビ、二一・一七以下）

一三〇——一三二

【嘸み】懶惰の罰せられし例をあげてこの罰を責むるをいふ
一三三―一三五

罰の第一例、イスラエル人。水分たれし紅海を渡りて、エジプトよりのがれいでしイスラエル人（出エジプト、一四・二一以下）は神の人モーゼの教へを守らざりしたため、ヨルダン川の流るゝ地パレスティナに到らずして死せり（ヨシュア、五・六）

一三六―一三八

罰の第二例、アエネアスの侶等。アンキセスの子アエネアスと漂流の苦しみを最後まで俱にする能はざりしトロイア人は譽を棄ててシケリアに残れり（『アエネイス』五・七〇〇以下
参照）

第十九曲

ダンテ夢にセイレン（シレーナ）を見、さめて後天使に導かれてウェルギリウスとともに第五圈に達す、こゝには貪慾の罪を淨むる魂の俯きて地に伏せるあり、その一法王ハドリヌス五世ダンテとかたる

一―三

明方近き時（地、二六・七一―一二並びに註參照）

【地球】前日の暑さの空中又は地上に残れるもの冷やかなる地球のために消ゆ

【土星】古、土屋に熱を消す力ありとおもへるによる

【月】月はその光によりて空氣と地球を冷却すとおもへるな

り、月の寒さといふは猶夜の寒さといふごとし

四一六

【ゼオマンティ等】geomanti 偶然に地上に劃點し、その點にもとづきて線をひき形を作りて卜する者

【大吉】maggior fortuna その所謂大吉なるものは劃點の位置殆んど寶瓶宮の後半と雙魚宮の前半の星を連ねし如し。太陽は今白羊宮にあり、而して雙魚寶瓶の二宮はこれに先だつものなればこれらの星の東にあらはるゝは日出前約二時間なり【ほどなく白む】日光のため。原文、その（大吉の）ためにしばし暗さを保つ

七一九

【女】シレーナ（一九一二行）。貪婪、暴食、多淫の象徵なり（五八一六〇行）、これらはその實極めて醜きものなれども

人、情に動かされ誤り見て美しとす（一〇——一五行）

一九——二一

【シレーナ】セイレン、神話に曰。セイレンはイタリア西南の海の一島に住む妖女なり、その美しき歌をもて航海者の心を迷はしこれを引きよせて命を斷つと。海は地中海

二二——二四

【わが歌をもて】異本、わが歌まで

【ウリッセ】オデュセウス。神話によればオデュセウスを迷はせしものはキルケ（チルチェ）にして（地、二六・八八以下）キルケはセイレンにあらず、ホメロスの『オデュセイア』にはオデュセウス、チルチェの教へに従ひ蠟をもて耳を塞ぎてセイレンの難を免かれしことみゆ、ダンテの據る處あきらかならず

【我と親しみて】一たび罪の快樂に耽る者容易に正道に歸らざるの意を寓す

二五―二七

【淑女】註釋者多くはこれを道理の表象となす、異説多し

三一―三三

【とらへ】淑女かのセイレンをとらへ

三四―三六

この一聯すべてムーアの『ダンテ全集』によれり、異本多し、委くは『神曲用語批判』（三九三―四頁）

【門】岩間の徑をいふ

三七―三九

【新しき日】四月十二日午前の太陽

四〇―四二

ダンテは頭をたれ身をかがめて歩みゐたるなり

四九―五一

【哀れむ者】マタイ、五・四に曰、哀れむ者は福なり。この
圈の靈泣き悲しめること前にいづ（淨、一八・九九）

【女王】所有者

【扇げり】ダンテの額上に現れる卍字の一を消さんため

五八―六〇

【上】上の三圈即ち貪婪、多食、及び邪淫の罪を淨むるところ

【年へし】世の初めよりありし罪なればなり

【人いかにして】人、道理の光に照らして此等の慾の真相を
觀その誘ひに勝つをいふ

六一―六三

【步履をはやめ】原、踵に地をうち

【天】原、大いなる海

神は諸天をめぐらしその美を示して汝等を抱けば汝等その招き（餌）に従つて心を天にむかはしめよ（淨、一四・一四八以下参照）

六四―六六

【聲】鷹匠の

【食物】獲物の一部を鷹に與ふる習ひなりきといふ

六七―六九

【環り】環行すべき處即ち第五圈、第五圈は貪婪の罪を淨むるところなり、ダンテは七大罪の分類に従ひ主としてこの罪をあげたれど浪費者も亦この圈に罰せらるゝこと地獄の場合と同じ（淨、二二・四九以下参照）

七三―七五

【わが魂は】詩篇一九・二五。塵。は地なり

七六―七八

ウエルギリウスの詞

【義と望み】神の正義に従つて淨めの苦しみをうくとの觀念及び時至れば天に登るを得との信仰

七九―八一

魂（ハドリアヌス）の答へ

【右を】園を右よりめぐれば兩詩人の左は山腹右は圈の外側なり

八二―八四

【かくれたる者】かく我等に答へし靈。靈皆俯むきて伏しむたれば目にてはそれと知り難かりしも耳にて知りえたりとの意

八五―八七

かの靈と語らんとて目付にて導者に許しを請へるに導者もまた目付にて許しを與へしなり

九一―九三

【物】罪を淨むること。罪の清むるを果實の熟するにたとへしなり

【意】罪を淨むるの願ひ

九七―九九

【ペトルスの繼承者】法王（地、二・二二―四參照）。この

法王は名なオットブオノ・デ・フィエースキといひコンチ・デイ・ラヴァーニアと稱するゼーノヴァの貴族の出なり、一二七六年七月選ばれて法王となりハドリアヌス五世と稱し在位三十八日にして死す

一〇〇——一〇二

【流れ】ラヴァーニア

【シエストリとキアーヴェリ】東シエストリ及びキアーヴェリはともにゼーノヴァの東にある町の名

【稱呼】川の名なとりてコンチ・ディ・ラヴァーニアといへり
一〇三——一〇五

われ法王の位にあること僅かに月餘に過ぎざりしかど、よくこの任の甚だ重きを知りえたり

【これを泥に汚さじ】法王の位を辱しめじ
一〇六——一〇八

【虚偽】世の富貴は眞の幸にあらざること
一〇九——一一一

かくの如き榮位をうるも慾心なほ飽かずまた飽かすべき地位

なきを見て我は永遠の生命眞いのちまことの幸を愛するにいたれり

一一二——一一四

【かの時】法王となれる時

一一五——一一七

【爲すところのこと】精神上に及ぼす惡結果

【苦き】忌むべきさまなる

一二一——一二六

【働】善行

【正しき主の】神の善しとみたまふまで、罪の全く清まるまで

一二七——一二九

【耳を傾け】ダンテを見る能はざれども聲近く聞ゆるにより
てその跪けるをさと

一三〇——一三二

【汝の分】地、一九・一〇〇—一〇二參照

一三三—一三五

默示録、一九・一〇參照

一三六—一三八

【また嫁せず】或問ひに答へて甦る者は嫁娶せずといへるキリストの言（マタイ、二二・三〇等）。寺院は淑女法王はその夫なり（地、一九・五五—七及び同一〇六—八註參照）、されどかゝる關係は現世にのみありて後世^{ごせ}になし故に昔法王なりきとて我今何ぞ殊更に敬をうくるに足らむ

一三九—一四一

【ところのもの】即ち神に歸るにあたりて缺くべからざるところのもの（九一—三行）

一四二—一四四

【アラージヤ】ハドリアヌス五世の姪にてルーニジアーナの
猛將モロエルロ・マラスピーナ（地、二四・一四五―七註參
照）の妻となるもの。古註に曰、ダンテは一三〇六年マラ
スピーナ家に客たりしときこの女を見かつその多くの善行を
知れりと

【わが族】原、我等の家。フイエースキ一家

一四五

わが近親の中にはアラージヤの外に善人なければ汝彼女に請
ひてわがために天に祈らしめよ

第二十曲

ダンテ、ウエルギリウスとともに山側に沿ひて進み清貧と慈善の例を聞く、ユーグ・カペーの靈第五圈にありてダンテとかたり己が子孫の罪業をのべかつその夜の間に誦す^ずべき貪慾の罰の例を告ぐ、詩人等さらに前進すれば全山こゝに鳴動して頌詠の聲四方に起る

一—三

一〇〇の意は法王ハドリアヌス五世となほも語らんと欲するダンテの願ひ、ま〇さ〇る〇意〇は〇ダンテに妨げられずして罪を淨めんと欲する法王の願ひにあたる

四—六

【障礙なき】地に伏しゐて路の妨げとなる魂なき

七—九

【縁】第四圈に界する斷崖

一〇―一二

【牝の狼】貪婪（地、一・四九以下參照）。始祖の昔より故にありし罪（地、一・一一一參照）なれば年へしといふ

一三―一五

【人或ひは】地上の事物の變遷するを諸天の運行に基因すとなす（淨、一六・六一以下參照）

【逐ふ者】獵犬（地、一・一〇〇以下參照）

一九―二四

清貧任慈の第一例、聖母マリア

【客舍】厩。聖母キリストをこゝに生みて馬槽かひをけの中に臥さしむ（ルカ、二・四以下）

二五―二七

第二例、ガイウス・ファールブリキウス・ルスキヌス。紀元前二八二年ローマのコンスルとなりサンニタ人と和を議するにあたりてその賄賂を却く、ファールブリキウス死して餘財なく市民公金を以てその埋葬の費を辨ぜりといふ、ダンテの彼を賞せる詞他の著作にもいづ（『コンヴィヴィオ』四、五・一〇七以下及び『デ・モナルキア』二、五・九〇以下参照）

三一―三三

第三例、ニコラウス（ニツコロ）。聖ニコラウスはミーラ（小アジアのリキアにあり）の僧正なり、傳へ曰ふ、嘗て人あり貧困のためにその三人の女を賣らんとす、ニコラウスこれを聞きてひそかに財囊をその家の窓より投げ入れかの女子等なして汚辱の生涯を免れしむと

三七―三九

【報酬】かの靈のために世の善人の祈りを請ふこと

四〇―四二

【慰】善人の祈り。そのこれを望まざるは子孫に善人なければなるべし

四三―四五

フランスのカペー王家（悪き木）の祖先（根）なるを告げしなり、このカペー家は一三〇〇年にフランス、ナポリ、イスパニアの諸國を治めき

四六―四八

されどフランドル人にして若し充分の力あらば速かに仇をわが子孫にむくいむ

ドアジオ、リルラ等はフランドルの主なる町の名なり、こゝにてはフランドル全體を代表す

一三〇二年クルトレイの戦ひにフランドル人大いにフランス軍を破りてこれを國外に逐ひ以てフランス王フィリップ四世の奪略に報いたり

四九―五一

【ウーゴ・チャペッタ】ユーグ・カペー。フランスのユーグ公の子なり、九八七年ルイ五世の後を承けてフランス王となり九九六年に死す

【フィリップとルイージ】フィリップ一世、二世、三世、四世。ルイ（ルイージ）六世、七世、八世、九世（以上一三〇〇年までにフランス王となれるもの）

五二―五四

【屠戸の子】或ひは、牛商の子。訛傳に基づく

註釋者のいふごとくダンテはユーグ・カペーとその父ユーグ

とを混じ、當時の俗説に従つてこれを牛商の子となせるに似たり

【昔の王達】カロリング王家の諸王。その最後の王はルイ五世（九八七年死）なり

【灰色の衣を着る者】僧となれる者。但し何人を指せるや明かならず、恐らくはダンテの記憶の誤りならむ

ルイ五世死して嗣子なく當時カロリング家に屬する者としてはたゞその叔父、ロレーヌ公のシャルルありしのみ、されどこのシャルルはユーグ・カペーにとらはれて獄に下され九九二年に死せり

五五―五七

五五行より六〇行に亙る二聯もユーグ父子の事蹟の相混じたる結果なるべし

【わが手に】攝政として

五八一六〇

【わが子】ユーク・カペーの子はロベール二世といひ九九六年より一〇三一年までフランス王たり、その戴冠式を行へるは九八八年即ちカペー即位の翌年なり

【寡となれる】ルイ五世の死によりて

【かの受膏の族】原、これ等の者の聖別せられし骨（即ちカペー家よりいでし前記の諸王）

六一―六三

【プロヴェンツア】一二四六年、シャルル・ダンジュがプロヴァンスの伯きみなるラモンド・ベリンギエーリの女ベアトリスを娶れるためこの地フランス王家に屬せり

六四―六六

【贖ひのために】暴逆の罪を贖はんために、嘲りの反語

【ポンティイ】ポンティイウ、ノルマンディイ（ノルマンディイア）、ガスコニー（グアスコニア）はいづれもフランス王（特にフィリップ四世）の奪へるイギリス領地

六七―六九

【カルロ】シャルル・ダンジュー。一二六五年ナポリ王國を征服せんとてイタリアに來れり

【クルラディイノ】一二六八年とらへられてナポリに殺さる（地、二八・一三一八註參照）、時に年十六

【トムマーゾ】聖トマス・アクィナス。名高きイタリアの聖僧（天、一〇・九七―九註參照）、一二七四年リオンの宗教會議に赴かんとてナポリを出でしときシャルル・ダンジュー己が非行の法王の前に摘發せられんことを恐れ途にて毒殺せし

めきとの説による

七〇―七二

以下九三行までカペーの豫言

【他のカルロ】シャルル・ド・ヴァロア。フランス王フィリッ
プ四世の弟なり、法王ボニファキウス八世に招かれ平和の使
命を帯びてフィレンツェに來れるも（一三〇一年）黒黨をた
すけて白黨をしひたげたれば却つて甚しく市の擾亂を大なら
しむ、後又シケリアを碍んとてかの地に赴けるもその志を果
さず翌二年手を空しうしてフランスに歸れり

【己と】己と己が一族の罪惡を

七三―七五

【身を固めず】軍を率ゐず

【槍】裏切。うらぎりジュダこの武器を用ゐてキリストを賣れり（ル

カ、二二・四七―八參照)

七六―七八

【いよく重し】かゝる罪かゝる恥を小さしとしてその非を悔いざるによりて罪も恥もいよく重き報いを來す

七九―八一

【カルロ】シャルル・ダンジューの子シャルル二世(一二四三―一三〇九年)。一二八四年アラゴナ王ペドロ三世の將ルージャロ・ディ・ラウリアとナポリ灣に戦ひ虜となりてシケリアに送らるゝされど殺さるゝにいたらず、父の死後その王位を繼ぐ

【己が女】一三〇五年その女ベアトリスをフェルラーラの君なるエステイ家のアッツォ八世(淨、五・七六―八並びに註參照)に與へて莫大の金を得たりといふ

八二―八四

【己が肉】わが肉親の子

八五―八七

以下九〇行まではフィリップ四世の法王ボニファキウス八世をとらへしことを責む、ボニファキウスは聖者にあらずして却つて墮地獄の罪人なれどもその位貴ければこれを責むる者その道を得ざりしを以てダンテは大罪と認めしなり。フィリップ四世ボニファキウスと相敵視すること久し、僧侶課税の争ひ及びその他の衝突あるに及びて兩者の隔離愈々甚しく遂に一三〇三年四月フランス王の破門となり、フランス王はこれに對して法王の廢位を圖り同年九月グリエルモ・ディ・ノガレット及びシアラ・デルラ・コロナをして法王をその郷里アナーニ（即ちアラニア）にとらへしむ

【小さく】わが子孫の過去未來における一切の罪業も法王虐待の一事に比ぶれば小さしとみゆべし

【百合の花】フランス王家の旗章

【代理者】法王。法王は地上におけるキリストの代表者なり
八八―九〇

【嘲り】昔の嘲り（マタイ、二七・三九以下等）をこの時ボニファキウスの身にて再びうけたまふ

【酷と膽】聖書の語（マタイ、二七・三四）を借りてボニファキウスの苦しみをいひあらはせるなり

【生ける盗人】二人の盗人キリストと共に磔殺せられし古事（マタイ、二七・三八及び四四）に基づき、かのボニファキウスを嘲りし前記ノガレット及びシアラの二人を指す

この二者は自ら苦しみをうけしにあらず、また殺されしにも

何等の害を被りしにもあらず、彼と此と異なるところこゝにあり、しかしてこの差別を適確にあらはせるもの即ち *ven.* (生ける) の一語なり、さればこの形容詞は當時の光景に一の新しき色彩を施すものといふべし (ムーア)

法王は獄にあること三日にしてローマに歸るをえたれどもかゝる汚辱の痛苦に堪へかね遂に病を得て薨ず (一二〇三年十月) 九一—九三

【第二のピラート】フィリップ四世。キリストを敵手に渡せしポンテオ・ピラト (ルカ、二三・二四—五) に似たれば斯く【殿の中】フィリップ四世がテムプル騎士團 (もとソロモン王の宮殿ありし處にその本部を置きたるをもてこの名あり) を迫害してその富を私せるをいふ (一二〇七年以降)。法によらずしてといへるは騎士等の正不正を分明に審理せずしての意

九四―九六

【うるはしうする】人の怒りの如く直ちに激發することなく、しづかに時の至るな待つをいふ

九七―九九

【新婦】處女マリア。聖靈に感じてキリストを生めり（マタイ、一・一八）

【わが語り】一九―二四行

一〇〇―一〇二

晝の間は我等祈る毎に恰も祈りの後の唱和の如く清貧仁惠の例を誦し夜到ればこれに代へて貪慾の罰の例を誦す

一〇三―一〇五

罰の第一例。ピグマリオン（ピグマリオン）はトュロス（フィニキアにあり）の王なり、その姉妹デイドの夫なるシュカイ

ウスの財寶を奪はんためこれを殺しかつデイドを欺きて己が罪を蔽へり（『アエネイス』一・三四〇以下參照）

一〇六一一〇八

第二例。ミダス（ミード）はフルュギアの王なり、己が身に觸るゝもの悉く變じて黄金となるを願ひ、バツコス神に請ひてその許しをえたり、されど食物もまた口に觸るゝに従つてすべて黄金に化するをみ、遂に救ひをバツコスに求む（オウイデウス『メタモルフォセス』一一・八五以下參照）

一〇九一一一一

第三例。ユダヤ人アカン、エリコの分捕品の中より金銀若干を盗みしかば、ヨシユア（ヨスエ）人々に命じ石にてこれのうちころさしむ（ヨシユア、七・一以下）

一一二一一一七

第四例、サツピラとその夫アナニア。あひはかりて己が私慾の爲に使徒等を欺かんとし、ペテロに責められて仆れ死す（使徒、五・一一一〇）

第五例、ヘリオドロス（エリオドロ。シリア王セレウコスの命をうけてイエルサレムの殿みやの資物を奪はんとせし時一騎士忽焉としてその前に現はれ、馬蹄にかけてこれを逐へり（マツカベエイ後、三・七以下）

第六例、ポリュメストル（ポリネストル）。トラキアの王なり、トロイア王デリアモスの委托によりてその末の子ポリュドロス（地、三〇・一八）を養ひゐたるがトロイアの衰運に赴くを見るやポリュドロスの富を私せんとし、これを殺してその骸むくろをば海に投じぬ、プリアモスの妃ヘカベ、ギリシア軍にとらへられてこの地を過ぐとはからずもわが子の骸を海

濱に見出し（地、三〇・一六―二一參照）悲しみのあまりに復讐を企て、偽り謀りてポリュメストルに近づき、その兩眼を抉りてこれを殺せり（オウイディウス『メタモルフオセス』一三・四二九以下參照）

第七例、マルクス・リキニウス・クラッスス（前五三年死）。カエサル、ポムпейウスとともにローマの三頭政治を行へるもの、強慾を以て名高し、傳へ曰ふ、クラッスス、パルチア人に殺されしとき王オロデスその首級を求めて熔かせる黄金を口につぎこみ、汝常に黄金に渴きゐたれば今こそこれを飲めといへりと

一三〇―一三二

【デロ】デロス、キュクラデス諸島の一にてエーゲ海中にあり、神話に曰、この島はもと浮島なりしがレトこゝにてアポ

ロン、アルテミスの二神（即ちゼウスとレトの間の子）を生むにいたれるより爾來一處に固定して再び浮遊することなしと（『メタモルフオセス』六・一八九以下參照）

【天の二の目】日（アポロン）と月（アルテミス）

一三六―一三八

【至高處】キリストの降誕にあたりて諸天使のうたへる歌（ルカ、二・一四）

一三九―一四一

【牧者】ルカ、二・八以下參照

一四二―一四四

【歎】淨、一九・七〇―二及び二〇・一六―八參照

一四五―一五〇

鳴動及び合唱の原因（淨、二一・四〇以下）を知るの願ひ甚

だ切なるをいふ

【疑ひ】原、無智

【解説を】原、知るを

第二十一曲

ラテン詩人スタティウスの靈罪清まりて天に登らんとし、兩
詩人の後より來りてこれに加はり地震と頌詠の由來を説き且
つその一の己が師事せしウエルギリウスなるを知りて大いに
喜ぶ

一―三

【サマリアの女】井の傍に坐せるキリスト、サマリアの女

の水を汲まんとて來れるを見、我に飲ませよといふ、女そのユダヤ人なるを知りてあやしむ、キリスト曰、汝若し我に求めば我活水を汝に與へん、およそこれを飲む者永遠に渴くことなし、女いふ、主よその水を我に與へよ（ヨハネ、四・六以下）

【水】眞

【渴】求知の願ひ（淨、二〇・一四五以下參照）。ダンテが『コンヴィヴィオ』の卷頭に引用せるアリストテレスの言に曰、人皆自然に知を求むと

四―六

【障】路に伏せし魂

七―九

キリスト甦りて後イエルサレムとエマオの間の路にてその二

人の弟子に現はれたまへり（ルカ、二四・一三以下）

一三一—一五

【表示】答禮の。或曰、cenno は挨拶の詞にて Pace con voi（汝等安かれ）に對し E collo spirito tuo（汝の靈も）と應ふる定例の挨拶をいふと

一六一—一八

問ふ（地震の原因を）に當りてまづ對話者の幸を希へる詞（地、一〇・八二—四並びに註參照）

【永遠の流刑】郷土なる天に歸るをえずして永くリムボに止まること

【眞の法廷】神の正しき審判

一九—二二

ウエルギリウスの間はざるさきにその詞をさへぎりていへむ

【その段】神の許に通ずる路即ち淨火

二二―二四

【標】額上のP字

【善き民と】天上の祝福を受くる者なるを

二五―二七

されど彼猶生くるがゆゑに

【女神】ラケシス。運命を司る三神（モイライ又はパルカエ）

の一にて生命いのちの絲を紡ぐ者

【クロート】同三神の一、人生るゝ毎にその生命の絲となる

べき麻の量を定めてこれを絲車の棒に掛く

二八―三〇

【姉妹】同じ造主よりいづれば

【物を見る】肉體の羈絆を放せざるをもてその理性の目我等

の如く明かならず

三一―三三

【闊き喉】地獄の最も輝き廣き圈即ちリムボ

三四―三六

【濡るゝ】海波に

三七―三九

【要にあたれり】原、針の目を透せり

四〇―四二

【この山の聖なる律法は】或ひは、この聖なる山は

四三―四五

【その原因と】淨火門内における變異の原因となるべきものはたゞ罪淨まれる魂のみ。換言すれば、天よりいでし（即ち神に造られし）魂天に歸ることある時に於てのみかの地震喊

聲の如き變異起る

四六―四八

【階】淨火の門の（淨、九・七六以下參照）

四九―五一

【タウマンテの女】イリス。タウマス（タウマンテ）とオケアノスの間に生る、虹の女神なり（神話）。朝は西夕は東にあらはるゝをもて處を變ふるといへり

五二―五四

【乾ける氣】アリストテレスの説に曰。地上の變異すべて地氣より生ず、此氣の濕れるもの雨、雪、雹、露、霜となり、その乾けるもの風を起し乾きて強きもの地震を起すと（地、三・一〇三―五註參照）

【ピエートロの代理者】門を守る天使（淨、九・一〇三―五

及び一二七―九參照)

五五―五七

【下】淨火門外

【地にかくるゝ】地下にひそむ乾ける氣の動くによりて地震
ふといへる古の學説によれり

五八―六〇

【起ち】起つは地上に伏す第五圈の魂につきていひ、進むは
他の諸圈の魂につきていふ

六一―六三

【意志】天に登るの願ひ。己が罪清まる時は魂忽ちこの願ひ
を起しかつこれを起すをよるこぶ、故にこの願ひの起るは即
ち罪清まれる證據なり

【侶を變ふる】罪を淨むる魂を離れて福を享くる民に到る

六四―六六

罪未だ清まらざる時に於てる天に登るの願ひなきにはあらず、されどかゝる時の願ひは正義に従つて罪を淨めんとする他の願ひに檢束せらるゝが故に自由の願ひにあらず

【罪を求めし如く】在世の日は心の願ひ罪に傾きて意志（眞の幸を求むる願ひ）にさからひ、今は心の願ひ罪を淨むることを求めて意志（天に昇るの願ひ）にさからふ

六七―六九

【我】プブリウス・パピニウス・スタティウス。有名なるラテン詩人、一世紀の後半の人

【五百年餘】その以前は第四圏にあり（淨、二二・九一―三参照）

【まされる里】原、まされる閬。天

七六一七八

【網】罪を淨むる願ひ

【解くる】罪清まるによりて

【俱に喜ぶ】喊聲をあげて

八二一八七

ローマ皇帝ヴェスパシアヌスの子ティトゥス（後、位を嗣ぎ七九年より八一年まで皇帝たり）がイエルサレムを毀てる頃即ちキリスト暦の七〇年

【主】神

【傷】キリストの。聖都の毀たれし事をキリストの磔殺に對する神罰と見做せるなり

【名】詩人の

【信仰】キリスト教の

八八―九〇

【有聲の靈】歌

【トロサ】フランスの南にある町（トゥルーズ）。註釋者曰。スタティウスの生地はトロサにあらずしてナポリなり、こはこの詩人の詩集『サルヴェ』に因りて知るをうべし、されど『サルヴェ』の發見は十五世紀の事に屬しダンテの時代にては一般にトロサの文人ルーチオ・スターツィオ・ウルソロと詩人スタティウスとを混じたりと

【ミルト】常縁樹の名、これを詩人の冠とすること桂樹ラウロの如し
九一―九三

スタティウスの作に敘事詩『テーバイス』十二卷及び未完成の『アキルレース』二卷あり

【第二の】『アキルレース』未だ完結せざるうちに我は死せり

九四―九六

【情熱】詩的

【焰】『アエネイス』

九七―九九

【これなくば】この歌なくばわが著作に何等の價值もなかり
しなるべし。一ドラクマは一※⁴の八分の一

一〇〇―一〇二

ウエルギリウスは前一九年に死せり

【一年】たとひ今年一年淨火にとゞまるとも

一〇六―一〇八

【誠實】その人正直なれば正直なるほど哀樂の情を蔽ひ難し

一三〇―一三二

⁴ 「オンス」の単位記号、291-16

【しかするなかれ】されど淨、六・七五にはウエルギリウスとソルデルロと相抱けること見ゆ

第二十二曲

詩人等第五圈より階を踏みてのぼる、その道すがらスタティウス、ウエルギリウスに己が罪と改悔の次第を告げかくて第六圈に到りて右に進めば路の中央に一果樹あり、聲葉の中よりいでて節制の例を誦^ずす

一―三

【疵】額上のP

四―六

【彼は我等に】異本、また義を慕ふ者等（天使等）我等に福なりといひ

【シチウント】sitiunt（渴く）。マタイ傳に曰く、義に饑ゑ渴く者は福なり（五・六）

この一節ウルガータには Beati qui esuriunt et sitiunt in-sitiunt とあり、その中の esuriunt を省きて單に Beati qui sitiunt iustitiam（義に渴く者は福なり）といへるなり、饑う（esuriunt）を省けるはこれを渴くとわかちて第六圈の頌詠となさんためなり（淨、二四・一五一以下参照）

異本にシチオー（sitio 我渴く）とあり、前項異本の文とあはせて委しくはムーアの『用語批判』四〇五頁以下を見よ

一三—一五

【ジョヴェナレ】デーチムス・ユニウス・ユーヴェナリ

ス。有名なるラテン詩人（二三〇年頃死）、その諷刺詩第七篇（八二行以下）にスタティウスの著作を稱讃せる詞いづ

一九―二一

【わが手綱】わが問ひ露骨にして禮を失ふことあらば

三一―三三

【圈】第五圈

三四―三六

【あまりに】浪費の罪に陥るばかりに

【幾千の月】五百年餘の間（淨、二一・六七以下）浪費の罰をうく

三七―四二

【あゝ黄金の】貪る者も費す者も共に黄金を求めていかなる惡をも行ふをいふ

この句『アエネイス』三・五六―七にいつ、但し *sacra* (*sacer*^{きよ}聖き、不淨の) を不淨の意に用ゐることイタリア語の用例に反するがゆゑに異説多し

【轉ばしつゝ】第四の地獄にて重荷をまろばすこと(地、七・二五以下參照)

【牴觸】原、試合。貪る者と費す者と相互に打當ること(同上)

四三―四五

汝の言を聞きてみだりに費すことの罪なるを知り、これを悔ゆることわが他の罪の如くなりき

四六―四八

【髪を削りて】最後の審判の日浪費の記念に髪を短くして墓より起き出るをいふ(地、七・五五―七並びに註參照)

四九―五一

地獄と同じく淨火にても罪の相反するもの（浪費と強慾の如き）同一の場所に罰せらる。縁を涸らすは活力を消耗するなり、即ち悔恨によりて罪を贖ふなり

五五―五七

【牧歌】ウエルギリウスの著作に牧歌十篇（*Bucolica*）あり

【二重の憂ひ】テバイ王オイディプスとヨカステ（ヨカस्ता）の間の二子（エテオクレス、ポリュネイケス）。ヨカステ、オイディプスの己が子なるを知りて縊死す

【酷き】兄弟相殺すにいたれる（地、一四・六七―七二註及び二六・四九―五四註参照）。この争のこゝとスタティウスの『テバイス』にいつ

五八―六〇

汝が『テバイス』に詩神ムーサの一なるクレイオ（クリオ）の助けを求め且つその徳をほめたゝへし言葉をおもへば汝はその頃未だキリストの教へを信ぜざりしに似たり（ムーアの『ダンテ研究』第一卷二四四頁參照）

六一―六三

【日】天の光即ち神の導

【燭】地の光即ち人の教へ

【漁者】聖ピエートロ（ペテロ）。キリスト十二弟子の一、魚すなと

を漁りまた人を漁る（マタイ、四・一八以下等）。これに従つて帆を揚ぐるはその信仰にならひてキリスト教徒となるをいふ

六四―六六

七三行とその意同じ

【パルナース】パルナツソス、ポキス（ギリシアの）の山、詩神等の住むところ

七〇―七二

【世改まり】第四牧歌（五―七）にいづ、中古世に行はれし説に従ひ、この歌をもて救世主（新しき族）降臨の豫言と見做せるなり

【人の古】第四牧歌にはサトウルヌスの王國とあり、世再び罪の涙なき黄金時代にかへるをいふ

七三―七五

【彩色】明細にかたること

七六―七八

【眞の信仰】キリスト教の信仰

【永久の國の使者等】天國の使者即ち使徒等

八二―八四

【ドミチアーン】ドミティアヌス。ヴェスパシアヌスの第二子、兄ティトウス（浄、二一・八二）の後を承けて八一年より九六年まで皇帝たり

八八―九〇

【わが詩に】我未だ『テバイス』第九巻を終へざるさきに

【テ―ベの流れ】『テバイス』第九巻に王アドラストスがギリシア人をみちびいてテバイ附近の二水イスメノスとアソポスに倒れることみゆ

九一―九三

【微温】怠慢の罪

九四―九九

【幸】キリスト教の信仰

【年へし】異本、友

【テレンツィオ】プブリウス・テレンティウス・アルフェル。
ラテン詩人にて喜劇の作者なり（前一五九年死）

【チェチリオ】カエキリウス・スタティウス。ラテン詩人（前
一六八年頃死）

【プラウト】ティトウス・マツキウス・プラウトウス。ラテン
詩人（前一八四年死）。カエキリウスと同じく喜劇の作者なり
【ヴァリオ】ヴァルロ。プブリウス・テレンティウス・ヴァッ
ロ・アタキヌス。ラテン詩人（前三七年頃死）

【何の地方】地獄の第何圈

一〇〇——一〇二

【ペルシオ】アウルス・ペルシウス・フラックス。ラテン諷
刺詩人（三四—六二年）

【ギリシア人】ホメロス（地、四・八五以下参照）、詩人中の詩人

一〇三―一〇五

【第一の輪】地獄の第一圈即ちリムボ

【乳母等】ムーサ

【山】パルナッソス

一〇六―一〇八

【エウリピデ】エウリピデス。名高きギリシア詩人、悲劇の作者（前四八〇―四〇六年）

【アンティフォンテ】古のギリシア詩人、悲劇の作者（生死の年不詳）

【シモニーデ】シモニデス。ギリシア抒情詩人（前五五六―四六八年頃）

【アガートネ】アガトン、ギリシア悲劇詩人（前四四八―四〇一年頃）

【桂樹】淨、二一・八八―九〇註參照

一〇九―一一一

【アンティゴネ】テバイ王オイディプスとヨカステの女
【デイファイレ】アドラストス王の女にしてテュデウス（淨、三二・一三〇）の妻なり

【アルジア】アルゲイア。デイファイレの姉妹にしてポリュネイケスの妻なり

【イスメーネ】アンティゴネの妹、その生涯を不幸の中に終へたるもの

一一二―一一四

【女】ヒュプシピュレ（イシファイレ）（地、一八・九一―三參

照)。海賊のためネメア王リユクルゴスに賣られてその婢となりゐたりしときテバイを攻むる諸王にランギア（ランジア）の泉（ネメアの近傍なる）を教ふ（淨、二六・九四以下參照）

【ティレジアの女】マント（地、二〇・五二以下）。但しマン

トは第八の地獄第四囊にあり、もし「淨火」のこの部分を「地獄」のかの部分より後の筆とせば、この錯誤は全く不思議といふの外なし

【テーティ】テティス。アキレウスの母、海の女神

【デイダーミア】デイタメイア、アキレウスの戀人（地、二六・六一―三註參照）

一一八―一二〇

時は日出後四時過即ち午前十時過なり

【侍婢】時（淨、一二・七九―八一並びに註參照）

【轅】日の車の。第五の侍女轅の尖を上にもくるは第五時未だその半に達せざるなり

一二一―一二三

【縁】道の外側

一二四―一二六

【魂】スタティウス

一三六―一三八

【方】左方、岩壁に塞がる

一三九―一四一

【汝等は】貪慾の罪を淨むる魂等ほかの果實を採ること能はず（淨、二四・一〇三以下参照）

一四二―一四四

節制の第一例。カナの婚筵に抱かれしマリア酒盡きたるを見

てキリストに告ぐ（ヨハネ、二・一以下）。淨、一三・二八—三〇にはこれを慈愛の例としてあげたり

【今汝等の】汝等のために罪の赦しを神に乞ふ

一四五—一四七

第二例。昔のローマの婦人は酒を用ゐざりきといふ

第三例。豫言者ダニエルがバビロニア王ネブカデネザルの與ふる食物と酒を拒めること（ダニエル、一・三以下）

一四八—一五〇

第四例。黄金時代の自然生活（『メタモルフオセス』一・八九以下参照）

【ネツタレ】神話の神々の飲料

一五一—一五三

第五例。バプテスマのヨハネ（マタイ、三・四）

一五四

【聖史】マタイ、一一・一一に曰く、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大いなる者は起らざりき

第二十三曲

詩人等第六圈にて、貪慾の罪を淨むる一群の靈にあふ、その一フオレーゼ・ドナーティ、ダンテをみとめてこれと語り、かつ大いにフィレンツェの婦人を罵る

一―三

聲葉の中よりいでしをあやしみてこれに目をこらせしダンテの姿は恰も鳥を捕ふる者の獲物を求めて木の間をうかがひ見

るごとし

四―六

【時】淨火歷程のために定め與へられし時間

一〇―一二

【主よわが唇を】主よわが唇をひらきたまへ、さらばわが口
汝の讚美をあらはさむ（詩篇五一・一五）

第五一篇は詩篇中改悔の七篇と稱せらるゝものの一にてウル
ガータにては *Miserere mei*（我を憐みたまへ）にはじまる（淨、
五・二二―四参照）。こゝにその第十五節をえらべるは昔口を
もて罪を犯せるに因みてなり

【喜びとともに】その信仰をよろこび、その悲哀に同情をよ
せしなり

一三―一五

【その負債の】その罪を淨むるならむ

一九―二一

【もだし】はや木と水を散れたれば（六七行以下参照）

二五―二七

【エリシトネ】エリユシクトン、神話。テッサリアの人、斧をデメテルの森に入れたためこの神の罰をうけて飽くなきの饑ゑになやまされ遂に己が身を啖ふ（オウイデイウスの『メタモルフオセス』八・七三八以下参照）

二八―三〇

【マリア】イエルサレム包圍の際（七〇年）饑餓に迫りて己が子を喰へりといふ女の名

【艮】饑ゑに苦しめるユダヤ人

三一―三三

【ONO】（人）、人の顔に人。の字あらはるとの説をなす者あればなり、この説に従へば眼は左右のOにあたり鼻と眉のあたりは中央のZにあたる、肉瘦するに従ひてZいよくいちじるし

四〇―四二

【こは】汝をこゝに見るを得るは

四三―四五

その何人なるやは姿を見て知るをえざりしも聲をきゝて知るをえたり

四六―四八

【火花】聲

【フォレーゼ】フォレーゼ・ドナーティ（一二九六年七月死）。フィレンツェの人にてダンテの妻ゼムマの遠縁にあたれり、

そのダンテと往復せる短詩（合せて六篇）ムーアの『ダンテ全集』（二七九―八〇頁）にいづ、詩中にビッチ・ノヴェルロとあるは即ち彼の異名なり

六一―六三

【永遠の思量】天意

七三―七五

神の義に従ひ神と和するの願ひあるによりてキリストは我等のためよろこびて十字架にかゝりたまへり、我等もまたこの願ひあればよろこびて木の下を過ぐ

【エリ】エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神わが神何ぞ我を棄てたまへるや）。十字架上のキリストの叫び（マタイ、二七、四六）にしてその苦しみ最も大なりし時をあらはす
七九―八一

苦し罪を犯す能はざるにいたりて、換言すれば死に臨みて、
はじめて悔い改めしならば何ぞ淨火の門外にとゞまらずして
【嫁がしむる】歸らしむる

【善き憂ひ】改悔

八二―八四

【時の時を補ふ】死に臨みて悔ゆる者その世に享けし齡と同
じ年數を淨火の門外に過すこと（淨、四・一三〇以下及び一
一・一二七以下參照）

八五―八七

わが妻ネルウわがために歎き且つ祈れるによりて我はかく速
かにこゝにわが罪を淨むるをえたり

【甘き茵蔯】うれしき苦しみ

八八―九〇

【山の腰】門外の淨火。魂この處にて門内に入るの時刻を待つ

【他の諸々の圓】この下の五圈

九四―九六

【バルバジア】サルディニア島の一山地にて中古蠻民住み風紀紊れし處なりといふ

【バルバジアより】トスカーナのバルバジアともいふべきフィレンツェより

九七―九九

【今を昔となさざる】今より遠からざる

一〇〇―一〇二

風紀興振の命寺院より出でしをいふ、されどいづれの時の事を指せるや不明なり

一〇三—一〇五

【サラチーノ】サラセン人、異教徒

【靈または】寺院の禁制または法律上の制裁なきため

一〇六—一〇八

【彼等の爲に備ふるもの】彼等の上にくだす禍ひ。一三〇〇
年以後、種々の災害フィレンツェに起れること當時の記録に
残れども特にその中のいづれを指していへるやは知りがたし
一〇九—一一一

【ナンナ】nanna 母や子守等が嬰兒を眠らしめんとて nanna
nanna ニンナ、ナソナとうたふ歌

一一二—一一四

【日を】これらの魂皆汝の影を見て生者のこゝにあるをあやしむ

一一五——一七

【汝の我と我的汝と】ダンテがフオレーゼと共に地上の樂しみを求めしこと

一一八——一二〇

【往日】四月八日。今は十二日なり

【姉妹】日（アポロン）の姉妹なる月（アルテミス）

【圓く】七日の夜の満月（地二〇・一二七參照）

一二一——一二三

【闌けし夜】地獄の闇（淨、一・四三——五參照）

【まことの死者】肉體を失ひ且つまた神の恩恵を失へる者

一二七——一二九

【いふ】地、一・二二以下參照

第二十四曲

ダンテなほフォレーゼとかたり、その多くの侶の名とその豫言を聞きて後、二詩人とともに第二の果樹のほとりにいたりて食欲の罪の罰せられし例をきき、さらに進みて第七圈に通ずる階きざはしの下に達す

四―六

【再び死にし】死後魂いたく痩せ衰へてあるかなきかのさまなるをいふ

【目の坎】深く窪める眼

七―九

【彼若し】前曲の終りの詞を次ぎていへり。スタティウスも

し獨りならばなほ速かに歩むべきも、ウエルギリウスと共に旅せんとして恐らくはその足をおそくするならむ

一〇―一二

【ピツカルダ】フオレーゼの姉妹

一三―一五

【オリムポ】オリュムポス。ギリシアのテッサリアにある山にて神話の神々の住むところ、轉じて天。ピツカルダは月天にあり（天、三・三四以下參照）

一六―一八

【我等の姿】饑ゑてやつれてありし日の面影なければ、みる目に誰と知りがたし

一九―二一

【ボナジュンタ】ボナジュンタ・オリビツチアーニ・デーリ・

オヴェラルディ。ルツカの人（十三世紀の後半）にてシケリア派の詩人なり（『デ・ウルガリー・エーロクエンチアー』一・一三參照）

二二―二四

【寺院を】寺院を抱くは寺院の夫即ち法王（地、一九・五五―七參照）となるをいふ、法王マルティヌス四世を指す、一二八一年選ばれて法王となり一二八五年に死す

【トルソ】パリの西南にある町。マルティヌスはトルソに生れしにあらざれどもこの地の寺院に僧官たりしフランス人なれば斯く

【ボルセーナ】ヴィテルボの北にある湖水。古註曰、マルティヌス四世は極めて口腹の慾を恣にせる人にて就中ボルセーナ産の鰻を好みこれをヴェルナツチャ酒（味醂の類）に酔はし

めて後焼きて喰へりと

二八一三〇

【ウバルディーン・デラ・ピーラ】（ムゼルロなるピーラ城の名なとれり）カルディナレ・オッタヴィアーノ（地、一〇・一一八―二〇）の兄弟にしてピサの大僧正ルッジエーリ（地、三三一―一三一五）の父なりといふ

【ボニファーチヨ】ボニファチオ・デイ・フィエースキ。一二七四年より同九五年までラヴェンナの大僧正たりし者
三一―三三

【マルケーゼ】フォルリの名族、十三世紀の後半の人
【便宜】フォルリの美酒を指す

三七―三九

【ところ】口の中、即ち饑渴の苦しみを最も切に感ずるところ

【ゼントウツカ】四三行以下にいへる女の名

四三―四五

【女】ゼントウツカの事傳はらず、一三二四年の頃ダンテ、ルツカに赴きしことあればその時この婦人にあひてその特に賞讃すべき者なるを知れるなるべし

【いまだ首帕を】未だ嫁せず（一三〇〇年には）、嫁したる者帕をもてその面をおほへばなり

【誹るとも】腐敗せるルツカの町（地、二一・三七―四二参照）も猶かの女ありてダンテの心を慰むるに足る

四九―五一

【新しき詩】十三世紀の後半におけるイタリアの二大詩派即ち（一）シケリア派とてプロヴァンス派を模せるもの及び（二）教訓派とて推理に傾けるものに對していへり

【戀を知る】 Donne ch' avete intelletto d' amore 『新生』に
いづる第一カンツォネの起句

五五―五七

【公の證人】 ヤーコポ・ダ・レンティニ。十三世紀の前半の
人にてシチーリア派の詩人なり

【グイットネ】 グイットネ・デル・ヴィーヴァ（一二九四年
死）。アレツツオの人、教訓派の詩人にしてフラータ・ゴデン
ティ（地、二三・一〇三参照）たり（淨、二六・一二四―六
及び『デ・ウルガリー・エーロクエンチアー』二・六・八五
以下参照）

【節】 障礙、即ち彼等をして新しき詩風に到達せしめざる
五八―六〇

【汝等】 汝等フィレンツェ新詩派の人々

【口授者】愛。内部にひゞく愛の聲をそのまゝ歌となすをいふ

六一―六三

新舊二派の詩風の相違をこの事以外に求めんとすとも得べからず

六四―六六

【ニ―ロ】エヂプトのナイル川

【鳥】鶴

六七―六九

【願ひ】罪を淨めんと

七三―七五

【聖なる群】罪を淨むる魂の群

七六―七八

【いつまで】わがいつまで世に生くるやは我知らず、されど郷土フィレンツェの禍ひを見ることなからんため一日も早く淨火の岸に歸るをねがへば、わが希ふ如く早くは死して世を去る能はざるべし

八二―八四

【罪の最も大いなるもの】フォレーゼ自身の兄弟なるコルソ・ドナーティを指す。コルソは黒黨の首領にしてフィレンツェの禍亂を醸せるもの、一三〇八年反逆の罪に問はれてこの町を逃げ出でしかど馬より落ちて敵に殺さる

【溪】地獄

八五―八七

ダンテの記事に従へばコルソはその乗馬に踏み殺されしなり
八八―九〇

【これらの輪未だ】未だ多くの年過ぎぬまに。輪は天球
九一―九三

【王國】淨火

九七―九九

【軍帥】師

一〇〇―一〇二

【わが目の】我のあきらかにその姿を見る能はざること恰も
あきらかにその豫言をさとする能はざるに似たり

一〇三―一〇五

【めぐる】まがれる路を

一〇六―一一〇

【民】多食の罪を淨むる民

【罪なき】vani（空しき望みにあやさるゝ）

一一五——二七

【エーヴァのくらへる木】善惡を知るの木（創世記、二・九及び一七）、エヴァ蛇に欺かれてその果を喰へり（同、三・六）
【この上に】淨火の山巔即ち樂園に（淨、三二・三七以下）
【かの樹より】最初の罪最初の罰の記念なる知識の木の芽よりこの木出でてかの木と同じく貪慾をうながしかつ過食の罪の罰を告ぐ

一八〇——二二〇

【岸の邊】木の左即ち岩壁に近きところ

一二一——一二三

罰の第一例、ケンタウロス（チェンタウロ）

【詛の子等】ケンタウロス（地、一二・五五——七註參照）。神話によればイクシオンと雲（ネペレ）との間に生る、嘗てラ

ピチ人の王。ペイリトウスとヒッポダメイアとの婚筵の席に抱かれしが酒に酔ひて狼藉に及びテセウス及びその他の人々と戦ひて多くこれに死せり（地、一二・七〇―七二註参照）

【二重の】人と馬と（地、一二・八二―四参照）

一二四―一二六

第二例、ギデオン（ゼデオネ）に従ひて勝利の譽をわかつ能はざりしヘブライ人（土師、七・四以下）

【貪り飲みしため】原、飲むにあたりて己の弱きを示せるため。即ち慾を制する能はざるため膝を折り屈みて水を飲めるをいふ（土師、七・六）

一二七―一二九

【縁の一】路の左側

一三〇―一三二

【寛に】木を避けんとて互ひに身を寄せたりしも今は木の下を離れたれば身自由なり

一三三―一三五

【おぢおそるゝ】或ひは休める（或ひは馴れざる）獸のおそるゝ

一三六―一四一

【ひとりの者】天使

【折れよ】左に

一四二―一四四

【あたかも】目にて行手を見る能はざる人、聲をしるべに進むごとく。二詩人と並びて歩みゐたるダンテは天使の光を避けんとて彼等の後よりゆき天使の聲またはこの二詩人の足音をしるべとなせるをいふ

一四八—一五〇

【羽】天使羽をもてダンテを扇ぎてその額の上なる「字の一」を削り去ること前の如し

【アムブロージャ】神々の食料（神話）

一五一—一五四

【福なり】義に饑ゑ渴く者は福なり（マタイ、五・六）といへる聖句の中渴くを第五圈の頌詠とし饑うを第六圈の頌詠とせり、またこゝにては暴食の罪に適合せしめんため此句を自由に敷衍せるなり（淨、二二・四—六註参照）

第二十五曲

階を踏みて登る道すがら、スタティウスはウエルギリウスの請ひに應じてダンテのために生殖の作用、靈肉の結合、及び死後における靈の状態を論じ、かくて相共に第七圈に達すれば色慾の罪を淨むる一群の魂焰に包まれつゝ聖歌をうたひ且つ貞節の例を誦^ずす

一—三

【日は】白羊宮にある太陽既に傾きて子午線を離れ金牛宮の星これに代る、金牛宮は白羊宮に次ぐ天の十二宮の一なれば時は今午後（四月十二日）二時の頃なりと知るべし

【夜】日と反對の天に於ては天秤宮にある夜（淨、二・四—六註參照）イエルサレムの子午線を離れ天秤に次ぐ天の十二宮の一なる天蠍宮の星これに代る（即ち午前二時の頃）

一三—一五

【消え】詩人等を累はすことを恐るゝため

一九―二一

【滋養を】肉體の榮養をうくる必要な魂（第六圈の）の瘦するをあやしみてかくいへり

二二―二四

【メレアグロ】メレアグロス。カリユドン王オイネウスとアルタイアの間の子、その生れし時運命の三神一木片を火に投じ、生兒の命數この木とともに盡くべしといひて去れり、アルタイア直ちに火を消してかの木片を祕藏せしかどメレアグロス成人の後二人の叔父を殺せしかば再びこれを火に投じてその兄弟のために仇を返せり（オウイディウスの『メタモルフオセス』八―二六〇以下参照）。榮養以外に人身を左右するの力あるをいふ

二五―二七

見ゆる魂は見えざる魂の鏡なるをいふ。硬きは解し難きなり
軟きは解し易きなり

二八―三〇

【望むがまゝに】或ひは、汝の望みに關して

【傷を癒さしむ】疑ひを解かしむ。人の靈性の状態を論ずる
は教理に關することなればウエルギリウスはこれをもてキリ
スト教徒の詩人スタティウスに委ぬるを善しとせり

三一―三三

【常世の状態】*la veduta eterna* 死後における魂の状態

異本、*la vedetta eterna*（永遠の刑罰、若くは永遠の存在者
即神の刑罰）

三七―三九

【完全】完全なる血は情液となる血をいふ。栄養に必要な
血の如くに血脈を循環せざるもの

四三―四五

【自然の器】子宮。こゝにて女性の血液と合す

四六―四八

【堪ふる】作用を受くるはたらき（男の血の）

【行ふ】作用を與ふる（女の血に）。出る處は心臓なり

五二―五四

この一聯及び以下の各聯に於てダンテはトマス・アクイナス

（天、一〇・九七―九九註参照）の神學大全（Summa Theologica）
の説に基づきスタティウスの口を藉りて胎子の植物性（成長）
より動物性（感觸）に進みさらに人間性（理智）に到達する
次第を陳ぶ

【活動の力】男性の血の中なる

【異なるところ】草木の魂は生育を限度としてそれ以上に進む能はざれども人間の魂はさらに進んで他の性を備ふ、前者は既に發達の彼岸に達し後者はなほその道程にあり

五五―五七

【海の菌】海中の下等動物。動物性の初期に於てはその物未だ各種の官能を具備するにいたらずしてたゞ動き且つ感ずるのみ

五八―六〇

血が心臓内に得たる肢體構成の力は今や既に弘がりて胎兒の各部各機官に及ぶ

六一―六三

【人間】fante (物言ふ者の義) 理性を備ふる者

【さとかりし者】註釋者曰、ダンテはこゝにアヴェルロエス（地、四・一四四）を指してかくいへりと

六四―六六

視るに目あり聽くに耳あるごとく理性に特殊の機官あるにあ
らざるがゆゑに彼此理性を人の魂より分散したり、されど個
性を備へずして普遍に存在する理性人の生るゝと共にこれと
合ひ人の死するとともにこれと離るゝものなりとせばこれ死
後個人の魂の存在するを認めざるに等し

【靜智】 possibile intelletto

アリストテレス（アヴェルロエスの註による）の區分せる智
に二あり、一を靜智 (intelletto passivo) 一を動智 (intelletto
attivo) といふ、人は靜智即ち所謂 possibile intelletto により
て外部の印象を受け動智によりて件の印象を理解し諸々の觀

念を構成するにいたる、動智は分離す非情にして不死なり、靜智は死滅す而して動智を缺くを許さず。その言に曰く、眞の智は分散の智なり、この智獨り永久不死なりと。アヴェルロエスこの説によりて謂へらく、動智は分たれず個性なし、その個人と合するは補助的にして補成的に非ずと、こは實に個人の魂の不滅を否定するに近し、ダンテは誤りてアヴェルロエス靜智を魂より分散せりと思へるに似たり、アヴェルロエスの離合を云々せるはまことは動智のことなるを（ノルトン）七〇―七二

【發動者】神。植物動物の二性は生殖の自然の作用より成る、ひとり理性は神が直接に人間に賦與したまふ靈なり

七三―七五

新しき靈は既に胎兒の中にはたらきつゝある植物動物の二魂

を己と合して一魂となし三性を兼備ふるにいたる

【且つ生き】生は植物性に屬し感は動物性に屬し自覺（自ら己をめぐる）は人間性に屬す

七九―八一

【ラケージス】ラケシス、運命を司る三神（モイライ）の一（淨、一二・二五―七註參照）。その絲盡くる時とは人死する時をいふ

【人と神と】人に屬するものは肉體に屬する能力、神に屬するるのは天賦の靈能なり

八二―八四

肉に屬する能力（感觸）は死と共にその機官を失ふが故にひそみて働きをとゞめ、靈に屬する能力は肉の羈絆を脱するがゆゑに却つていよく活動す

八五―八七

【岸の一】罰せらるゝ魂はアケロンテの岸に（地、三・七〇以下）、救はるゝ魂はテーヴェレの岸に（淨、二・一〇〇以下）

【路】地獄か淨火か

八八―九〇

【構成の力】魂の中なる構成の力（四〇―四二行）は周圍の空氣にその作用を及ぼしその及ぼす状態並びに程度はあたかも生時肉體の上にその作用を及ぼせると同じ、換言すれば魂はその周圍の空氣をもて生時と同様の形状を構成す

九一―九三

【日の】原、他の者の。日光、雨滴に映じて虹生ずることく

一〇〇―一〇二

【これ】空氣より成れる新しき體

【影】 ombra 又亡靈の義あればなり

一〇六一—一〇八

【あやしとする事】第六圈の魂の瘦すること

一〇九—一一一

【最後の曲路】第七圈。但し *ultima tortura* を最後の苛責と解する人あり

一一二—一一四

左側の岩壁より火焰噴出すれば右側の縁よりは風起りてこの火炎を追返し、縁に沿ひて一條の徑路をひらけり

【そこに一の】或ひは、これ（火焰）に己（縁）を離れ去らしむ

一二一—一二三

【こよなき憐憫の神】 Summe Deus clementie 寺院にて土曜

日の朝の禮拜にうたふ讃歌の起句にして貞節を祈り求むる詞
この歌の中にあり

一二七—一二九

貞節の第一例、聖母

【われ夫を知らず】天使ガブリエルに答へたる處女マリアの
詞（ルカ、一・三四）

一三〇—一三二

第二例、デアーナ（アルテミス）。アルテミスはゼウスとレ
トの間に生れし獵の處女神なり

【とゞまり】異本、走り

【エリーチェ】カリスト。アルテミスに事へたる女神（ニム
フ）の一。ゼウスの辱しめをうけて森より逐はる（オウイディ
ウスの『メタモルフォセス』二・四〇—以下參照）

【ヴェーネレ】アプロデイト、戀の女神。こゝにては色慾
一三六―一三九

【かゝる】かく聖歌をうたひかつ淑徳の例を唱ふるによりて
つひにその罪清まるにいたる

【その傷つひに】la piaga d'ascezzo 或ひは、最後の傷（即ち
最後の圈に淨めらるゝ罪）と解する人あり

第二十六曲

ダンテ兩詩人と俱になほ第七圈にありてグイード・グイニツエ
ルリ及びアルナルド・ダニエルロと語る

【誠】淨、二五・一一八―二〇參照

四―六

【日】四月十二日の夕陽

七―九

【表徴】ダンテの影の落つるところ焰いよく、赤く見ゆ、身に影あるは生者のしるしなり

一三―一五

色慾の罪を淨むる魂焰の外に出づるをえず

一六―一八

【渴】ダンテの生者なりや否やを知らんとするの願ひ

一九―二一

【エチオピア】エジプトの南にある國。インドと同じく熱帶に屬す

二八一三〇

邪淫の罪人二群に分たる、一は淫慾を恣にせる者にて詩人等と方向を同じうし一は自然に背ける者（男色）にてこれと反對の方向に進む、二群相會ふとき彼と此と互ひに接吻してしかして直ちにわかるゝなり

三四―三六

【路と幸】路のよしあし食物の有無を互ひに尋ねんためなるべし

四〇―四二

【ソッドマ、ゴモルラ】ソドムとゴモラ、罪惡（殊に男色の罪）大なるによりて天火に焼かれし（創世記、一八・二〇及び一九・二四―五）パレスティナの町の名、邪淫の罰の第一例【パシフェ】パシファエ、第二例（地、一二・一〇―一五並

びに註參照)

四三―四五

ありうべからざることを限定していへり

【リフエ】古ヨーロッパの北部にありといはれし連山

【砂地】リビアの砂漠

四六―四八

【歌】淨、二五・一二一―三參照

【叫】貞節の例(淨、二五・一二七以下參照)

四九―五一

【請へる】一三行以下

五五―五七

熟める身を世に残すは老いて後死せるにいひ、熟まざる身を世に残すは若くして死せるにいふ

五八一六〇

【淑女】聖母マリア。マリア、人類のために上帝に請ふ（地、二・九四―六參照）

六一―六三

【天】エムピレオの天

七三―七五

【生を善くせんとて】神の恩寵の中に生きんとて。異本、死を善くせんとて

七六―七八

【チエーザル】ガツリアより凱旋せるカエサルにむかひてローマの兵士等、カエサル、ガツリアを従へニコメデス、カエサルを従へり云々と歌ひカエサルとビテュニア（小アジアの）王ニコメデスと不自然の關係あるを嘲りたりとの傳説によれ

るなり

七九―八一

【恥をもて】かく己が罪をいひあらはし自ら責めて焰と共に罪を淨む

八二―八四

【異性】原文、二形^{ふたなり}。男色に對して異性間の淫行をいふ

八五―八七

【板】即ち模擬^{まがひ}の牝牛（地、一二・一〇―一五）

【女】パシファエ

九一―九三

【グイード・グイニツェルリ】有名なるイタリア詩人にてダ
ンテ以前第一と解せらる、ボローニアの人（十三世紀、但し
生死の年並びに事蹟不詳、岩波文庫版『新生』一五七・一五

八頁參照)

九四―九九

【リクルゴの憂ひ】ネメア王リユクルゴスの婢ヒュプシピユレ（イシフィレ）テバイ攻圍の諸王にランジアの泉のある處を教へんとて（淨、二二・一一二參照）行きたる間に草の上に残されしリユクルゴスの幼兒蛇に噛まれて死せしかば王憂へ且つ怒りて將さにその婢を殺さんとす、ヒュプシピユレの二子トアス、エウネオスその己が母なるを知り走りゆきてこれを救ふ、ダンテは再び母にあへる子の喜びを再びかの詩人にあへる己が喜びにたとへしなり

ヒュプシピユレの物語はスタティウスの『テバイス』第五卷にいづといふ

【されど】ヒュプシピユレの子等は走り進みてその母を抱け

るも我は敢てグイードを抱かず

一〇六―一〇八

【聞ける事】神恩によりて生きながら冥界を過行くこと（五
五―六〇行）

【レーテ】忘却の川（淨、二八・二五以下参照）

一一二―一二四

【近世の習ひ】俗語を用ゐて詩を作ること（『新生』二五・二
二以下参照）

一一五―一二七

【一の靈】アルナルド・ダニエルロ。プロヴァンスのトルヴァ
ドル派の詩人、十二世紀の後半の人、その名聲詩の實質より
もダンテの讃辭に負ふところ多しといふ

一一八―一二〇

【レモゼスの人】グイロー・ドウ・ボルネイユ。リモージ（フランス）の詩人（一二二〇年頃死）

一二四―一二六

【グイットネ】グイットネ・デル・ヴィーヴァ（淨、二四・五五―七註參照）

【多くの人】世評に盲從してグイットネを激稱することの誤りなるを見し人々

一二七―一二九

【僧院】天堂。キリストこゝに諸聖徒の長たり

一三〇―一三二

【パーテルノストロ】Paternostro（我等の父）キリストの教へたまへるキリスト教徒の祈り（マタイ、六・九以下及びルカ、一一・二以下）

【但し】主の祈りの中、我等を誘惑に遇はせず惡より拯ひ出し給へといふ最後の祈りは淨火門内の魂に必要なきなり（淨、一一・二二―四參照）

一三六―一三八

【指示されし】一一五―七行

【わが願ひ】わが心よろこびて彼の名を迎ふと告ぐれば、わが彼の名を聞くの願ひの切なるを告ぐれば

一三九―一四七

原文にてはアルナルドの答へみなその國語なるプロヴァンスの語にてしるさる

【この階の頂】即ち淨火の山巔

【權能】神の

【憶へ】憶ひ出でてわがために祈れ

第二十七曲

詩人等猛火の中を過ぎて階を登るに闇既に地上をつゝみて登り終ること能はず、みな階上に臥して天明を待つ、ダンテは夢にレアを見、夜のあるに及びて二詩人と俱に地上の樂園に到りこゝにウエルギリウスの最後の言を聞く

一―六

日没近き時（四月十二日）を敍せり、淨火の日没はイエルサレムの日出、インドの正午イスパニアの夜半にあたる

【ところ】聖都イエルサレム。太陽その他萬物の造主なる（ヨハネ、一・三參照）キリストが十字架にかゝり給ひしところ

【イベロ】イスパニアの川の名

【天秤】日白羊宮にあるがゆゑに夜（即ち夜半）は天秤宮にあり

【ガンジェ】ガンヂス、インドの川の名（淨、二・四―六註参照）

七―九

【心の清き者】マタイ、五・八

一〇―一五

【かなた】火のかなたにうたふ他の天使の歌（五五―六〇行参照）

【穴に埋らるゝ人】生理にせらるゝ罪人（地、一九・四九―五一参照）

一六―一八

【人の體】火刑に行はるゝ罪人の體なるべし

二二―二四

【ジェーリオン】ジェーリオンの背に跨りて第七獄より第八獄にくだれる時（地、一七・七九以下參照）

三一―三三

【良心】師の言に従へと命ずる

三四―三六

【壁】二人の間を隔つるもの即ち火

三七―三九

ピュラモス（ピラーモ）とティスベはバビロニアの若き男女なり、互ひに深く愛せしかどその親結婚を許さざりしかば、ひそかに相謀り、家をいでて一大桑樹の下に會はんと約し、夜に入りて後ティスベまづかしこに到る、會々獲物を喰へる

一匹の獅子の水を飲まんとて來れるあり、ティスベ月光によりてはるかにこれを見、走りて一洞窟の中に避け獅子はティスベの地に落せし面帋をかみて去れり、後れて來れるピュラムス猛獸の足跡と血の附着せる面帋を見てティスベ既に殺さるとおもひ刀を抜いて自刃す、血高く飛びて桑樹に及びその白色の實深紅に變ず、洞窟より出で來れるティスベこの状を見るやその戀人の刀をとりてまたこれに死す、爾後桑樹常に深紅の實を結ぶにいたれりといふ（『メタモルフォセス』四・五五以下參照）

【目を開きて】洞窟より歸れるティスベ自刃せるピュラムスを見てしきりにその名を呼びまた己が名をこれに告ぐればピュラムス、ティスベの名をきくに及び瀕死の目をひらきてその戀人を見やがて再びこれを閉ぢたり

四三―四五

【一の果實に負くる】一個の果實に誘はれて先に爲さざりし
事をも爲さんとする

四六―四八

【わかつてる】この時まではウエルギリウス最初にスタティウ
ス中にダンテ最後になりゐたり

四九―五一

【煮え立つ】火に熔けし。地上最も熱しとなすものといふと
もかの火にくらぶれば冷水の如し

五八―六〇

【わが父に】キリストの言（マタイ、二五・三四）

【わが目をまばゆうし】原文、我に勝ち

六四―六六

【我は】日光身に遮られて影その前にあらはれしをいふ
七〇―七二

【一の色と】一面に暗く

【夜】夜の闇あまねく天を蔽はざるまに

或ひは。夜その處（天）をことごとく占め終らざるまに
七三―七五

【山の性】この山の特性により、夜登らんと欲するも能はざるをいふ（淨、七・四〇以下参照）

八八―九〇

【星】（複數）、註釋者曰、燦かなるは空清ければなり、大いなるはこの處天に近ければなりと

九一―九三

【我かく倒嚼み】見來りしことどもを回想するなり

【即ち事を】あけがた 曉方の夢しばく、未來の出來事を告ぐ（地、二六・七一―一二並びに註參照）

九四―九六

明け近き頃を指す

【チテレア】キュテレイア、（アプロデイト、ウエヌス、ヴェネレの異名）即ち明あけの明星

アプロデイト（戀の女神）はイオニア海中の一島キュテラ（今のチエリゴ）に住みしことあるによりてこの罪名を得たるなり

一〇〇―一〇二

【リア】レア、ラバンの長女（創世記、二九・一六以下）。活動の生を代表す。花圈を造りて身を飾るは善行によりて徳を積むなり

地上の樂園は人生至上の幸福を表示す、しかしてこの幸福は人間各自の徳の活動に外ならず（『デ・モナルキア』三、一六・四三以下參照）

一〇三——一〇五

【鏡】聖徒の魂の鏡なる神

【ラケール】ラケル、ラバンの次女（創世記、二九・一六以下）。默想の生を代表す。人間の生活を實行と冥想の二生に分ちレア及びラケルをこれが象徴となすこと當時の教理に見ゆ
一〇六——一〇八

【美しき目を】己を神の鏡に映^{うつ}して神のたへなるみわざを思ひめぐらすなり

一〇九——一一一

遠國の旅果てて歸る人わが森に近づくに従ひ歸思いよく切

にして夜のあくるを待ちわぶ

【曉の光】splendori antelucani 日出前の光

一一五——一七

ダンテがこの日地上の樂園にいたるをうるを告ぐ。行く道各
ゝなれども人皆人生の眞の幸福を求む、汝の願ひ今日成就し
汝は地上の樂園に到りてこの幸福をうくるをうべし

一一八——一二〇

【賜】或ひは、しらせ

一二七——一二九

【火】一時の火は淨火の苦しみ、時至れば止む。永久の火は
地獄の苦しみ、永劫に亙りて盡くることなし

【わが自から】理性は人を導いて現世の幸福に到達せしむる
ことをうれどもすでにこの境に到達しさらに進んで永遠の幸

福を享受せんと欲するものを導くをえず、これ信仰に屬することは天啓によらざれば知る能はざればなり

一三三―一三五

【日】四月十三日の旭日

【おのづから】種を要せずして（淨、二八・六七―九）

一三六―一三八

【目】ベアトリ―チェの（地、二・一一五―七參照）

一四二

人罪を離れ、己が好むところに従ひて而して誤ることなく、その思ひその行よく正義に合するにいたれば、既に現世の羈絆を脱して自由自主の境界にあり、かゝる人はもはや理性の導者を要せずたゞその養ひ來れる力を活用し天啓の助けによりて進んで永遠の幸福を求むべきなり

【冠と帽】古、法王が帝王の首に冠と帽とを俱に戴かしめしことあるによりて、ウエルギリウスはダンテにその自主の權を認むることを告げしなり

第二十八曲

ダンテ樂園に入り、レーテの川のかなたの岸に花を摘む一佳人を見、これとかたりてその教へを聞く

一―三

【林】地上の樂園。昔寺院の説に地球の東最高の山の巔にありとなせるもの、これを淨火の山上に置くはダンテの創意にいづ（ムーアの『ダンテ研究』第三卷一三四頁以下参照）

四―六

【岸】山頂の外側即ち詩人等が階を登り終れるところ

一〇―一二

【方】西方即ち淨火の山がその朝影をうつす方

一六―二一

【エオロ】アイオロス、風の神。鎖をもて諸々の風を大いなる岩窟の中に繋ぎおき、時に應じてこれを海陸に放つ。『アエネイス』にヘラ（ジュノネ）神がかの岩窟に赴きてアイオロスに風を乞へることみゆ（一・五〇以下）

【シロツコ】東南の風

【キアツシ】アドリアティコの海濱ラヴェンナに近き舊城市の名、大いなる松の林このあたりにあり

二五―二六

【流れ】レーテ

二八―三三

【蔭】林の木蔭

四〇―四二

【淑女】名をムテルダといふ（淨、三三・一一九）。かの階上の夢の中なるレアの實現にして活動の生を代表す、されどその名の由來については定かなること知りがたし

四三―八

【愛】神の愛

四九―五一

【プロセルピナ】ペルセポネ、魔王ハデス（プルート）に奪はれてその妻となるもの（オウイディウスの『メタモルフォーセス』五・三八五以下参照）

【その母】デメテル（ケレス）

【春を失へる】摘み採りし花を失へるをいふ。

ペルセポネがハデスにとらはれし時その摘める花を失ひて悲しみしこと『メタモルフオセス』（五・三九八以下）に見ゆ

【いづこに】花咲く林に

【いかなるさま】若き美しき姿

五二―五四

舞姫の舞ひ進むときその兩足殆んど地を離れずまた相前後せざるごとくなるをいへり

六四―六六

戀の女神アプロディテ（ウエヌス）が自ら戀に陥りし時といふともその目の光かくあざやかならざりしなるべし

【子】エロス（クーピド）。戀の神、戀の矢を放ちて神々また

人間の心を貫くもの

【あやまちて】原文、子の習ひに背きて。即ち誤りて矢を射ることなきエロスがかつてその母アプロデイテに接吻せんとてあやまりてその胸に矢疵を負はせ、アプロデイテこの疵のためにアドニスを慕ふにいたれるをいふ（『メタモルフオセス』一〇・五二五以下参照）

六七―六九

【右の岸】原文、右の對岸

七〇―七十二

【セルセ】クセルクセス、ペルシア王ダリウスの子、紀元前四八〇年大軍を率ゐる船橋を造りてヘレスポントス（エルレスポント即ちダルダネルズ海峡）を渡り以てギリシアを征服せんとせしかどサラミスの戦ひに大敗し汚名を残して故國に歸

れり

七三―七五

【レアンドロ】レアンドロス、アビュドス（アジア側なるヘレスポントス沿岸の町、クセルクセスの船橋を装へるもこの處なり）の一青年、對岸の町セストスに住めるへ口を慕ひ夜毎に海を泳ぎ渡りてこれを訪ふ、されど一夜波荒く、かの地に達するあたはずして死す

【開かざりし】紅海の水の如く（出エヂプト、一四・二一以下）左右に分れて路を與へざりしをいふ

七六―七八

【巢】住むところ（九一―三行參照）

七九―八一

【汝我を】詩篇九二の四に曰、主よ汝みわざをもて我を樂ませ給へり、我聖手みてのわざを歡ばん。マテルダは樂園の中にあらはるゝ神の奇くすしきみわざをよろこびてほゝゑめるなり

八二―八四

【先に】ダンテ今は二詩人の先に立てり（二四五―七行參照）
八五―八七

ダンテはさきにスタティウスより淨火門内には風雨霜雪の異變なきよしを聞きて（淨、二一・四三以下）その眞なるを疑はざりしに今現に地上の樂園に風あり河あるをみてあやしめるなり

九一―九三

【至上の善】神。完全なる者神のみなれば、よく聖旨かなに適ふ者神の外にあることなし

【限りなき平和の】やがて天上の限りなき福を享けしむべき
九四―九六

始祖罪を犯して樂園より逐はれしをいふ（創世記、三・一以下）

九七―九九

水陸より發する一種の氣あり、太陽の熱度に應じ之に向ひて上昇す、門外の淨火及び人の世に風雨霜雪の變を起すもの即ちこの氣なり

一〇〇―一〇二

【鎖さるゝところ】淨火の門。風雨の異變門内に及ばず、これ地氣のこれより高く昇るあたはざるによる

以上ステイウスの言の眞なるを證す

一〇三―一〇五

以下地上の樂園に風あるの理を示す

【第一の回轉】第九天、プリーモ・モービレ（第一動）と稱す。當時の天文によれば他の天球皆これに従ひ東より西に向ひて廻轉す空氣亦然り、しかして地球は宇宙の中心にありて動かざるがゆゑに氣壓の變化なき處にてはたえず微風の東より西に吹くあり

一〇六——一〇八

【純なる】原文、生くる

【絆なき】氣壓の作用をうけざる

一〇九——一一一

草木風にあたれば各々その自然に有する繁殖の力を風に満たしこの風これを下方におくる

一一二——一一四

【かなたの地】人の住む地。地質と氣候に應じて風の散らせし力を受く

一一八―一二〇

【一切の種】各種の草木

一二一―一二六

以下樂園に水あるの理を説く。世の水脈は濕氣の冷却して水となれるものに補はるゝがゆゑにこれより流れいづる河或ひは溢れ或ひは涸るゝことあれども樂園の河は神の直接に造りたまふ水より成り、たえず聖旨によつて補はるゝがゆゑにかゝることなし

一二七―一二九

樂園の水一の泉よりいで、二の川となりて左右に流るゝ、その一はレーテといひて罪業を忘却せしむる力を有し他はエウノ

エ（淨、三三・一二七以下）といひて善行を想起せしむる力を有す

一三〇―一三二

【まづ味はれ】人まづこの二の河水を味はざればその功德をうけて天に登ることあたはず、即ち人罪を忘れ徳を憶ふにあらざれば不朽の福を享くるあたはず

一三九―一四一

【人々】黄金時代をうたへる詩人等、特にオウイディウスを指す（『メタモルフオセス』一・八九以下参照）

【パルナーズ】パルナッソス、詩神の山（淨、二二・六四―六参照）。パルナッソスの夢は詩人の想像を指す

一四二―一四四

【人】原文、人の根。即ち始祖アダム、エヴァ未だ罪を犯さ

ずして樂園に住めるをいふ

オウイデイウス曰。この頃（黄金時代）人律法おきてによらず、自ら求めて信と正義を行へり

【春】オウイデイウス曰。こゝにとこしへの春ありき……地は耕さずして諸々の實みを生じたり

【ネツタレ】神々の飲料

オウイデイウス曰。この時乳の川、ネツタレの川流る

第二十九曲

ダンテ對岸のムテルダとともに流れに溯りてすゝみ、寺院の勝利を象かたどれる一の奇くしき行列を見る

一—三

【罪を】 咎をゆるされ罪をおほはるゝ者は福なり（詩篇、三

二・一）

四—六

【ニンファ】 ニムフ、山川林野等に住む一種の女神。林の木蔭を歩むをもてその習ひとなせし傳説中のニムフの如く行歩しとやかに優なるをいへり

七—九

【さかのぼりて】 右即ち南方に

一〇—一二

【岸】 レーテの兩岸ともに左にまがれるなり

一九—二一

【現はるゝごとく】 忽ち現はれ忽ち消ゆ

二二—二四

【エーヴァ】エヴァ、蛇に誘はれて禁斷の木の實をくらひしため夫アダムと共に樂園を逐はる（淨、八・九七—九參照）

二五—二七

【被物】服從。或ひは曰、無智と（創世記、三・五—六參照）
二八—三〇

エヴァ禁斷の果を食はざりせば樂園ながく人類の住む處となりて我もわが生れし日より死ぬる日にいたるまでかゝる福をうくるをえしものを

三一—三三

【樂しみの初穂】はつもの天上無窮の福を果實にたとふれば地上の樂園の美觀はその初物にあたる

【いよく大いなる喜び】ベアトリーチェにあふこと（淨、

六・四六―八及び二七・一三六―八參照)

三七―四二

詩神ムーサ(ムーゼ)を呼びてその助けを乞へり

【處女等】ムーサ

【汝等のために】詩を愛するあまりに

【エリコナ】ボイオティア(希)の山にてムーサのとゞまるところ。アガニツペ及びヒツポクレネの泉ありて詩神等にさゝげらる

【ウラーニア】ムーサの一にて天の事を司る

四六―四八

類似の物遠距離にあるときはその差別を没するがゆゑに視覺を欺きて燭臺をも黄金の木と思はしむれど近距離にあるときは個々の差別性を現はすがゆゑにしかすることなし

四九―五一

【力】認識の力

【オザンナ】（救ひたまへの義）神を讃美する詞（マタイ、二
一・九等）

五二―五四

燭臺のこと黙示録による、七の燈は神の七の靈なり（黙示録、
四・五）、聖靈の七の賜これよりいづ（七三行以下参照）

五五―五七

靈界の奥義は理性（ウエルギリウス）の解し能はざるところ
なるをいへり（淨、二七・一二七―九参照）

六四―六六

【民】二十四人の長老（八二―四行）

七三―七五

【流るゝ小旗】tratti pennelli 七の燭臺の光その餘光を空に残して七色の線を現出せるさまあたかも細長き七の旗のごとし或ひはこれを「運ぶ繪筆」と解する人あり

七六―七八

【日の弓】虹

【デリア】アルテミス、又はディアナ（月）の異名、その帶は月暈

七色の線は聖靈の七の賜即ち智慧、聰明、謀略、剛氣、知識、敬虔、及び敬畏をあらはす（『コンヴィヴィオ』四、二一・一〇五以下參照）

八二―八四

【二十四人の長老】默示録（四・四）に曰、寶座の上には二十四人の長老白き衣を着、頭に黄金の冠を戴きて坐せりと。二

十四人の長老は舊約全書二十四卷を代表す、但しその分類につきては註釋者の説一ならず

【百合の花】その教義の醇なるをあらはす

八五―八七

【アダモの女子】女。天使ガブリエル及びエリザベツが聖母マリアを祝して、汝は女の中の福なる者なりといへることルカ傳に見ゆ（一・二八及び四二）、かの長老等また聖母を祝しかくうたひ且つその美をほめたゝへしなり

九一―九三

【光光に】一の星他の星に従つて動くがごとく

【四の生物】新約全書中の四福音書を代表す、縁葉の冠は希望をあらはす

九四―九六

【翼】六の翼は福音の世に傳播することはやきを表はし多くの目は福音の眞理のよく一切の事物を洞察するをあらはす。但し異説多し

【アルゴ】アルゴス。神話、ヘラの命によりてイノ（ゼウス神の慕へるニムフ）を守る者、頭に百の眼あり、この者ヘルメスに殺されし後ヘラその眼をとりて孔雀の尾の飾となせり（『メタモルフォセス』一・五六八以下）

【生命あらば】孔雀の尾の球斑は死せるアルゴスの目なれども、この生物の翼の目は生くるアルゴスの目の如し

一〇〇——一〇二

【エゼキエレ】エゼキエル書（一・四以下）

一〇三——一〇五

【ジヨヴァンニ】黙示録の作者として。エゼキエル、一・六

には四の生物各々四の翼ありといひ、默示録四・八には各々六の翼ありといふ

一〇六一一〇八

【凱旋車】寺院の象徴。但しその兩輪の寓意明かならず、多くの註釋者これを新舊兩約の輪と解す

【グリフォネ】想像の動物、頭及び翼は鷲にしてその他は獅子なり、キリストを代表す、即ち鷲の天に翔り獅子の地に走るごとくキリストの神人兩性を兼備ふるをあらはせるなり

一〇九一一一

七線即ち七の燭臺の後に流るゝ七の光の中、中央なるはグリフォネの兩翼の間を過ぎ三線はその左を三線はその右を過ぐ
一一二一一二四

【黄金】神性のしるし

【紅まじれる白】人性のしるし。雅歌五・一〇——一一に曰、わが愛する者は白く且つ紅にして萬人の長なりその頭は精金の^{をさ}ごとし

一一五——一七

スキピオ・アフリカヌス（有名なるローマの大將）もカエサル・アウグストウス（ローマ皇帝）もかく美しき車を用ゐてローマに凱旋を祝せしことなし

【日の車】太陽の火車

一一八——一二〇

フエトンテがかの火車をめぐらせしときのこと（地、一七・一〇六以下並びに註參照）

【テルラ】テルラ（即ち地）が火焰になやみその滅亡を免かれんためゼウス神に祈願をさゝげしをいふ、この祈り、オウイ

ディウスの『メタモルフオセス』二・二七八以下にいつ

【奇しき罰】人の僭上を戒めんとてくだせる罰

一二一—一二三

【みたりの淑女】教理の三徳即ち愛（赤）、望（緑）、信（白）

一二七—一二九

或時は愛と望みともに信に導かれ、或時は信と望みともに愛にみちびかる、されど望みは愛または信仰より生るゝものなれば他の二徳を導くあたはず

【その】白或ひは赤の

一三〇—一三二

【よたりの淑女】四大徳即ち思慮、公義、剛氣、節制の象徴。

紫の衣はその高貴なるをあらはす

【三の目ある者】思慮。その三の目にて過去現在及び未來を

見る、思慮は他の三徳の本なればこの一團をみちびくなり

一三三―一三五

【ふたりの翁】使徒行傳とパウロの諸書とをその作者によりてあらはせるなり

一三六―一三八

【ひとり】使徒行傳の作者なる醫師ルカ（コロサイ、四・一四參照）

【自然が】ヒップクラテスは自然がその最愛の生物即ち人間の生命を救はんために造り出せる名醫（地、四・一三九―四四並びに註參照）なればかくいへり

一三九―一四一

【またひとり】パウロ。靈の劔（エペソ、六・一七參照）をとりて信仰のために戦へるをあらはす

【反する思ひ】醫師は癒さんことを思ひ武人は撃たんことを思ふ

一四二―一四四

【よたりの者】ヤコブ書、ペテロ書、ヨハネ書、ユダ書。これ等の諸書は他に比して小なれば外見劣るといへり

【翁】默示録。新約全書の卷末にありて他に類なき書なればたゞひとりといへり、眠れるはその著者の異象を見しさまをあらはし、氣色鋭きは未來を洞察する意氣の鋭きをあらはす

一四五―一四七

【第一の組】前列なる二十四人の長老

【花圈】brolo※しげみち薈

一四八―一五〇

【薔薇と】紅の色は新約の諸書に満つる愛の甚だ強きをあらはす

一五四

【旌】燭臺とそのうしろの光

以上寺院の行列について敘せしところは、寺院が悔改めし者を求め喜びてこれに就くを示せり（ルカ、五・四以下参照）

第三十曲

行列とゞまれるとき天使の散らせる花の中にベアトリーチエあらはれいで（ウエルギリウス去る）車の左の縁に立ちてダ
ンテの罪過を叱責す

一—三

【第一天の七星】七の燭臺。これを第一天（即ちエムピレオの天）の七星といへるはわが世界より見ゆる北斗七星に對してなり、七の燭臺は神の七の星なり（淨、二九・五二—四註参照）

【出沒を知らず】神の靈の常に輝きて善人の目に映ずるをいふ

【罪よりほかの】たゞ罪あるもの神の靈を見るをえず

四—六

七の燭臺のかの行列を導けること恰もわが七星の舟手を導いて舟の方向をあやまらしめざるに似たり

【低き】エムピレオの天は星宿の天（第八天）より高ければ七—九

【眞の民】二十四人の長老即ち舊約二十四書

【己が平和に】舊約の望みはキリストによりて寺院を建設するにあり、故に寺院をうるに及びて望み達し心安んず

一〇——一二

【新婦よ】雅歌四・八にあり、ラテン譯の聖者には「來れりバーノより、わが新婦よ、來れりバーノより、來れいざ」といひ、來れ（veni）の語を三たびくりかへせり。長老の一、神の使命を果さんとする者の如くかく歌ひてベアトリーチエを呼べるなり

一三——一五

最後の審判の日、すべて救はるゝ者喇叭らっぱの聲をききて再び肉の衣をまとひアレルヤ（默示録、一九・一參照）をうたひつゝ、その墓より起出ることく

【再び】再び得たる肉體の聲にてアレルヤをうたひつゝ
異本、再び着たる肉の衣かららかに

一六―一八

【車】 *basterna* 美しく飾れる車

【永遠の生命の僕と使者】 神の僕と使者即ち天使

一九―二一

【來たる】 キリスト聖都に入りたまへるとき群集のよろこび
てさける詞（マタイ、二一・九等）。 天使等ベアトリーチェ
の來らんとするをよろこびてかくいへり

【百合を】 *Manibus o date lilia plenis!* 『アエネイス』 六・八
八三にいづるアンキセスの詞にたゞOの一語を加へしのみ
二五―二七

太陽朝霧に蔽はれていでその光劇しからざるがゆゑに人なが

くこれに目をとむるをうるなり

三一—三三

橄欖は智慧と平和のしるし、白は信、緑は望、赤は愛

三四—三六

【かく久しく】一二九〇年ベアトリーチェの死せしよりこの方十年の間ダンテはかの女を見ざりしなり

【彼の前にて】ダンテが驚異の目をもてベアトリーチェを見、深き印象をうけて身を震はせしこと『新生』の處々にいづ三七—三九

【目の】面帕にかくれてベアトリーチェの顔あきらかにみえざりしなり（六七—九行）

四〇—四五

【童の時過ぎざるさきに】九歳の時（地、二・七〇—二註參

照)

四六―四八

【焰】愛。『アエネイス』四・二三に「昔の焰のあとを、我今知る」といへるデイトの詞をとれるなり

五二―五四

樂園における一切の歡樂もわが涙（ウエルギリウスの去れるを悲しむ）をとゞむるをえざりき

【昔の母】エヴァ（淨、二九・二以下參照）

【露に淨められ】ウエルギリウスがカトーの命に従ひ草の露をもてダンテの顔を淨めしこと（淨、一・一二一以下參照）

五五―五七

ベアトリーチェの詞

【ほかの劔に】ダンテを責むるベアトリーチェの言に

五八一六六

【己が名】神曲中ダンテの名の見ゆるはたゞこの處のみ

六七一六九

【ミネルヴァの木葉】橄欖。アテナ（ミネルヴァ）がはじめ
て地より橄欖を生ぜしめしこと神話に見ゆ

七三一七五

【汝は人が】汝は福を享くるに足る人のみこの山に來るをう
るを知らざりしか

八二一八四

【主よわが望みは】詩篇第三一篇を一―八まで歌へるなり、ヴ
ルガータにては第八節 *pedes meos*（わが足を）に終る、天使
等これをうたひダンテに代りてベアトリーチェに答へ、彼は
ダンテの主を待ち望めるを告げしなり

八五―八七

【スキアヴォーニアの風】スラヴォニア、東北の風。スラヴォニアはユーゴスラヴィアの一地方

【イタリアの背】アペンニノ山脈

【生くる梁木】森の樹木

八八―九〇

【陰を失ふ國】アフリカ。日光直下して陰なき時あり

【己の内に】上層の雪南風に溶けて下層に沈み入るをいふ

九一―九三

【とこしへの球の調】諸天の調（天、一・七六以下参照）

九七―九九

【氷】憂ひ

【息と水】歎息と涙

一〇〇——一〇二

【慈悲深き】*pie* 天使の敬虔にして慈悲あるをあらはせる語

一〇三——一〇五

汝等神の永遠の光の中に常に目さめて萬の事を視、夜と眼に妨げらるゝ間なければ人の世に行はるゝほどの事一として汝等の目より洩るゝはなし

一〇六——一〇八

汝等悉く世人の行爲を知るがゆゑにわが答へは汝等の知らざることゝを汝等に告げんがためになさるゝにあらず、ダンテをしてよくわが詞をさとらせその罪の大なるに應じてその悔いを大ならしめんがためなり

一〇九——一一一

【諸天】原文、大いなる輪。諸天が自然にその力を人に及ぼ

しよき星の下に生れし者を善にむかはせあしき星の下に生れし者を惡にむかはしむるをいふ

一一二——一四

【その雨の】神の恵みの兩人に降れどその降る次第にいたりては人智何ぞこれをきはむるをえむ

一一五——一七

【生命の新たなるころ】若き時

【すべての良き】天賦の才能をみちびいて若き時の期待に背かざる効果をあぐるをうべかりしに

一二一——二三

【しばらく】ダンテがベアトリーチェを初めて知りし時よりこの方この戀人の死にいたるまで

一二四——二六

【第二の齡】人生に四期あり、第一期は Adolescenza（發育時代）といひて二十五歳に終り第二期は Gioventute（壯年時代）といひて四十五歳に終る（『コンヴィヴィオ』四、二四・一以下參照）、ベアトリーチェの死せるはその二十五歳のはじめなれば即ち人生第二期の闕にいたりて一時の生を永遠の生に變へしなり

【他人】他の婦人。地上の事に専らにして天上の事に遠ざかれる意を寓す

一三三―一三五

【默示】神の。ベアトリーチェがダンテの異象の中にあらはれしこと『新生』四〇にその例あり

一三六―一三八

ダンテを正路に呼戻し罪の中より救ふの道はたゞ恐ろしき惡

の報いをまのあたり彼に示してその改悔をうながすにあるのみ

一三九―一四一

【死者の門】罰をうくる者の門即ち地獄の門。ベアトリーチェがリムボにくだりてウエルギリウスにダンテの救ひを托せしこと地、二の五二以下にいつ

一四二―一四五

人若し悔改めずしてその罪を忘るゝをうべくば神の律法は廢らむ

【その水を】原文、かゝる食物。レーテの水には罪を忘れしむる力あり（淨、二八・一二七以下參照）

第三十一曲

己が罪過を懺悔して後ダンテ、マテルダにたすけられてレーテの流れを渡りその水を飲みて彼岸にいたれば諸徳彼を導いてベアトリーチェの前に立たしめかつこれに請ひてその面帕を脱せしむ

一―六

【刃さへ利しとみえし】間接に（即ちベアトリーチェがダンテの罪過について天使にいへる言を）ききてさへ劇しとおもはれし

七―九

【官】喉と口

一〇―一二

【悲しき記憶】 汝未だレーテの水を飲まざるがゆゑに汝の罪過を忘るゝ筈なし

一三―一五

【目を】 聲甚だ弱きがために唇の動くさまをみて判ぜざれば
さとりがたき

【シ】 s. (然り) 責められしことの眞なるをいへる語

一九―二一

【重荷】 惑ひと怖れの

二二―二四

【幸】 至上の幸即ち神

【わが願ひ】 わが汝の心の中に起さしめし善き願ひ

二五―二七

【堀】 原文、横の堀（路を遮る堀）カーシー二曰、堀と鍵と

は消極積極二種の障礙なり、一は心の弱みより生じ一は世の誘ひよりいづ、ベアトリーチェに對するダンテの愛の冷却のごときは前者に屬し、濁れる愛、肉の快樂のごときは後者に屬すと

二八一—三〇

【他の】世上の

三七—三九

【士師】神

四〇—四二

【我等の】天の

【輪】圓形の砥石をいふ、逆轉して刀にむかへば刃鈍りてその切味劣るきれあちごとく神の正義の劔慈悲のために鈍るなり

四三—四五

【今】異本、尚深く

【シレーネ】シレーナ（淨、一九・一九―二一註參照）の複數。その歌を聞くは世の快樂の誘ひにあふなり

四六―四八

【涙の種】心のみだれ

【葬られたるわが肉の】わが死の

【異なる】正しき

五五―五七

げに汝はわが死によりて世の無常を觀じ、永遠の生を享くるわが靈を慕ひて向上すべく

【第一の矢】ベアトリーチェの死はダンテが世上の物よりうけし最初の矢即ちほろぶる肉の美のたのむにたらざることを知れる、心の最初の疵なりしなり

五八一六〇

なほも地上の幸を求め虚浮の快樂に欺かれて再び心に疵をうくべきにあらざりき

六一一六三

【羽あるものの】箴言一・一七に曰、すべて鳥の眼の前にて網を張るはいたづらなり

六七一六九

【鬚】童なるざる汝の顔（七三一五行参照）

【見て】わが天上の美を見て、汝がこれを地上の幸に代へしを悔い

七〇一七二

【ヤルバの國】ヤルバス王の治めし國即ちリビア。この吹く風はアフリカ地方より吹く南の風をいひ、本土の風即ち北の

方ヨローロッパより吹く北の風に對せしむ

七三―七五

【頤を】木の容易に倒れざるを、ダンテが恥ぢて容易に顔を上げえざるにたとへしなり

七六―七八

【はじめて造られし者】天使。ふりかくるは花をベアトリーチェにふりかくること

七九―八一

【獸】グリフォネ。鷲と獅子とによりて神人の兩性をあらはせるもの（淨、二九・一〇六―八註參照）

八五―八七

【すべてのもの】すべての偽りの快樂

八八―九〇

【者】ベアトリーチェ

九一―九三

【わが心】人我を失ふ時はその心の作用皆内はたらきに潜みてあらはれず、このはたらき外にあらはれ諸官を活かしむるに及びてはじめて我にかへるなり

【淑女】マテルダ（淨、二八・三七以下參照）

九七―九九

【汝我に】ウルガータに「汝我にヒソポを注ぎたまふべし」といへる詩篇五一・七の詞。僧が改悔者に淨水をそゞぎてその罪をきよむるときこの歌をうたへりといふ

一〇三―一〇五

【よたり】四大徳の象徴なる（淨、二九・一三〇―三三並びに註參照）。腕にて蔽ふは各々その徳によりてダンテを護るなり

一〇六一一〇八

【ニンフエ】淨、二九・四一六並びに註參照

【星】淨、一・二二一四並びに註參照

【まだ世に】世に生れざりしき。『新生』二六・四三一四に
曰、彼は一の奇蹟を示さんとて天より地に降れるものの如く
見ゆ

【侍女】寺院の建設、未だ成らざる時にあたりてこの四徳は
神意に基づき既に神學のために世に道を備ふるものとなれる
なり

一〇九一一一一

【悦びの光】ベアトリーチェの目の中なる悦びの光を充分に
見ることをえんため

【三者】教理の三徳を代表するみたりの淑女（淨、二九・一

二一以下）。人かの四徳に導かれて神學に到るを得、されどその堂に入することは神を知ることさらに深きこの三徳の力を借りるにあらざれば能はず

一一五——一七

【縁の珠】ベアトリーチェの目

一二一——一二三

神としてのキリスト、人としてのキリストがこもぐ神學の目に映ずるを敘す

【忽ち彼忽ち此】或ひは鷲（神性）或ひは獅子（人性）の恣態（顯現）

一二七——一二九

【食物】ベアトリーチェの目を見ること

一三〇——一三二

【さらにすぐれ】さきのよたりの淑女にまさりて

一三三―一三八

【第二の美】口。第一の美は目にして第二の美は口にあらはるゝうるはしき微笑なり（『コンヴィヴィオ』三、八・六四以下参照）

一三九―一四五

みたりの淑女の請ひを容れて面帕をぬぎ去れるベアトリーチェの姿の美しさ尊さはいかなる詩人の筆といへども敘するにふさはしからざるをいへり

【パルナーゾ】淨、二二・六四―六参照

【あをぎめ】詩の研究につかれて

【飲みたる者】詩想のゆたかなる者

【調をあはせ】運行の諸天相和してその自然の調亂れしやうらんざるこ

と。但しこの一行の解釋につきては異説多し

第三十二曲

ダンテ目を轉じてかの聖なる行列の東に歸るを見、マテルダ及びスタティウスと共にこれに従ひ一奇樹のほとりにいたりて眠り、眠りさめし後象徴によりて寺院の多くの變遷を見る
一―三

【十年の渴】ベアトリーチェを見んとおもへる十年の間（一二九〇年即ちベアトリーチェの死せる年より一二〇〇年までの切なる願ひ

【等閑の壁】ベアトリーチェを見るに専らにして他の事物をすべて等閑に附するをいふ

【微笑】ベアトリーチェの第二の美（淨、三一・一三三―八並びに註參照）

【昔の網】昔の愛の力

七―九

【女神等】車の右ダンテの左に立てる教理の三徳

一三―一五

【小さき】行列の光の如き小さき

【大いなる】ベアトリーチェの顔の光の

一六―一八

【榮光の戰士等】行列

【日】四月十三日の午前日光。これと七の燭臺より出づる

光を顔にうけつゝ東にむかひてかへりゆくなり

一九―二一

長き列を成せる一隊の兵その方向を變ずる時は後列未だ動かざるまに前列既に旗を先立てて轉換す

二二―二四

【王國の軍人】二十四人の長老

二五―二七

【淑女等】ダンテを導かんとて車の左を去れるよたりの淑女も、またダンテのためにベアトリ―チエに請はんとてやゝ先に進めるみたりの淑女も

【荷】凱旋車

二八―三〇

【輪】車の右の輪。車右に方向を轉ずるがゆゑに車轍の弓の

形左の輪に此すれば小さし

三一―三三

【女】蛇に欺かれて禁斷の果を食べるエヴァ（淨、二九・二三以下參照）

三七―三九

【アダモ】エヴァに勧められて神命に背けるアダムの罪（創世記、三・六以下）を責め且つそのためになげくなり

【一本の木】善惡を知るの木（創世記、二・九）。神この木を樂園に生ぜしめ且つその果實を採るを禁じて人の服従を求めたまひしものなればこゝには服従の象徴として人類の罪及びキリストの救ひをあらはせるなるべし、但し異説多し、今多く古註により

【花も葉もなき】神の律法がその積極的效果を失へるをいふ

ブーチ曰。人かく神の命に背きてその恩寵を失へるがゆゑに能く善を行ひて以て聖旨を和ぐるをえず、キリスト來臨したまふに及びその從順の徳によりて神人はじめて融和すと

四〇―四二

【髮】枝。從順の徳は神に近づくに従つて増すなり

【インド人】インドの森には亭々たる巨木ありて矢もその頂に達せずといふことウエルギリウスの『ゼオルジカ』二・一二二以下にいづ

四三―四五

アダムの罪を責むると同時にキリストの從順を讃めしなり

四六―四八

【すべての義の】ブーチ曰。慢心は衆惡の母、謙讓は諸徳の本なり、しかして謙讓はたゞ從順によりて保たると

四九―五一

グリフォネがかの大樹の枝をもて凱旋車の轍をその幹に結べるは、キリストが従順の例を示して寺院にこの徳を教へしことをあらはす

【その小枝をもて】或ひは *quel di lei* を「それ（かの木）にて作れるもの（即ち轍、轍を十字架の表章と見做し、キリストの十字架は知識の木にて作られたりとの傳説によれり）を」と解する人あり

五二―五四

春來れば地上の植物（その芽を出し）

【大いなる光】太陽の光

【天上の魚】雙魚宮の星。その後には輝くは白羊宮の星なり（地、一一・一一二―四註参照）、こゝには春太陽の光が白羊宮の星

の光とまじりて地上に降るときをいふ

原語 *lascia* は淡水に住む魚の一種

五五―五七

【日が】太陽白羊宮の後なる金牛宮うしろに移りてその日毎の廻轉を續けざるまに。太陽の金牛宮に入るは四月の下旬なり

五八―六〇

キリストの模範によりて寺院從順の徳を傳へ、神の律法その失へる効果を克復するにいたりしこと

【薔薇より】薔薇と堇の中間の色、但しその何色なるや（ム―アは、薔薇の如く赤からざれども堇よりは赤勝てる意なるべしといへり）將又これに特殊の寓意ありやあきらかならず
六一―六三

【終りまで】歌をききつゝ眠りたれば

六四―六九

【目】アルゴスの百眼（淨、二九・九四―六並びに註參照）。アルゴスの守りきびしきを見てゼウス神その戀人イノに近づくあたはざるを怨みヘルメスを遣はしてアルゴスを殺さしむ
【高き價を拂へる】生命を失ふにいたれる

【シリング】パン神に慕はれしニムフ、シュリンクス。ヘルメス神この物語（『メタモルフォセス』一・六八九以下）をもてアルゴスを眠らしめその頸を撃ちてこれを殺せり

七〇―七二

【煌】天に登る行列の光

【聲】マテルダの

七三―七五

【林檎】キリスト。雅歌二・三に曰。男子等の中にわが愛す

る者のあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし

【花】變容（マタイ、一七・一一八）によりてあらはれしキリストの榮光

【果】天上に於けるキリストの榮光。花の果に於ける如く、キリストの變容はたゞその榮光の一部の顯現即ち全榮光の一約束に過ぎず

【婚筵】（默示録、一九・七―九）、キリストがその榮光によりてかぎりなく聖徒を福ならしむること

七六―七八

【導かれて】キリストに導かれて高山に登り（マタイ、一七・二）

【氣を失ひ】光と聲とにおどろきて（マタイ、一七・六）

【さらに大いなる睡】死の睡。キリストの言によりて死者の

蘇れることあるを指す（ルカ、七・一二以下、ヨハネ、一一・一以下等）

【言葉】 起きよ恐るゝ勿れといひたまへるキリストの言葉（マタイ、一七・七）

七九―八一

【變りたる】 常の如くになれる

八八―九〇

【組】 七淑女。キリスト（グリフォネ）天に昇りて後、神學（ベアトリーチェ）は諸徳（七淑女）にかこまれて寺院（車）を護る

九四―九六

【眞の地】 terra vera 眞實にして神に従順なる地の謂か、或ひは曰ふ、席を設けざる裸の地の意と

九七―九九

【光】七の燭臺

一〇〇―一〇二

汝が地上の人としてこの樂園にとゞまるはたゞしばしの間の
み、その時過ぐれば天に登りてかぎりなくかしこに住まむ

【ローマ】天の都。キリストもその民のひとりなり

一〇九―一一一

高き密雲の中より電光の射下する早しといへども。註釋者曰、
雨雲高處にあるときは當時の所謂火炎界に近きがゆゑにその
影響をうけて電雷常よりも劇しき意と

一一二―一一四

【ジョーヴェの鳥】鷲

鷲はローマ帝國の徽章なれば、鷲が知識の木を荒せるはロー

マ皇帝等（ネロ、ディオクレティアヌス等）が神の律法をな
みせるをいひ、その聖車を打てるは彼等が寺院を迫害せるを
いふ

一一八―一二〇

【狐】迫害に次ぎて起れる異端。良き食物は健全なる教義

一二一―一二三

正しき教へ（ベアトリーチェ）に逐はれて異端寺院を去れる
なり

一二四―一二六

驚は皇帝、羽は世の利慾なり。即ち皇帝コンスタンティヌスが
法王シルヴェステル一世に領地を供物として捧げしこと（地、
一九・一一五―七並びに註参照）

一二七―一二九

【小舟】寺院を指す

一三〇—一三五

龍は即ち宗争にしてその車底の一部を奪へるは寺院の相分散せる（ギリシア寺院のラテン寺院よりわかれしごとく）をいへるか、ダンテの眞意分明ならず、異説或ひはマホメットとし或ひは魔王とす

一三六—一四一

残れる物即ち底の一部を失へる車の羽をもておほはれしはその後の皇帝等の供物によりて寺院の所得忽ち膨脹せることを表はす

【おそらくは】彼等或ひは眞に寺院の益をおもひてかく供物を捧げしならむもその結果としてはたゞ寺院の腐敗を招くに過ぎざりしなり

一四二——一四七

寺院富を得ていよく利慾に迷ひ腐敗を極むるにいたれるをいふ

註釋者曰。七の頭は七の罪なり、七の罪の中、誇りと嫉みと怒りとは神と人とに對しての罪なればこれに各々二本の角あり、他の四の罪はたゞ人に對して行はるべき罪なればこれに各々一本の角あるなりと

この項は地、一九・一〇六以下に見ゆる水上の女と同じく默示録よりいでて意は異なれり、讀者よく思ふべし

一四八——一五〇

【遊女】法王。法王ボニファキウス八世及びクレメンス五世の頃の寺院の腐敗を敍せるなり

一五一——一五三

【巨人】フランス王特にフィリップ四世。遊女と接吻せるはボニファキウスとフィリップと初め相和せるをいふ

一五四―一五六

法王ボニファキウス八世がフランス王家の抑壓を免かれんとして却つてフィリップの虐待を受けしをいふ（淨、二〇・八五―七並びに註參照）

【我に】古註に曰、ダンテはこゝにキリスト教徒を代表し、寺院がキリスト教徒に助けを求めしをあらはせるなりと

一五七―一六〇

クレメンス法王たりし時法王の廳ローマよりフランスのアヴィニオンに移されしをいふ

【盾】林盾の如く目を遮りて

【獸】即ち異形の車

第三十三曲

ベアトリーチエ、マテルダ、スタティウスとともにダンテかの奇樹のもとを離れ、ゆく／＼ベアトリーチエより、近く故國に起るべき事及びその他の教へをきき、遂にエウノエのほとりに達し、こゝにてマテルダにたすけられてその水を飲み、天に登るをうるにいたる

一―三

【神よ】 Deus, venerunt gentes 「あゝ神よ、異邦人は汝の境に入來り、汝の聖なる殿みやを汚し、イエルサレムを荒地となせり」といふ詩篇第七九篇第一節の初めの詞。みたりの淑女（教理

の三徳）よたりの淑女（四大徳）とつぎ／＼にこの歌をうたひて寺院の頽敗を歎きたるなり

四―六

【マリア】聖母マリアが十字架上のキリストを見て哀れにたへざりしごとくベアトリーチェは寺院の悲運をいたみおもひてその顔色を變へしなり

七―九

淑女等うたひをはれるときベアトリーチェはその熱烈の情を
おもて
面にあらはし

一〇―一二

【少時せば】キリストの言（ヨハネ、一六・一六）。寺院の腐敗によりて靈界の知識一時ひそみかくるゝとも久しからずしてまた顯はるべしといひ、寺院の改善を豫言せるなり

一三一—一五

七淑女を前に立たしめ、ダンテとマテルダとスタティウスとを身振りに示して後に立たしめ

二五—二七

【聲を齊ふる】原文、聲を完全に齒までひきいだす

二八—三〇

【汝は】わが問ひを待たずして汝は我に必要なものとその必要に應じて我に教ふべきこととを知る

三四—三六

かの龍のために底を奪はれし凱旋車は今や遠く移されてこゝにあらず、されどこれを移せる巨人は神の刑罰必ずその上に臨むを知るべし

【サッピ】sappi 酒またはその他の液體に浸せる麴包

註釋者曰。昔フイレンツエの習俗として、人を殺せる者若し兇行の當日より九日の間に於て被害者の墓にゆき、酒に浸せるパンをこゝに食ふときは、死者の遺族復讐をなすことあたはず、故に遺族等九日の間墓を護りて殺害者のこゝに入來るを防ぐを例とせりと。こゝにてはいかなる方法を用ゐるとも神の刑罰の避けうべきにあらざるをいへるなり

三七―三九

【羽を】淨、三二・一二四―六參照

【獲物】巨人の（淨、三二・一五一以下參照）

【鷲】即ち皇帝。世繼なきは帝位の空しきをいふ。フリートリヒ二世の死よりハインリヒ七世の即位まで（一二五〇年―一三〇八年）帝位空しきにあらざりしも名實相そはざるがゆゑに（淨、六・九七以下參照）ダンテはフリートリヒを指し

て最後のローマ皇帝といへり（『コンヴィヴィオ』四、三・三八以下）

四〇―四二

【妨碍障礙】世に及ぼす星の影響をさまたぐるもの

四三―四五

【五百と十と五】註釋者曰。五百と十と五はDXVなり、少しくその位置を變ずればDVX（即ちラテン語にて導者、首領の義）となる、偉人出でて世の改善をはかるの意と、但し異説多し、また偉人とは何人を指していへるものなるや不明なり

ムーア博士はこの偉人を以てハインリヒ七世に外ならずとしArrig (cork) 〇よりへブライ文字の計算法によりて五百十五の數を得べき一の新しき試みをなせり（『ダンテ研究』第三

卷二五三頁以下）、ベアトリーチェのこの豫言をばハインリヒ七世に對するダンテの望みをあらはせるものと見做すべき多くの理由あれどもダンテが果してその名をかく數字の上に現はさんとしたりしや疑はし

【盜人】遊女即ち法王。法王の位を奪へるによりてかくいふ（地、一九・五二以下參照）

四六―四八

【テミ】テミス、神話、ウラノスとゲーの間の女にして神託を以て名高し

【スフィンジェ】スピックス、女面獸身の怪物、テバイの附近に住み謎を以て旅客をなやませるもの

四九―五一

事實は速かに汝をしてわがこの豫言の眞義をさとるをえせし

むべし

【ナイアーデ】ナイアデス（ナイアス）泉の女神

スピンクスの謎を解けるはナイアデスにあらずしてライオスの手、即ちテバイ王オイディプスなり、こは謄寫の誤りよりオウイディウスの『メタモルフオセス』（七・七五九）にナイアデスとなりゐたるがダンテの時代にいたりてもなほいまだ訂正せられざりきといふ

【損害】スピンクス謎を解かれて死するやテミスこれがために讎を報いんとて怪獸を放ち、テバイ人の畜類及び田野に損害を與ふ（『メタモルフオセス』七・七六二以下参照）

五五―五七

【二度】最初はアダムに次は鷲に

五八―六〇

【己のためにとて】神の大權の表章として

六一―六三

禁斷の果實を食へるため、人類の始祖アダムはキリスト（即ち十字架上に死してアダムの罪を贖ひたまへる）の降臨を望み待ちつゝ、神を見るをえざる苦と神を見るをうるの願ひの中に五千年餘の歲月を経たり

【五千年餘】地上にあること九百三十年（創世記五・五）、リムボにあること四千三百二年（天、二六・一一八以下）

六四―六六

【うらがへる】淨、三二・四〇―二並びに註參照）

六七―六九

諸々の空しき思ひによりて汝の心かたくなになり、かゝる思ひより生ずる樂しみにによりて汝の智暗むことなかりせば

【エルザ】アルノの支流。その水多くの礦分を含みてよく物の上層を化石すといふ

【ピラーモ】ピュラモス（ピラーモ）の血に桑の染みしごとく（淨、二七・三七―九並びに註參照）汝の智かゝる楽しみに染ますば

七〇―七二

【多くの事柄】汝のしたしく見し種々の出來事

七三―七八

【書きざるも】智暗みてわが言をあきらかに心に書きしるす能はずとも少なくもその形をとゞめて

【巡禮】聖地に旅する巡禮等その記念として棕櫚にて卷ける杖を携へ歸る如く汝もこの地歷程の記念としてわが言を携へ歸れ

八五―八七

【學べるところ】世の學問のいかなるものなるやを自ら知りてその教へのわが教へに遠ざかるを見

八八―九〇

【天】第九の天即ちプリーモ・モービレ。（イザヤ、五五・九参照）

九七―九九

レーテの水を飲むは過去の罪を忘るゝためなり、罪を忘るゝはわするべき罪ある證なりあかし

【他に移りし】天上の教へを棄てて世上の教へを求め、聖道を離れて世道を踏めること

一〇〇―一〇二

我今より後わが言葉を明瞭にして汝にきとり易からしめむ。

粗き目は不充分なるさとの力

一〇三—一〇五

【いよく】正午の太陽は光殊に強く廻轉殊におそしとみゆ
【見る處の】正午即ち太陽の過ぐる子午線の位置は經度の異なるに從つて異なる意か

【亭午の圈】子午線

一〇九—一一一

【仄闇き蔭】林の

一一二—一一四

【エウフラテスとティーグリ】エウフラテス、チグリス。
エデンの園よりいづる四の川の中第四と第三の川の名（創世記、二・一〇以下）

一一八—一二三

【人のごとく】速かに

【告げたり】淨、二八・八八以下

一二四—一二六

他に強く心を惹くものあれば人屡々記憶の力を失ふ、思ふに彼ダンテもまたかゝるもの（ベアトリーチエの姿及びその詞、木と輦くるまに關する種々の不思議なる現象等）の爲に汝が先に教へし事を今思ひ出づる能はざるならむ

一二七—一二九

【エウノエ】Eunoë善事を記憶せしむる川にて（淨、二八・一二七以下参照）その名とともにダンテの創意にいつ

【力】己が善行を憶ひ起す力

一三〇—一三一

心たふとくやさしき人は他人の願ひ、言語または舉動により

て外部にあらはるれば言に托ことせてその願ひを辭いなまず、直ちにこれを己が願ひとひとしうす

一三九―一四一

【第二の歌】淨火篇

【技巧の手綱】技巧の法則即ち作品各部の間の調和に制限せられて、さらに章を重ねるをえず

神曲の各篇曲數相同じく（地獄篇の第一曲は神曲全部の總序なり）その句數亦路々相同じ

淨火の山は南半球の海中、聖都イエルサレムの反対面にあたりて突出する一圓錐状の高嶺なり、この山三大部に分る、一は海濱より淨火の門に互る山麓の急坂にして瀕死の際まで

悔改めざりしもののとゞまる處（さらに細別して四となす

- (一) 寺院の破門をうけし者 (二) 怠惰なりし者 (三) 横死せし者

(四) 國事に没頭して靈の事を省みざりし者) 一は淨火の門

よりの巔の附近に互る山腹にしてこれを圍繞する七個の地帯より成り淨火の最主要部たり、寺院の教義に基づきて分類せる七大罪（傲慢、嫉妬、忿怒、懶惰、貪慾、暴食、邪淫）の淨めらるゝところ、一は山上の平地にして樂園の在る處なり。

ウエルギリウスはダンテを導いて海濱より登り、たえず右に道をとつゝ門外の各地及び門内の諸國を歷程して遂に樂園に達し、ベアトリーチェあらはるゝに及びて去る。

兩詩人がこの南海の孤島を仰ぎてよりダンテがエウノエの水を樂園に飲むにいたるまでに經過せる時間は三晝夜と約七

時間なり。

底本：「神曲（中）」岩波文庫、岩波書店

1953（昭和 28）年 3 月 5 日第 1 刷発行

※「神曲」の原文は、三行一組の句を連ねる形式を踏んでいます。底本は訳文の下に、「一」「四」「七」と数字を置いて、原文の句との対応を示していますが、このファイルでは、行末に「一一三」「四一六」「七一九」を置く形をとりました。
※底本が用いている「〔」と「〕」は、「アクセント分解された欧文をかこむ」記号と重なるため、「【」と「】」に置き換えました。

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2004 年 9 月 25 日公開

2006 年 5 月 19 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。